
先の見えないラブストーリー（仮）

りきてっくす × 沢木香穂里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先のないラブストーリー（仮）

【Nコード】

N3405N

【作者名】

りきてつくす×沢木香穂里

【あらすじ】

志浦季奈子の生活は、散々だった。まるつきり先が見えない。そんな時に逢った占い師、都築フサは、季奈子を強運の持ち主と言うのだが……。

この物語は、リレーの形を取ったりきてつくす先生とのコラボ小説です。原稿をいただいてからストーリーを決めています。

プロットは、ありません。

そのため、更新スピードも一定しないと思います。

どこまで続くのか？ 決着がつくのか？

先がわからないのは、主人公である季奈子とおんなじです。
気長にお楽しみいただければ幸いです。

第一話 First impression（前書き）

コラボ小説にチャレンジしてみたいと思いました。意見をすり合わせてと言つのもなかなか困難で、それなら、いつそリレーにしてみえと、連載を開始しました。不定期更新となりますが、よろしくお願いします。

では、第一話、沢木香穂里からのスタートです。

第一話 First impression

志浦季奈子は、アスファルトの道路を進む速度を早めた。とにかく早くこの場から遠ざかりたいと、それだけを思っていた。路上に舞い落ちた紅葉の葉っぱが物悲しさを誘う。寒い季節の訪れが今の季奈子の心の内に共鳴するようだ。季奈子は、たった今、叔母に紹介された男性と義理で会って来たところだった。見合いと言うほど形式ばったものではなかったし、きつかけはどうあれ良い相手にめぐり合える可能性だってある。だから軽い気持ちで会ってみたところだが、とんでもなかった。彼に会うなり違和感を覚えたのだ。一目惚れがあるとするなら、その真逆の直感だった。細面のルックスは悪くはなかったし、外車にだって乗っている。けれどせわしく髪に手をやるしぐさはナルシストとしか思えなかったし、季奈子に向けた視線は、完全に上から目線である。この貴重な休日に俺ほどの男が時間を割いて会ってやっている、いかにもそう言いたげで、思い出すだけでも胸糞が悪くなる。

確かに季奈子は、第一印象で相手を取りこにするような絶世の美女ではないし、経歴だって、地元の短大を出ただけで何ひとつ光るものはないのだ。だから季奈子を気に入らなかったと言えばそれまでだ。もともと季奈子は、おばあちゃんや母親世代には可愛いと良く言われるのだが、同世代にはまるつきりもてなかった。目は大きいし、色も白い。ただ中央に鎮座した団子鼻が悩みだった。色白は七難隠すと言うけれども、器量までカバーしてくれるとは思えない。つまりところ季奈子の顔立ちには時代遅れのもっさり感が漂っているのかもしれない。

お昼近かったことから、まずは食事に行くことになった。ところが出かけたファミレスが満席と知るや、男はチツと軽く舌打ちをしたのである。その小さな音を季奈子は聞き逃さなかった。日頃からこの男は上手いかわないことがあると、こんな態度に出るんだろ

うと想像させるに充分だった。休日の昼どきのファミレスが混み合っているなど、ごく当たり前の事だと思う。男は面倒くさそうに、すたすたと自分だけ先に車に乗り込んでしまった。その場に取り残された季奈子は、いつそのまま帰ってやろうかと思ったが、叔母の手前そうは行かなかった。何をもたもたしているんだと言いたげな男の素振りに慌てて助手席に乗りこんだ。男は、季奈子がドアを閉めるやいなや 乱暴に車を発進させた。

二軒目にたどり着いた喫茶店もまた満席で、結局、昼食は季奈子の提案で通りがかりの道の駅で済ませたのである。八百円の豚肉のしょうが焼き定食が男と季奈子の昼食だった。男が肘について箸を運ぶ食事の仕方でも季奈子には、我慢のならない事だった。男は、季奈子ばかりでなく、食べ物をも馬鹿にしている、と思えた。そんな調子だから、会話だって弾むはずもない。まるつきり趣味思考が異なり、話はかみ合わない。希奈子が話題を提供しようとすれば、話の腰は折られてしまう。そして男は、己の自慢話ばかりとうとうと話し始めた。その割に語彙が乏しいのが、悲しいところである。ちつとも楽しくなかった。最悪だ。

食事を終えて時計を見ると、二時間ほどが経過していた。これだけ一緒にいれば、義理は果たしただろう。季奈子が、帰ることを提案したところ、男は快くそれに応じた。決して一緒にいたくはなかったが、それも季奈子の……吹けば飛ぶようなプライドを痛く傷つけた。もう二度と会わないかもしれない初対面の相手にもうちよつとまともな接し方が出来ないものだろうか。人間には、二通りあると思う。二度と会わないからこそ、誠実に対応する人間と、二度と会わないから後は知るかと言う人間が。男は間違いなく後者だ。

そんな男が何故ここまで来たのか首をひねるところだったが、おかた季奈子と同じく義理だったのだろう。家まで送ると言う男に季奈子は用事をしたいからと嘘をついて、駅近くに着いたところで車を降ろしてもらった。一分一秒でも早く、この男と離れたかったのだ。車が走り去った瞬間、季奈子は空を見上げ、自由を満喫した。

ようやく開放された。休日の貴重なこの時間。気の合う友人を誘って、お茶してショッピングしたほうがどれだけ有益だったかしれない。たとえひとりだつてプランターに花の種を植えるとか、読書をするとか充実した時間を過ごす事が出来る。季奈子はあてどもなく、雑踏を逃れてわき道に入った。

近くのグラウンドに目を向けると、少年野球チームらしき集団が試合をしている。初冬の寒さをものとせず元気いっぱい掛け声にかぶるように塁に向けて走り出す少年たちの姿が季奈子の目に映った。みんなこの休日に充実した時間を送っている。なのに私と来たら。

そもそも新卒で勤めた会社が、数ヶ月で倒産の憂き目にあつた事が不運の始まりだった。

数ヶ月となれば、失業保険だつてもらえない。とりあえずは、牛井屋のパートで食いつないでいた季奈子に、見合いでもすればと叔母が世話を焼いてきたのだ。親戚の持つてくる話に触手は伸びなかったが、それでも少しでも前向きに捉えようと、今日、相手に会つたのに。

私の人生って……。まだ自分は、二十一歳になつたばかりだ。友人には、まだ学生をやつてる子さえいる。なのに私の人生って……。このまま牛井屋で一生を終えるつもりはない。新たな就職先を探していくつか事務職で面接だつて受けた。しかし、世間は空前の就職難である。新卒でさえ、就職がないこの時代、軒並み選考に洩れ、不採用だった。現時点でまったく先の事がわからない自分……。情けなくて涙がこぼれそうになつてくる。そんな時だった。占いの張り紙が目に入ったのは。

『あなたの人生、占います……見料三千円』

繁華街のはずれに目立たぬようにある張り紙が、ミステリアスな雰囲気をもし出している。貼り紙は、木造の家屋のガラスの引き戸に内側から貼られており、そのたたずまいときたら昭和の香りが立ち上つてくるようだった。季奈子は、おそろおそろ中を覗き込

んだ。中は土間になっており自転車一台と石段の上に大人用のゴム長靴やら子供のズックやらが並んでいる。華々しく宣伝を打つでもないこの家に、季奈子は強烈に惹かれてしまった。もしかしたら淒くの中する占いの穴場かもしれない。好奇心に駆られながら、それでも中に入る勇気が持てないままに 二、三步後ずさる。表札には『都築』とあった。

脇に設置されたインターホンを押せばいいのだと思いながら、季奈子はためらっていた。その時である。

「ああ、いらっしやい」

突然、背後から呼びかけられて、季奈子はギクツとした。振り向くとそこには六十代くらいのおばさんが立っていた。節くれだった手には、エコバッグの袋。大仏パーマに血色のよいつやつやの肌。年齢はいつてもしっかりと健康を維持しているんだと言う風情である。

「うちに用かね？ あんた、もしかしたら占い？」

おばちゃんの地声は大きかった。他人じゃなかったら、しいつ。静かに！ と言っていただろう。

「はい。この貼り紙を見て……」

季奈子は、弱弱しく言った。けれどあとの言葉が続かない。

「ああ、そう！ ちょうどいいタイミングだったね。私がやってるんだよ。さ、中に入って」

それでも躊躇する季奈子に、おばちゃんはたたみかけるように言った。

「お代は、三千円の定額。それでなんでも占ってあげる。うちは明朗会計だからね」

そこまで言われて、季奈子はようやく決心がついた。

「お願いします」

季奈子は、おばちゃんの後に続いた。覗き込んでいた家屋の中が今、解明される。土間の向こうは、大概の家がそうであるように茶の間があった。季奈子はさらにその奥の廊下をたどり座敷に通され

た。金糸で刺繍がほどこされたふかふかの座布団に恐縮しながら座る。おばちゃんは茶筆笥の引き出しから紙切れをつかむと、ペンとともに季奈子に差し出した。

「ここに名前と生年月日を書いて」

「はい」

季奈子は、白い紙にゆつくりと横書きで名前を書いた。

「へえーあなた、綺麗な字で丁寧に書くんだね」

「あつ、ありがとうございます」

「字は大事なもの。それだけで人柄が想像できる。特に履歴書なんかは、字がいいと経歴まで良くなって見えるよ……」

「ええっ、あのっ」

季奈子は、つい先日会社に送付した履歴書の事を見透かされているようでどきつとした。

「四柱推命。姓名判断に人相、手相……。ひととおり、やってきたよ。あと靈感占いもね」

靈感占いにぞくつとした。ちようどのタイミングで帰宅したところと言い、履歴書と口走ることと言い、このおばちゃん。占いをするだけあつて、直感がするどいのもかもしれない。そう思いながらおばちゃんを見るとカリスマ性が備わっているように見える。第一印象は、普通のおばちゃんなのに……。

「私の名前は、都築フサ。よろしく」

「志浦季奈子です」

言ってからすでに自分の名前を紙に書いたことに気がついた。でもやっぱり最初は自己紹介ってもんだらう。フサは、季奈子をじつと見つめると、手元のノートと季奈子の書いた紙をつき合わせながら、ペンを片手に話し始めた。

「ふん。あんたは強運の持ち主だよ」

「ええっ、嘘ーっ!？」

思わず叫んでしまった。どこが。しかし、フサは淡々と続ける。

「大丈夫。窮地に陥っても必ず誰かが助けてくれる。それから……」

季奈子は息を呑んで、フサの言葉に耳を傾けた。

第二話 Second o p i n i o n (前書き)

第二話 Second opinion

古畳の香ばしいにおいが、季奈子の心を落ち着かせる。そつと視線をめぐらせ、座敷のなかを見回してみた。

彼女の正面、フサが背にする床の間には、質素だけど力強い筆致で『山紫水明』と書かれた掛け軸がさがっていた。その傍らには素焼きの花瓶に生けられたススキが、涼しげに穂を垂れている。部屋は八畳ほどだろうか。凝った調度品こそないが、古風な桐の茶箆筥やアンティークな雰囲気鏡台などがひっそりと配置され、この家の歴史の古さを物語っていた。西日のさし込む障子戸に目をやると、まるで影絵のように庭木のこずえが映りこんで、さやさや、さやさやと風に鳴っていた……。

「どうぞ、おあがりなさいな」

そう言つてフサは、自分も丸いちやぶ台にならんだ湯のみのひとつを手にとつた。

「あ、いただきます」

ふわつと湯気のたつお茶を、季奈子もゆつくりとすすつた。熱くて芳しいその焙じ茶は、舌や喉だけでなく彼女の心のなかまで潤してくれた。

「……おいしい」

「そうだろう。これは駿河清見のお茶といつて、日本五大銘茶のひとつにも数えられる有名なお茶なんだ。二番茶だけど味も香りも、そこらのスーパーで売っているものとは格段に違うだろう」

「本当ですね。私、お茶がこんなに美味しいと感じたの、生まれて初めてかもしれません」

「ははは、静岡の清水にいる親戚から毎年箱で送ってもらつんだ。よかつたら少し分けてあげようか」

「わあ、ありがとうございます」

二人、静かに茶をすすっていると、つぐみだろうか、街路樹に群

れている小鳥のかまびすしい鳴き声が耳にとどいた。ずっと遠くのほうで電車のはしる音もする。ああ、こういう時間の過ごし方もいいな、と季奈子は思った。スケジュールを組んで、それをきっちりこなしてゆくのも気持ちいい。けど、なにも考えず、時間さえ止まってしまえば、そんな古風なたたずまいに身を置いて、美味しいお茶をすすり、景色にとけ込んだ自然の音を聞いて過ごすのも悪くないと思った。日々のせわしさについて忘れてしまいがちな、なにげない幸せ。なんだか富山の实家に帰っているみたい、そう思って彼女は思わずくすりと微笑んだ。気が向いたら、また遊びに来ちゃおうかしら……。

「さて――」

静かに湯のみを置いて、フサが季奈子をまっすぐに見つめた。

「さっきの占いの続きだけどね……」

「はい」

季奈子もしゃんと背筋をのばす。さっきは強運の持ち主だなんて言われて驚き、少し疑ったりもしたけど、熱いお茶を口にふくみ心が落ち着いたおかげで、今は素直な気持ちで彼女の話に耳をかたむけることが出来る。息をつめ次の言葉を待った。フサは、季奈子の姓名と生年月日の書かれた紙に視線を落としなにごとかを呟いていたが、不意にうんとうなずいて顔を上げた。

「あんた最近、変な夢を見なかったかい？ 目覚めてからも鮮明に記憶しているような、なにか心に強烈な印象をあたえる夢を」

「夢……ですか？」

しばらく考えて、季奈子はあっと小さく叫んだ。

「そう言えば……」

「やはり見たんだね」

こくりとうなずき、そして彼女はぶるっと身震いした。つい眉間にしわがより、きゅっと唇を噛みしめる。

「一昨日の晩なんですけど、友人と慣れないお酒を飲んで、帰宅してからもちよつと気持ち悪くて、シャワーも浴びずに、そのままべ

ツドへもぐり込んだんです。そしたらすごい寝汗をかいて、なにか気味の悪い夢をたくさん見たような気がします。その中に、見知らぬ男の人にナイフで刺される夢があつて、それだけが朝目覚めてからもはつきりと記憶に残っていて……」

「それだ！」

フサは、ぽんと自分の膝をたたいた。

「あんた、近々すごい出会いをするよ。運命の人かもしれない」

「ええっ？」

「他人に殺される夢というのは、じつは吉事の前兆なんだよ。思いがけない幸運に恵まれることがあるのさ。金運、出世運、恋愛運……、四柱を占った結果、あんたの場合は間違いなく恋愛の卦が出ているね」

「そうなんですか」

「ただし手放しでは喜べないよ。九曜を見るとね、あんたは今年、火曜星にあたっているんだ。火曜星は、思わぬ災いをもたらすというから……」

「うむむ……、けっきょく良い運勢なのか悪い運勢なのか、判断に迷ってしまいますね」

季奈子が首をひねる。フサは豪快に笑って言った。

「あははは、禍福は糾える縄のごとし、ってね。しょせん、占いなんてそんなもんさ。心がけしだい吉にだって凶にだってなりえる。けっきょく運命を切り開くのは自分自身だからね」

「はい」

「でも、三千円もいただくんだ、ひとつヒントをあげようかね」

季奈子は驚いて目を瞬いた。ヒントってなんだろう。フサは先ほどの紙を裏返すと、そこに不思議な図形を描いて見せた。正五角形のなかに五芒星のようなシンボルがすっぽり収まった図だ。その図形の角にはそれぞれ木、火、土、金、水と五つの文字が書かれている。

「これは陰陽道でいうところの、五行相生図、相剋図というやつさ。

万物はみな、これら五つの元素から成り立っている。そしてそれぞれが互いに作用し合い、干渉し合ってこの世界のバランスを保っているんだよ」

「へえ……」

「ちなみに、あんたは今年——」

フサの節くれ立った指がすつとのびて、火という文字を指し示した。

「火の女だ」

「火の女ですか……、なんか情熱的な響きがありますね」

「ははは、そうだね。ぜひ燃えるような恋をしなくちゃね」

言いながらフサの指先はすーっと紙面をすべり、木のところで止まった。

「そして、あんたと相性の良い男性は、これ、木の男だよ」

「木の男？　ってどんな人だろう。まさか営林署につとめる人とか

……」

フサは苦笑した。

「そうじゃない、木の運氣を持つ人ってことさ。火を燃え上がらせるためには木をくべるだろう、だから火の女とは相性が良いんだよ。きつと森に生える木々のようにもの静かで、力強くて、どっしりと大地に根を下ろした、そんな雰囲気を持つ人じゃないかね」

「そんなものですか」

「そうさ。逆に水の運氣を持つ男は、あんたと相性が悪いから氣をつけな」

運氣などと言われても、季奈子は困ってしまう。うむむ、と首をひねっていると、フサがまた快活に言った。

「だれか意中のひとがいたら、名前と生年月日、そして三千円を持って再び私をたずねておいで。期待どおりの木の男か、私が占ってあげるよ」

占いはともかく、ここへはたまに遊びに来てもいいかな。そう思い季奈子は快くうなずいた。そんな彼女に、フサは最後にこんなこ

とを言った。

「愛は惜しみなく与う、って言葉知ってるかい。恋愛だなんてひとくくりに言うけど、恋と、愛とはまったく別のものさ。恋とは力づくで奪うもの、反対に愛とは互いに与えあうものなんだよ。あんたは、きつと素敵な出会いをする。これは私が保証する。でもね、本当に大切なのは、出会ってから先のことなんだよ——」

すっかりおやり、という励ましの言葉に送り出され、季奈子はフサの家を後にした。

外はすでに日が暮れかかっていた。頬をなでてゆく風が刺すように冷たい。季奈子は、あわてて鞆からカシミヤの手袋を取り出すと、両手にはめ、その手ですっぽりと自分の頬を覆った。ほっと息を吐き出してみる。小指と薬指のあいだから、真っ白い呼気がひろがり風にとけて消えた。

ここへ来たとき萎れていた心は、もうすっかり癒えて、今は晴れやかな気分になっていた。彼女は、力強い足取りで歩き出した。繁華街をぬけ、駅前のショッピングモールへと入る。せっかく美味しいお茶を分けていただいたのだから、素敵な急須と湯のみのセットが欲しかった。恥ずかしい話だけど、彼女の部屋にはコーヒーなどを入れるマグカップ以外置いていなかったのだ。

ちよつと歩くと、なかなかにお洒落な雰囲気のレストラン専門店を見つけた。でも看板にユニオンジャックが描かれているところを見ると、輸入食器をあつかう専門店なのかもしれない。そつとショーウィンドウを覗き込んでみる。

「ふむふむ、マイセンのワイングラスセットか、やっぱり品があつて素敵ね……」って、げっ、半額セールなのに九千八百円もするじゃない」

思わすのけぞってしまい、そのはずみで後ろを歩いていた人と肩がぶつかった。

「きゃあ、ごめんなさい」

あわてて振り向き、頭を下げる。相手は若い男性だった。

「おっと、だいじょうぶですか？」

彼は立ち止まり、季奈子が落とした鞆を拾い上げてくれた。

「あ、すみません」

恐縮しながら鞆を受け取るとき、その男とばっちり目が合った。

——あれ、このひと知ってる。だれだっけ？

頭をフル回転させ懸命に記憶の糸をたぐり寄せる。

——うむむ……どこで会ったんだろう。

大昔に仲良しだった友人のような気もするし、つい最近テレビドラマで見た俳優のような気もする。記憶って、こうも曖昧でいい加減なものなのか。自分で自分に呆れていると、不意にその男がびっくりしたような顔で笑いかけてきた。

「なんだ、だれかと思ったら、志浦さんじゃないか」

「あ……」

その瞬間、ようやく彼のことを思い出した。

第二話 Second opinion (後書き)

今回は、りきてつくすさんの回でした。さすがの描写です。

この続きはどうなるのか？ 現段階で私にも見えないのです。「タ

イトル未定」としましたが、「先の見えないラブストーリー（仮）」
に改題いたしました。

このままのタイトルでもいいけそうです。

第三話 Third event (前書き)

偶然、再会した男性。いつたい、彼は誰？ 三話目。沢木香穂里の番です。

第三話 Third event

「牧村さん？」

彼は、大きくうなずいた。

「や、やだな。私ったら、意外なところで会ったものだから、一瞬、誰だかわからなくなっていました」

牧村は、季奈子が倒産の憂き目にあった印刷会社で外回りの営業をしていた。そのため内勤で事務職の季奈子と顔を合わせる機会は、朝夕しかなかったのだ。季奈子の在職中に交わした言葉は、仕事上のやり取りかあいさつ程度である。どうりで確かに見覚えのある顔なのに、すぐに誰とは思いつけなかったわけだ。彼は、季奈子よりも三年早く入社している。確か四大卒だったから、今、二十六歳ぐらいだろうか。彼は、営業をしていた頃と同じように髪を短く切りそろえて、こざっぱりとした印象でそこにいた。ライダーズジャケットにジーンズ履きの姿は、さわやかで学生のようにも映る。名前はわからないが、テレビドラマの脇役でよく似たタイプの俳優がいたはずだ。

「久しぶりだね。あれからもう半年以上も経つんだな。志浦さん。今、何してるの。仕事は、見つかった？」

「あつ……いえ。あの、私はアルバイト生活で……」

自分は何も悪くはないのに肩身が狭くて、季奈子は、後の言葉を濁した。

「俺もまだ仕事が決まらないんだ。ま、堂々と言える事じゃないけどさ。同じ会社の仲間だったから、ぶっちゃけて言うよ。だけど酷い話だよな。俺は、少しばかりの退職金と失業保険が出たけど、志浦さんは、入社したばかりで、何にもなしだもんな。可哀相だなって思ってた……」

季奈子の胸に懐かしさがよみがえる。株式会社 袋小路印刷。新人であり一番若かった季奈子は、社内で唯一、二十代の女性社員だ

った。そんな季奈子の次に若い女性社員は、四十代半ばで、親子ほども歳が離れていた。そんな環境だったから、女性同士のいじめもなく、娘のように可愛がってもらえたものだ。まだ試用期間中だった季奈子は、早く一人前になりたくて日々夢中で仕事に向かっていた。解雇を言い渡されたのは、そんな矢先の事である。退職日の三日前。梅雨明けが待ち遠しい六月の終わりだった。朝一番に全社員を集め、その事を告げる時、先代から引き継いできた会社を自分の代でつぶすとはと、高校時代はレスリングの全国大会で入賞したと言う経歴を持つ、いかつい社長が男泣きに泣いていた。袋小路印刷に愛着を持つ他の女性社員も、思わず貰い泣きしていたけれど、季奈子は突然の事に涙も出なかった。

入社したばかりの季奈子は、気づかなかったのだ。すでに兆候があった事に。沈みかけた船から鼠が逃げ出すように、ひとりふたりと若い営業マンたちが、会社を去って行った。取引先経由でこの会社は、危ないとの噂も耳にした。それでも不景気と言われる時代にここは、自分を採用してくれたではないか。だからきつと持ち直すと信じていた。いや、そう信じたかったのかもしれない。季奈子と机を突き合せて仕事をする女性達は、義理を重んじる年代と見えて最後まで会社に残っていた。しかし、後で冷静になつて考えてみれば、単に転職先が見つからなかっただけかもしれない。

そこまで思いを巡らせたところで、季奈子は、不意に洋服の袖を引っ張られ、よろけた。牧村の顔がすぐ近くにある。ボディゾーンの領域を侵略されて、季奈子の心臓がどきりと鳴った。もしかして……もしかすると彼が運命の人なのだろうか。まさか。今、占いをしてもらったばかりで、それはいくらなんでも早計過ぎる。

「ここで話していると、通行の邪魔だね」

季奈子の戸惑いなんかお構いなしに牧村は言った。

振り返ると、ストールを巻いた年配の婦人が薄紫のサングラスの奥でぎょろりと季奈子を睨んでいた。張りのない首筋を飾る二連のペンダント。太いチェーンが、犬の首輪を連想させ、高級なのだろ

うがいささか悪趣味だった。咄嗟に成金の二文字が季奈子の頭に浮かぶ。自分が行く手を阻んでいて、こう言うのもなんだが、このおばさん、怖い……と思った。

「す、すいません」

季奈子は、首をすくめるとぺこりと頭を下げた。婦人は、何も言わずにつんと向き直ると店の扉の中に吸い込まれて行つた。季奈子は、視線を落とすと、おばさんの革靴から伸びたむくんだ足首のたるみを見送つた。

「入るんだろ？」

「え？」

「志浦さん。この店に用事があるんじゃないの？」

「あ。いえ。私は、ここの食器に興味があつて見ていただけで……」
彼はにつこりと微笑んだ。

「ああ！　じゃあ、入ろう」

促されるように季奈子は牧村に続くと、恐る恐る店の中に足を踏み入れた。店内は、優しいオルゴールの音色に包まれていた。一番先に季奈子の目に入つたのは、レースのテーブルクロスの上に置かれたウエッジウッドのコーヒーポットとカップのセットである。おなじみのワイルドストロベリー柄。五万二千八百円也。季奈子は、ほうとひとつため息をついた。可愛い柄に丸みのあるフォルム、金色の縁取り。繊細に仕上げられた高級品だけが持つ気品。こんな食器でお茶をしたなら、どんなにか優雅な気持ちで美味しくいただける事だろう。今日、牧村に偶然再会していなかったら、こんな高級なお店に入ることなどなかった。精々、目の保養をして帰るところにしよう。季奈子はゆっくりと足を進めた。季奈子の近くにすでに牧村はいなくなっていた。店の奥に目をやると、牧村はしきりに棚のティーカップを眺めている。彼は、ここで買い物をするつもりなのだろうか。失業しているのにこんなに高い物を？

いや、余計な詮索はすまい。季奈子は、身を堅くしながら、陶磁器を見てまわつた。壁に配された作り付けの木製棚には、コーヒー

カップが一客ずつ飾られている。そのどれもにゼロが四つついている。たまに一万円を切る商品が見つかる、その都度、季奈子は胸を撫で下ろした。ここは、そんな世界だった。

ミントン、リチャードジノリ、ロイヤルコペンハーゲン。いわゆるフリーターの自分には手も届かないような世界の名だたる陶磁器。こんな食器を愛用している上流階級の客がいる。だからこそこの店の商売が成り立っているのだと、季奈子の想像は店の経営状態にまでも及ぶ。不意に牧村が、近づいてきた。

「志浦さん」

「はい？」

咄嗟の返事のひっくり返った声を自分の耳で聞いた。焦り。うろたえるな、自分。季奈子は、ごくりとつばを飲み込んだ。牧村は言った。

「一緒に食器を選んでくれたら助かるんだけど。俺、女性の趣味がわからなくてさ……」

今、牧村は、女性の趣味だと言った。とすると牧村は、ここには女性への贈り物を見繕いに来たのか。なんだ。一度膨れ上がった期待が急速に萎えていくのを季奈子は感じた。一瞬でも牧村が、運命の人かもなんて思った自分が恥ずかしい。彼女に贈るなら、彼女と来ればいいのに。いや、こっそりプレゼントして驚かせたいのかもしれない。

季奈子はきつと顔を上げ、迷いを振り切るように言った。

「いいですよ」

行きがかり上である。しかも同じく会社を解雇となった元同僚の頼みとあっては、断れない。テーブルウェアの店で高級食器を選ぶ、失業中の牧村にフリーターの自分。おかしい構図だが、これも何かの縁に違いない。もしも季奈子が帰り道、占いに立ち寄らなければ、フサからお茶の葉を分けてもらわなければ、この時間にこの場所を訪れ、ばつたりと牧村に出くわす事はなかったのだから。

第四話 ? t r a n g e r

「あの、訊いてもいいかしら？」

季奈子は、どこか事務的な笑顔をづくり牧村に訊ねた。目を見ないように、心が折れないように、まるで明日のお天気でも訊ねるように平静を装って……。

「どなたへの贈り物？」

とくん、——と胸が高鳴った。牧村の目を見ることができない。無意識にそらす彼女の瞳に、店のショーウィンドウを透かして外の景色が映りこんだ。

コートの際をかき合わせ、足早に帰宅する勤め人たち。せわしなく行き交う、自動車のヘッドライト。

タイ料理店の看板と、風に揺れるコンビニののぼり。

葉が散って、すかすかになった街路樹。

ごくありふれた、秋の夕暮れ。そのどれもが、無声映画のワンシンのように別の世界の物語として彼女の心をすり抜けてゆく。

また、とくん、——と胸のおくが鼓動した。

目の焦点を、外の景色から磨き込まれたガラスへと移してみる。カメラのピントが合うように、そこに映りこんだ店内の様子が見えはじめる。

壁に貼られたポスターのなかで微笑む、異国人。

陳列された高級陶磁器の、冷たい輝き。

接客する店員の、きれいに揃えられたつま先

非常口の脇に積まれた、白い段ボール箱のやま。

私と。

そして、元同僚の若い男性。

外の寒さとは対照的に暖房のきいた店内はとても暖かった。彼女は、じつとりと汗ばんでくる手のひらを軽くにぎりしめ、ゆっくり息を吸い込んだ。もう一度、とくん、——と胸が鳴る。

牧村が言った。

「姉貴に贈るんだ」

「え……」

「来週、結婚するんだよ」

季奈子は、ふっと自分の体が軽くなるのを覚えた。騒がしかった胸の高鳴りが、急速に静まってゆく――。

「あ、お姉さんご結婚なさるんですか。おめでとうございます」

「ありがとう」

牧村が笑った。笑うと、日に焼けた両の頬に小さなえくぼができるのを発見した。ともに会社で働いていたころには、これほど近くで話をする機会などなかった。さつき偶然出会うまでは、なんの接点もなかった二人。なにか不思議な星の巡り合わせのようなものを感じ、彼女は頭の片隅にフサの笑顔を思い浮かべた。

運命のひと。

まさかね。

耳たぶが、ほんのり赤くなる。

やだ、なに考えてるんだろう私、バカみたい……。

牧村がなにかを言いかけて、口をつぐんだ。じつと次の言葉を待つ。彼は黙ってポートメリオンのコーヒークップを見下ろしていたが、やがてしみじみとした口調で言った。

「……じつは姉貴、三度目の結婚なんだ。だから式は挙げないと言うし、もちろん披露宴だつてやらない。でも、そんなの淋しいじゃない。せつかく男女が知り合つて一緒に生きてゆく誓いを立てたわけだから、そこにはやはり愛の証というか、記念となるイベントなり品物があつてもいいと思うんだ」

「……ただ役所へ行って婚姻届を出すだけじゃ、淋しいですものね」「そうなんだ。だから俺は、従兄弟や姉貴と親しかった友人らを集めて、ささやかな祝いの席をもうけてやることにした。知り合いのやつてる小さな料理屋を借り切つてね。ついでにみんなから少しづつお金を集めて、プレゼントも買うことにした」

まだ姉貴には内緒だけどね、と言って彼は季奈子のほうを振り向き、そしていたずらっぽくウィンクした。彼女はあやうく、胸に抱いていた鞆を落としそうになった。

「姉貴は、むかしから料理が好きでね。そのせいで食器なんかにも凝っちゃって、少しずつお金を貯めては買い集めていたんだけど……、二人目のだんなを事故で亡くしたとき、それまで使っていた生活道具をすべて処分してしまっ……」

「……そうだったんですか」

「はは、悲しい顔しないでよ。そんな姉貴もようやくふさわしいパートナーを見つけて、これから新たな人生を歩みはじめるんだ。そして俺は彼女を喜ばせてやるために、ここで記念となる品を買っ……」

彼の人差し指が、ずっと季奈子の鼻先へのびる。

「それを選んでくれるのが君、っていうわけ——」

「あの……」

「自慢じゃないけど、うちの食器棚にはドーナツの景品でもらったコーヒーカップしかなくてね。俺はそういうものにまったく興味がない。コーヒーなんて中身さえ美味しければ、紙コップで飲んでもかまわないと思っている。だから志浦さんと偶然ここでめぐり会えて、本当に良かったと思っているよ」

そう言われて季奈子は急に気恥ずかしくなり、顔の前で小さく手を振ってみせた。

「いえ、私も、そんなに食器類について造詣が深いわけじゃないんですよ。情報誌で読み知ったくらいの知識しか持ち合わせていませんから」

「それでいいよ、直感で選んでくれればいい。もし自分がプレゼントされたらどれが一番嬉しいか、それを教えてくれないか」

「……それでよいのでしたら」

彼女は、美術館のように商品がディスプレイされた店内をひとり見渡し、ちよつと悩んでからある一角へと歩み寄った。じつは、

さつきから秘かに気になっていたものがある。瑞々しい果物が絵付けされたお洒落なティーカップ。縁取られた金色が、なんとも神々しい輝きを放っている。メッキではなく、おそらく本物の金を使っているに違いない。もしお財布に余裕があったならば、ぜひ自分にも……なんてつい思ってしまう。

「これ……すごく素敵なんですよね」

「ああ、これが」

牧村が相好をくずした。

「じつは俺も、さつきこれを見たときいいなあと思ったんだ。なんだか食器棚より宝石箱へ仕舞っておきたくなる、そんな高級感があるよね」

「ほんとですね……」

すかさず店員が声をかけてくる。

「これはエインズレイのオーチャードゴールドといって、当店の人気商品なんですよ」

こういう店のスタッフは、客に対し声のかけどころというのをわきまえている。やたらに話かけたりせずつち着いて商品を選ばせ、なにか気に入ったものを見つけたようなら、その瞬間を見極めすつと背中を押してくる。客に、気持ち良く、ごく自然に高級品を買わせるテクニクだ。

「贈り物ですか？」

牧村が微笑んで応じる。

「はい、姉への結婚祝いにと買って……」

「きつと、お喜びになりますよ」

彼が、ちらつと季奈子を見た。彼女は小さくうなずき、そのエインズレイのティーカップのなかから、とっておきのひとつを選び出した。

「じゃあ、これを」

「はい。ありがとうございます」

数分後、きれいにラッピングされた商品が牧村の手のなかにおさ

まる。彼は季奈子のほうを向き直り、ていちょうに礼をのべた。

「君のおかげで良い買い物が出来たよ、本当にありがとう。これで俺も一安心というわけだが、君のほうはいいのかい？ 自分の買い物を済ませなくて」

「私は、いいんです……」

元はと言えば、日本茶をいただく急須と湯のみが欲しかっただけである。あの美しいティーカップは……、いつか仕事を見つけてお金を稼いで、そして今みたいに生活費を捻出するだけで四苦八苦するなんてことがなくなつたときにでも、大手を振ってここへ買いに来よう。漠然とそんな思いを胸に抱き、彼女は牧村と一緒に店を出た。

自動ドアをくぐり外の空気に身をさらしたとたん、火照つた体から急速に汗が引いてゆくを感じた。ぶるつと身震いする。あわてて手袋をはめ、その手をこすり合わせるようにして息を吹きかけた。這うように流れる秋風が、さつきよりも冷たく透明度を増したように感じられる。落ち葉がさらさらとアスファルトの上をすべってゆく。牧村が、ジーンズのポケットに両手を突っ込んで、白い息を吐いた。

「ねえ、ちよつと時間ある？」

「え……」

「買い物に付き合ってくれたお礼に、お茶でもご馳走したいんだけど」

縮こまって寄せ合つた互いの肩が、一瞬だけ触れた。柑橘系のコロンと、革ジャケットに擦り込まれたミンクオイルの匂いがした。季奈子は、しだいに浮き立つ自分の心を必死になって抑えた。それでも自然と顔がほころんでしまうのは隠せそうもない。

「あ、はいっ、喜んで——」

家路を急ぐサラリーマンや、仕事帰りに買い物を楽しもうというOLたちで込み合うショッピングモール。その雑踏にまぎれ、二人は肩を寄せあい川面をただよう木の葉のようにゆるゆると歩いた。

あと二ヶ月もすれば、この街の景色もクリスマス一色になる。もし今、雪が降ってきたならどんなに素敵だろう、そう思い季奈子はどんなよりと曇った夜空を見上げた――。

「ねえ、志浦さん」

不意に牧村が言った。

「渡瀬課長のこと覚えてる？」

「え、あの、業務課にいた渡瀬課長ですか？　もちろん覚えてますけど……」

「じつは彼、会社を辞めた後この近くでコーヒーショップをはじめたんだ。ちよつとそこへ行ってみないか」

「ええっ？」

季奈子は驚いて目を瞬かせた。

渡瀬課長のことはよく覚えている。たしかもう五十過ぎだと言っていたが、とても物腰が柔らかで、背が低く小太り、顔にも丸みがあつていつも優しい笑顔を絶やさない、そんな人だった。季奈子も入社してから会社が倒産するまで、ずいぶんと親切にしてもらった記憶がある。

あの人が喫茶店のマスターだなんて、ちよつと似合わない気もするけど……。つい、くすつと笑いが漏れた。

「あの課長、酒が入るといつも口癖のように、俺は脱サラして喫茶店をやるのが夢なんだ、なんて言ってたけど、まさか本当に店をはじめてしまうなんて思わなかったよ」

「わあ、渡瀬課長のお店、ぜひ行ってみたいです」

「すぐそこさ――」

猥雑とした商店街を抜けて裏通りに入ると、少し落ち着いた雰囲気のあるビジネス街に出た。建ちならぶ雑居ビルのほとんどが法人のオフィスである。店といえばコンビニエンスストアと、輸入雑貨を取り扱う上品なたたずまいのショップが一軒だけ。そんななか、壁にびっしりと蔦のからまつたレンガ造りの三階建てビルに、コーヒーメーカーのロゴが入ったお洒落な看板が見えてきた……。

コーヒーショップ黒薔薇。

張り出したテラスに、びっしりと薔薇の鉢植えがならべられている。

「ここだよ」

牧村は、もう何度も訪れているのであろうその店の階段を、颯爽と上ってゆく。季奈子も急いでその後続いた。

から、からん――。

重たいドアを押しあけると、勢いよくカウベルが鳴った。つん、とコーヒー豆の香ばしい匂いが、二人の鼻先に立ちこめる。

「そこ、段差があるから気をつけて」

「きゃあ！」

牧村が注意する間もなく、季奈子が床の段差に足をとられて転びそうになる。店の奥から、あわてて人の近づいてくる気配があつた。

「大丈夫ですか？」

「マスター、やっぱりここ直さなきゃダメだよ」

「うーん、そうだなあ……、やはりスロープに造りかえてもらうべきか」

そう言つて首を捻つてから、そのマスターと呼ばれた男は、あれ？ と驚きの声を上げた。

「君……もしかして、志浦さんじゃない？ ほら、袋小路印刷につめていた志浦さん、そうだよな？」

顔をまっ赤にして落とした鞆を拾い上げた季奈子は、あわててぺこりとお辞儀をした。

「ど、どうも、ご無沙汰しておりますっ」

「いや懐かしいなあ、ははは、本当によく来てくれたよ。外は寒かつたろう、ささっ、どうぞなかへ入って、夜景の見える奥の席がいかな。せつかく来たんだ、今日はゆっくりしていつてよ」

かつての業務課長は、白いドレスシャツに身を包み、上品にヒゲをたくわえ、すっかり喫茶店のマスターになりきっていた。季奈子は、妙な感慨を覚えた。

——会社を辞めてから、私はなにか時間の流れがそこで止まってしまったような、そんな妙な錯覚にとらわれていた。それでも世の中はちゃんと動いている。この渡瀬課長だって会社が倒産したとき私と同じように、いえ私以上に大変だったはずなのに、こうして自分の道を見つけ、切り開いている。自分だけが特別運の悪い存在だなんて思ってたやダメ。牧村さんだって、きっと毎日一所懸命に仕事を探しているはずだもの。

だったら私だって……。

落ちていた色調のインテリアに見え隠れして観葉植物が遠慮がちに葉をひろげている。優しい間接照明が、たばこの煙をきらきら光らせる。季奈子は、ふと板張りの床に視線を落とした。すり減った靴のつま先から店の奥へ向かって、線の細い自分の影がすーっとのびているのが見えた。

そうよ、頑張らなつくっちゃ。

どこか陽気なジャズのフリーズと、久しぶりに会った人の良い課長の以前と少しも変わらぬ後ろ姿が、彼女の心に言い知れぬ勇気と感動を与えてくれた。

今日はなんだか、とても良い日……。

気を抜いた瞬間、ついほろりと涙がこぼれた。

第五話 Memory

季奈子は、目尻の涙をそっと人差し指で拭くと、目をしばたかせた。ゆっくりと時間が流れていく。季奈子は牧村から目を逸らし、窓越しに見える明かりに目を向けた。通りの向かいには、輸入雑貨店が見える。店員が出てきて、軒先に置かれた籠入りの商品を片付けはじめた。周辺のオフィスビルは、こうこうと明かりが点いている。この街が完全に眠るのは、もっと夜が更けてからだろう。駅前の喧騒とは趣を変えたビジネス街にあっても、人々の生活の息吹が感じられた。

——そして

夜の訪れと懐かしい人々に会った感慨が季奈子をセンチメンタルな気分にならせていた。

「どうしたの？」

牧村の声に季奈子は我に帰った。

「あつ、ごめんなさい。今日、渡瀬課長や牧村さんに会えて、とっても懐かしくて」

牧村は、目を細めて季奈子を見つめている。とくんと胸がまたも鼓動を打った。不思議だった。昼過ぎまでは、やりきれない気持ちだったのに。フサに会ってから、運命の流れが、まるっきり変わってしまったかのようだ。

——運命

季奈子の視線が、牧村の目と一瞬だけクロスする。けれど季奈子は、すぐに視線を牧村の胸元のライダースジャケットの金具に移した。恥ずかしくて、まともに顔を合わせる事ができない。

「なんだ。牧村が泣かせたのか。だめじゃないか」

いつの間にかマスターが水を運んできていた。テーブルに表面にびっしりと水滴のついた冷えたグラスがカタリと置かれる。

「いやだな。マスター。俺、泣かせてなんかいませんよ」

そんな事ないんです……と、季奈子も慌てて胸の前で手を振った。
「わ、私は、渡瀬課長いえ、マスターや牧村さんに会えて、みんな
頑張っているんだなあって思ったら、泣けてきちゃって……」

マスターは、びっくりしたように牧村と顔を見合わせている。それ
から少し考えるように口ひげをなぞって言った。

「志浦さん。何か辛い事があるのなら話してみないか。僕らは一緒に
仕事をしてきた仲間だ。今日、こうして会ったのも何かの縁だと思
うんだ。残念な事に会社は倒産してしまったけど、幸い僕は、か
ねてからの念願だったコーヒーショップをこうして開店する事がで
きた。だからね。まあ、僕なんかじゃ、志浦さんの役にたてるかど
うかわからないけどね。話だけでも気持ちになるかもしれないな
いよ」

「ありがとうございます……ごさい……ます」

季奈子の目から再びじわりと涙がこぼれ落ちる。会社を解雇さ
れてからというものの、こんなに他人の温かさが胸に沁みたことはな
かった。

「ほら、今度はマスターが志浦さんを泣かせちゃったじゃないか」

「ああつ、志浦さん。ごめんね」

マスターがうろたえたように言った。季奈子は、かぶりを振ると
手早く鞆からハンカチを取り出して目頭にあてた。

「いえ。嬉しいんです……ほんとに」

何か言えば、また季奈子をほろりとさせてしまう。マスターが、
それ以上何も言わなかったのは、そう考えての事だろう。彼に押し
付けがましさを偽善めいたところは、少しも感じられない。心から
季奈子の力になりたいと思っっているようだった。

「じゃあ、今、二人にとびきり美味しいコーヒーを淹れてこよう」
マスターは再びカウンタの奥に姿を消した。ふたたび牧村と差し
向かいの時間がやってくる。何を話そう。牧村のお姉さんの事をと
思ったが、プライバシーに立ち入るようで気が引ける。会社時代の
話はどうだろう。しかし、最後には、倒産で暗い話になってしまい

そうだけど。共通の話題はそれくらいだ。季奈子の心拍数が徐々に上がりはじめる。会社にいた時は、ほとんど話した事もない彼。季奈子は、姿勢を正して足を揃え、椅子に座りなおした。ライダースジャケットを着た彼に対して、自分は、かつちりとしたジャケット姿。ちぐはぐな服装の二人は、いったいどんな間柄に見えるだろう。喉が渴いてきた。季奈子はスカートの柄から目線を上げるとグラスの水をゆっくりと口に含んだ。コーヒーの香りが一層強く店内に立ち込める。先に沈黙を破ったのは、牧村だ。

「今日は、本当にありがとう」

ビニールコーティングされた重量感のある紙袋を牧村はいとおしそうに撫でて言った。

「とんでもない。牧村さん。お姉さんと仲が良かったですね」

「うん。姉は、俺より十歳も年上なんだけどね。両親が共働きだったせいで、よく面倒を見てもらっていたんだ。しつかり者の姉でね。早くに結婚したんだけど、最初の結婚は失敗だったんだ。そして次のだんなが死別で。だからやるせなくてさ。なんとしても今度こそは、幸せになってもらいたい」

牧村は、水をぐつと飲むと半量ほどに減ったグラスをテーブルに置いた。

「まあ、姉に言わせると、人の事なんか心配しないで、あなたはさつさと仕事を見つけないかってさ。痛いところを突いて来るよね」

牧村が季奈子に相槌を求めるように軽く笑う。季奈子は、こくりとうなずいて言った。

「私も早く仕事を見つけないちゃ。今は、牛井屋さんのアルバイトだから」

「ええと志浦さんは、一人暮らしなんだっけ？」

「はい。私は、地元の短大でデザイン関係の専攻だったんです。ずっと県内で育って来たから、いちどは東京に出たいと思って。袋小路印刷では、面接の時、社長が私の履歴書を見て、いずれデザインの仕事もさせてあげるって……。それで事務で採用されたんです」

「ああ、そうだったんだね」

会話を邪魔しない絶妙なタイミングで、マスターがコーヒーを運んで来た。

「さつ。どうぞ」

立ち上る芳香が鼻腔をくすぐる。季奈子は、鼻先にカップを近づけると湿気を孕んだ香りを思い切り吸い込んだ。飲んでみてと言いたげなマスターの瞳に促されるように、季奈子は一杯を口に運ぶ。

季奈子は、美味しいと小さく呟くと、マスターに笑みを向けた。牧村もまたコーヒークップを傾ける。

「やっぱりマスターのコーヒーは、最高だね。で、俺さ……」

一旦、言葉を切ると、牧村ははっきりとした口調で言った。

「応募していた第一堂の書類選考に通ったんだ」

「おおっ、本当か!？」

マスターの声がひときわ高くなった。第一堂の名前は季奈子も知っている。袋小路印刷よりも更に規模の大きな印刷会社である。袋小路印刷に勤めてからと言うもの、季奈子は俄然出版物に関心を持つようになった。コンビニに入っても本屋に入っても雑誌を手にした時は、まず裏面の印刷所の名前に目を通す。それ自体になんの意味も成さないのだけど、どこの会社が印刷したのかを知ると、にわかには安心できたものだ。第一堂の名前を目にする機会は、袋小路印刷のそれよりも多かった。

「昨日、面接の案内を受けて。それに通れば次は社長面接なんだってさ。さすが第一堂。簡単には入れてくれない。でもチャンスだと思っただけ一杯面接を受けてくるよ」

「ああ、頑張れよ。牧村君なら出来る」

季奈子は、だまって二人のやり取りを聞いていた。やっぱり、牧村さんは現状に甘んじてはいない。ずっと頑張ってきたんだ。ここにマスターがいて、牧村さんがいる。そして美味しいコーヒー。黒薔薇で過ごす時間は、季奈子に明日からの活力を与えてくれた。

黒薔薇を出た頃には、もう八時半をまわっていた。ビジネス街を抜け、駅近くに辿り着く。途端に人の流れが戻ってきた。

「志浦さん。すっかり遅くなってごめんね」

「いいえ。私のほうこそお茶をご馳走になって、ありがとうございました」

「ねえ。志浦さん」

牧村の目が季奈子を見据えている。季奈子は、息を詰めて牧村の次の言葉を待った。

「俺の就職が決まったら、もう一度黒薔薇で会ってくれないか」

「え？」

「俺は今までひとりで就職活動に明け暮れてきた。見届けてくれる人がいると、嬉しい」

「えっ。あの……」

どうして。私なんかで……牧村の真意を問いただきたい。言いたい言葉は実を伴わずにただ胸の中でリフレインしていた。俺の就職が決まったら……それは、第一堂のことだろうか？ それともいずれ就職したらのことだろうか。何故、自分なんだろう。今日、再会したしたばかりの自分。そこに恋愛感情があるとは、考えるににくい。元同僚と言う間柄に裏打ちされた友情に近いものなのだろうか。牧村の真剣な表情に押された季奈子は、ただ肯定するしかなかった。

「あっ……わかりました」

「ありがとう」

牧村は、うなずくと軽く手を上げて言った。

「それじゃあ、気をつけてね。おやすみ」

「おやすみなさい……」

二人は、そこで別れた。

季奈子は改札に向かいながら、牧村に会ってからの事を思い出していた。彼の言葉のひとつひとつを脳内に再生させては、じつくりと味わう。それらは心地よく脳髓に染み渡り、次への甘い期待に繋がってゆく。彼は、また会ってくれないかと言ってくれた。ついつ

いにやけそうになる顔を季奈子は手袋で覆った。道端で一人でにやにやしているなんて、かなり怪しい人だ。

——けれど……。

牧村さん。第一堂に受かるかなあ……。

第一堂への応募者は、かなり多いらしい。彼は大丈夫だろうか。在職時の彼の人懐っこい笑みが季奈子の脳裏にのみがえった。そうだ。牧村には笑っている印象しかない。会社にいる時は、いつも笑顔だった。不平不満をストレートに口にするでもなく人の悪口も言わない人。直接、話したことはなくても、評判は小耳に挟む。感じの良い人だと、ひそかに好感をもっていた。

——神さま。牧村さんが第一堂に受かりますように……。

『季奈子ちゃんは、強運の持ち主だって言っただろう？　これから面接を受ける彼が、強運の女神様に出逢ったら……どうなると思う？』

不意にフサの声が聞こえてきて、思わず振り返る。まるで、すぐそばにいたようなハッキリとした声だった。

しかし、季奈子が見つめる先には、見知らぬ人々が行き交う駅前の風景が佇んでいるだけだった。

第五話 Memory（後書き）

沢木香穂里の番でした。自分なりに一所懸命頑張ってみたんですが、如何でしょうか。りきてつくす先生も気合が入っているようで、こつ、怖いです……。

第六話 B l i n d l o v e (前書き)

さーて、そろそろ仕掛けてみましょうかね^{じぎょうくす} ^^

第六話 B l i n d l o v e

その男は漆黒の衣を身にまとっていた――。

と言えば聞こえはいいが、たんに上から下まで黒のスウェット姿である。しかも上下セットで九百八十円。先月の初めころだったか、激安衣料品店の自動ドアのわきに投げやりな感じで置かれていたセールの品のカートから、苦勞して掘り起こしたものだ。背中の方はラメ入りの鷹と富士山がプリントされていて、そのあまりにおめでたい図柄が見るものにかえって不吉な印象を与えている。ついでに首廻りや袖口のジャージは、すっかり伸びきってびろんびろんになっていた。

「うー、寒い」

男は、ぶるるいつと震えながら背中を丸めた。短く刈り込んだ坊主頭を支える日焼けした首に、これは純金製の太いネックレスが下がっている。

「なんでこう冷えやがるんだっ、だっ、だっ、だあーつくしよい!」
ほとんど絶叫に近い豪快なくしゃみを飛ばし鼻をすすると、その斜め後からちよつと間延びしたような声が返ってきた。

「財布の中身が寒いから心まで寒く感じちゃうんすよ。あーあ、第五レースまでは順調だったのに、まさかあそこでメジロウイングが走行妨害とられて失格になろうとは……」

「やいマナブ、てめえさつきから同じ愚痴ばっか垂れてんじゃねえぞ」

坊主頭に一睨みされ、マナブというひょろりと背の高いその若者は、生来の猫背をさらに折り曲げて縮こまった。

「すみません、アニキ」

「ちくしょう、お前のせいでまた思い出しちゃったじゃねえか……。あのぼんくら騎手が、トーシローでもあるまいに下手うちやがって今度会ったらただじゃおかねえ、どてっ腹に二、三発弾あぶち込ん

で山んなかへ埋めてやる」

そう言つて、ぺつと唾を吐いた。時刻は三時を少し回つたところ。ラッシュアワーにくらべると交通量は少ないが、それでも私鉄沿線に延びる国道だけあつて宅配便のトラックやら路線バスやらがひっきりなしに通る。排気ガスをまき散らし車が走り去るたび、道路わきに吹きだまつた黄色い落ち葉が風に巻かれて紙吹雪のように舞い上がった。

「ふっ、なんだか今は落ち葉まで、破り捨てたハズレ馬券に見えやがるぜ……」

通りの両側は、テナントビルにまじつて店舗兼用の住宅が軒をつらね、ちよつとした商店街のようになっていた。ちやうど高校の下校時間帯らしく、そちこちの店先で帰宅途中の生徒がたむろしている。クレープを頬張っているやつ、スポーツバッグをリュックのように背負つて立ち読みするやつ、コンビニの店先でウンコ座りしてスポーツドリンクを喉に流し込んでいるやつ……。今どきの高校生の例に漏れず、男子生徒はみな浮気の現場を見つかった間男みたいに今にも脱げそうな腰位置でパンツを引っかけているし、女子生徒は客へのサービスで学生のコスプレしているキャバ嬢みたいに派手なメイクを施しパンツが見えるくらい丈の短いスカートを穿いている。坊主頭のアニキが、ふんと鼻息を荒げた。

「最近のガキどもときたら、見かけばっかちゃらちゃらがつて、しかもみな判で押したように同じファッションをしていやがる。胆の据わつた硬派なやつなんて一人もいねえ。嘆かわしいとは思わねえか、見てみるよあのズボンの穿きかた、脱ぐのか穿くのかはつきりしやがれてんだ」

マナブが不思議なものでも見るような目で言った。

「俺たちの頃は、つっぱりと言やあ短ランにボントンつて相場が決まつてたんすけど、今どきの学生はあれっすね、さっぱりわけの分からん格好するもんすね」

「だほっ、短ランなんてのは根性なしが着るもんだ。俺が学生のこ

ろはな、と言っても中学までしか行つてねえが、不良はみんな裾が膝までとどくような長いやつをはおっていたもんだよ」

今日も元気にドカンをきめたら洋ラン背負つてリーゼント――

調子つ外れの音程で歌い出したところへ、男子生徒のグループがガムをくちやくちや噛みながら通りかかった。周囲の迷惑をかえりみず大声でふざけ合っている。たちまちアニキの坊主頭に、ぷにぷにと青いミミズのような静脈が浮き上がった。

「こらあつ、そのガキども！」

見知らぬオツサンに突然怒鳴りつけられ、学生たちは驚いて後じさりながら一斉に振り向いた。

「……な、なんだよ、いきなりびっくりするじゃねえか」

息を飲みながら目を丸くする彼らをサングラス越しに睥睨しながら、坊主頭はドスの利いたざらざら声で言った。

「てめえら、耳の穴かつぽじつてよく聞きやがれ、……少年老いやすく学なりがたし、一寸の光陰軽んべからず、いまだ覚めず……覚めず、……あれ？ おいマナブ、覚めずの後はなんだっけ？」

急に話をふられマナブは、ええつ、と大げさに仰け反つてみせた。

「お、俺知らないっすよ。なんすかそれ？ 天保水滸伝っすか」

「ばかやろつ、オヤツサンが任侠道について語るときいつも口にするだろつ。ほら大昔の中国にいた偉い学者さんだかの言葉で……」

「――いまだ覚めず池塘春草の夢、階前の梧葉すでに秋声」

骸骨のピアスをした学生の一人が、抑揚のない声で言った。他の男子学生たちも、そろつて興ざめた顔に薄笑いを浮かべている。

「おう、それよそれ、なんだお前から知ってるじゃねえか」

「ふん、高校生なめんなよ。いくら落ちこぼれだからって、ヤクザに説教されるほど頭の出来は悪くねえからな」

「な、なんだとっ」

「おい行こうぜ、こんなオツサンにかまってたら、俺たちまでヤクザの仲間と思われちまう」

そう言つて噛んでいたガムをぺっと吐き捨て、わらわらと蜘蛛の

子を散らすように逃げて行った。坊主頭のアニキは、怒りの矛先を失いまつ赤な顔をしたまま視線をふらふら泳がせていたが、不意にパンチパーマをかけたマナブの頭をぺしっと引っぱたいた。

「痛てっ」

「てめえが無学なせいで俺まで恥かいちまったじゃねえか」

「……そ、そんなこと言っただって」

「おい、ところで今何時だ？」

痛い頭をさすりながら、マナブは左腕に輝く金色のロレックスを睨んだ。一昨年に香港へ行ったとき手に入れた、だれが見ても一目瞭然のまがい物だ。よく見ると文字盤にはめこまれた王冠のディテールが、小学生の図画工作なみにつたない。

「三時半ちょうどっす」

「なんだもうそんな時間か、そーいや腹減ったな」

「そうっすね、俺たち朝からなんにも食ってませんから」

「マナブ、おまえ今いくら持ってる？」

竜の刺繍がどこされたスカジャンのポケットを探り小銭をつかみ出すと、彼はそれを手のひらにならべて、ひい、ふう、みいと数をかぞえた。

「六百と……七十二円っす」

「けっ、しけてやがる。それじゃファミレスで仲良くコーヒー飲んだら終いだ」

坊主頭がふうとため息をつく。するとマナブが車道を隔てて建ちならぶ店の一角を指さした。

「アニキ、あそこに牛丼一杯三百円ってありますよ」

見ると、某牛丼フランチャイズチェーンの店先に、今なら牛丼（並）が一杯たったの三百円！と銘打ったのぼりが、まるで遠洋漁業から帰港したトロール船の大漁旗なみに何本もはためいていた。

「……牛丼か、一杯三百円ってことは、六百円ありゃあ二杯食えるってことだな」

「え、アニキ、俺の分は？」

「ばかやろう、競馬でスツて無一文の兄貴分がこうして打ちひしがれているんだ。ここは思う存分食べさせてやって、自分はその食べる姿を見て満足するつてのが男のなかの男つてもんじゃねえのか？」
「そんな無体な……」

食事をするには中途半端な時間にもかかわらず、その牛丼店にはそこそこ客が入っていた。ほとんどが下校途中の学生か、昼食を食いそびれた若いサラリーマンだ。坊主頭とパンチパーマは勢いよく自動ドアをくぐると、怒らせた肩をずいっと店内へさし入れた。一瞬、店のなかの空気がピーンと張りつめる。

「いらつしやいま……」

女性店員の「いらつしやいませ」の「せ」の部分がフェードアウトしてかき消えた。二人は端っここの席を目指し、肩を揺すり健康サングダルをぺたぺた鳴らしながら歩いてゆく。途中、他の客が食べている丼のなかを覗き込んで失望の声を上げた。

「けっ、なんだか猫マンマみてえな牛丼だな。これじゃムシヨのなかのメシのほうがよっぽど人間の食いもんらしいや」

「ほんとつすね、肉なんかしゃぶしゃぶ用のやつより薄っぺらじゃないすか」

やがて二人がどっかり席に着くと、両隣にいた客がまるで早食い選手権のような勢いでメシをかき込み、ほどなく逃げるように店を出ていった。坊主頭が叫ぶ。

「おうい、並二つ、サービスで量心持ち多めなつ、音速で持つてこいっ！」

マナブがセルフサービスの水を二人分取りに行きながら訊いた。

「なんすか音速つて？」

「すげー早くつて意味だ」

「そんなら光速のほうがずっと早いっすよ。俺小学校んときに先生から教わったつす」

「その先公つてのはどこの大学出だ？」

「さあ……？ たぶん教育大学じゃないすか」

「だめだな、東大出以外は信じられん」

「でも美人でしたよ、若いころの吉永小百合にそっくり」

「おーいつ、さっきの取り消しだあ。光速で持ってこいっ!」

再びカウンターの奥へ向かって叫ぶ。何人かの店員が直立不動の姿勢でほぼ同時に返した。

「は、はいっ、ただ今お待ちいたします」

店で唯一の正社員であるマネージャーの男が異様な雰囲気につき、PRIVATEと書かれたドアから首だけ覗かせ不審そうに店内を見回したが、坊主頭と目が合った瞬間、外敵に出会った亀のように首を引っ込めボタンとドアを閉じた。厨房のなかでは戸惑ったような囁き声が交わされている。

「お、おい、量心持ち多めってこのくらいかな?」

「ばか、もっと盛れよ。メシの量ケチって因縁つけられたら目も当てられないぞ」

「そうだな、よしっ、そんじゃこのくらいにしよう」

明らかに特盛りの「並」が二つプラスチック製のトレーに並ぶ。

それを見て、店の采配を任されているアルバイト店長が腕組みして唸った。

「さて、誰がこの牛丼をあのお客のところまで運んで行くかだが……」

ちようどそこへ、社員通用口のほうから元気の良い女性の声が飛び込んできた。

「おっはようございまーす。あれれ、今日もけっこう混んでますねえ」

基礎化粧品でこまかしているのではない天然の白い肌が、ほのかに上気している。こぼれんばかりの笑顔からは、なんとも言えない愛嬌がにじみ出ている。

「あ、季奈子ちゃん。ちようど良いところへ来てくれたよ。さっそくで悪いんだけど、これ三番テーブルまで運んでくれる?」

「はい、おやすいご用です」

ユニフォーム姿の季奈子は、澁刺として見えた。就職が決まるま

でのつなぎとして始めたアルバイトだが、案外自分は接客業が性に合っているんじゃないかなんて最近よく考える。たとえそれがマニュアルに沿った対話であるにせよ、お客さんと接するのは楽しいし、満足そうな顔で「ごちそうさま」と言ってもらえると、こっちまで嬉しくなってしまう。季奈子はここで働いているときだけ、将来に対する不安や恋人がいないことへの淋しさを忘れることができた。

「お待たせいたしました。牛丼の並がお二つですね」

言ってから丼の中身が並にしてはやけに多いことに気づく。まさか注文と違うものを運んできてしまったのだろうか。不審に思いカウターのほうを振り返ると、店のスタッフほぼ全員が肩を寄せ合い固唾を飲んで自分の一挙手一投足を見守っていた。

——なんか変なの。

「失礼しまーす」

ことりとテーブルに丼を置く。とたんに客の坊主頭が、ぬつと季奈子の方を振り向いた。

「おせーぞ、こらあ、光速で持って来いと……」

その瞬間、お互いの目が点になった。

なによ、この人あきらかにヤクザじゃない。季奈子は、彼のすっかり伸びきったスウェットの襟からちらりと見えた入れ墨に驚いて半歩ほど後じさった。だからみんな、ああやって店の奥からこそこそとこつちを覗き見ているんだわ。それでも逃げ出すわけにはいかず、もう一人のパンチパーマの前にも丼を差し出した。

「お、お、お待たせいたしました」

必死の愛想笑いを浮かべる。すかさず充血した三白眼が季奈子の顔をとらえた。

「なんだよ、これ。メシに比べて肉の量が……」

ところが、彼がなにか文句を言いかけたとたん、坊主頭がその頭を思いつきり小突いた。ごつと重みのあるにぶい音がした。

「痛てっ」

「ばかやろっ、この人に失礼なこと言うんじゃない」

自分が一番失礼だったくせに偉そうにそんなセリフを吐いてから、季奈子の顔を見てにっと不気味な笑みを浮かべた。

「いやあ、すんません、うちの若いもんが行儀作法を知らなくって、これみなひとえに兄貴分である私の責任、丁重にお詫びしますんでどうかひとつこらえてやっておくんない」

そう言つてハゲピカの頭を深々と下げる。季奈子はトレーを胸にひしつと抱きしめたまま、怯えた表情にむりやり笑みを作った。

「ご、ご、ごゆっくりどうぞっ」

ぺこりと頭を下げ、一目散にカウンターの奥へと引つ込んでいった。その後ろ姿をうつとりと眺め、坊主頭はほうと熱いため息をついた。

「……おいマナブ」

「はい？」

頭を小突かれたことへの恨みか、マナブがちよつと尖つた声を出す。だがそんなことには構わず、彼は夢見るような目つきで言つた。「見たか今の娘、良い女じゃねえか……。この世に生れ出て三十と四年、そのうち七年はムシヨにいたから実質二十七年だが、あんなに良い女と出会つたのは初めてだぜ」

そうっすかね？ と口を尖らせるマナブに、坊主頭は胸を張つて言つた。

「うん、俺あ決めたぜ。あの娘口説いて一緒になる。オヤッサンに盃返してカタギになる」

マナブは食べかけの牛丼を勢いよくぶーつと吹き出した。

「なな、なに言ってるんすか、アニキ？」

「仕方あるめえ、相手はカタギの娘さんだ。それにヤクザやめるつてのは今思いついたんじゃないやねえよ、ずっと前から考えていたことなんだ」

「テキ屋やめて、どうやって食つてくんすか？」

「まあ、二人で知恵をしばりゃあ、なんとかなるだろ」

「えーっ、俺っちも道連れっすか？」

マナブの手から箸が滑り落ちて、ころころと床を転がった。

「ははは、おめえはなにも心配しねえで黙って俺に付いてくればいいんだ」

にかつと笑ったその口は、まるでピアノの鍵盤みたいに歯が何本も欠けていた。ついでに言うとき左手の小指が半分ほどない。

この男、名を木村茂樹といった。

名前だけ見れば、まさに「木の男」なのだが……。

第六話 B l i n d l o v e （後書き）

リレー小説の真髄はバトルをすることにあります。作者同士がストーリーの主導権を奪い合い真剣勝負するのです。というわけで今回ボクの放った牽制ジャブを、香穂里先生は上手くかわすことが出来るのでしょうか。はたして反撃はあるのでしょうか。次回、乞うご期待なのであります！（りきてつくす）

第七話 P r i m a r y e x a m i n a t i o n (前書き)

沢木香穂里。勝負かけます！

第七話 Primary examination

今、地震が起これば、真っ先にに崩壊してしまいそうな長屋のドアを、茂樹が力任せに引っぱった。ベキッとドアがもげるのではないかと思うような鈍い音が鳴る。全開になったドアの内部から、かび臭い湿った空気が流れてくる。

「寒びいな、うー。ちくしょうっ」

背を丸め、だぼだぼのスウェットの首周りを両手で押さえながら、茂樹はサンダルを脱ぎ捨てて部屋に転がり込んだ。湿気を帯び、赤茶けた畳がにちゃりと足裏にまつわりつく。それでも構うことなく茂樹はどっかりと腰を下ろした。後に続くマナブが、うつむき加減にドアを引くとボタンと閉じる。このドアの扱いには、コツを要するのだ。ここは、すっかり建て付けが歪んでいて、梁と柱が直角ではない。そして風通しが良いといえは聞こえはいいが、中にいてもスースーとすき間風が忍び込んでくるのだ。壁が薄いから隣の部屋の話し声だってまる聞こえだし、昼間であっても中は常に薄暗い。部屋の中は、装飾めいたものは何ひとつなく、整理棚とちゃぶ台と天井の真ん中からぶら下がった電灯がひとつあるだけだ。それでも住まいとしては、充分だった。なぜなら茂樹とマナブは、一年の大半は、テキ屋稼業で全国を巡っていて、ここにはいないからだ。茂樹は、はちきれそうに膨れあがったスウェットパンツのポケットから大量のティッシュを取り出すと、ちゃぶ台の上にぶちまけた。帰りの道すがらティッシュ配りの男から、ポケットティッシュひとつなんて、しけた事してんじゃねえよ。もっと寄越しなといちゃもんをつけて、奪ってきたものだ。ひっくり返すと、裏にニコニコ金融の広告が挟まっていた。深夜のB級ドラマに出ている女優がさわやかに微笑んでいる。顔はわかるが、名前は定かではない。が、思い出す必要もない。茂樹は、ティッシュの封を切ると、ちーんと鼻をかんだ。

さて、これからどうしようか。茂樹は壁にかかったカレンダーに目をやった。冬場になれば、屋台の仕事はぐっと減ってしまう。秋祭りの開催を追って、南へ南へと移動した後は、首都圏で時折、開催される冬のイベントに店を出すのが関の山だ。とりあえずは、日銭を稼いで冬場を凌ぐしかない。競馬では散々だったけれど。

マナブとは見れば、ガスコンロで沸かした湯をやかんから、じかに急須に注ぎこんでいる。マナブが使い終えた茶の缶は、すでに空っぽになっていた。マナブが、茶を差し出した。安っぽい黄色い液体の中に茶柱が横向きに浮いている。

「アニキ。どうぞ」

茂樹は、それを受け取るとずりりと一口をすすった。味を確かめるようにぴちゃぴちゃと舌を鳴らす、すぐにしかめっ面で湯飲みの中をじろりと覗きこむ。

「なんだ。こりゃあ。味も香りもしねえじゃねえか。おい」

「えーっと……賞味期限が、六月二十五日……。あ、日が過ぎてらあ……」

すかさず、茂樹の左手がマナブの頭を小突いた。

「痛てっ」

「何、飲ませやがるんだ。コラ」

「へい。すみません……」

茂樹は、ちゃぶ台の上にダンと乱暴に湯飲みを置くと言った。

「おう。マナブ。お前……な」

「へい」

「仕事探して来い」

「へっ？ し、仕事……っすか」

マナブが、目を白黒させている。

「おうよ」

「あの……アニキは？」

「ばかやろ。世話になったアニキに働いて尽くすのが、子分としての務めじゃねえのか？」

「そ、そんな殺生な……」

「つべこべ言わずにとつと探してきな。このままじゃお飯の食い上げた」

マナブは、ひと息つく暇もなく、部屋からせきたてられるように出て行った。

ばたんと玄関のドアが閉じられる。マナブの後姿を確認すると、茂樹は、再び湯飲みを手に取ると、牛井屋でのワンシーンを思い出した。

——それにしても良い女だった。

驚いた顔の牛井屋の女店員。大きな目をますます大きくして、困惑した表情を浮かべていたっけ。色白の肌をした彼女は、なんとも可愛らしかった。パツチリとした目にデンと位置した大きな鼻がご愛嬌である。どこか懐かしい顔立ちが郷愁を誘う。やがて彼女の顔と重なるように、茂樹が小学生の頃に急逝した母の顔が浮かんできた。そうだ。記憶に残る母は、色白で、ふっくらした頬に大きな鼻をしていた。いかにも幸運を呼び込みそうなおかめ顔だった。なのに若くして病気で亡くなってしまったのである。

——あの娘は、どこかおつ母あに似ている……。

自分が、こんな風になってしまったのも、家庭に問題があったからだ。厳格な父と新しい母のいる環境は、到底馴染めるものではなかった。まして父と母の間に子供が産まれるとますます居心地が悪くなる。そんなわけで茂樹は、中学卒業と同時にひとり、家を飛び出した挙句、やくざの世界に足を踏み入れるに至ったのだ。茂樹は、ぎゅっと湯飲みを握る手に力を込め、一気におおった。次の瞬間、うっと鼻から息を吐いた。かろうじて吹くことなく、口の中のものをごくりと飲み込む。

——くそつ。不味い茶だった……。

スーツに身を包むときりりと心が引き締まる。牧村は、第一堂に向けてアスファルトの歩道を急いでいた。外の冷たい空気も今の牧

村には、まったく苦にならない。それよりもこれから受ける面接の事で頭が一杯だった。むしろ、ここまで歩いてきた事と、気分が高揚している事から、暑いとさえ感じられるほどだ。最寄駅から五分ほど歩いただろうか。交差点の角を曲がると、第一堂の建物が視界に飛び込んできた。様々な会社が入居している白いビルは、一階がカフェテリアになっていて、二階と三階が第一堂になっている。牧村は、感慨深げに立ち止まると、まずはビルの全景を眺めた。それから、おもむろに腕時計を確認する。午後四時。書類選考通過の案内に面接は午後四時半からと指定されていた。まだ充分に余裕がある。ずいぶん遅い時間だが、選考自体は朝九時から午後五時までとなっていて、三十分刻みに個人面接が行われるとの事だった。第一堂は、今日一日を選考に費やすつもりらしい。一時間に二人ずつ。昼休憩を除いて単純計算で牧村の前に十三人面接を受ける者がいるのだろう。業務時間が五時までの会社だったから、牧村が一番最後の面接かもしれない。十三人。いずれも書類選考を通過した人材ばかりと思えば、激戦だ。会社が目に見えるエリアに来たなら、面接はもう始まっていると言って良い。これはよその会社の話だが、応募者が訪れるところを、面接担当官が社内の窓からじつと覗いて観察していると言う。つまりは、素の本人の姿勢も問われるという事だ。念には念を入れて臨まなくてはならない。

自分はきつと採用される。そう信じて立ち向かうしかない。昨日は、珍しく元の会社の同僚の志浦さんに再会した。そして彼女が姉への結婚祝いに選んだ食器は、偶然にも自分が良いと思えたものと同じ食器だった。いくつもの偶然。そんなにあるものではない。きつと彼女は、ラッキーガールに違いない。

——そして俺は、これから面接を受けに行く……。

牧村は、襟元に手を伸ばすとネクタイを整えた。コホンとひとつ咳をする。

——よし。行くぞ。

勢い良く一歩を踏み出した、その瞬間——。牧村は、左肩に激し

い衝撃を受けた。

「わっ……」

反射的に声を上げる。しかしそれで体勢を持ち直すまでには及ばない。体がグラリと揺れ、バランスを崩したかと思うと、牧村はひっくり返っていた。牧村の目に夕暮れの空が映る。上向きになったカエルのような格好で、牧村は呆然としていた。縁起でもない。面接の直前に転倒するなど……。

「おう。兄ちゃん……悪かったな」

上から声が降ってきた。ゆっくりと起き上がった牧村の目に入っていたのは、パンチパーマの目つきの悪い男である。男は、なで肩の痩せた体に竜の刺繍を施したテカテカのスカジャンを羽織っていた。

——やばっ。やくざだ……。

ぶつかってきたのは向こうの方だが、因縁でもつけられたらたまったものではない。

「あの、いえ。おかまいなく……失礼します。これから会社の面接があるので」

牧村は、立ち上がり洋服をパンパンと叩く。

「なに、面接う？」

男は、なおも話しかけてきた。やばい関わりたくない……。

「どこに？」

「そっ、その第一堂に」

牧村がビルを指差しながら答える。

「ふうん。じゃあな。兄ちゃん。頑張んな」

男はあっさりと引き下がった。ガラが悪い男だと思ったらそうでもなかった。ほっとして、あらためて身なりを整える。そして第一堂に向かおうとしたところ――。

牧村は、後頭部に激しい痛みを感じた。目から星が出るかと思えたほどだ。視界が真っ暗になる。立っていられない。そのまま牧村は、歩道に突っ伏して気を失ってしまった。

果たして、牧村のそばに、マナブが立っていた。

——面接か。面接で採用されれば、仕事が決まるって事だな。

マナブは、牧村をずるずると植え込みの陰に引っ張っていき、自らもそこに潜んだ。数分後、植え込みの陰からスーツ姿のマナブが姿を現した。近くの反射鏡に己の姿を映して、パンチパーマの髪を撫で付ける。この男と自分は、背格好が似ている。なら、俺が代わりにこれから面接を受けてやろうじゃないか。マナブは、にやりと口元を緩めると、第一堂に向かって歩いて行った。

第七話 P r i m a r y e x a m i n a t i o n (後書き)

思いつきり、漫画ちつくになってしまいました。読者様に引かれな
いかと、心配です。

さて、この続きをりきてつくす先生は、どう進めていかれるので
しょうか？ 乞うご期待なのであります。

第八話 Devil and Angel

瀟洒な五階建てオフィスビルの回転式ドアを、マナブは小指のない手のひらですいっと押し開けた。想像していたよりも殺風景なエントランスホールだった。空調設備がいかに残っているためか、フロア内には安っぽいワックスのにおいが抜けきらずに残っている。向かって右側がエレベーターホール、正面には受付のカウンターがあり、若い女性社員が取ってつけたような笑みを浮かべじつとこちらを窺っている。マナブは背筋をのばし、ネクタイの曲がり直した。ここはひとつ、堅気の間人を演じなくてはならない。いつものように東映Vシネマのヒーローを気取っていてもダメだ。歩きかたも社会人らしくきちんとせねば……。

しかし彼は、正しい歩き方には少なからず自信があつた。なぜなら今まで刑務所のなかで嫌というほど叩き込まれてきたからだ。いっちょカマしてくっか。

そう自分に気合いを入れると、まずは直立不動の姿勢から、あごを引いて、胸をはって、腕をのばし、膝を高く上げて、高校野球の入場行進のように元氣よく一步を踏み出した。

おいっちにつ、おいっちにつ、右っ、左っ、右っ、左っ――

指先をぴんとのばし、膝をリズムカルに上下させ、まるで軍隊行進のようにやってくるスーツ姿の男を見て、受付嬢は本能的に恐怖を覚えた。カウンターの下にこっそり隠しておいたヒョコまんじゅうを、思わず喉に詰まらせる。

んが、ぐぐつ。

目を白黒させやつとの思いでそれを飲み下すと、イスの上で中腰になりいつでも逃げ出せる体勢をとった。ついでに防犯ベルのスイッチへそつと手をのばす……。

右っ、左っ、右っ、左っ、ぜんたいい、止まれっ

マナブはカウンターの前で立ち止まると、気をつけの姿勢を保つ

たままきりつと前方を見つめた。受付嬢は、思わず立ち上がって敬礼しそうになった。

「いいい、いらっしやいませっ」

「面接を受けに来たっす」

「ああ、採用面接を受けられるかたですね」

ほつと胸を撫で下ろし、いつもの営業スマイルに戻る。

「では、お名前を頂戴できますでしょうか」

「——え、名前っすか？ むむむ」

本来この面接を受けるはずの男は、向かいの公園にある植え込みの陰でのびている。どうしたものか。やつが着ていたこのスーツのポケットを探れば、なにか身元の分かるものが出てくるかもしれない……。

「すみません、ちょっと出直してきます。すぐに戻りますんで」

マナブはくるつと回れ右をした。ぜんたーい、進めっ。ふたたび出口へ向かって歩きだす。おいっちにつ、おいっちにつ、右っ、左っ、右っ、左っ——

ぼかんと呆気にとられている受付嬢を後に玄関ホールを抜けると、彼はすばやく上着のポケットを探った。まず出てきたのは、きれいにアイロンのかったハンカチとティッシュペーパー、そしてガソリンスタンドの割引券、喫茶店のマッチ、目薬に、あとは飾り気のない携帯電話……。右側の内ポケットに手をつ突っ込んだとき、マナブの指先は黒い二つ折りの札入れを探り当てた。すかさず抜き取って中身を確認する。

「……なんだ、三千円しか入ってねえのかよ、俺よりもシケてやがんな」

札入れのカードホルダーを確認してみる。カラオケボックスとクリーニング店の会員証がそれぞれ一枚ずつと、それから運転免許証が見つかった。

「へへへ、あったあった……。どれどれ、色男くんのお名前は……？」

氏名、牧村理人

「まきむら、り……と？　なんて読むんだ、こりゃ？」

名前の読みが分からなくて首をかしげていると、ちょうどビルの窓ふきをしていた清掃作業員のおばちゃんを通りかかった。抱えていた脚立で、ぐいつとマナブのことを押しのけようとする。

「はいはい、ちよつくらごめんなさいよ」

「ああ、おばちゃん、いいところへ来た。悪りいんだけど、この字なんて読むのか教えてくんねえかな？」

ブルーの作業服に同色の頭巾で大仏パーマを覆ったその女性の目の前に、牧村の免許証をかざして見せる。すでに老眼が入っているらしく、彼女はその免許証を取り上げると目を細め、色んな角度から眺めまわした。

「あれあれ、こりゃまた縁起の良い名前だね、天格、人格、地格、外格、どれを取ってみても画数のバランスがひじょうによろしい」

「だれが姓名判断しろなんて言ったよ。俺っちは読みかたを訊いてるんだ」

「あんた、これだれの免許証だい？」

「そ、そりゃあもちろん自分のに決まってるじゃん」

「へえ、じゃあ自分の名前が分かんないの？」

「ははは、そう意地悪言うなよ」

テキ屋稼業で主婦連中を大勢相手にしてきたマナブは、こういう手合いのあしらい方をよく知っている。彼は、ほんと手を打つと大げさに驚いてみせた。

「おお！　おばちゃんって、よく見ると往年の大女優に似てるね」

「だれ？」

「えーと……浅香光代」

「はいはい、ちよつとそこどいて、仕事の邪魔だよ」

免許証を突き返し、ふたたび清掃作業へ戻ろうとする。マナブは取りすぎるような目で言い直した。

「や、山本富士子」

彼女はふんと鼻を鳴らした。

「仕方ないねえ、じゃあ教えてあげるよ。これは、まさと、と読むの」

「まさと……か」

「牧村理人——良い名前じゃないか」

「さんきゅうババア、助かったぜ、さすが物知り、だてに年食ってるわけじゃ……」

すかさずモップの柄で、どんっ！ とみぞおちのあたりを突かれた。

「ぐ……はっ」

「あんた人相悪いよ、あんまり悪いことばかりしてるとそのうち天罰が下るよ」

そう捨てぜりふを吐いて、彼女はそそくさと窓拭きの作業へ戻っていた。

「こっ、この……くそばば」

ふたたび第一堂のオフィスビルへ戻ると、あの受付嬢は内線電話でひそひそ誰かと話し込んでいた。

「ええ、そうなんですよ、なんか変な感じの人で——あっ戻ってきました、どうしましろう、警備のひと呼びますか？ えっ、いいんですか取り次いでも？ ……はい、分かりました」

疲れたような顔で受話器をぱたんと置く。そんな彼女に、マナブは親しげな笑みを浮かべて言った。

「喜んでください、俺っちの名前が判明したっす。どうやら牧村理人というらしいっす」

「ふう……」

額に手を当て、熱でも計るような仕草でため息をついてから、彼女は言った。

「それでは、あちらのエレベーターで五階まで上がっていただいてから、突き当たりの廊下を右へ折れた先にある第一会議室で担当のものがお待ちしておりますので」

「おっす」

指定された場所へ向かう途中、ちょうど自分の前に面接を受けていた人とはち合わせた。大学を出たばかりのような、リクルートスーツをぱりつと着こなした若い男だった。彼はマナブとすれ違いざま、ふうつと深いため息をついてうなだれた。

「どうやらここは、難関みてえだな。」

第一会議室では、三人の面接官が待ち構えていた。一人は黒ぶちのメガネをかけた若い女性で、彼女の前にだけネーム入りのプレートが置かれている。その両隣には、おっさんが二人。向かって左側の席には五十がらみの男が、眉間に深い縦じわを刻みじつとこちらを睨みつけている。オールバックの頭にハエが一匹とまっているが、本人は全くそれに気づいていない様子だった。反対側にはさらに年配の男がいた。すっかり禿げあがっているわりにはやけに額がせまく、にやにやと神経質そうな薄ら笑いを浮かべている。目の良いマナブは、二人が首に提げている社員証から、左側のオールバックが総務部長、右側の禿げが人事課長であることを素早く読み取った。

「どうぞ、お掛けください」

そう促される前に、マナブは三人の前に据えられたパイプイスにどっかりと腰を下ろし、背もたれにふんぞり返った。面接官の女は呆れたような顔で咳払いした。

「こほん……では、お名前をどうぞ」

「おっす、自分、牧村理人っす」

マナブは、質問してきた女にではなく、オールバックの総務部長に向かって答えた。彼は会社訪問には慣れている。と言っても採用試験を受けた経験があるわけではない。

——恐喝。

企業の弱みを握り、それをネタに金を強請る。バブル経済がはじけてこのかた、多くの中小零細、いや大手もけっして例外ではないのだが、ほとんどの企業が取引先や銀行、税務署などに知られては困るたくさんの秘密を抱えている。そんな弱みを目ざとく探し出し、

口外しないことを条件に金銭を脅し取る。かなり悪い金儲けだが、このご時世テキ屋稼業だけでは食っていけず、マナブや兄貴分の茂樹が所属していた組でも企業からのカツアゲは重要なシノギの一つとなっていた。

企業を相手にするときには注意しなければならないことがある。それはいくら下っ端のやつを脅しても埒があかないということだ。なるべく会社のトップか、無理ならばその場に居合わせた一番偉いやつを相手にする。これが企業と対峙するときの鉄則である。

マナブの鋭い視線に怖じ気づいたのか、総務部長がふつと目を逸らした。仕方なく真ん中の女に視線を戻す。それを待っていたかのように、彼女はたたみかけるように次々質問を浴びせかけてきた。

「昨日の晩はきちんと眠れましたか？」

「アニキのいびきがうるさくて眠れなかったす」

「今朝の起床は？」

「十時ころっすかね」

「朝食には何を食べましたか？」

「朝メシは抜きっす、自分ぜんぜん金持ってないっすよ」

面接官の女は少し嫌な顔をしたが、なおも続けた。

「当社を希望された理由は？」

「なんか金儲けてそうだなと感じたからっす」

「今までにどんな仕事をしてこられましたか？」

「おもに神農道の稼業に従事してきたっす」

「希望の職種はありますか？」

「できれば、若頭みたいな地位につきたいっす」

「地方への転勤は可能ですか？」

「たぶん無理っす、アニキにドヤされます」

「なにか資格や専門的なスキルをお持ちなら教えてください」

「自分たこ焼き焼くのめっちゃめっちゃ上手いっす。だれにも負けないっすよ。もうアニキを超えたっす」

「あなたの長所と短所を簡潔に述べてください」

「自分、ケンカ強いっす、まじ強いっす、ほとんど無敵っす。でも勝負運はからきし無いので競馬ではいつもスツてばかりっす」

「い、いつも読まれる新聞は？」

「勝馬かダービーニュース。スポーツ新聞の競馬欄はいつも予想外すから、基本的にはエロ記事しか読まないっす」

「……」

とうとう面接官の女は、額に青筋を立てたまま黙り込んでしまった。代わりに禿げ課長が、メガネ越しに履歴書を睨みながら質問してきた。

「あんた……二十六歳だが、七歳になる娘がいるね。これ一体どういうこと？」

「決まってるじゃないっすか、俺っちが十九のときに作ったガキっすよ」

面接官の女が明らかに軽蔑したような視線を送ってきたが、マナブがぐつと睨み返すと黙って下を向いた。禿げ課長はかまわずに続ける。

「あんた高卒だね。しかも夜学を出てる。親御さんは一体どんな仕事をしていたんだね？」

「あれっすか？ この会社は社員雇うときに、出身校や親の職業で決めるんすか？」

「こら君、言うに事欠いて失礼にもほどがあるぞ！」

ついにオールバックの部長が怒鳴った。

「もういい、時間の無駄だ。最後になにか質問があるなら訊いてやるから、言ってみたまえ」

その一言に、マナブの目がぎらっと凶悪な光を放った。こいつらはなっから俺を雇うは気ねーな。

そのときである――。

会議室のドアが突然ぱたんと開いた。見ると男が二人立っている。一人は黒いダブルのスーツを着込んだスキンヘッドの男、もう一人は紫色の詰め襟を着た背の高い若者だった。彼らを目にしたとたん、

面接官の三人は表情を凍り付かせた……。

「おっと、部屋を間違えたようだ」

あきらかに品のない低い声で言った。マナブはその二人の男と視線があった瞬間、おやつと思った。この顔、どこかで見たことがある。二人もマナブのことを知っているらしくキツネにつままれたような表情を互いに見合わせている。

「こりやどうも失礼」

そう言っただアを閉めたとき、マナブはようやく彼らのことを思い出した。なるほど、そういうことか……。

「部長さん、それじゃあ一つだけお訊ねしたいことがあるんですけど、いいですか？」

「な、なんだね早く言いたまえ、私は忙しいんだ、君のような人間につき合っているヒマはないんだよ」

「まあ、そうおっしゃらずに……」

彼はぐつと身を乗り出した。そして部長の目をきつと睨み据えたまま口の端をつり上げた。

「東神興業とは、どういったおつき合いで？」

部長をはじめ、三人の顔からさーっと血の気が引いてゆくのが分かった。彼は、なおもたたみかけるように言う。

「今入ってきたやつらはよく知っている。蛇の道は蛇ってやつでね。東神興業といって一応は土建業で法人登記しているが、その実体はたんなる総会屋だ。あんたら当然それを分かっけて、つき合ってるんだろ？ やつら企業脅しては総ページ数が十ページにも満たないような小冊子を、一冊十数万円で売りつけている。まさかそれを印刷しているのが、あんたらの会社だったとはねえ……、世間のやつらが知ったらなんと思うか」

「なっ、なにが言いたい？」

「俺は、そういうことを糾弾するのが三度のメシより好きだという草の根ネットワークをいくつも知ってるんだよ。くくくつ、明日から苦情の電話が殺到するだろうなあ……。そうだ、ついでにおたく

の得意先にも、この事実を文章にして送りつけてやろう。さてさて、どうなることやら、明日から忙しくなるぞ、うしし……。ほんじゃま、俺っちはこれにて失礼するっす」

そう言つて立ち上がるうとするマナブを、部長が蒼白な顔で押しとどめた。

「ちょ、ちよつと待ちたまえ君、金か？ 金が欲しいのか？ いい、いくらだ？ いくら欲しいんだね？」

「ほう、やはりそうきましたか。でも具体的な金額を言っちゃうと俺っち恐喝罪でぶち込まれるから、あんたが自分で考えるよ」

「……ちよつと待っていなさい」

深刻な表情のまま、部長は部屋を出ていった。後に残された二人は、おろおろしながら互いの顔を見合わせている。そのうちの課長に向かつてマナブが言つた。

「タバコくれや」

「は、はい、ただいま」

慌てて駆け寄り、震える手でタマイルドセブンを箱ごと差し出す。マナブはそこから一本を取り出して、口の先にくわえた。

「火」

「は？」

「は、じゃねーよ、火い付けろつてんだろがよ、このハゲっ」

「こつ、これは気がつきませんで」

米つきバツタのようにぺこぺこしながら百円ライターで火をつける。マナブはその顔に向かつて煙を吐きかけながら言つた。

「俺っちに親父はいねえ、いわゆる私生児つてやつさ。おふくろは夜の仕事をしながらそんな俺を育ててくれたんだ。だけど体が弱いのに無理して働いたせいで、俺っちが高校を卒業する前にあつけないく死んじまつた……」

「そそそ、そうでしたか」

「これで満足かい？ 課長さん」

「ななな、なにがでございます？」

「てめえは、こういう話が聞きたかったんだろうがよお！」

「ひいつ、申しわけございませんっ！」

課長が、平蜘蛛のように這いつくばると同時に、会議室のドアが開いた。茶封筒と『念書』とプリントされたA4のコピー用紙を手に、部長が入ってきた。

「君、この金でもって二度とうちの会社には関わらないと約束しなさい」

にたりと笑い、マナブが手を差し出す。その手に部長が持っていた茶封筒をのせると、マナブは引たくるようにして中身を数えた。ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、やあ……。その様子を、三人は固唾を飲んで見守っている。全部で三十万円入っていた。マナブはちつと舌打ちして顔を上げると、とっておきの三白眼を作り凄みをきかせて怒鳴り散らした。

「ふざけんじゃねえ、このくそ馬鹿たれどもがあつ、こちとらガキの使いで来てるんじゃねえんだぞっ！」

バラが咲いた　バラが咲いた　まつ赤なバラが……　さびしかつ

た　ぼくの庭に　バラが咲いた

唐突に何処からともなく携帯電話の着信メロディが流れてきて、風が霧を払うようにそれまで牧村が見ていた悪夢の全景を払拭した。南極で、口から冷気を吐くコウテイペンギンの群に追い回されるといふなんともヘタレな夢だった。がばつと身を起こす。あまりの寒さに一瞬にして目が覚めた。なぜ自分はトランクと肌着だけの姿でいるんだろう？　疑問を胸に抱いたまま、あたりに脱ぎ散らかしてあるワイシャツやスーツをかき集めた。

ひつくしよん

くしゃみをした拍子にスーツのポケットから携帯電話が転がり落ちた。公園の街灯がぼんやり照らす薄闇に、LEDがきらきらと点滅している。そうだ電話に出なくては。慌てて通話ボタンを押す。

とたんに聞き慣れた元気な女の子の声が耳に飛び込んできた。

「しーきゅー、しーきゅー、こちらくるみ、パパりん応答せよ、どうぞ！」

「……お、おう、くるみか、遅くなってごめん。父ちゃんもうすぐ帰るから」

「めんせつ、どうだった？ うまくいったか？ どうぞ」

——面接。……そうだ、自分は第一堂の面接を受けるためにここへ来ていたのだ。

立ち上がって、植え込み越しに第一堂のオフィスを仰ぎ見た。二階から上にはまだ電気についている部屋もあるが、一階ロビーはすでに明かりが落とされ、まっ暗だった。携帯電話の時刻表示を確認する。すでに午後七時を回っていた。たしか指定された面接時間は、四時半だったはず……。くそっ、一体なにがあったというのだ。なぜ、こんなことに……。

「しーきゅー、しーきゅー、パパりんどうした？ 応答せよ、どうぞ」

「——あ、ごめんごめん。安心しろ、面接のほうは、……まあまあつてところだ」

「そうか……ダメだったか。でもがっかりするな、君には明日がある、どうぞ」

ははは、娘に見透かされてしまった。

くるみは、二年前に死に別れた妻の連れ子だった。当然、血は繋がっていないし顔も全然似ていない。しかし妻と一緒にあった当初から、牧村はこの少女と妙にうまが合った。へたをすると妻よりも心が通い合っていたかもしれない。そして病弱だった妻が癌であつけなく逝ってしまったときから、彼と娘との不器用な二人暮らしが始まった。父子家庭は大変だ。場合によっては母子家庭よりも大変なときがある。しかし娘のくるみはとても明るくマイペースで、牧村はいつもこの可愛らしい天使から元気を分けてもらっていた。本当は母親がいなくて淋しいだろうに……。独りぼっちのアパートで

ポテトチップスをかじりながらテレビゲームをしている我が娘の姿を想像して、彼はちくつと胸が痛むのをおぼえた。

「そうだから、父ちゃん今日は帰りが遅くなったお詫びになにかお土産でも買って帰ろうと思うんだが、なにがいいかな？」

「おっ、それならばル・ショコラティエのケーキが食べたい、どうぞ」

「むむう、いきなりハードル上げてきたなあ……」

「むりならばコンビニのチョコビで我慢するから心配しなくていい、どうぞ」

「ははは、わかったよ。父ちゃんががんばってケーキ買って帰るから、楽しみに待ってるんだぞ、どうぞ」

「りようかい、りようかい、では気をつけて帰ってくるべし、つうしん終わり、ぷつつん」

そこで電話が切れた。相変わらず竹を割ったようにさっぱりとした性格の娘だ……。

「さてと」

かき集めた衣服を身につけ、あちこちに付いた汚れを手で払うと、彼はきびすを返し夜の公園を後にした。一度だけ、第一堂のほうを振り返る。まあ今回は縁がなかったと、きれいさっぱり諦めよう。

また次のチャンスをもにすればいい。それより問題なのは、くるみへのお土産だ。ル・ショコラティエは泣く子も黙る高級菓子店だが、今はほとんど持ち合わせがない。どうしたものか……。なんとかショートケーキの二つや三つくらい買えればいいのだが……。

彼は、内ポケットから札入れを取り出すと、街灯の明かりに照らしてそつと中身を確認した。

……なぜだか、一万円札が十枚も入っていた。

第九話 U n e a s i n e s s (前書き)

さて沢木香穂里、伏線を拾って参ります。

第九話 U n e a s i n e s s

牧村は、大きく目を見開いた。かぶりを振るとあらためて札入れを広げた。

ゆつくりと札の枚数を数える。確かに十万円。そのほかに数枚の千円札が入っている。

——何故だ？

ありえないことだった。普段から、牧村は現金で十万円も入れて持ち歩く事などない。この十万円が紛れ込むとしたら、いつ、どこで？ 牧村は、眉間にしわを寄せて、必死に記憶を呼び覚まそうとした。面接に出向く前に何があっただろう。自分は、植え込みの影に服も着ずに倒れていた。第一堂に向かっていた時。確か、やくざ風の男とすれ違ったのだ。

——その直後に気を失って……。あの男か。あの男が何かしたのか？

わからない。しかも金を巻き上げられるなら理解できるが、増えるなんて。牧村は歩き出した。これだけあれば、ル・ショコラティエのケーキなんざ山ほど買える。ちらっと思つた。しかし使う気など毛頭ない。もしかしたらやくざが絡んでいるかもしれないのだ。やばい金だったとしたら。それでは、この金を今すぐ警察に届けようか。確かこの近くに交番があつたはずだ。

——待てよ。

牧村は立ち止まる。財布の中に十万円入っていましたと言って、信じてもらえるのだろうか。そんな奇特な話は聞いた事がない。聴き取りに時間を取られて、なかなか帰してもらえなかったらどうする。

——くるみが、ひとりで待っているんだ。

牧村の帰りをずっと待っているくるみ。しっかりした娘だが、さぞ細かい思いをしている事だろう。だから電話してきたのではない

か。牧村は再び歩き出すと、警察を素通りした。ちらりと金をネコババしたかのような背徳感がよぎったが、そんな思いを振り切るように歩を進める。牧村は、札入れに自分の金が三千円が入っているのを確認すると、そのままル・シヨコラティエに向かった。重いガラス戸を開けると、店内には芳醇な力カオの香りが立ち込めていた。

「いらつしやいませ」

一步店内に足を踏み入れると、たつぷりとフリルの入ったエプロン姿の女性店員が笑顔を向けてくる。周りにいるのもまた女性客ばかりだった。滅多に入ったことのない高級店、ましてや女性ばかりの店内に牧村は、萎縮してしまった。しかし、少なくとも今日は自分がかちんとしたスーツ姿である事が救いだ。いつものライダースジャケット姿だったら、入るのにかなりの勇気を要した事だろう。ショールケースのケーキは、大半が売り切れていた。かろうじていくつかの白いトレイの上に数ピースのショートケーキが残っている。どれも五百円以上するものばかりだ。こんな遅い時間では、品を選ぶ余地などなかったが、かえって迷わずに済んだ。早くケーキを買って帰り、くるみを喜ばせてやりたい。牧村は、表面にベリーを散りばめた見た目も華やかなショートケーキを二つ購入した。

2LDKの小奇麗なマンションの三階に牧村の自宅はあった。マンション購入は、セキュリティのしっかりとしたところに住んで、新生活をスタートしたいとの妻のこだわりだった。そこまでの金が牧村や妻に支払えるはずもなく、頭金の支払いには、妻の実家から多額の援助を受けている。牧村は、エントランスをくぐると、くるみの待つ部屋へと急いだ。

「パパりん。おかえりー」

「ただいま。くるみ。遅くなってごめんよ」

牧村が、ケーキの箱をだんつとりビングのテーブルの上に置く。「ル・シヨコラティエのケーキ！パパりん。無理したんじゃないか」

くるみが腰に手を当てて、大人びた口を利く。

「ははは。いくらなんだってケーキくらい買えるさ。くるみ。晩御飯は食べたのか？」

「うん。冷蔵庫のカレー、チンして食べた」

「そうか。じゃあ、ケーキ食べていいぞ」

「パパりん。ご飯は？」

「父ちゃんは、いいや。くるみと一緒にケーキだけ食べようかな」

フォークを手にしたくるみがケーキにはすぐに手をつけず、上目遣いに牧村を見つめた。

「パパりん。めんせつで、ふさいようになってショックだったのか」

牧村は、苦笑した。いったい、不採用なんて言葉をくるみはどこで覚えたのだらう。

就職活動をするうちに、知らず知らずにくるみの前で口走ったかもしれない。言葉には、気をつけなくては。くるみを不安にさせてはいけない。

「うん。まあ……書類審査は通っていたから今日はね。でも父ちゃん、明日からまた頑張るよ。さ、食べよう」

くるみは、嬉しそうにうなずくとてっぺんに載ったベリーにフォークを突き刺した。

ケーキを口に運ぶくるみの様子を牧村は、目を細め見つめる。

妻が亡くなった時、義理の両親……つまりは妻の親は、くるみを引き取ると言ってくれた。牧村はまだ二十三歳と若かったし、いくらでも再婚できる。くるみがいては、その足かせになるだろうと言うのが理由だった。しかし妻の実家には兄夫婦が所帯を構えている。そんな中にくるみをひとりやるのが心配だった。向こうの子どもと分け隔てなく可愛がってもらえるだろうか。本当の家族同様に何のためらいもなく暮らすことは、叶わないだろう。利発なくるみの事だ。きつとうまくやってゆけると思ったが、くるみが、向こうの家族の顔を窺いながら、生活していくのではと思うと、耐えられなかった。だからくるみを引き取るとの申し出には、どうしても首を

縦に振れなかったのだ。牧村は、くるみとうまが合っているし、血は繋がらなくても親子である。そして何よりも妻の忘れ形見であるくるみと一緒に暮らしたかったのだ。話し合いの結果、困った事があつたらいつでも力になるからと、向こうの両親は牧村にくるみを任せてくれたのだ。

——早く仕事を決めないと。くるみのじいちゃん、ばあちゃんも心配するだろうし……。

牧村は、フォークでショートケーキを一口分に切り分けた。そこで手が止まる。

——そう言えば、あの十万円。

さつきから、小骨が喉にささったように気になっている。あの金に手をつけるわけには行かない。あれはきつとやばい金である。牧村は、リビングの写真立ての妻とくるみと自分の三人が写った写真に目を向けた。

——どうしたら、いいと思う？

写真の中の妻は、ただ微笑んでいるだけだ。

妻は牧村が中学を卒業してから世話になっていたひふみ一二三建設で事務員をしていた。中学三年生の時に父を事故で亡くした牧村は、生活のために受かっていた私立高校を蹴って、あえて定時制高校に進んだのだ。そんな牧村に同情した担任教師は、自分の友人が社長を務める一二三建設を紹介してくれた。勤勉な牧村の人柄は、担任のお墨付きとあつて、四月から牧村は、定時制に通いながらそこで働ける事になった。十五歳の身では、運転免許すらない。牧村に出来る事は、現場での工事の後片付けや掃除、事務所での雑務だったが、文句ひとつ言わず黙々と働き続けた。五つ年上の妻は、そんな牧村を弟のように可愛がってくれた。仕事が引けて学校に行こうとする牧村に、そつと夜食を持たせてくれたりしたのだ。牧村の中で、それは次第に思慕の念に変わってゆく。婚約者に先立たれてしまい若くして未婚の母になってしまった妻の経歴も父を亡くした自分に重なるものだった。そして牧村が、二十歳になった時、二人は結婚し

たのである。その頃になると、車の免許も高校卒業の学歴も手に入っていたから、牧村は、袋小路印刷に営業職として転職する事が出来たのだ。

——また昔の事を思い出してしまった。

ふつと牧村は口元をゆるめた。わずかの時間の回想。くるみは、すでにケーキを食べ終えて、牛乳を飲んでいる。

——行くか。明日。警察に。

警察だって、本当の事をありのまま話せばわかってもらえる。牧村にやましい事などひとつもないのだから。亡くなった妻とそしてくるみのためにも、後ろめたい思いをして生きて行きたい。明日、義理の両親にくるみを預かってもらい、警察に行こう。

そう決めると幾分気持ちが軽くなった。牧村は大口を開けてケーキをほおばった。

フサは、自室でゆつくりと湯飲みを傾けていた。駿河清見の茶の香ばしさが、一日の疲れを癒してくれる。フサは、ふつとひとつ息をつく。

フサは、占いの仕事がない時は、清掃会社で仕事をしていた。取引先の第一堂ビルには、何年も前から週に三回、清掃に出向いている。いつも五階から掃除をはじめて、夕方になる頃には、一階にたどりついている。そうして一日の仕事が終わるのだ。フサは、第一堂の社員や派遣で来ている受付嬢に対して、知る人ぞ知る存在である。そもそも清掃の仕事をはじめたのは、ずっと家にいて体がなまらないようにするためだったが、いざ始めてみると、この仕事、なかなか楽しい。二三階には、キーテナントである第一堂が、一階は、一角を占めるビルの内外から出入りが出来るコーヒーショップがあって、ビルで働く人間や出入りする人間を思うさま観察できる。そうして世間に触れた感覚は、占いにも生かすことができたのだ。それにしても今日は、しまりのない日だった。いつものスケジュールどおりに清掃をこなし、四時台には、一階フロアにやってきた。受

付の角川嬢とふたこと、みこと言葉を交わして、進物のひよこまんじゅうをお裾分けした。そうやって今日の仕事が終わると思っていた。ところがだ。突然、変な男が現れたのだ。男は、不釣合いなスーツをまとい、やにわにフサに免許証を見せて名前の読み方を聞いて来たのだ。フサは、怪訝に思った。どこから盗んだものだろう。免許証に写った男は、紛れもなく木の男だった。対してそれを手にした男は、水だった。澄んだ水ならばいいのだが、男は濁っていた。水は低きに流れる性質を持つ。だから方向性を間違えば、破滅が待っている。

「あんた人相悪いよ、あんまり悪いことばかりしてるとそのうち天罰が下るよ」

警告のつもりで、フサは言い放ち、仕事に戻った。免許証は、持ち主の元に戻る。フサにはそんな予感がした。男は、どうせチンピラであろう。誰かにへばりついていないと、単体では大した事の出来ない男だ。フサはそう見切っていた。

何か、胸騒ぎがする。何かが起こりそうな気が。

しかし、フサにもそれが何かまで、現段階で占う事は出来なかった。

第九話 U n e a s i n e s s (後書き)

りきてつくす先生、如何でしょうか。

第十話 A d r e a m c o m e t r u e (前書き)

えいつ、秘技・場面転換っ！ ぽわん……。 (りきてっくす)

第十話 A dream come true

「えーっ！」

思わずそう叫んでから、季奈子はあわてて店内を見回した。何人かの客が驚いたように自分たちのほうを見ている。

コーヒーショップ黒薔薇はオフィスビルの集中したエリアに店をかまえているため、訪れる客の多くがビジネスマンだ。背の高い観葉植物でおおざっぱに仕切られたテーブル席は、その半分ほどがスーツ姿のビジネスマンによって埋められていた。みな、応接室やミーティングルームの代わりに、あるいは仕事のあい間のちょっとした息抜きに、自販機では味わえない本物のコーヒーの香りを楽しみに来るのである。

季奈子は首をすくめぺろつと舌を出してから、今度は少し声をひそめて言った。

「じゃあ牧村さん、けっきょく面接は受けなかったんですね」

「うん、実はそうなんだ……」

ため息まじりに湯気の立つコーヒーカップを持ち上げると、彼はほとんど無意識のうちにそれをすすった。季奈子は、期待して読んだ推理小説の顛末がどうにも納得いかなかったときのような諦めのつかない顔で、木目の浮き出たテーブルの上に視線を落とした。そんな二人の様子をそっと見比べながら、この店のマスターが二つのコップに順番に冷えた水をそそぎ足してゆく。銀製の水差しがコップのへりに当たるたび、きん、と涼しげな音を立てた。

「……それは牧村くんも災難だったねえ。一応先方へは事情を話してみたのかい？」

「ええ、次の朝一番で人事課長あてに電話を入れたのですが、今回の採用はもう打ち切ったということ……」

季奈子が、頬杖をついて上目遣いに牧村を見た。

「でもそれって犯罪の匂いがぶんぶんしますね。きつと牧村さん、

知らないうちになにか良からぬ陰謀にでも巻き込まれたんですよ」

「ははは——、たかだか会社の採用面接ごときで、陰謀はないだろう」

「でも……」

子どもっぽくつんと口を尖らせる季奈子を見て、牧村は少し困ったような顔をした。

「いや、俺も最初は警察へ届け出ようと思っていただけで、そう話したとたん、第一堂のほうでそれだけは勘弁してくれって頼んでくるし。それに何者かが企んでやったとしても、そいつの意図が今ひとつはつきりしなくてね……」

「そうよね、何の目的があって牧村さんになりすまして面接受けたりしたのかしら」

季奈子が控えめにマニキュアの塗られた指先で、耐熱ガラス製のティーカップのふちをピーンとはじいた。それを見てマスターが、今ではすっかりヒゲの似合ってしまった口元をゆるめて、静かに笑った。

「まあ、こう言っちゃなんだけど、牧村くん、案外その会社に採用されなくて良かったのかもしれないよ。ひよっとしたら何か後ろめたいことにでも関わっていたのかもしれないし」

「面接を受けられなかったのは、かえって怪我の功名だった……というわけですか？」

「まあ、そう言うことだね」

ちよっと考えてから、牧村が爽やかに笑った。

「うん、そう言ってもらえると、俺もなんだか気持ちが悪くなったきました」

「運悪くタイタニック号に乗り遅れてしまった幸運な乗客……そんな風に思っておけばいいさ」

「さっすがマスター、うまいこと言いますね」

季奈子がぱちんと指を鳴らす。マスターは照れくさそうに言った。「人生なんて案外そんなもんさ。結果オーライ、ってね」

結果オーライ……、袋小路印刷で業務課長をしていたころよりも明らかに生き生きとして見える今のマスターが言っと、妙に説得力がある。彼は、しっかりと自分の夢をつかんだ。会社が潰れることによって逆に背中を押されるかたちとなり、彼は長年の夢だった喫茶店の経営を始めることが出来た。そういう意味ではまさに怪我の功名、結果オーライ……。でも自分はどうか？ 何か、逆境をバネにしても叶えたい夢があるだろうか？ 少なくともマスターの成功を夢の結実と鑑みるに、今の自分の中にもそうした前向きな夢が存在しているとは思えない。水差しに氷を足すためカウンターへ戻った彼の背中を見送りながら、季奈子はそつとため息をついた。じゃあ、牧村さんは？ この人の場合はどうだろう、一生をかけて成し遂げたいような、そんな夢があるのだろうか？ 第一堂の採用試験を受けたのは、やはりこの先も印刷業界で働いてゆきたいと願うてのことだろう。だけどそこに自分の夢は見出せているのだろうか。単に就職して生活力を取り戻すとかいうんじゃないかって、もっと自分の一生をかけてチャレンジしてみたいと願うような、ときおり思い出しては少年のように瞳を輝かせるような、そんな夢があるのだろうか……。

ミントティーのカップを手のひらで包み込んだまま、彼女は外を吹き荒れる木枯らしが、店のウィンドウを叩く音を聞いた――。

どん、どんっ

ベートーヴェン交響曲第五番『運命』。この曲の冒頭は、運命の扉をノックする音で始まる。

どん、どん、どんっ

私の運命の扉はいつ開かれるのだろうか？ そして牧村さんは？

――けっきょく運命を切り開くのは自分自身だからね。

ふと、フサの言葉が脳裏に甦った。

「……志浦さん？」

季奈子は、はっと我に返った。目の前には、困惑したような表情のまま、それでも優しく微笑む牧村の顔があった。

「どうしたの？ ぼーっとしちゃってさ」

「あ、ごめんなさい。ちょっと色々と考えてしまっ……」

「人間は考える葦である」

「え？」

「ブレーズ・パスカルが『パンセ』のなかで語った言葉さ。——人間は考える葦である」

「あ、それ聞いたことがあります」

「人間はしよせん自然界に弱々しく生える一茎の葦にすぎないけれど、でもそれは考える葦なのである」

「うーん…… なんか深いようでいてその実まったく意味分かんないような。でも牧村さんって物知りなんですね」

「営業であちこち回っているよね、余計な雑学ばかりが身についてしまっ……。そうだ、こういうのもあるよ。クレオパトラの鼻がもつと低かったなら大地の表面積は変わっていただろう」

くすくすとイタズラっぽく笑う。季奈子は、耳たぶまで赤くして怒った。

「ひどーい、牧村さん。それって私の鼻の造形に対する当てつけじゃないですかー」

牧村は、顔の笑みを絶やさないまま大きく手を振ってみせた。

「いや、違う違うって、そんなつもりじゃ……。まじめな話、志浦さんの鼻ってすごく可愛いと思うよ、うん、むしろチャームポイントと言っても過言じゃない」

「無理して褒められると余計に傷つきますっ」

「たははー、こりゃ参ったなあ」

困ったような顔でぼりぼりと頭を掻いてから、彼は唐突に話題を変えた。

「ところでさ、今日はじつは季奈子ちゃんに、——おつと失敬、志浦さんに折り入って頼みがあつてここへ来てもらったんだ」

「あ、季奈子ちゃんていいです。そう呼んでもらえると私も嬉しいです……」

ちょっと照れてうつむいてから、彼女は「えっ？」とその顔を上げた。

「頼み……ですか？」

「うん。じつは一晩だけうちの娘を預かってもらえないだろうか？」
季奈子の目が大きく見開かれてゆく。まるで朝顔が開花する様子をビデオの早回しで見ているように……。

「えーっ！ 牧村さんって、結婚してたんですかあ？」

さっきよりも大きな声が出てしまい、彼女は慌てて周囲を見回した。幸いなことに、他の客はもう季奈子の「えーっ！」には馴れてしまったようで、誰一人こちらを気にかけている様子もなかった。

牧村は、少し目を伏せて苦笑した。

「まあ、妻とは二年前に死に別れたんだけどね……」

「……あつ、ごめんなさい。私、何か訊かなくてもいいことを訊いてしまったようですね」

「ははは、そんなこと気にしないでよ。それより今の話の続きなんだけど、じつは友人の勤めている会社が北海道に出先をつくることになってね。それで今、人を集めているらしいんだ」

「北海道……ですか」

「うん。もとはイベントの企画会社なんだけど、ご当地グルメみたいな地方の特産品を生産者から直接買い付けて、それをデパートや空港、あるいは直営店なんかで売り出したら大当たりしてね。それで今、急ピッチで事業を拡大しているところなんだ。商品を仕入れる拠点として去年は沖縄に出先をつくり、そして今年は北海道というわけさ」

季奈子は、遠い目を虚空に据えた。

「北海道かあ……遠いですね。なんか北の果てって感じがします」
「まあ飛行機に乗ればあつという間だけだね。それで一応、来週の月曜日に採用試験と面接をやるということなので、こういう事業をおこなっている会社なのか視察がてら行ってみようと思う。本当は娘も連れていって北海道の大自然にでも触れさせてやりたいところ

なんだけど、あいつには学校があるし、それに祖父母の家に預けるという手もあるんだが、あいにく今祖父のほうが入院中でね……」

季奈子が、につこり笑いながら自分の胸をとんと叩いた。

「あ、お嬢さんのことなら任せてください。私、子どもって大好きですから」

「良かった、引き受けてくれるのかい。ありがとう、これで俺も一安心だ」

「でも……」

何かを言いかけて、季奈子が押し黙った。静かに目を伏せて自分の指先を見つめる。牧村が、心配そうにその顔を覗き込んだ。

「どうしたの？ 季奈子ちゃん。なにか不都合でもあった？」

「——いえ」

喉元まで出かかった言葉を飲み込んで、彼女はふるんふるんと首を振った。

「いえ、なんでもないです。お嬢さんに会えるの楽しみだなあ」

「そんな、お嬢さんなんて代物じゃないぜ、お転婆で困っているんだ」

「私も子どものころには、よくお転婆さんなんて言われてました。お転婆同士、仲良くやれそうです」

ははは、と二人で笑った。

店を出るとすでに秋の陽は傾いて、木枯らしの這う歩道には二人の影が細く長く伸びていた。牧村はトレンチコートの襟をかき合わせる、白い息を吐き出して言った。

「ごめん、駅まで送って行きたいんだけど、俺この後ちょっと用事があったてさ。悪いんだけど、ここで失礼するよ」

「あ、いえ、今日はご馳走さまでした。来週の月曜日、楽しみにしています」

「ありがとう、それじゃ」

軽く手を振ってから、彼は急ぎ足で横断歩道を渡っていった。しばらくその背中をぼんやり眺めていた季奈子は、やがて自分も踵を

返し歩きはじめた。しかしすぐに思い直してもう一度彼のほうを振り返る。牧村は、ちょうど道路を渡り終えたところだった。歩行者用の信号機が赤になる。信号待ちをしていた車が徐々に動きだす。季奈子は手をメガホンの形にして口へ当てると、大声で彼の名前を呼んだ。

「まきむらさあん」

驚いたように彼が振り返る。二人の間を数台の車が通り過ぎた――。

「まきむらさあん、採用が決まったら本当に北海道へ行っちゃうんですかあ？」

え、聞こえないよ？ といった風に彼が耳に手をかざす。季奈子はさらにポリウムを上げてもう一度叫んだ。

「本当に、北海道なんかに行っちゃうのお？」

今度はちゃんと聞こえたようで、彼が困惑ぎみに笑うのが見えた。その立ち姿の前をさらに数台の車が走り過ぎる。彼の動きがまるでコマ送りのように映る。季奈子は、もう一度声をふりしぼった。

「ほんとに行っちゃうんですかあ？」

私のことを残して……。

今度は牧村が、手をメガホンの形にして叫び返した。

「君も――」

そこで二人の間を引き裂くように、大型の路線バスと貨物車が立て続けに横切り、彼の姿が見えなくなった。後に続く言葉が聞こえない……。

きみも――その後は、なんて言ったの牧村さん？

きみも――頑張れよ？

きみも――早く仕事見つけろよ？

きみも？

きみも、何？

それは、ほんの一瞬のことだった。

しかし大型車両が行き過ぎたあと、そこにはもう牧村の姿はなか

った。横断歩道の信号機がふたたび青になる。後を追いかけようか？ あの背の高い後ろ姿に追いついて、そしてコートの袖を引っぱって確かめてみようか。ねえ、さっき私になんて返事したの？ 君も——の後にはどんな言葉が続くの……？

しかし彼女の足は、まるで地に根が生えたようにそこから動かなかった。交差点の雑踏にまぎれ、もう牧村の姿は見えなくなっている。信号機が点滅を始めた。彼女は、じりじりと焼けつくような思いを必死になって胸の奥へ押しとどめた。

——私は、牧村さんに一体何を求めているのだろうか？ 自分で自分の気持ちが良く分からない……。

やがて信号は赤に変わった。

それが合図のように、彼女はゆっくりと駅のほうへ歩きだした。

第十話 A d r e a m c o m e t r u e (後書き)

じゃあ後は沢木先生に任せて——忍法、雲隠れの術！ どん……。
(りきてつくす)

第十一話 Encounter (前書き)

りきてつくす先生。きっと、ススキノに遊びに行っちゃったんだ…。
ッ。その間に私も場面転換なのでございます。

第十一話 Encounter

ビルの外では車の行き交う音が聞こえる。時折、トラックらしきものが走ってゆく。遠くで鳴り響くクラクション。都会の喧騒。コンクリートの壁一枚隔てた部屋で、神戸礼子は、微動だにしない。壁に掛かった時計は、すでに八時三十分過ぎを指している。丁度、始業時刻をまわったところだ。皆が自分の席について本日の業務に取り掛かり始める。礼子は、すうと一回深呼吸をした。それから人差し指で黒縁のメガネのブリッジを整えると、意を決したように自分の席を離れた。ヒールの音をコツコツと響かせながら、人事課長席に向けて歩いてゆく。そんな礼子の行動に気を留める者は誰もいない。目にしたとしても、おおかた朝の伝達事項とでも思う事だろう。礼子の心情をよそに人事課のフロアには、相変わらずの仕事風景が広がっているだけだった。

「塚田課長……」

声が震えるのではと、危ぶむ事はなかった。礼子の声は、明瞭に相手に伝わったようで、書類に目を落としていた塚田の禿頭が、ピクリと反応する。塚田は、ゆっくりと顔を上げ、礼子を見つめた。私に何か進言をするつもりかねと言いたげな表情をしている。

名門の女子大を出て総合職として第一堂で採用された礼子は、周囲からは仕事のできる女として、認識されていた。正義感にあふれたとえ立場が上のものであっても齒に衣着せず自分の意見を言った。上層部の中にはそんな礼子を疎んじる者もあったが、何よりも礼子は、業績において結果を出していた。だからこそだ。三十歳そこそこにして人事課長代理にまで出世したのは。

しかし、礼子は、今日は塚田に意見するつもりは毛頭なかった。

礼子の形の良い唇が、さらに次の言葉を告げる。

「これを……」

すっと礼子が差し出したもの。それは、辞表だった。塚田はコホ

ンと咳払いをすると、慌てて周囲を見渡した。幸い気づいている者はいない。

「一体、なんでだね……？」

礼子は何も言わなかった。塚田は肘付き椅子から立ち上がると、打ち合わせに使用している小会議室に向けてあごをしゃくった。

「ちよつと……あちらで話そう」

礼子を小会議室に誘うと、塚田はその扉に使用中のプレートを下げて、冷え切った会議室に明かりを落とすと、塚田と礼子は、差し向かいに座った。

「今、君に抜けられると困る」

塚田は、わなわなと震える手でシガレットケースを取り出した。が、すぐさまこの会議室が禁煙であった事に気づき、あきらめて引っ込める。

「規定に則って、退職は、今日から一カ月後の日でお願いします。それまでなら補充が利くと思います。先般の採用面接も無事、終了しましたし」

先般の採用面接の部分で塚田の眉がぴくりと動く。

「神戸君。当社に何か不満でもあるのかね。まあ、わからんでもないが……」

それだけ言って、後を濁す。

「いえ。第一堂では充分やらせていただいております。感謝もしています。私事ですが、そろそろ郷里の北海道に帰りたいのです。両親も高齢ですし、親孝行したいと思ひまして」

礼子は、第一堂のやり方をなじるわけではなかった。そして退職の理由も無理もないと思われるものだった。塚田がひとつため息をつく。

「まあ……。君の事だからこうと決めたら慰留しても聞かないのだろね。君を失うのは痛手だが、仕方がない」

「ありがとうございます。それで、早々に申し訳ないのですが、来週、有給を取らせていただきたいのです」

「ああ。君は、ほとんど休みを取っていないからね。いいよ。この機会に精々有給消化したまえ」

「では早速休暇届を書いて参ります。塚田課長。本当にありがとうございます」

礼子は、につこりと微笑んで一礼すると、先に会議室を出て行った。後には、苦虫を噛み潰したような顔をした塚田が一人取り残されている。背中に刺すような塚田の視線を感じながら、礼子は爽やかな気分だった。これでいいのだ。立つ鳥後を濁さずのことば通り、きれいに辞めよう。第一堂のやり方には、以前から首をひねるものが多かった。先般の採用面接だってそうだ。最初は一般公募だったのに、途中で総会屋の津波土建から待ったがかかってしまった。そして蓋を開けてみれば、後から割り込んできた土建屋の息子が採用されてしまったのだ。選考試験も経ずに……である。土建業は、冬場は仕事が激減しますから、息子には年間を通じて安定した職をつけて、どうせサマー会社のくせに……と、礼子が思ったところでどうなるものでもないだろう。

——それよりもこれからの事を考えなくちゃね。

礼子には、あてがあつた。先週、地元に住む友人から教えてもらった情報である。とあるイベント会社が北海道に営業所を新設するから人材を募っていると言う。郷里の北海道で、新しく事業をはじめ。それだけでもう礼子のアンテナは、ピピッと来てしまった。そもそも礼子は第一堂採用された時、まず営業部門に配属となつたのだ。営業の仕事は礼子の性に合っていて、第一堂にはかなり貢献できたと思っている。だから郷里の物産品の企画展示の仕事は、このうえなく魅力的なものだった。すくさま礼子は、この会社に応募する事を決め、札幌行きの手ケットも手配してしまったのである。

有給取得の依頼を持ちかけたのは、この会社の面接を受けに行くためだった。

この日、礼子は残業することなく定時で帰る事にした。もちろん退社日までは、きっちり手を抜かず、仕事をしていくつもりであ

る。しかし、今日ばかりは、退職の意思を課長に告げた事で、気分が高揚していたのだ。B4サイズの書類がすっぽりと納まりそうな仕事仕様の焦げ茶のバッグを手に、吹き抜けになった一階フロアを闊歩していると、いつも掃除に来ている都築フサの姿が目に残った。礼子は、その姿に声をかける。

「フサさん。お疲れさま」

名を呼ばれたフサは、振り向くと怪訝な顔で礼子を見た。今まで顔を合わせれば挨拶や短い言葉くらいは交わしていた。が、わざわざ呼び止められまでは、しなかった。ましてや五時を少し回ったこの時間に帰り支度をした礼子に遭遇した事もない。

「おや、神戸さん。珍しい。今日はずいぶんと帰りが早いんだねえ」
「ええ」

「まあ、たまには早く帰らないとね。あんたには息抜きが必要さ」
ねぎらうようにフサが言つと、礼子は小首をかしげ、にっこりと微笑んだ。

「あのね、フサさん。私、会社を辞める事にしたのよ」

唐突に礼子が告げる。投げたボールがあさつての方向に返されたようにフサは、啞然としている。しかし礼子の表情を見て取ると、少し考えたようにフサは言った。

「あんたにとつては、それが大事なことだったんだね……」

「フサさん。今までお世話になりました。でもまだ来月の今日までは、第一堂にいますから、よろしくね」

「そうかい。今日のアンタ。綺麗だよ……」

「ありがとう」

礼子はフサに頭を下げきびすを返すと、カツカツとヒールの音を響かせながら、正面の自動ドアから去って行った。

季奈子は、しばし固まっていた。ユニフォームの脇から冷たい汗がたらりと流れる。カウンタの中央に、黒いスウェットを纏った坊主頭の男がいた。そして隣には、パンチパーマの男が金魚のフンみ

たいにくつついている。その特徴ある容姿を忘れるはずもない。以前、季奈子が牛丼を運んだ男達だ。あれから二人は、週に二、三回位の割合で、姿を見せるようになった。因縁をつけてくる事もなく、カウンタ席の中央にでんと座ると、牛丼をかつ込んで去っていく。一体、どうしたと言うのだろうか。この店の牛丼がそんなに美味かったのだろうか。もしかしたら二人は、最近この場所の近くに越してきたのかもしれない。

近所に住んでいるがために、毎日のように訪れる客は、別段珍しくはない。だとしたら、なんと厄介な事だろう。そのうえ季奈子は、一度彼らに牛丼を運んだ事から、不本意にも二人の配膳要員となつてしまったのだ。

「季奈子ちゃん。また頼むね」

厨房から特盛りの牛丼の載ったトレイを差し出し、店長が口元に手を添え小声で言った。

季奈子は、しぶしぶトレイを受け取ると、生唾をごくりと飲み込んだ。かくんと向きを変え、二人に歩み寄る。

「お、お待たせいたしました……」

トンと丼を差し出すと、坊主頭の口元がにやりと緩む。黒いサングラスに緩んだスウェットの首元から覗く刺青。そんな男が微笑んでも、腹に一物あるのではと感じられ不気味なことこの上ない。季奈子は、毎度ながらびびってしまう。

「季奈子ちゃん。今日は、天気がよくていいね」

目の前に丼が置くと坊主頭は顔を上げ、季奈子の名を呼んで話しかけてきた。どうやら従業員達に季奈子ちゃんと呼ばれているのを聞きつけて覚えたようだ。これだけ通い詰めれば、名前を覚えるのも無理もない事である。坊主頭の甘ったるい猫なで声が、さらに恐怖を煽る。季奈子は、ゾクツとした。

「はっ、はい……そうですね。天気がいいっていいですね」

季奈子は、ひきつり笑いを浮かべながら、あたりさわりのない言葉を棒読みのように返す。この場を穩便に収めるのが、季奈子の使

命だった。彼らは刺激さえしなければ、普通に食事をして去つていくと言う今までの来店歴から得た希望的観測のもとに。

彼らの姿に恐れをなすのか、この牛丼店の客足はすっかり鈍ってしまった。安さ速さと、そこそこの味が売りのこの牛丼屋は、薄利多売で収益を得ている。しかし、同じような店は、他に山ほどあるのだ。店長は頭を抱えた。

「この調子であの二人が通い詰めたら、この店は潰れてしまつかも……」

そんな恐ろしいことを口にする。客に会話を聞かれる心配のない厨房で、少しくらいぼやいたとて仕方のない事だろう。ここ最近、店長はいつも弱った顔でため息をつくばかりである。

「はっ、もしかしたら、ライバル店の差し金じゃないですかね？」

さも重大な発見をしたように従業員のひとりと言う。そんな会話を季奈子は、息を詰めて聞いていた。冗談じゃない。袋小路印刷が潰れ、このお店まで潰れてしまったら、季奈子の生活の糧がなくなってしまう。しかし……である。季奈子も、そろそろ次の転職先を真剣に考えなくてはならない時期が来ていた。このままずっとフリーターで通すつもりはない。アルバイトとは言え、フルで働いていてなまじ収入があるだけに就職活動に真剣味が湧かなかった。最初からこのアルバイトは繋ぎだった事を肝に銘じておかなくては。

——私は、近いうちに次の仕事を見つけないきゃならない……。

あてはなかったが、季奈子は決意した。この牛丼店はこれから続くであろう季奈子の長い職業生活の中のほんの箸休め的な場所。自分の行く末は、自分で責任を持つしかない。

季奈子は、ちらとカウンタに目を向けた。坊主頭とその連れは、特盛りのメシが赤々となるほど、ご自由におとり下さいとある紅シヨウガを載せている。案外とあの二人の出現は、季奈子にとって今後の事を考えるいい機会を作ってくれたのかもしれない。

季奈子は、客の入りを確かめるように出入り口付近に視線を送った。

——あ……。

季奈子の視線が一点で止まる。とくん……と心臓が鳴った。向こうから牧村がやって来るではないか。彼は、小さな女の子と手を繋いでいる。

——預かってもらう前にくるみにも会っておいて欲しいから、一度、季奈子ちゃんの店に顔を出すよ。

黒薔薇でコーヒーを飲んでいる時、牧村はそう言った。ずるい。こんな不意打ちで現れるなんて。今日の季奈子のユニフォームの下は、短大時代に買った冴えないシャツブラウス姿だった。先にメールか電話でも寄越してくれれば、もっと可愛い洋服を選んできたのに。そんな後悔がよぎったが、すでに時遅しである。季奈子の視界の中で、牧村がどんどんズームアップされてくる。客が少ないのを良い事に季奈子は牧村を視界の隅に留めたまま、ゆっくりとカウンタにふきんをかけた。入り口のドアが開く。

「いらっしやいませ」

店長の第一声に重なるように季奈子は叫んだ。牧村が季奈子に向けて微笑み軽く手をあげる。その気配を察して店長が言った。

「知り合い？」

「はい。前に勤めていた会社の人なんです」

それだけ言うと、早速、季奈子は牧村と小さな女の子に水とおしぼりを運んで行った。

「牧村さん。もうっ……急でびっくりしましたよ。先に来ることを教えてくれたら良かったのに。私、シフト勤だからいない時だってあるんですよ」

「ごめんごめん。季奈子ちゃん。ほとんどフルで働いてるって言うてたから。ちょっと覗いてみようと思ってさ」

白い襟のチェック柄のワンピースを着て、胸には牧村くるみと書かれたバッジをつけた女の子がじっと季奈子を見ている。その顔に牧村の面影はない。服装もさながら、きちんと腰掛けた姿が、おしやまさんな印象を与えている。

「こんにちは」

くるみの顔を覗き込むように季奈子は言った。

「こんにちは。牧村くるみです」

「私、志浦季奈子です。くるみちゃん。よろしくね」

「はい。お世話になります。よろしくお願いします」

くるみがぺこりと頭を下げる。利発なくるみの様子に季奈子はほっとため息をもらした。父親と二人暮らしの環境が、くるみをしっかりとらせてしまったのかもしれない。季奈子は、牧村の出張中、くるみを温かく迎えてやろうと心に決めた。

「ええと、牛井の並とこのお子様セット、頼めるかな」

「はい。ただいま……」

しかし、メニューから顔を上げた牧村の表情がさっと変わった。はじかれたように椅子から立ち上がる。

——え？

睨み付けるような牧村の視線に季奈子は戸惑った。くるみもぱかんとしている。牧村の視線の先は、カウンタの向こうを捉えていた。

「お、お前……」

搾り出すように牧村が発した声。その先には、パンチパーマの男が座っていた。

第十一話 Encounter (後書き)

さて、今週も無事更新できたところで、スポーツクラブに筋トレに行ってきます。

また再来週、戦うためにね♪

第十二話 once upon a time

「なあ、マナブよ……」

牛丼屋のカウンターに片肘ついてぼんやりと茶をすすっていた茂樹が、不意にぼそりとつぶやいた。

「ちよいと聞いてもらいてえ話があるんだが」

「へい」

眉間に清水健太郎ばりの深い縦じわを刻んだまま、マナブは競馬新聞から目を上げることなく応えた。二人とも相変わらず趣味の悪い服装をしている。しかしまるで悪い冗談のように、二人の胸にはおそろいで赤い羽が付けられていた。善意のシンボルでもあるその赤い羽は、彼らのいかつい外見とはまったくのミスマッチで、見る人の目になんともユーモラスなものとして映っている。茂樹はすぐりとした背中をやや丸め加減にして、ほうと切ないため息をついた。それに呼応するように、カウンターの向こうで巨大な炊飯器がしゅーっと真っ白い湯気を吐き出した。

「……じつはよ、このあいだ酒井のオジキに頼まれて、とあるイベント会場でちよつくらバイかましてきたんだが」

「あ、ずるいやアニキ、俺っちに内緒で自分だけシノギかけるなんて」

マナブが『今年の有馬記念を大予想——』と書かれた記事から顔を上げ、つんと口をとがらせた。茂樹はちよつとばつの悪そうな顔をして、ゆっくり湯呑みを置いた。

「いや、イベントちゅうても、いわゆるチャリティー企画ってやつでな、俺のふところには一銭も入ってこねえんだ」

「なあんだ、慈善事業っすか」

「おうよ、ボランティア精神で手伝ってきたのよ」

「ボランティア精神ねえ……」

ボランティアと聞いて急に興味を失ったのか、マナブは再び競馬

新聞に目を落とした。その横で茂樹は、ぼんやりと虚空を見つめている。しかしやがて彼は何かを思い出したようにくくつと笑うと、照れくさそうに鼻のあたまをぼりぼりと掻いた。

「そのイベント会場つてのがよ、けっこう客が入ってて、俺は大忙しで焼きそばを炒めたり、たこ焼きをひっくり返したりしてたんだが、そしたらその催しを企画した会社のお偉いさんっていうのが現れてな、俺に向かって言うわけよ。あなたの客あしらいや売り場での劇的な演出の手法にはいたく感動させられました。ついてはもしよろしければ我々がこれから新しく立ち上げる店を手伝っていただけないでしょうか？ …… ってな」

「もしかして、それスカウトされたんすか？」

「もしかしなくてもスカウトされたんだよ」

「新しく立ち上げる店つて…… それもちろん屋台のことっすよね？」

「いや、それがご当地グルメなんかをウリにした全国展開の居酒屋チェーン店らしいんだ」

マナブが呆れ顔で笑った。

「ははは、じゃあアニキには無理だ、調理師免許持ってねえから。無免許で料理して客に出したのが保健所にバレたら営業停止くらいまずからね。屋台で綿菓子売るのはワケが違うんだ」

「ばーか、厨房で働くんじゃないよ。俺は統括責任者として店を一軒任されるんだ、ジャーマネだよジャーマネ」

マナブが驚いた顔で競馬新聞をわきへ押しやった。

「ジャーマネっすか、そりやすげえや」

「だろう？ ジャーマネと言やおめえ、ステータス的な意味合いで言うなら、若頭と同格だからな」

「若頭かあ…… いいなアニキは」

「心配すんな、店の人事ごと俺に託すと言ってきてるんだ、もし俺が本当にその店でマネージャーやることになったら、真っ先におめえをチーフに抜擢してやるよ」

「おお、チーフっすか、それもまた格好いい響きがあるっすね」

「まあ、若頭補佐つてところだろうな」

「やりましょう、アニキ！」

マナブが、茂樹の太い二の腕をがしつと掴んで言った。

「露天で鍛えた俺たちの実力を存分に発揮できるチャンスですよ」

はしゃぐマナブを尻目に、茂樹はまゆを八の字にしてため息をついた。

「ところが、ちょっと問題があつてな……」

「え、なんすか？ まさか、くりからもんもんが会社の就業規則に引つかかるとか？」

「いや、そうじゃねえ……」

「じゃあ、前科七犯なのが人事規定に抵触するとか？」

「ばか、そういうんじゃねえよ……」

茂樹は、ぺたんこに潰れたハイライトの箱からひしゃげた一本を取り出すと、口の先にくわえ百円ライターで火を付けた。すうつと力一杯吸い込み、そのままカウンターの奥に貼つてある『全席禁煙にご協力ください』と書かれたプレートへ向かつて煙を吐きかける。

「……北海道にあるんだよ、その新しく出来る店っていうのが」

「北海道すか——」

マナブはちよつと考えるふつに天井を見上げてから、しかし笑顔になつてうなずいた。

「うん、結構じゃないすか北海道、冬は寒いけど空気はからつとして梅雨はないし、海の水は冷たいけど獲れる魚は脂がのつて美味しい。俺っち駆け出しのころに半年ほど、サーカス団の巡業につき従つて札幌で暮らしたことあるんすけど、けっこう住みやすいところでしたよ」

「いや、そうじゃなくつて、俺が悩んでいるのはだな……」

茂樹が、ちらつと横目で季奈子のほうを見る。そのとたん、彼のまゆがぴくつとつり上がった。

「……おいマナブ、あの男は一体なんだ？ 季奈子ちゃんとずいぶん親しそうに話をしてやがるが」

マナブも茂樹にならって鋭い視線を送る。

「俺っちも、さっきから気になってたんすよね。こっちに向かって、ちらちらガン飛ばしてくるし、この辺をシマにしているチンピラの息のかかったやつじゃないすか。ちよつと行ってヤキ入れてやりましようか？」

立ち上がろうとするマナブの肩をつかんで、茂樹が押しとどめた。「いや——ちよつと待て。俺ぁ以前にも、あの野郎をどっかで見かけたことがあるような気がするんだが……」

「ああ、アニキもっすか。じつは俺っちもなんすよ。なーんか見覚えあるんすよね。あの締まりのない二枚目づら……」

二人は、じつとりと重たい視線を牧村に向けた。

一方の牧村は、がらの悪い二人組に睨まれ完全にビビっていた。喉がからからに乾いて、目の前にあるコップの水を何度も口にする。さっきマナブの姿を見つけたときには、ここであつたが百年目と言わんばかりに勢い込んで席を立ったのだが、途中で思い直し、今は見なかったことにしようかと心に決めている。せつかく良い雰囲気にくるみを季奈子に引き合わせることに成功したのだし、だいいちあの事件のことは自分のなかではすでに決着のついている話なのだ。

どうした、パパリん？

いや、何でもないよ。

ヤクザがそんなに怖いの？

え。

怖いんでしょう？

ははは、父ちゃんはそんなに弱虫じゃないさ。

じゃあガツンと一発かましてやりなよ。

……かますって。

パパリんひどい目に遭つたんでしょ？　すごく迷惑したんでしょ？　だったらちゃんと文句は言うべきだよ。

そ、そうだろうか……。

絶対そうだよ。今、文句を言っておかなきゃパパリん一生負け犬

だよ。ヤクザなんか怖くないよ、やっちゃんえ、やっちゃんえ！ やっちゃんえ、やっちゃんえ！

牧村の頭のなかで、デビルくるみのやっちゃんえコールが炸裂する。しかし一方で、エンジェルくるみが必死の形相で止めに入った。

パパりん、だめだよ。

え？

あいつらヤクザだよ。思いっきりアナーキーな連中だよ。法律完全無視だよ。あんなやつらに関わっても絶対に良いことないよ。

いや、父ちゃんだってそう思っではいるんだけど……。

それに、このお店で騒ぎを起こしたら季奈子お姉ちゃんがとっても迷惑するよ。

う、うん、それもそうだな。

知らんぷりするのが大人の対応ってやつだよ、だから関わっちゃダメダメ！ 関わっちゃダメダメ！ 関わっちゃダメダメ！

デビルくるみのやっちゃんえコールに対抗するように、エンジェルくるみのダメダメコールがわき起こる。

やっちゃんえ、ダメダメ、やっちゃんえ、ダメダメ、やっちゃんえ、ダ

メダメ――

「うむむむ……」

頭のなかでステレオフォニックに響き渡るくるみのコールを聞きながらあれこれ逡巡していると、不意に本物のくるみが言った。

「なんかよく分かんないけど、パパりん……」

「うん？」

「――男は度胸だよ」

「え、なんのこと？」

「パパりんがなにか悩んでいるときには、そう言えって、むかし母ちゃんに教わった」

「ははは」

「ちなみに、くるみは女の子だから愛嬌をふりまくよ、えへ」

「よし分かった」

牧村は手を伸ばして、がしがしとくるみの頭をなでると、おもむろに立ち上がった。ちょうど二人のテーブルへ牛丼を運んできた季奈子が、何ごとだろうと驚いて目をはる。

「くるみ、パパりんは税金も国民年金も健康保険料もきちんと納めている善良な一市民の当然の権利として、あいつらにひとこと文句を言ってくるよ」

「いいぞ、がんばれ！」

くるみとガッツポーズを交わした後、牧村はマナブたちが座る力ウンター席のほうへと真つすぐに歩いていった。季奈子が牛丼の並とお子様セツトをテーブルにならべながら、囁き声でくるみに訊ねる。

「ねえ、くるみちゃん。牧村さん一体どうしちゃったの？」

くるみは、お子様セツトに目をきらきら輝かせながら言った。

「うーん……よく分かんない。なんかうじうじ悩んでるみたいだから、ちよつと気合いを入れてやったの」

「ふうん」

「パパりん、いざつてときにからきし度胸のなくなるタイプなんだ。だから母ちゃんにプロポーズするまで三年もかかったんだって」

「あはは」

くるみは季奈子の顔を見上げて、ふふつと笑った。

「だからね、お姉ちゃんもじつと待ってるだけじゃだめだよ。そのうち待ちくたびれて気がついたらお婆ちゃんになってるよ。ここぞというときには自分のほうから積極的に……」

「く、くるみちゃん、それなんの話？」

そのときカウンター席のほうから怒声が上がった。

「なんだ、てめえは！」

季奈子は驚いて立ち上がり、声のしたほうを見る。他の客や店員たちも一斉にそちらのほうを注視していた。カウンター席の中央で、牧村が血相を変えてパンチパーマの男と睨み合っていた……。

「あ、あんた、第一堂の前で俺と会いましたよね？」

マナブは、ぽんと手を打った。

「ああ、そうか。どつかで見たことあるつらだと思ってたら、あんときの間抜けな兄ちゃんか」

「なぜ俺とすり替わって面接受けたりなんかしたんですか？ おかげで俺はものすごく迷惑を被りましたよ」

マナブがにたりと薄ら笑いを浮かべる。

「おう兄ちゃん、わけ分かんないこと言うなや。俺っちに因縁付けるつもりなら、もっと上手にやりな」

「なに？」

「あの場所であんたと肩がぶつかったことは事実だが、それだけのことだ。面接がどうか、すり替わったとか、そんなマンガみてえな話、ひでえ言い掛かりだぜ」

「しかし……」

「全部あんたの被害妄想だ。それともなにか？ 俺っちがあんたとすり替わるところを目撃したやつでもいるのか？」

「第一堂の面接官にあんたの顔写真を見せれば、すぐに分かることだ」

「ばーか、やつらはビビって正直に話したりはしねえよ……あつ」

喋りが過ぎて、墓穴を掘ったマナブだった。

「やつぱり、貴様かつ」

「うるせえ！ こうなったら仕方がねえ、いつそ拳で決着つけてやるぜ」

正体がバレたときの悪の組織の親玉みたいなセリフを吐いて、マナブは牧村に掴み掛からんと身を乗り出した。しかしその長身をぐいっと押しのけて、坊主頭の男がぬつと顔を見せる。

「おい、おまえ……」

パンチパーマのマナブに輪をかけて人相の悪い茂樹を見て、牧村は一瞬尻込みした。サングラスの奥に隠されている瞳が、なんとも凶暴な光に満ちているように思える。たぶん、いや絶対に二、三人は人を殺しているに違いない。すみませんと謝って逃げてしまおう

か……。彼がそう思いかけたとき、不意に自分のほうを凝視していた茂樹が、くしゃつと顔をほころばせて言った。

「おまえ……、もしかしてマー坊じゃねえか？」

「え？」

「ほら、俺だよ……」

彼はサングラスを外し、齒の抜け落ちた口でにつと笑って見せた。その顔をまじまじと見つめ、牧村もあつと小さく叫んだ。

「……シゲ兄イかい？」

「そうよ、思い出してくれたかい。あはは、懐かしいな、おい、元気にしてたか」

「シゲ兄イこそ、急に学校やめちゃうから。俺ずっと心配してたんですよ」

親しげに肩を叩き合う二人。その様子をぼかんとした表情で見つめていたマナブが、恐る恐る茂樹に訊ねた。

「ア、アニキ……、まさかこいつと知り合いなんじゃ」

するとここ最近見せたことのないような満面の笑みを作って、茂樹が答えた。

「そうなんだよ。むかし俺が定時制高校に通っていたときのクラスメイトなんだ」

「あれ、アニキって中卒だったんじゃ……」

「いや正確に言うと、三ヶ月だけ高校に通っていた」
牧村が懐かしそうに目を細める。

「あのときはよくシゲ兄イの屋台でメシ食わせてもらいましたっけ。どうして途中でやめちゃったんです？」

「いや、ははは……、ちよつと義理ごとがあつてな、それで急に義務に行かなきゃなくなつて……」

いつの間にか、牧村の横にくるみが立っていた。

「パパりん、このひとだあれ？」

「うん？ ああ、お父ちゃんが昔お世話になった、シゲ兄イっていうひとだ」

「ハゲ爺イ、こんにちは」

茂樹がしゃがみ込んで、よしよしとくるみの頭をなでた。

「こらこら、どう聞き間違えたら、シゲ兄イがハゲ爺イになるんだ」

「じゃ、タコ爺イ」

「ははは、元気がいいな。お嬢は、なんて名前だ？」

「くるみだよ」

茂樹は顔を上げ、牧村を見た。

「マー坊、おまえの娘か？」

「ええ、二年前に妻を亡くしてから、父ひとり娘ひとりの慎ましい暮らしをしていますよ」

「そうか、お前も色々あつたんだな……」

二人がしんみりと話をしているすきにその場からこそこそと逃げ出そうとしていたマナブは、絶妙のタイミングで茂樹に首根っこをつかまえられてじたばたと暴れた。

「こらっ、大人しくしゃがれ」

茂樹が思い切り尻を蹴飛ばすと、マナブは観念したようにがっくりとうなだれた。

第十三話 Words of a shock

第十三話 Words of a shock

牛井店のカウンターでは、季奈子にとって信じがたい光景が繰り広げられていた。なんと坊主頭と牧村が、親しげに話しこんでいるのだ。時折、笑い声さえ響いてきて、季奈子は、思わず耳をそばだててしまう。しかし、坊主頭の野太い声は、巻き舌で聴き取りにくく、細かい内容まではわからない。まして季奈子が知る由もない昔話となれば、切れ切れに聞こえてくる言葉を繋ぎ合わせて、推理することさえ困難である。牧村は、立ち話の挙句、ついにくるみと一緒に席を移動して、坊主頭と並んで仲良く牛井を食べはじめたのだ。

牧村は、牛井を食べる手を休めては、坊主頭に話しかけている。話す相手もなく、既に牛井を食べ終わった坊主頭の連れだけが、不貞腐れたように茶をすすっていた。牧村がシゲ兄イと呼ぶのが、会話の端々から洩れ聞こえてくる。それがあの坊主頭の名前らしい。

昼下がりの牛井屋の店内で、やくざ二人組と父娘の見るも違和感ありまくりの取り合わせ。その周りには、誰も座っていない。店内には、坊主頭のかい声だけが、反響している。季奈子は、興味深く彼らを見守っていた。

牧村とは、袋小路印刷時代、ほとんど会話らしい会話もした事がなかった。しかし、陶磁器店で再会して以来、はずみがついたように関わる機会が増えた。そんな牧村に死に別れた妻にくるみと言う娘までいるなんて。そのうえ、坊主頭とは、定時制高校時代の先輩と後輩らしい。季奈子には、つくづく牧村がわからなくなった。

牧村は、年齢のわりにこれまでの人生の中で背負ってきたものが多くて、季奈子のような若輩者が、ちよつと憧れました程度の理由で付き合える相手じゃないのかもしれない。

ちよつとくらい、親しくしたからって、運命の相手とは限らない。

フサの占いを受けたあの日から、いつも頭の隅で意識していた。木の男って……。

思いを巡らせていると、ふと視線を感じた。坊主頭の連れでマナブと呼ばれていた男が、じっとこちらを見ているではないか。一瞬、ぎくりとしたが、湯飲みが空になっっている事に気づき、季奈子は慌てて茶を注ぎ足しに行った。

「季奈子ちゃん。マー坊と同じ会社に勤めていたんだって？」

近づいてきた季奈子に、坊主頭が破顔して言った。

「はっ……はい。牧村さんと同じ袋小路印刷に勤めていたんです。でも会社が倒産してしまっただけ」

やくざが牧村の知り合いだという事で、季奈子は安心できた。牧村の知人となれば、むやみに手出しして来ないだろう。おかげで季奈子は、少しばかり口数が多くなっていた。

坊主頭は、季奈子の話を聴くと眉をひそめ、神妙そうな表情になると、目頭を押さえた。

——え？ まさか……ね。

もしかしたらこの男、意外と人情に厚いのかもかもしれない。

「そうか。それでこんな牛井屋で働いているのか……。季奈子ちゃん、健気だなあ……」

坊主頭は、牧村のほうに向き直り肩に手を置いて言った。

「なあ、マー坊。季奈子ちゃんは、この牛井屋の看板娘でなあ。可愛くて愛想が良いうえに働き者なんだ。だから俺ア、ついついこの店に来てしまうんだ」

——えええっ？ そうだったんですかあー！。

その通りですよ、シゲ兄ィ……と言うように牧村が、二度頭を縦に振る。自分が話題にされている。季奈子は、赤面しそうになって急須を持つ手にぎゅっと力を込めた。

「大丈夫。季奈子お姉ちゃんは、パパリの恋人だから。パパリンが守ってくれるよ」

一瞬、あたりの空気が凍りついた。そんな様子などどこ吹く風で、

くるみはあつけらんとしている。季奈子の心臓は、ひときわ大きくどきんと鼓動を打った。かつと顔が熱くなる。きつと今の自分は、はた目にもすぐにわかるほどに顔が真っ赤になっているだろう。

坊主頭に至っては、口をぱくぱくさせたまま言葉を失っている。

「こらっ、くるみ。何てこと言うんだ……」

牧村が、慌てたようにたしなめたが、くるみは、いたずらっぽい表情になると、容赦なく次の言葉を放った。

「くるみ。来週、季奈子お姉ちゃんのところにお泊りに行くんだ。

ねっ。お姉ちゃん。女の子同士のお話しようね。パパりんとの逢いのお話が聴きたいな。くるみ、楽しみっ」

「くっ、くるみちゃん……」

季奈子は、恥ずかしくて消え入りたかった。けれど、子どもを相手に大人気ない態度を取るわけにも行かない。もう誰もくるみを止められなかった。

「な、なんだよ。そうだったのか。マー坊……。季奈子ちゃんと一緒にになるのか。そうか……」

やや置いて、坊主頭が、気を取り直したように言った。ばしばしと気合を入れるように牧村の背中を何度も叩く。しかし、その口から紡ぎ出される語調は、これまでと打って変わって、弱いものだった。

「は……ははは。良かったじゃねえか。幸せになるんだぞ……」

——ああ、牧村さんと恋人同士って事になってしまってる……。

困惑したような牧村と目が合った。

——牧村さんは、迷惑なのかもしれない……。

そこに絶妙のタイミングで、他の客が入ってきた。いたたまれなくなっていた季奈子にとっては、願ってもない援軍である。

「い、いらっしやいませっ」

勢いよく叫んで、季奈子はそそくさと逃げるように水を取りに厨房に戻った。客のオーダーを聞きに戻った時、季奈子の目に坊主頭とマナブが、店から出て行くのが映った。

茂樹は、ポケットに両手をつ突っ込んで肩で風を切り、ずんずんと歩いてゆく。無言の背中は、怒っているようにも見える。牛井屋の勘定を済ませ、一呼吸遅れて店を出たマナブは、ようやく茂樹に追いついた。ぴゅうと木枯らしが吹いて、茂樹とマナブの間に枯葉が舞う。マナブは黙って様子を窺っていた。心なしかその肩が震えているように見えて、こらえきれずに口を開く。

「ア、 アニキ……。どうしたんですかい？」

訊くだけ野暮だとは思ったが、マナブには他にかけ言葉が見つからない。

アニキは、失恋してしまったのだ。それも告白する前から。季奈子には、恋人がいた。

それだけではなく、恋人と一緒にいるところまで見せ付けられてしまったのだ。そのショックは計り知れない。マナブは必死で次の言葉を探した。

「あんな、にやけづらの二枚目よりもアニキのほうが、百倍男ぶりいいツスよ……。」

うーん。嘘くさいかなア……。

「あんの野郎、季奈子ちゃんに手エ出しやがって。俺っち、これから店に戻って奴を絞めてきましょうか……。」

いやいやいや……。曲がりなりにもアニキの元学友である。うーん……。

マナブは、頭を抱えた。

「おい。マナブ」

茂樹が立ち止まり、静かに振り返った。サングラスをかけた瞳の表情は読み取る事は出来ない。

「へっ、 なっ、 何すか？」

「北海道。行くぞ」

にやりと茂樹の口角があがった。

今のアニキは、傷ついているはずだ。むしろ北海道に行くと決め

たのは、傷心の心を癒すためかもしれない。しかし、いつまでもぐずぐずと悲しんでいるアニキではなかった。

「へっ、へえ。アニキの行くところなら喜んでお供しますぜ」

それでこそ、アニキだ。マナブの心は、一足飛びに北の大地に飛んでいた。

——運命の月曜日。

こんな言い方が、今の季奈子の気分にぴったりだ。今日、くるみが家に泊まりにやって来る。くるみは、とても礼儀正しい利発な愛くるしい女の子だ。日頃、父ひとり娘ひとりの家庭で暮らしていることを思えば、温かく迎えてやりたいと心から思う。しかしその一方で、牛井屋でおませなくなるみの様子を見てしまった季奈子は、子どもだと思つて侮つていたら、何を言われるかわかつたものではないと警戒もしていた。季奈子にとっては、くるみが、天使のようにも悪魔のようにも思えるのだ。

牧村とは、恋人同士どころかまだ何も始まつてすらない。それどころか、ほんとうに牧村の事が好きなのかどうかさえ、よくわからないのに。

——あつ、いけない……。

考え事で手が止まっていた。ピーピーケトルの音で我に返った季奈子は、沸かした湯をポットに注いだ。

ピンポン……。

玄関のチャイムが鳴った。季奈子は、顔を上げて時計を見る。

——まだ十五分も早いじゃないの……。

少し早めに来たのだろうか。いや、案外と宅配便か何か別の訪問客かもしれない。

「はあい。今、行きます……」

パタパタとスリッパを鳴らし、まずは小窓から外を覗き込んだ。えっ？

そこで季奈子は、息を呑んだ。何故ならそこには、東京に住む、

季奈子に例の見合い相手を世話してくれた叔母の姿があつたのだから。今までにも叔母は、季奈子の一人暮らしを心配して遊びに来る事があつた。しかし、よりにもよって、今日、遊びにくるなんて。

第十四話 a u n l u c k y p e r s o n

叔母の名は、幸子という。

おそらくは、幸せな人生を歩んでほしいという願いをこめて付けられた名に違いない。しかし、これほどまでに名前負けしている人物も珍しいだろう……。

叔母は大阪万博のあった翌年、昭和四十六年の秋に堺市で生まれた。数日来続いたおだやかな晴天が嘘のように、その日にかぎってはなぜか薄暗い曇天のそこかしこで雷鼓がどろどろと不気味に轟いていた。奇しくも十三日の金曜日だった。しかも珍しいことに仏滅と三隣亡まで重なっていた。そして産声と同時に近くのボロアパートでプロパンガスの爆発事故があり、火傷を負った住人が彼女の生まれたまさにその同じ病院へ次々と搬送されてきたという。

小学校の入学式では校長先生のあいさつが始まったとたん強い地震があり、体育館の窓ガラスがのきなみ割れ、記念すべき日は阿鼻叫喚のちまたと化した。その後も遠足や運動会のたびに大雨が降り、修学旅行では旅館で出された夕食に新種のウイルスがまぎれ込んでクラスのはば全員が集団食中毒にかかった。また高校入試のときには試験会場へ向かう途中のバスが玉突き事故に巻き込まれて立ち往生し、新婚旅行へ行つた先のフィリピンでは、強盗に襲われ所持金のすべてとパスポートと結婚指輪を奪われた。

とにかくそんなしょそこの運の悪い人とは次元が違う。もしフサなどが観たら、世の中こんな星の巡り合わせの悪い人もいるものかと驚くに違いない。今でも懸賞に応募すれば決まってハガキが宛先不明のまま戻ってくるというし、他人に頼まれて買った宝くじはよく当たるくせに、もっぱら自分のために買ったときにはけつして当たらないという。茶柱が立ったのなど生まれてこのかた見たことがないと嘆いていた。

ちなみにご主人はリストラにあつて失業の真っ最中、おまけに胃

潰瘍で入院している。娘が一人いるはずだが、ギャンブル好きのろくでなしと駆け落ちしたあげくに行く方知れずとなっている。

不幸な不幸な、幸子おばさん。

しかし彼女が一番不幸なのは、自分がこれほどまでに運のないことを全く不幸だと思っていないところであつた。

「いやあ、突然お邪魔してもて、すんまへんな。季奈子ちゃん、ひよつとして迷惑やつた？」

「い、いえ……」

迷惑には違いなかったが、まさか帰つて下さいとも言えない。曲がりなりにも日頃お世話になっている叔母なので、取りあえず愛想笑いで応じた。しかし彼女が玄関へ一歩足を踏み入れたとたん、頭上で蛍光灯がぱちっぱちつと二回またたいて間もなく消えた。

「かなんなあ、この蛍光灯、うちが来るたんびにたま切れよるわ。氣いつけや、どこぞで漏電してるかも分からんで」

「あはは……」

季奈子としては、もう笑うしかない。けっして叔母に悪気があるわけではないのだ。ただ本人の意思とは関係なく、自らの背負う不幸が周囲に伝染してしまうだけなのだ。できれば冠婚葬祭のとき以外会いたくない。季奈子はいつもそう思っている。しかし磁石のプラスとマイナスが引き合うように、この不幸な叔母は、なぜかいつも季奈子のことをいたく気に掛けてくれるのだった。

「季奈子ちゃん、こないだはかんにんやでほんま。あないにしょむない男やつて、うち知らなんだもんやさかいに……」

幸子おばさんに紹介され、やむなく会つてみたあの男は本当にしよもない男いやつだった。自分勝手に、ナルシストで、行儀が悪くて、気配りもできなくて……まったくもって最低最悪の男。会った瞬間に、ものすごく後悔したのを覚えている。

ほんと、幸子おばさんの言う通りにしていたら、いつも大変な目に遭つてしまう。

季奈子は大きくため息をついた。今日彼女がなんの用で来たのか

も、だいたい見当がつく。きつとまたお見合いの話だ。このあいだのお詫びよ、とかなんとか言っておの派手なハンドバッグからまたぞろ男のひとの写真を取り出してくるに違いない。まったくもってありがた迷惑。とにかく彼女には早めに引取ってもらおうと、季奈子は率直に用件だけを訊ねた。

「で？　今日は、どういったご用でいらしたんですか？」

すると、どんぴしゃり、はたして幸子おばさんは、自分の派手なハンドバッグから一枚の写真を取り出してきた。

「まあ、こないだのお詫びゆっわけやないねんけどな。季奈子ちゃんに新しいお見合い写真を……」

「すつぷ！」

季奈子は、両手のひらを勢いよく振ってみせた。

「け、けっこうですの」

つい力が入り過ぎて声がひっくり返ってしまった。前回であんなに懲りているのに、また義理で男のひとと会っただなんてうんざり、ここはなんとしても断らねば。季奈子は、幸子の顔をきつと見据えて言った。

「わ、私今回こそはもう、はつきりくつきりお断りしますから」

しかし幸子は引き下がらない。空気はあくまでも吸うものであり、けっして読むものではないと頑に信じているひとなのだ。

「いややわあ、季奈子ちゃんゆったら、うちがぜんぶ言い終わらんうちに断ったりして……。今度こそ間ちやおらへんねんで。ほれ、写真見てみい、ごつつ男前やし、これはいわゆるジャーニーズ系ゆっやつやな。まだ若いのに大手の総合商社でエリートしたはるゆっ話やねんで……。でや？　ひとつ会ってみるだけでも」

まるで子どもにお年玉でも渡すような気楽さで笑いかけてくる。

季奈子はぞっとした。ああ、どうしよう、このひとはどうやって断ったら諦めてくれるだろう。もうすぐ牧村さんやくるみちゃんたちが来るというのに……。

「……あれ？」

ふと、季奈子は『袋小路印刷社員会』と刻印されたオクタゴンの壁掛け時計を見上げ首をひねった。そういえば約束の時間はとうに過ぎていくというのに、あの二人どうしたのかしら……？

「なあ、季奈子ちゃん。写真見るだけでも、なあなあ」

幸子おばさんが、ぐっと身を乗り出してくる。反動で、季奈子は思わずのけ反った。

「いえ、で、ですからはつきりお断りすると……」

そのとき――。彼女の携帯電話から、楠トシエの歌う某製薬会社の懐かしいCMソングが流れ出した。

ゆき空 あめ空 くもり空

頭のいたみに 齒のいたみ

どうにもならない そのつらさ

「あ、ちよつとごめんなさい」

ディスプレイを見る。牧村の名前が表示されていた。彼女は慌てて電話機を耳に押しあてた。

「もしもし、牧村さん？ 志浦ですけど、どうしたんですか？」

しかし応じたのは牧村ではなく、元気のよい女の子の声だった。

「しーきゅーしーきゅー、こちらくるみ、季奈子お姉ちゃん応答せよ、オーヴァー」

「あ、あれ、くるみちゃん？ ……どうしたの？」

電話口のくるみは、いたってお気楽な感じで言った。

「なんか駅でパパりんとはぐれちゃったみたい、大至急応援たのむ、オーヴァー」

「えーっ！」

やばい、幸子おばさんの不幸が確実に自分の周囲に伝播している。季奈子は、携帯電話を握りしめ立ち上がった……。

第十五話 A time of the tea

幸子おばさんもさすがに今の電話にはなにか察したらしい。怪訝そうに季奈子を見ている。とにかく、今すぐくるみの元に向かわなくちゃ。季奈子は、通話を切ると、向き直って言った。

「実は、これから家にお友達が来る予定だったんですけど、何かトラブルがあったみたいで。私、駅まで迎えに行つて来ます……」

「そうなの？　ほんならうち、季奈子ちゃんが戻るまでここで留守番していまひよか」

おばさんは、バッグを膝に丁寧に椅子に座りなおした。冗談じゃない。彼女に留守番なんてしてもらった日には、その間に電化製品の二、三個は、ぶっ壊れる事を覚悟しなくてはならない。それに牧村とくるみとおばさんを接触させて不幸に導くなんてできない。でも彼女は、好意のつもりなのだ。今度ばかりは、季奈子のはつきりとした口調で言った。

「ううん。おばさんがいると、お友達が気を遣うわ。悪いけど、私と一緒に出て欲しいの。ここは、鍵かけて行くから……」

季奈子にせかされて、おばさんはしぶしぶ立ち上がった。折角、電車を乗り継いでやって来たものをこんな形で帰すなんて悪いと思っている。そうは言っても向こうが勝手なだけなのだけだ。せめて何かしらここに来た甲斐があればいいのだが。そうだ。季奈子は、とっさに思いついたひとことを口にした。

「そうそう。今、近くのショッピングセンターでリニューアル前の在庫一掃処分をやっているんですよ。あそこお洒落なテナント入っているから、掘り出し物が見つけれられるかも。おばさん、帰りがてらに寄ってみたらどうかしら？」

季奈子は、知っている。あの派手なハンドバッグは、おばさんの一番のお気に入りであり、大阪の実家に帰省した時に値切りに値切つて手に入れたものだ。見合い写真がすっぽりとおさまるバッグは、

相変わらずパンパンに膨らんでいて、おおかたあの中には、財布やハンカチなどの必需品のほか、みかんとゴミ袋と老眼鏡代わりの虫眼鏡が入っているに違いないと季奈子は踏んでいる。幸子お婆さんは、買い物好きだ。まして、それが安く手に入っただとなれば尚更で、季奈子に会うと必ずと言っていいほど、「ええやろ。これ」と身に着けたアイテムの自慢をしてくるのだ。これだけの良い品物をいかに安く手に入れたかをとうとうと語る。そして更にそれらの戦利品を気前よく季奈子にプレゼントしてくれるのだ。しかし悲しいかな、そのすべてが季奈子の趣味に合うものではなかった。去年もらったショッキングピンクのニットに豹柄がプリントされたラメ入りのセーターは、捨てるに捨てられず、デパートの包装のままたんの奥に眠っている。

「そうやのん？　ほんま？」

とたんにお婆さんの瞳が輝きを帯びる。上手く季奈子の話にのってきたのだ。こうしてまんまと幸子お婆さんを外に連れ出す事に成功した季奈子は、機嫌よく去っていく背中をしばし見送った。そして反対方向に足を踏み出すとまっしぐらに駅に向かう。季奈子のアパートは、駅から五、六分の距離と好立地である。こんな事になるなら、最初から二人を迎えに行けば良かった。すぐ近くだからと、来てくださいと言ってしまった。季奈子の胸に軽く後悔がよぎる。とにかく駅に着いたら、すぐにくるみに電話しよう。さっきくるみは、牧村の携帯から連絡をよこしてきたが、当の牧村はどこに行ってしまったのだろう。走りながら季奈子は、先ほどの会話の内容に手がかりを探した。くるみの口調には、不安そうな様子はなかった。携帯さえあれば、季奈子に連絡が取れる。その故だろうか。もともとしっかりとした子だけと……。

駅のロータリーが、道路の向こうに見えるところまで来て、目の前の信号が赤に変わった。待っているのもまどろっこしくて、すぐさま季奈子は、地下の連絡通路の階段を降りる。歩きながら携帯をかけると、呼び出し音三回ほどで相手が出た気配がした。

「もしもし……くるみちゃん？」

「あ。季奈子ちゃん？」

思いもかけぬ男性の声が響いてきた。ちよっぴり低めの牧村の声。戸惑いと同時に季奈子の緊張の糸がぶつりと切れた。ほっとため息が洩れる。季奈子に電話してきた後、すぐに会えたのだらう。

——よかった。幸子おばさんの不幸が感染しなくて。

季奈子は、胸を撫で下ろした。

「牧村さん……！　くるみちゃんに会えたんですね」

「ごめんね。季奈子ちゃん。くるみが俺とはぐれたと早合点したらしいんだ。心配かけて、本当にごめん」

それはそれで構わなかった。むしろ無事会えたのなら、幸子おばさんと早々に離れられた事を感謝したい。

「今、駅前に出てきたところです。すぐに行きますから……」

ロータリーから正面で入り口をくぐり構内に入ると、すぐにニット帽をかぶり、カーキ色のブルズンを着た牧村がくるみを連れていく姿が目についた。くるみは白いAラインのコートにバッグを斜めがけにし更に手提げバッグを持って、牧村のものと思われるキャリーバッグに浅く腰掛けている。季奈子の姿を目にすると、はじかれたように立ち上がった。

「季奈子お姉ちゃん！」

「季奈子ちゃん。ごめんっ」

牧村が背を丸め、手を合わせる。季奈子は、いえ、もういいですから……と牧村を制した。

「疲れたでしょう。ここから私の家まで五分ほどなので、休んでください」

季奈子の心は、自然と浮き立っていた。幸子おばさん以外の人が季奈子の部屋に訪れるのは、学生の時以来だ。部屋のスイッチを入れ、二人を招き入れる。

「綺麗にしているんだね」

部屋に一步踏み出すなり、牧村が言った。

「とんでもない！ 昨日、慌てて片付けたんです。いつもは、もつと散らかってます」

「ははは。季奈子ちゃんは、正直だなあ……」

「今、お茶を淹れますから。さっ、どうぞ」

二人に椅子を引いて勧めると、季奈子はキッチンに立った。ティーポットに茶葉をいれ、お湯を注ぎこむ。背後の牧村とくるみの話し声が飛び込んでくる。

——タクヤ君が掃除をさぼるから、さおりちゃんとめぐみちゃんばっかり掃除してるんだよ。だからくるみ、意見してやったんだ。

——おお、えらいぞ。くるみ。

たわいもない学校のできごと。くつろぎの時間は、季奈子を楽しみ錯覚に遊ばせてくれる。

——もしも。もしも……後ろにいるのが、私の家族だったら……。午後の時間は緩やかに流れ、家族のためにお茶を淹れる私がここにいる……。

『さ、りんこのパイが焼きあがったわよ』

分厚いミトンをはめ、オーブンレンジからパイを取り出す私。ちりちりと音が聴こえてくる。表面にこんがりと焼き色がついて、仕上がりは上々だ。荒熱を取るためにしばらく寝かせておく。くるみが目を輝かせる。

『わあ、ママりん。おいしそう！』

お菓子作りに参加したがるくるみに、パイの表面にあんずジャムを塗るお手伝いを言い付ける。そんなふたりの様子をテーブルに座り、目を細めて見守る牧村。利発なこどもに優しい夫のいる風景。幸せは、何も大きなイベントである必要はない。こんなささいなお茶のひと時にこそやって来て、私は、それを味わい噛み締めればいい。季奈子は想像しただけで口元が緩んだ。

——やだ。私ったら変なこと、考えちゃって……。

こんな妄想に遊んでしまつのも一人暮らしの故だろうか。ティーポットの中にほどよく紅茶の色がつくと、季奈子は牧村とくるみの前にカップを置いた。

「ありがとう」

牧村が、紅茶を口元に運ぶ。黒薔薇でなら見慣れた仕草も自分の部屋となると新鮮に映る。季奈子は、二人の向かいに腰掛けた。

「パパりんね、駅のトイレに入ってなかなか出てこないんだもん……あんまり遅いからくるみ、はぐれたのかと思っちゃった。パパりん、お腹の調子が悪いみたい。緊張すると下痢ピーになるの……」

「こら、くるみ。トイレが混んでいただけだ」

ほんとうなのか、どうなのか、牧村がくるみをたしなめる。あつけらかんと話するみに季奈子は、紅茶を吹きそうになって口元を押さえた。素直にものを言うくるみの存在は心地よい。くるみがお腹の調子が悪いと言うとおり、牧村の顔色は冴えなかった。

「実は、数日前から風邪っぽくてさ。悪いけど、俺、お茶を飲んだらすぐに出発するよ。季奈子ちゃんやるみにうつすといけな……」

「……」

「ええつ。大丈夫ですか。牧村さん。あつたかくしてくださいね。」

私、お薬持ってきてましようか？」

「大丈夫だよ。常備薬は、ちゃんと旅行かばんの中に入れてあるから」

「それならいいんですけど……」

季奈子は、玄関先に置かれた牧村のキャリーバッグに目をやった。紅茶を飲み終えたら、牧村は行ってしまふ。日程に充分な余裕を持つて出かけるなら、もう少しここでゆっくりして欲しかった。くるみは、すっかりリラックスして、手提げかばんの中から取り出した携帯ゲーム機に夢中になっている。

「じゃあ」

「あの……」

コトリとカップを置いた牧村と季奈子がほとんど同時に口を開い

た。牧村が、なんだいと言った表情で問いかける。それだけで季奈子は、泣きそうになった。

「いえ。北海道に行っちゃうんですか？ 採用されたら」

牧村はしばらく黙っていたが、やがて言った。

「……わからない。北海道に行くと決まったわけじゃない。とにかく今は、詳しい話が訊きたい」

「そうですか」

「一晩だけと言っておきながら、結局くるみを長く預からせる事になって、季奈子ちゃんには本当にすまないと思っているよ。お土産買ってくるからね」

「そんなの、いいんです。それよりも風邪気味なんですから無茶しないでください」

牧村は、うなずくとかけてあったブルズンを着込み、紐靴に足を入れた。

「パパりん。いつてらっしゃい」

「くるみ。いい子にしてるんだぞ……向こうに着いたら、電話入れるからな」

くるみの頭をがしがしと撫で、じゃあ……と玄関のドアノブに手をかける。しかしその時……牧村の上半体がぐらりと揺れた。そのまま牧村は崩れ落ちてしまった。

「牧村さん！」

牧村の息が荒い。額には、うつすらと汗が滲んでいる。その額に季奈子は手を当てた。

——すごい熱……。

第十六話 Sweet home

季奈子が祖母と死に別れたのは、彼女が小学校三年生になって間もない春のことだった。

五月の連休も終わり、頬をなでてゆく風にも少しずつ夏のおいが混ざりはじめていた。マンションのベランダからは、遠く見晴るかす立山連峰のいただきに残る雪渓がまぶしく輝いて見えた。

季奈子は、朝食のトーストを口にくわえたままランドセルを廊下のわきへ置くと、祖母のいる六畳間をそつと覗き込んだ。昨日の晩、熱があると言って早めに休んだ祖母は、まだ布団のなかで静かに目を閉じていた。

「どうね、あんべえ良くなつたけ？」

季奈子が遠慮がちにそう囁くと、喉の奥がはり付いたようなしわがれ声がゆっくりと返ってきた。

「……もう、だいぶ良いっちゃ」

しかしその声は、すぐにこほんこほんという咳で遮られた。あまり調子が良いそうには見えなかった。

「婆ちゃん、無理したらだちかんよ」

「季奈子はきつう育って、風邪なんど引かんよにせんにゃあかんぜね」

「……うん」

一晩のうちに祖母の体がなんだか干からびて小さくなってしまったような気がして、季奈子は少し悲しくなった。正月には親戚の叔父さんたちと一緒に、元気に餅をついていたのに……。

「じゃあ、いつてくっちゃ」

「ああ、車に気いつけられ」

これが祖母との最後の会話になった。

季奈子が学校から帰ると、祖母の姿は部屋から消えていて、母がその祖母の着替えやら身の周りのものをバッグに詰めているところ

だった。どうしたのかと訊くと、いよいよ熱の下がらない祖母を病院へ連れていったら、医者にすぐ入院させなさいと告げられたのだという。丈夫そうに見えた祖母だが、やはり寄る年波には勝てず体のあちこちが弱っていたらしい。検査も兼ね、一週間ほど入院するとのことだった。季奈子は、祖母のために千羽鶴を折ることに決めた。以前、自分が盲腸で入院したときにクラスのみんなから貰って、すごく嬉しかったからである。

しかし次の日、まだ夜も明けきらぬうちに病院から電話があった。母が出ると、それは祖母が急死したという知らせだった。どうやらインフルエンザに罹っていたらしく、肺炎の合併症により多臓器不全をおこしたとの説明だった。病院に着くまで、季奈子は祖母の死をまったく信じていなかった。きつとお医者さんがだれか他の患者さんと間違えているに違いない。風邪をひいたくらいのことでは人が死ぬわけがない。あれだけ元気だった祖母が死ぬわけがない……と思っていた。

やがて対面した祖母の死に顔は、まるで蠟細工かと思えるほどに白かった。その透けるような白さを、季奈子は今でもはっきり思い出せる。

「……というわけなのよ」

牧村は、やれやれと苦笑して頭をかいた。風邪なんて病気のうちに入らないよと主張する彼に、季奈子がえんえん祖母の死について語って聞かせたのだ。旅行用のキャリーバッグはすでに彼女の手によって部屋のなかへ運び込まれてしまっている。これはどうあっても自分を引き止めるつもりだなと、牧村はため息をついた。

「分かったよ季奈子ちゃん。さいわい面接はあさつての午後からだし、今夜は自宅でゆっくり養生することにするよ。明日の少し遅い便であらためて北海道に発つ」

「なに言ってるんですか、今すぐ横になってください。今夜はくるみちゃんとリビングにお布団敷いて寝ますから、牧村さんは私のベ

ツド使ってくださいね。あ、シートもベッドカバーも新品のものと替えてありますから大丈夫ですよ」

「え、なに言ってるの、ちょっと待ってよ季奈子ちゃん。だいの男が、若い女性の部屋で寝るだなんて——」

あわてふためく牧村を、季奈子とくるみ二人掛かりで寝室へ押し込んだ。さすがに熱のせいで体がだるいらしく、はじめのうち抵抗していた彼も、やがて不承不承に従った。

「なんだかもの凄く気が引けるけど、じゃあちよつとだけ休ませてもらうよ。熱が引いたらすぐタクシーを拾って帰るからさ」

「はいはい、とにかく今夜はゆっくり休んでください」

牧村がスウェットに着替えているあいだ、季奈子は洋服筆筒の上で埃をかぶっていた救急箱を引っぱり出し、中身を物色した。まだ封が切られていない総合感冒薬の箱が三つほど出てきたが、どれも使用期限があやしい。少し迷ったが、近所の薬局まで新しいのを買いに行くことにした。

「くるみちゃん、ちよつとお留守番しててね。おねえちゃん、かぜ薬を買いに行ってくるから」

するとくるみが、学校の先生に向かって挙手するみたいに、右手をぴんと上げて背伸びした。

「はいはい、お使いなら、買い物上手のくるみにお任せだよ」

ちよつとためらってから、季奈子は膝を折ってしゃがみ込むと、くるみの目をのぞき込んだ。

「くるみちゃん、知らない町でひとりでお使いなんて大丈夫？」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。そのかわり、うまい棒も買っている？」

季奈子は、あははと笑った。

「一本だけよ」

「えーっ、なつとう味とめんたいこ味だけは、外せないよー」

「じゃあ特別に二本買ってもいいわ」

「やったー！」

薬局の場所を教えると、くるみは脱兎のごとく玄関を飛び出していった。

「車に気をつけるのよ」

「がつてん、しょうちくばい！」

くるみの小さな背中が交差点のタバコ屋の角をまがるまで見送ってから、季奈子は部屋へ戻った。玄関のドアをあけると、歌が聞えてきた。

ケーロリン ケーロリン 青ー空 晴ーれた空ー

「あ、電話——」

テーブルの上に置きっ放しにしていた携帯電話が、間延びした歌を口ずさんでいた。あわてて電話機を耳に押し当てて。すると待ちかねたように、女性のきんきん声が耳に飛び込んできた。

「あー、季奈子ちゃん、やっと出てくれたわあ。良かった良かった。うち呼び出し音、百八まで数えたんやでほんま。あー、しんど……。あ、そないなこと、どうでもええねん。あんな、あんな、うち、ええもん見つけたんよ。それで季奈子ちゃんにも教えてあげよ思て……」

叔母の声だった。なにやら興奮しているらしく、いつもより早口がパワーアップしている。しかも声が微妙に上ずっていた。なにかよほど良いことがあったに違いない。

「……な、なんですか、ええもんって？」

「あんな、あんな、驚いたらあかんで。季奈子ちゃんに教えてもろたショッピングセンターへ行って見たらな、なんや、ぶわーって行列できてるさかい、なんやるなー？ 一万円札のつかみ取りかいなー？ 思てのぞいて見たんや。ほたら、あんだ、サイン会やったはるやないの。な、な、季奈子ちゃん、誰のサイン会やと思う？ 今ここに誰がいてはると思う？ 当ててみて、なあ季奈子ちゃん」

「あ、あのね、おばさん……」

「なんと、阪神タイガースのイケメン外国人、ブラゼルとマートンなんよ！ でや、凄いやろ。うち今着てるクリスチャン・ディオールのシャツの背中んとこに、ばっちりサインしてるてん、さすが外国人やな、サインもさらさらーって達筆でよう書けとるわ、おまけに顔もごっついイケメンやし……。へへへ、ええやろ？ でな、色紙売っとったさかいに、季奈子ちゃんにもサイン一枚もろて帰るかなー思て」

季奈子は、膝からへなへなと力が抜けてゆくのを感じた。一刻も早く電話を切らねば。

「ごめんなさい、私、今とっても忙しいの」

「なに言ってるの、クレイグ・ブラゼルに、マット・マートンやで、あのランディ・バースの再来やないかと言われた……」

「シヨッピング楽しんできて下さいねー、あと決してここへは戻ってこないで」

そう言って、強引に通話終了ボタンを押した。ふうーと、長いめ息が漏れる。叔母は基本的に善人ではあるが、おとなしい季奈子に対して一方的にものを言うくせがある。しかも、つねにテンションが高めに設定されていて、すごく暑苦しい。おまけに負のエネルギーまで放出している。牧村が急に熱を出したのも、もしかしたら幸子おばさんの瘴気に当てられたのかもしれないのだ。

携帯電話をマナーモードに切り替えると、季奈子は寝室のドアをそつと押した。牧村は、タオルで巻いた保冷剤を頭の下に敷いたまま、じつと目を閉じていた。一度ためらってから、しかし季奈子は小さな声でそつと名前を呼んでみた。

「……牧村さん」

返事はなかった。どうやら眠ったらしい。彼女は足音を忍ばせてベッドへ近づき、牧村の寝顔をじつとながめた。少し疲れているようにも見えるが、血色はそれほど悪くない。頬やあごに、うつすらと無精髭が伸びていた。ふと、季奈子は、彼のあごの下からスウェットのえりにかけてなだらかに隆起する、喉仏に触れてみたいとい

う衝動にかられた。恐る恐る、指先を近づける。そして微かにコロンのにおいがする彼の喉に触れる直前、慌ててその手を引っ込めた。やだ、私なにしてるんだろう……。

自分の耳たぶが赤くなつてゆくのが分かる。と同時に、牧村に対しすぐく申し訳ない気持ちでいっぱいになった。新しい仕事を見つけ、第二の人生を踏み出そうとしている矢先に、こんなことになつてしまつて……。なんだか自分が牧村を引き止めてしまったような、そんな気がして季奈子は悲しい気分になった。

あんたは、強運の持ち主だよ

不意に、占い師フサの言葉が胸によみがえつた。自分は、強運の持ち主。なら、その運を牧村に分けてあげられないだろうか。彼女は、自分の両手のひらをじつと見つめた。本当に自分に強運がそなわっているならば、その力で幸子おさんの負のパワーを相殺できるかもしれない……。彼女は手のひらを牧村の額にかざし、ゆっくり目を閉じた。そして五指をひらひら動かしながら、えいっと気合いを込めてハンドパワーを送り込んだ……。

どうか私の幸運を彼に分けてあげて下さい。

一分ほどそうやっていたが、しかしついに力尽きて目を開け、イメージしていた幸運のパワーをため息と一緒に吐き出した。だめだ、こりゃ、我ながらなんてバカバカしい。

と、突然、牧村がぷーっと吹き出した。どうやら狸寝入りしていたらしい。

「あー、牧村さん、寝たふりー。ずるいー」

「あはは、ごめんごめん。寝たふりしてたら季奈子ちゃん、もしかしておでこにチュっとかしてくれるかなー、なんて期待してたものだから」

「な、なにバカなこと言ってるんですか」

「でも季奈子ちゃんて、ほんと面白いね。見てて、飽きないよ」

「いいです、もう知りません」

顔を赤くしたまま立ち去ろうとする季奈子に向かって、牧村が言った。

「あ、ねえ季奈子ちゃん」

「はい？」

険のある顔で振り向くと、牧村がめずらしく真面目な顔をしていた。季奈子は、少しどぎまぎした。

「あの……なんですか？」

「いや、このシチュエーションでは格好悪いというか、ちょっと照れくさいんだけど……」

急に、このせまい部屋のなかには自分と牧村の二人きりしかないという事実には思い当たり、季奈子は急速に鼓動が早まるのを感じた。逃げ出したいような、そうでもないような、そんな複雑な思いが、彼女の胸のなかを目まぐるしく去来した。

「あのさ……、あの、俺、じつはさ……」

「は、はい」

「あの、その、季奈子ちゃん聞いてる？」

「聞いてますってば」

「いやだから、その……」

そのとき、ボタンと玄関ドアの開く音がした。ぱたぱたーっとすごい勢いで足音が近づいてくる。——と、次の瞬間、くるみが豪快に寝室のドアを開けた。

「たっだいまーっ」

「あ、あら、くるみちゃん、おかえり。早かったのね」

どうやら走りづめに走ってきたらしく、くるみは、はあはあと肩で息をしていた。

「ど、どうしたの、くるみちゃん？ そんなに慌てて」

「見て見て、おねえちゃん、これっ、これっ」

くるみが、興奮冷めやらぬと言った表情で水戸黄門の印籠のように突き出したのは、たった今買ったばかりのうまい棒だった。大き

な目をくりんと動かしながら、でへへーとだらしく笑う。

「じゃじゃーん、新発売のキャラメル味とラー油味だよ!」

季奈子は一瞬言葉を失ってから、ぷつと吹き出した。牧村が、なぜだか膨れっ面で言った。

「こらくるみ、お父ちゃんの薬はどうしたんだ? まさかうまい棒に夢中になつて買うのを忘れたとか言わないだろうな」

「がちょーん」

「が、がちょーんて、お前……。え、まじか? くるみ、お前本当に買うのを忘れたのか?」

「うそだよーん」

くるみはコートのポケットをがさごそ探ると、なかから小さな箱を取り出しひらひらと振って見せた。

「ほらほらこの通り、ばっちりベガルタ」

パッケージの文字をすばやく読んで、季奈子が首をひねる。

「あれ……。くるみちゃん、それってもしかして」

「そうだよ、熱冷ましの座薬。薬剤師のおじさんが、座薬のほうが即効性あるからって教えてくれたの。パパりん、早く風邪治して北海道へ行かなきゃなんないもんね」

言うが早いか、くるみは牧村に飛びかかっていった。

「パパりん、覚悟ーっ!」

「きゃあ、くるみちゃん、ちょっとやめて、ここで暴れちゃダメです」

くるみは、ぴょーんとベッドへ向かってダイビングすると、牧村の腰に取り付いてスウェットパンツを下しにかかった。

「お尻出せ、お尻。くるみが座薬入れてあげるから」

「わあっ、くるみい、お前バカやめろっ! 俺のパンツを引っばるなああっ」

第十七話 A storm is brought

ベッドの縁にうつぶせたまま、すっかり寢息を立てて眠ってしまったくるみを季奈子はそっと抱きあげた。牧村に座薬を入れようとひとあばれた次の瞬間にコトンと寢入ってしまったのだ。無垢な寢顔にくすつと笑みが洩れる。つい今しがたまであんなに大騒ぎしていたのに。季奈子はくるみのコートを脱がせると、そっと横たえ毛布をかけた。ポニーテールの頭の邪魔にならないよう枕を差し入れる。

「季奈子ちゃん。申し訳ない……」

牧村の声に季奈子は、顔をあげた。

「とんでもない。牧村さん。ゆっくり休んでください」

「うん……」

牧村はいったん長いまつげを伏せたものの、またすぐに目を開けた。

「情けないな。俺って」

「……え？」

「失業しているうえに若い女の子の家に押しかけて、親子で雁首そろえて寝てるなんてさ」

熱があがって苦しいのか、牧村の目が潤んでいる。もう少しすれば座薬の効果も出てくるはずだ。状況を説明されてはじめて季奈子は、なるほどそうかと思った。しかし、牧村だって好きで失業しているわけではない。父子家庭である牧村は、くるみの面倒をみるために残業の少ない会社を選ぼうとしている。そんなところが就職活動のハンディになっているのだ。事情は、充分わかっている。

「だって急に熱が出ちゃったんだもの。仕方ないわ。今は、少し眠って。ね？」

季奈子は、なだめるように言った。

「ほんとうは、あれがいや、これがいやって仕事を選んでなんかい

られないんだよな。季奈子ちゃんは、ほんとうに偉いと思うよ。すぐに牛井屋のアルバイトを見つけて、一所懸命働いて。辛いはずなのに厭な顔ひとつ見せずにさ。まったくシゲ兄イの言うとおりさ。俺は、季奈子ちゃんに会うたびに元気をもらっていたんだよ」

「そつ、そんなことないですよ。私だって厭なこと、いっぱいあります。頭の中は、いつも不平不満とか思ってた……」

褒められて季奈子は顔が熱くなるのを感じた。季奈子にすれば、アルバイトでもなんでもして働くのは当然の事で、偉いなんて意識はない。牛井屋で働いているのも、たまたま求人募集の張り紙を見たからだ。もしファミレスや喫茶店の募集を見たなら、そこで働いていたかもしれない。単なるタイミングの問題なのだ。季奈子は、牧村が話し終えるのを待って声をかけた。

「熱が下がったら、お粥でも作ります。そしたら風邪薬を飲みましょう。しっかり治してください」

「ありがとう。季奈子ちゃんといると、ほつとするよ」

その時、玄関先でがさり……と音がした。誰か来たような気配がする。

がさがさがさ。何者かが、玄関先でかばんの中身でも物色しているような音だ。

——もしかしたら幸子おばさんかも……。ああ、もう。もどってこなくていいって言ったのに！

もしも幸子おばさんだったら、この状況をなんと説明しよう。牧村の事をどう紹介すれば。季奈子は、息を殺し様子を窺った。いつその事、居留守を決め込もうか。それとも眠ってしまった事にするか。そうすればおばさんも諦めるかもしれない。三尺ほどしかない玄関のたたきは、男ものの靴と女の子用の靴が仲良く並んでいる。ひとたび、玄関のドアを開ければ、二人が部屋にいる事がわかってしまう。次に鳴らされるであろうチャイムの音色を予期して、季奈子は、ドアをじっと見つめた。ロックされチェーンもかかったドア。

ひとり暮らしの季奈子は、家に入ったら即、鍵をかけるのが習慣になっているのだ。けれども待てど暮らせど、その後、玄関のチャイムが鳴る事はなかった。季奈子は立ち上がるとおそろのおそろドアロックを外し、半分ほど廊下に出てみた。きよろきよろとあたりを見回してみるが周囲には誰もいない。気のせいだったのだろうか。幸子おばさんではなくて、隣の部屋に誰か入っていったのだろうか。いや確かに音は季奈子の部屋の前から聴こえてきた。拍子抜けしたような安心できたような複雑な気持ちで、季奈子はドアを閉じようとしたが、ふとドアノブにスーパー袋がぶら下がっているのに気づいた。

手に取るとずっしりと重い。袋には、季奈子がおばさんに教えたシヨップینگセンターの黄色いロゴが入っている。

——やっぱり！ 幸子おばさんが来たんだわ。

そこに急にサーツと雨が降り出してきた。その勢いはどんどん強まってくる。雨に煙って視界が揺らぐ。豪雨である。ピカツと空が光ったかと思うと、遠くで稲妻が空を切り裂いた。ひと呼吸遅れて雷鳴が鳴り響く。ずどんと鳩尾まで響く大音響に季奈子は思わず肩をすくめた。

——さすが、おばさん……。

もしかしたら、幸子おばさんがまだその辺を歩いているかもしれない。季奈子は、アパート前の道路を見渡した。しかしこの雨の中、道路を行き交う人はほとんどいない。幸子おばさんは、みずから嵐を呼び、あまりの悪天候にタクシーでも拾って帰ったのかもしれない。今までにもしばしばこんな事があった。

「ひどい嵐。牧村さん、今日、北海道に向かわなくて正解かも。こんなひどい天気じゃ、飛行機が飛んだかどうかだって怪しいところだわ」

歌うように言うと、季奈子はキッチンに立ちスーパー袋を開けてみた。まずは、先ほどの電話で大騒ぎしていた色紙である。律儀にもらってこなくてもいいのにと、季奈子は苦笑いした。それから老

舗漬物屋の包装紙に包まれた奈良漬が姿を現した。ずっしりと重かったのは、このためだったのか。

——季奈子ちゃん。好きだったやろう。

叔母の微笑む顔が目には浮かぶように季奈子の口もとが緩んだ。奈良漬は、季奈子の好物である。覚えていてくれたのか。不幸を一身に背負った叔母さんだけど、なんだかんだ言って季奈子の事を心配してくれているのだ。さらにもう一つの包みを開ける。ゼブラ柄の腹巻。上下が黒いレースで縁取られ、カイロを入れるためのポケットには、黒いリボンが付いている。そして牛柄のババシャツが二枚入っていた……。取り付けられた値札は、下半分がちぎられている。季奈子の趣味に合うものではなかったが、まだ実用性がある。

一番奥には、カフェエンジェルのマカロンの箱があった。これは、ひとつ二百円近くする高級菓子で、季奈子の好物である。ひとつおり中身を見たところで、テーブルの上に置いた季奈子の携帯が点滅しながらふるえはじめた。続いて馴染みのあるケロリンソングが流れてくる。

ゆき空あめ空　曇り空――。

「はいっ。もしもし……」

「あ。季奈子ちゃん？　家の前にお土産置いてきたさかいな」

「今、見つけたの。ありがとう……おばさん」

「下着がごつつ安くてね。女の子は体を冷やしたらあかんやつ思ってたぎょうさん買ってきたわ」

「ええ。使わせてもらっわ」

あくまでも室内用下着だ。外出する時は身に着けまいと季奈子は思った。

「ねえ。季奈子ちゃん。あんた好きな男の人がいてるんやろう？」
「えっ」

「今も部屋にその人がいてるんやろ？」

「あつ、いえ。そんなこと……」

確かに部屋に男性がいる。しかし、恋人とも言えない間柄である。季奈子は答えに窮した。

「おばさん、鈍感だったわ。季奈子ちゃんが、お見合いを断り続けんねんがその証拠。季奈子ちゃんのことだから、まさか変な男性につかまっついていてへんと思うけど……」

「あのつ、おばさん……」

しかし、幸子おばさんはしゃべり続けた。

「時期がきたら、ちゃんとおばさんに紹介すんねんで。ほなね」
電話は切れた。

第十八話 My Daddy , My Hero

くつ、くつ、くつ……

コンロの火にあぶられて土鍋の表面で飯つぶが踊っている。せまいキッチンの中に、真っ白い湯気とともに空っぽの胃を刺激してやまない鶏がら出汁の良いにおいが立ちこめている。エプロン姿の季奈子が、銀色のおたまを使ってその土鍋の中身をすくい上げ、そっと口に含んだ。

「うん……塩加減、よし」

キッチンの壁にあいた小窓からは、秋めいてやわらかな朝の光が斜めに射し込んでいる。どうやら嵐は一過性のもので、夜が明けの前には去ってくれたようだ。しゃかしゃかしゃか。手早くシェイクした溶き卵を、彼女は火を止めた土鍋のなかへゆっくりと流し込んだ。

「これで、仕上げも、よし」

おたまを置いて細い腕でガッツポーズをつくる。そして最後のとどめとばかりに、ちゅっ、鍋へ向かって投げキッスを送った。

「愛情も、よしっ……と、これで完成ね、神もごしょうらんあれ、季奈子の特製雑炊でござあい」

そう言うてにこやかに振り向くと、いつの間にそこに立っていたものかパジャマ姿のくるみとぼっち目が合った。

「うふふ、季奈子おねーちゃん、おはよ」

「あ、あらっ、おはよう……。くるみちゃんたら、いつからそこにいたの？」

にへー、と笑って、くるみが答える。

「ちゅっ。愛情よし。ってそこから」

季奈子は頬を赤くして、目をうるうるさせた。

「もう、足音もさせないでひとの背後に立つんだからあ。くるみちゃんって忍者みたいなのね」

「伊賀の生まれでござる」

「昨日は、よく眠れた？」

「にんにん」

「じゃあ朝ご飯にしましょう」

「にんにん」

「今朝は風邪ひきお父さんのために、鶏から出汁でおかゆを煮てみましたー」

「おおっ！」

目を丸くして、くるみが小さな手で、ぱちぱちぱちつと拍手をした。

「さ、くるみちゃん、まずは顔を洗ってらっしゃい」

「がってん、しょうちゃん帽」

ぱたぱたーつと、くるみは勢い良く洗面台のほうへ駆けていった。季奈子は、ヒヨコの絵柄がプリントされたエプロンでせわしく手を拭きながら、寢室の前までいって音を立てないよう、そろりとドアを押した。

「殿はまだお目覚めにはならぬか、と……あ」

牧村は起きていた。ベッドで仰向けに寝たまま、さも居心地悪そうな表情をこちらに向けている。季奈子は決まり悪そうに首をすくめてから、ぺろつと舌を出した。

「あ、あらつやだ、おはようございます。牧村さん、もう起きてらしたんですね」

「……いやあ、起きてたっていうより、ゆうべからぜんぜん眠れなくてね」

そう言ったかと思うと、ふわっと特大のあくびをした。充血した目が、眠たそうにしょぼしょぼと瞬きをくりかえす。

「なんか布団からものすごく色っぽい匂いが香ってくるもんだから、おかげで一晩中悶々としてしまったよ」

「ご、ごめんなさいっ。シーツやベッドカバーは新品のものと替えてあったんですけど……」

季奈子は耳まで赤くなつて、うつむいた。牧村が、ふたたび大きなあくびをしながら言った。

「いやいや、おかげでドーパミンが大量に分泌されて風邪ウィルスのやつを追い払ってくれたよ、あふわあ……」

最後の部分はあくびでかき消された。そのあくびを無理に噛み殺そうとして、今度は鼻の穴がびろーと広がった。カバみたいだなと思つて季奈子はその顔を飽きずに眺めていた。すると牧村は無精ひげの浮いた顔で涼やかに笑った。

「きつと季奈子ちゃん家のベッドには、癒しのパワーが凝縮されているんだね」

「牧村さんったら、すぐいい加減なこと言つんだから」

「いい加減なことじゃないさ、ノルアドレナリンによる神経伝達が……ニューロンとシナプスの結合を……ふあーあ」

もう一度、特大のあくびをしてから、彼はもぞもぞと布団に顔を埋めた。

「悪いけど、あと一時間だけ寝かせてくれないか」

「別にいいですけど……、熱のほうはもう大丈夫なんですか？」

「ああ、寒気もしなくなつたし、だいぶ良くなつたみたいだ」

「よかった」

そのときリビングから、くるみの声がした。

「季奈子おねえちゃん、いいかげんお腹がすいたでござるよ、にんにん」

「ごめーん、いま行くから」

ドアの外へ向かつてそう叫んでから振り返ると、牧村はベッドのなかで肩をすくめていた。

「あいつは、いつも元気だなあ……。今までだって俺が風邪ひいて寝込んで、あいつにだけは決してうつらない、いつも生簀のなかの鯉みたいにぴんぴんしてやがる。我が娘ながら天晴れというかお恥ずかしいというか……。バカは風邪ひかないっていうけど、あれは本当なんだなあ」

「そんな無理して憎まれ口たたかなくたって良いですよ。くるみちゃん、もう可愛くって抱きしめたいくらいです」

「あんな娘でよければ、いつでも可愛がってやってくれ。ついでに季奈子ちゃんのお淑やかさの何分の一かでも、あいつに分けてやってくれよ」

「今度二人でおてんばコンビ結成して、牧村さんの悩みの種をひとつ増やしてあげます」

ふふと笑って、季奈子はエプロンのポケットから体温計を取り出した。

「熱計ってみてください。あと、おかゆ煮たんで後で食べてくださいね」

「うう、いつもすまないね……」

「なんですかそれ？ 私とコントがしたいんですか」

「うん、夫婦漫才がいい」

「それだけ軽口をたたければ、もう大丈夫ですね」

季奈子は明るく笑いながら部屋を出た。キッチンへ行くと、くるみが土鍋の乗ったコンロの前でおどりを踊っていた。腰に手を当てお尻を振りながら頭をぐるぐる回している。水玉模様のシユシユで結わえられたポニーテールが、何度も大きな「の」の字を描いていた。

「く、くるみちゃん、なにやってるの？」

「鶏がら出汁の雑炊にささげるダンス、朝ご飯をより美味しく食べるための食前体操」

「へえ、ずいぶんと情熱的なダンスじゃないの」

「りよじゃじゃめーろ、の生まれでござる」

「それを言うならリオデジャネイロ。さあ、ダンスはもうそれからにして、冷めないうちに食べましょう」

「待ってましたっ」

季奈子とくるみは、雑炊の入った土鍋をリビングへと運び、テーブルの上に三人分のお茶碗とはしをならべた。一人暮らしをする季

奈子の部屋には、ダイニングテーブルはない。食事をするときも、お茶を飲みながら読書するときも、パソコンでネットショッピングするときも、みなこのガラス製のローテーブルで済ませている。

「あ、くるみちゃん。食事の前にお父さんの体温みてきてくれない」「うん」

「熱、ほんとに下がってればいいんだけど……」

季奈子が不安げにつぶやくと、くるみは右手の人差し指を車のワイパーみたいに振ってみせた。

「パパりんは不死身だよ」

「あらあら、牧村さんだつて人間だもの、たかが風邪と言えど、こじらせたりしたら大変なことになるのよ」

「でも、くるみのパパりんは不死身なの」

くるみが少し強い口調で言った。季奈子は、あれつと首をかしげた。雑炊を盛ったお茶碗をそつとテーブルの上に置く。昨日くるみのために買っておいた、可愛いキャラクターの絵入りのやつだ。そして優しく微笑みかけながら、くるみに訊ねてみた。

「へえ、くるみちゃんのお父さんつて、くるみちゃんにとっては不死身のヒーローみたいなものなんだ」

くるみは澄んだ目で季奈子をまっすぐに見つめ返しながら、うん、とうなずいた。

「くるみの本当の父ちゃんは、くるみが生まれる前に死んだ。母ちゃんも、おとしの夏に死んじゃった。くるみはもう独りぼっちになつてしまつたんだつて泣いたよ。そしたらパパりんが言つたんだ」
一瞬ちらつと寂しそうな表情を浮かべたが、くるみはすぐにまた笑顔になつて季奈子にVサインを向けた。

「くるみには俺がいるぞ。そして父ちゃんはぜつたいに死なない」

季奈子は、はつとなつた。今までくるみが、風邪をひいて寝込む牧村に対しこれっぽっちも心配する素ぶりを見せなかったので、そのことが彼女には少し不満だった。しかし父ひとり娘ひとりの家庭で、娘が父親の体を案じないわけがない。本当は彼のことが心配で

たまらなかったのかもしれない。ただ牧村とくるみのあいだには、季奈子が思っている以上に強い絆と、そして信頼関係が存在していた。今はじめて彼女はそのことを思い知らされた。と同時に、この元気一杯の少女が、その澁刺とした笑顔の裏側に深い悲しみを隠していることも分かった。なんて健気でいじらしいんだろ。愛しいな、と季奈子は今度こそ本気でそう思った。くるみのことが愛しい。もう愛しくってたまらない……。

「ああ、なんだかくるみちゃんのこと……ぎゅってハグしたい気分」
やや瞳を潤ませて季奈子がそうつぶやくと、照れ隠しなのか、くるみは真面目くさった顔で大仰にうなずいて見せた。

「苦しくないぞよ、ささ、遠慮せず好きなようにしてたもれ」

季奈子はカーペットの上をずりずりと這ってゆくと、くるみをつかまえ両腕でしっかり抱きしめた。その小さな体からは甘いお菓子みたいな香りがした。肌の温もりと微かな鼓動の音も聞きとれた。不思議なことに、季奈子は心のなかで勇気で満たされてゆくのが感じた。いつも牧村がくるみから元気を分けてもらっているように、今くるみの体を抱きしめる腕を通してその無垢で生命力に満ちたエネルギーが季奈子のなかへも伝わってくる。そしていつの日にか、自分も牧村やくるみに元気を分けてあげられるような、そんな存在になりたい……と、季奈子はそう願って瞳をとじた。

「もしも、私が子どものころにくるみちゃんと出会っていたなら……うん、たとえば小学校のクラスメイトとして知り合っていたなら、きっとすごく仲の良いお友だち同士になれたらうな……。きっと、いや絶対に、大親友になっていたと思う」

そう言って抱きしめる腕にぎゅっと力をこめる。するとその腕のなかでくるみは、けけけと肩を揺らし愉快そうに笑った。

「あんがい恋のライバル同士になってたかもよ」

その日の夕刻、不死身のパパりんこと牧村理人は、ひとり北海道へと旅立った。

第十八話 My Daddy , My Hero (後書き)

読者のみなさん、どうぞ良いお年をーっ。(……って、もう一回順
番まわってきたりして) by りきてつくす

第十九話 A b e l o v e d w i f e (前書き)

みなさまには大変お世話になりました。

今年最後の更新です。お楽しみいただければ嬉しいです。

第十九話 A b e l o v e d w i f e

通路から人の気配がなくなると、牧村の乗った飛行機がゆらりとゆれた。ゆつくりとした走行の後、機体は大きく旋回する。離陸体勢に入った機内は、座席の目の前にシートベルト着用のサインが光っている。

——いよいよ、俺は旅立つ……。

飛行機に乗るのは、二度目だ。最初は今のくるみくらい年齢の時。両親に連れられて沖縄旅行に出かけた事がある。初めて乗る飛行機に牧村の心は躍ったものだ。多くの乗客を乗せて飛び立つ飛行機には夢がある。将来はパイロットになれたらと、あこがれたものだ。あの日のような純粋な気持ちはもうない。目の前に横たわっているのは、まぎれもない現実で、今の牧村が得ようとしているのは、生活の糧である。

しかし、牧村は今の状況に期待していた。新しく出来る営業所で求人募集。新規事業の立ち上げは、魅力的だ。大変であろうと言う事は容易に想像できる。しかし、そこにはすでに出来上がった人間関係の中に入っていく煩わしさはない。スターティングメンバーとして、事業を軌道に乗せる事は、確かな手ごたえが感じられるに違いない。牧村は、袋小路印刷では、ルート営業ばかりでなく、新規開拓もしていた。自分の培ってきた経験は、業界が違ってもきつと役立つと信じている。

直線走行に入った機体が徐々に加速していく。座席に感じる振動、耳に響くノイズ。体にかかるGが、臆病風に吹かれそうになる自分を後押ししてくれるようだ。ほどなくして機体はふわりと地上を離れた。その後機体は、ひたすら上昇し続ける。新しい世界に踏み出す牧村を励ますように。

牧村が営業に転職したのは、土木の仕事に限界を感じていたから

だ。同じ会社に勤める従業員たちは、履歴書に書ききれないくらいの資格を持っている。

また大学を卒業して入ってくる社員は、入社数年で幹部になって行く。

いっぽうで中学を卒業してすぐに就職した牧村は、車の免許すら持たなかった。入社一年が経過したところで、まだ十六歳である。二年が経ち、三年が経った頃、ようやく運転免許を手にする事が出来た。そこで牧村は、どんなにまじめに勤務しても自分の努力で力バーしきれない部分がある事を知ったのだ。己の学歴と年齢を恨めしく思いながら、牧村は約五年間を一二三建設で過ごした。

そこでふつと牧村は我にかえた。機体は水平飛行を保っている。窓際の席に座った牧村は、そつと外の様子を窺い見た。もはや景色など見えるはずもない。眼下に広がるのは、白い雲だけだ。牧村は、起こしていた半身を再び座席にうずめた。

「みちる……」

亡くなった妻の名前をつぶやいてみる。人は、死んだら天に昇るのだと、小さな頃、母が言っていた。とすれば、今の自分は少しだけ妻の魂に近づけているのだろうか。牧村が、一二三建設でやってこられたのもひとえに妻の励ましがあってこそなのである。

連れもないひとりきりの機内は、牧村に色んな事柄を想起させてくれる。

牧村はそつと目を閉じた。

——「これ。持って行きなさい」

青いギンガムチェックの紙袋を差し出された牧村は、はつとした髪を一本に束ね、一二三建設のネームの入った作業着を羽織った須藤みちるが、牧村に向けて微笑んでいる。牧村は、自分よりも少しだけ背の高いみちるの口元をどきまぎしながら見つめ返した。思いがけぬできごとにしほし、言葉が出てこない。

「お弁当。おなか空くでしょ？ よかったら食べて」

一瞬、何のことなのか頭が回らなかった。頭の中でみちるの言葉を復唱し、それが弁当である事を理解した。単なる同僚の彼女がどうして――。

牧村の頭の中は、疑問符でいっぱいになった。そんな牧村の思いをよそにみちるは、言った。

「気にしないでね。おかずを作りすぎて、気まぐれに持って来ただけだから」

ためらう牧村の手にみちるはそつと弁当箱を持たせた。

「あ、ありがとうございます……」

「じゃあね。しっかり勉強してきなさいね」

くるりと背を向けると、小走りに彼女は事務室に戻って行った。

牧村は、しばらく廊下に立ち尽くしていた。

――どうして……。

牧村の頭の中に色んな思いが交差する。彼女は気まぐれだと言った。確かに一二三建設に半年余り勤めて、弁当をもらったのは、今が初めてだ。言葉どおりに受け止めればよいのだろう。働きながら勉強している自分にふと彼女が思いたった気遣いなのだと。

中学を卒業してすぐに勤めた牧村の周りは、年上の従業員ばかりである。自分の親ほどの年齢の従業員とて珍しくはない。同世代の仲間がいない事は、寂しくもある。が、仕事場は、仲間と遊びに来るところではない。だからそれでいいのだと思っていた。その代わり牧村は、どこの職場でもありがちな人間関係の難しさをさほど感じる事もなく、みんなから可愛がってもらえた。

みちるが弁当をくれたのも、きっとそんな思いからだろう。更に加えるならば、彼女は、普段から細やかになんでも気のつく女性なのだ。

理由はどうあれ、嬉しかった。みんなのアイドル的な存在であるみちるに、牧村はひそかにあこがれていたのだから。

高校に到着した牧村は、お茶を淹れるとひとけのない食堂の一番奥の席を選んだ。いつもなら食堂の素っ気無くも栄養計算だけはし

つかりとされている食事で腹を膨らませている。けれど、今日は違う。

みちるからもらった弁当の蓋をそつと開けてみた。ジャーマンオムレツに鮭の切り身、ほうれん草のおひたし、タコさんウィンナーなどが、ところせましとばかりにおさまっている。添えられたサラダ菜とプチトマトは、彩りに一役かっていた。牧村は、それらの隙間に箸を差し入れると、その弁当を大切に味わって食べた。

「おつ、牧村君。今日は手弁当かい？」

通りすがりに父親ほどの年齢の同級生が声をかけてきた。

「ね、姉ちゃんに作ってもらったんです」

とつさに牧村は嘘をついた。

「そうか。牧村君にはお姉さんがいたもんねえ」

すぐに相手は信じた。実際のところ、姉はすでに嫁いでおり家にはいない。

——遠くの親戚より近くの他人……か。

現代国語の時間に習ったことわざが、やけに心に沁みた。空になった弁当箱に牧村は、ごちそうさまでしたと手を合わせた。

学校から帰宅すると、牧村は不器用な手つきで弁当箱を洗った。

ふきんで丁寧に水滴をふき取ると、元通りに袋に納める。

——このまま返すのも悪いかな……。

牧村は電話機のそばにあったメモ用紙にありがとうございましたと書きこむと飴玉を数個とともに袋の中に入れた。みちるは、なんと思うだろうか。楽しい仕掛けをしたような気持ちで牧村は眠りについた。

「あはは。ありがとう。牧村君。すごく気がつくんだあ」

袋の中で何やら転がる感触にみちるは、すぐに気づいてくれた。

そして飴玉を口に放り込んだ。

「おいしい。仕事中に飴、舐めてたら怒られるかなあ。別にいいよね」

そう言ってみちるはいたずらっぽく笑った。弁当の事、飴玉の事。牧村とみちるだけしか知らない秘密。みちるは、五歳年上で、恋人がいることも知っている。けれど牧村のあこがれの対象である事は変わらない。

みちるは、それからたまに弁当を持たせてくれる事があつた。帰り際に廊下でそつと手渡してくれるのだ。もしかしたら、彼氏にも同じものを作っていて、そのついでなのかもしれない。そんな思いが頭をよぎった事もあつたが、仮にそうだとしても、それによつてみちるへの思いに変わりがあるはずもない。

そうして牧村は、十九歳の時、所定の単位を履修して無事に定時制高校を卒業する事が出来たのだ。

――妻は、ひなぎくみたいに愛らしくて、そして太陽みたいに明るい女性だった。

頭の中の妻の満面の笑顔が次第にフェードアウトしてゆく。近づくいてくる客室乗務員のワゴンの気配に牧村は、また現実にかえつた。牧村は、前列のシートのポケットから冊子を取り出すと、北海道のグルメ商品が掲載されているそれをぱらぱらとめくつた。

機体が少しずつ高度を下げる。牧村の視界に飛び込んできたのは、中学校で見た日本地図と同じ北海道の輪郭だった。当たり前前の事が可笑しかった。やがて機内アナウンスが流れはじめ。東京から、札幌へ約九十分の旅。牧村は、千歳空港に降り立った。

札幌の街を歩く。寒さのせいなのか、外を歩いたびに頭痛がする。マフラーで半分ほど顔は覆っているものの、露出した肌は突き刺すように痛かった。

牧村は身震いしながら、メモの通りに足を進めた。大通公園を挟んで北側の駅前通に位置する真新しいビルの中に目指す会社がある。

――ああ、あつた。ここだ。

やたらと横幅のある銀色に輝く生命保険会社のビルを見上げる。

この立地条件だと、月にいくらかかるんだろ。そんな事を思いながら自動ドアをくぐりぬける。透明なエレベーターが三基並んでいる横で大理石の柱にくつつきそうになりながら到着を待った。

ほどなくして小気味よいチンと言っ音とともに扉が開く。何気なしに乗り込もうとした瞬間、牧村の息が止まった。

止まったエレベーターの中から出てきた女は、なんとみちるにうりふたつだったのだ。

——みちる！

第十九話 A b e l o v e d w i f e (後書き)

新春第一発目は、りきてつくす先生の回です。お楽しみに！

第二十話 C o o l - B e a u t y (前書き)

読者の皆さま、新年あけましておめでとうございます。今年も沢木香穂里先生との二人三脚で『先ラブ』の連載を頑張ってゆきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。m (_ _) m

第二十話 Cool-Beauty

その女は、かるく会釈しながらエレベーターを降りると、そのまま牧村の横をすり抜けていった。なめらかな黒髪が彼の鼻先すれすれのところをかすめ、ウツディ系の、少しユニセックスな香りがした。女性がつけるにしては、わりに男っぽい感じのする香料だ。対照的に妻はどちらかというと、ライムやベルガモットなどシトラス系のコロンを好んだ。牧村が初めて購入した十年落ちの中古車は、いくら清掃しても汗と埃のにおいが取れなかったが、妻の乗る助手席からだけはいつも清涼感あふれる優しい匂いがしていた。

人造大理石の床をこつこつと鳴らしてヒールの音が遠ざかってゆく。

面影があまりにも似ているせいで少し驚いたが、しかし当然のことながら今見た女は妻とは別人だ。牧村は、刹那的に浮かんた白昼夢から解き放たれ、ほっと胸を撫で下ろした。と同時に、少しだけさびしい気持ちにもなった。みちるが死んでから、もうそろそろ三度目の冬を迎えようとしている。彼女が生きていたころにくらべ、今の自分からはなにか大事なものが欠落しているように思えてならない。あのころ思い描いていた未来は、甘ちゃんで、青二才だった自分の無責任で楽観的なストーリーのうえに成り立っていた。もちろん根拠なんてなにもなかったが、しかしそれゆえに燦然と輝いて見えたあのころの未来予想図。それを今でも同じように信じ続けろと言われれば、それは無理な相談だろう。それどころか今ではつねに氣力を奮い立たせていないと、ときおり自分自身さえ見失いそうになる。しゃにむに希望へ向かって邁進していたかつての自分が、少しだけ懐かしかった。

うつふ、まだ過去を懐かしむ年でもないでしょうに。

ふと、なぜだかそんな妻の笑い声を聞いたような気がした。よく笑うひとだった。牧村が浮かれていると「ばかねえ」と言って笑い、

落ち込んでいると「元気だしなさいよ」と言って笑った。先に死んでゆく者を、残された者はずいと感じるときがある。なぜなら思い出のなかで微笑む妻の面影はいつだって、そしていつまでも若くてきれいなままなのだから……。

なにやら物思いにふけっているうちに、エレベーターのドアは閉じてしまったようだ。ずっと上の階から呼ばれたらしく、ぐんぐん上昇してゆく。ちっと舌打ちして、ため息まじりにもう一度あの女の背中を振り返ってみた。小柄だが、背筋のきりつと伸びた優雅な歩きかたをする。ばりばりのキャリアウーマン、といったところか。それにしても、パンツスーツの上にN・3Bをはおるというファッションセンスがいただけない気もするが。まあ、防寒性に優れていると言ってしまうえばそれまでだが。などと思っていたら外へと通じる自動ドアが開き、外気圧との差で氷点下の空気がどつとホールへ流れ込んできた。牧村は思わず首をすくめ、ぶるつと身震いした。どうやら体のほうは、まだ本調子というわけではないらしい。ホテルへ帰ったら風邪薬を飲んですぐに寝てしまおう、そう思い彼はコートの際をかき合わせた。

見ると夜の街は、いつのまにかぼつてりと水気を含んだみぞれ混じりの雨に叩かれていた。ぽた、ぽた、ぽた、と重たいしずくは、すっかり葉の落ちた街路樹や道行くひとたちの傘を容赦なく打っている。

やはり寒いところだなあ、北海道は……。

くるみを一緒に連れて来なかったのは正解だったと思う。いくらあの元気娘だつて、この寒さを体感すれば震え上がるに違いない。勝ち気なくなるみがうひゃつと肩をすばめる様を想像して、牧村はついにやにやしてしまった。気がつくやうな女の姿は冷たい無味無臭の夜のなかへすうつと飲み込まれ、見えなくなっていた……。

お目当てのオフィスは、このビルの四階にあった。フロアの表通りに面した側を、ほぼ半分ぶち抜きで使用している。通路をはさん

で反対側を見ると、会計事務所と小さな出版社、それに名前からして明らかに国土交通省の天下り役人が巢食っていそうな特殊法人が入っていた。

オフィスの入り口に立つ。

株式会社ワシオ・プランニング。

これが、牧村がこれから面接を受けようとしている会社の名前だ。たしか代表者の名前が鷲尾といったはずだ。牧村はネクタイの曲がりをおしてから、その真新しいネームプレートの貼りつけられたドアをゆつくりと開けた。

オフィスの内部はまだパーティションで仕切られていないため、すぐにその全貌を見渡すことができた。引越しのときの荷物が梱包を解かれないまま、そこらじゅうに雑然と積まれている。デスクもイスも部屋の一角へまとめて押しやられ、電話機やファックスなどは、とりあえず配線をつないだうえで段ボール箱の上に直接置かれていた。どう見たって、いまだ引越しの真っ最中といった雰囲気だ。それなのに電話の呼び出しはひっきりなしで、忙しく立ち働く二十名ほどのスタッフが代わる代わるその対応に追われていた。

「あの……失礼します」

カウンターから遠慮がちに声をかけてみたが、牧村の存在に気付く者など、ひとりもないようだった。もう一度声をかけてみようか、それとも誰かが気付いてくれるまで待とうか逡巡していると、後ろでドアの開く音がした。

「すみませーん、ちよつと後ろ失礼しまーす」

そば屋の出前持ちみたいに書類のたばをどっさり抱え込んだ女性スタッフが、あわわわ、とよるめきながら牧村の後ろを通りすぎようとした。分厚いA4ファイルのたばを自分の頭の高さくらいまで抱えこんでいる。前方がちゃんと見えているのだろうか。少し気が引けたが、しかし彼はそのスタッフを呼び止め、ついでに抱えていた書類を半分ほど持つてやった。

「あ、すみませーん」

「いえいえ、転んだりしては危ないですから。それより自分は今日この面接を受けにきた者なんですけど、お手が空いたら営業所長の有田さんへ取り次いでいただけないでしょうか」

すると彼女はどっこいしょと荷物をカウンターの上に置き、ほっと息をついてからオフィスの奥へ向かって叫んだ。

「所長おー、有田所長おー、面接のかたがお見えになってますよーっ」

すぐに壁際でスチール製のマガジンラックを組み立てていた男が、こちらを振り向いた。ものすごく派手な服装をした男だった。

「へえへえ、今すぐ行きます」

スパナと電動ドライバーを部下にあずけ、ひょこひょここと脚立から降りると、その男はすぐにやって来て牧村へ人なつこい笑顔を向けた。ストライプの入ったダブルのスーツをびしっと着込み、ワイシャツの柄まで同じストライプ模様で統一している。しかも白と赤茶のストライプだった。おそろしく派手で、なにやら異様な風体とも言えた。なんて悪趣味な服装センスの持ち主だろう。そう思ったが、牧村はつとめて表情にはあらわさないようにした。しかし黒ぶちの丸メガネまでかけていて、これに紅白しま模様の三角帽をかぶらせれば、もうどこからどう見たって大阪道頓堀のくだおれ太郎になってしまう。そのあまりのビジュアルの激しさにどうリアクションしたら良いものかと悩んでいると、くだおれ太郎、もとい有田所長は、愛想の良い笑顔のまま揉み手をして言った。

「これはこれは、たしか牧村はんでしたな。いやいやいやいや、ほんまよう遠いところまで来てくれました」

営業所長というと、もっと貫禄のある人物を想像していただけに、牧村は少し拍子抜けしてしまった。これでは所長というより座長である。ただ、よく見ると金の儲かりそうな福々しい耳の形をしている。商売が繁盛しているふうに見えるのは、案外そのおかげかもしれない。

「まあ見ての通りで、年の暮れにオフィスかまえたりしたもんやさ

かい、てんてこ舞いでごらんの有様ですわ。なんちゅうても今はお歳暮商戦まっただ中ですよ、そこへきて本社の営業どもときたら、仕入れ先へきちゃんと話もつけんとばんばん注文とるもんやさかいに、わしらここへ回されて早々、商品かき集めるのにもう必死なんですわ。あっちへぺこぺこー、こっちへぺこぺこー、ちゅうてな。ひとに頭下げるのんにはもう慣れてますけど、年の暮も押し迫ってるいうのに、こない損な役ばかり回ってきてもう半分ヤケクソですわ」
わはははっ、と反り返って豪快に笑ったあと、彼は急に真面目な顔になって言った。

「で？ 牧村はん、うちにはいつから来てくれはりますのん？」
「へ？」

思わず間抜けな返事をしてしまった。

「いややなあ。へ？ やあらへんがな。来てくれはるんやろ？ うちの会社に。こっちはもう猫の手も借りたいくらい忙しゅうて、ひっちゃかめっちゃかですねん。出来るだけ早う来てもらえるとうちも助かるんやけどなあ……」

「は、はあ……」

「はあ……て。なんやねん、覇氣のないお人やなあ、ほんま大丈夫ですか。うちの仕事は日々戦争でっせ。ぼけーつとしたりたら、ビジネスチャンスつかみそこねて、人生負け組いうことになりますさかいにな」

「はあ、ごもつとも……」

頭のなかで思い描いていたシミュレーションがもろくも崩れ、牧村は戸惑いを隠せなかった。どうやら面接どころか、相手はすぐにも雇い入りたい意向らしい。しかし、こんなに簡単にことが運んでしまつて良いものだろうか。彼は一抹の不安を拭えないまま、苦笑して言った。

「いえ、こんなに簡単に採用していただけたとは思つてもいなかったものですから……。というか、こちらの会社では試験や面接といったものは一切行わないのですか？」

オフィスの奥から「所長おー、営業二課の松村さんから電話でえーす」と女性スタッフが呼びかけるのに対し「すまーん、今忙しいさかい後でかけなおす言うといてー」と叫び返しておいて、所長は丸メガネの奥にある大きな目をしばたいた。

「あんた、本社総務の杉山係長の紹介やる。わし、杉ちゃんとは昔からほんまよう気が合うねん」

杉山というのは牧村の中学時代の同級生で、そもそも失業中の彼にこの会社を勧めてくれたのはその杉山係長なのだ。腕を組んで、ふんと鼻息を吐きながら所長が続ける。

「それに杉ちゃんの人を見る目は確かやで。もう長いこと総務畑で人事の仕事に腐心したはるお人やし、その杉ちゃんが、使える人やって太鼓判押すんやさかい、だれがなんて言うたかて有能な人材に決まってる。まあ固く考えんと、まずはうちで頑張ってみたらどうないや？ やってみて、こらあかん、自分には向いてへん思たら、そんなときは改めて別の職探したらええ」

まずは飛び込んでしまえ、ということか。それも正論といえば正論かもしれない。なにせ自分は新卒ではない、中途採用なのだ。このご時世、すぐにでも働いてほしいなんて先方から言ってもらえること自体珍しいし、また幸せなことなのだ。

やってみようか……。そう決心しかけたとき、不意に牧村の脳裏に季奈子の顔が浮かんた。そうだ、季奈子ちゃんは何んて言うだろう。今回こうして問題なく北海道まで来ることができたのも、彼女のおかげと言っていい。おそらく今日の会社訪問のことだっけ、ちゃんと気にかけてくれているに違いない。彼女にだけは意見を訊いてみようか。事務所の整理も追いつかないほどに忙しくて、おまけに営業所長はくいだおれ太郎みたいな変な格好をした人だけど、ここに就職を決めてしまってもだいじょうぶかな？ こう言ったら彼女は笑うだろうか。

「一晩だけお返事するのを待ってはいただけなんでしょうか。家族などにも相談してみたいし」

おそろおそろ切り出すと、所長はあつさりとうなずいてくれた。

「別にええよ。こつちで働くのやったら家族も一緒に引つ越して来なならんからね。……でも牧村はん、たしか独身でしたよなあ。履歴書にそう書いてあった記憶が……」

「娘がひとりおります。それと……」

「それと？」

それと……。ここで牧村はふと考えた。あれ？ 季奈子ちゃんは俺にとってどういう存在なんだろう。以前に勤めていた会社の同僚で、くるみとも気の合う美人のお姉さん。いや違うな。おてんばだけど、ときどき俺の相談相手にもなってくれる優しい妹のような存在。これも違う気がする……。

彼が懸命に頭をひねっていると、後ろでドアの開く音がした。次いで若い女性の、少しトーンを下げた冷たい感じのする声がした。

「所長、水虫のクスリ買ってきました」

目の前のくいだおれ所長が、慌てて口の真ん中に人差し指を押し当てる。

「しいーっ、しいーっ、礼子ちゃん、声が大きいって。そないみんなにも聞えるような声で言わんかてええやないの。わし、明日から水虫所長ってあだ名される」

牧村が後ろを振り返ると、さつきエレベーターの前ですれ違ったあの女が立っていた。亡き妻、みちるに良く似た、あの女だ。そうか、彼女もこのオフィスで働いているのか……。

しかし驚きの表情を見せる牧村にはなんの関心もしめさず、彼女は所長のほうへ冷たい視線を向けながら言った。

「ひとに知られるのが恥ずかしいなら、ご自分で買いに行けばよろしいのに」

「いやはや、まったく礼子ちゃんの仰るとおりなんやけど……、そやけどほれ、わしとっても忙しい身やし、それにあれやろ、わしのような、つまり紳士然とした立派な男がやな、まさか水虫のクスリなんて……」

なおも続く所長の言い訳を聞き流して、その女はカウンターのう
えに薬局の袋と釣り銭を投げ出すと、さっさとオフィスのなかへ戻
っていった。その後ろ姿へ恐縮した面持ちでぺこぺこ頭を下げた
あと、有田所長は牧村へ向かってそつと耳打ちした。

「あの子も、杉ちゃんの紹介でこの前採用したばかりなんやけど、
なんややえらい気の強い子おでな。まあ仕事のほうは良くできるさ
かいに、その点では大いに助かってるんやけど……」

「ふふ、クールビューティーって感じの女性ですね」

「それや、それぞれ、クールビューチー。ほんま寒い北国のイメー
ジにはぴったりのクールな子おですわ」

もう一度、牧村は彼女のほうへ視線を投げかけた。すると向こう
もほぼ同じタイミングで、こちらを盗み見た。

一瞬、目と目が合った。

第二十話 C o o l - B e a u t y （後書き）

ちょっと文章が固いかもですねー。礼子をとんでもキャラにするか悩んだけど、悪ノリすると怒られるからやめました（汗）その代わり、くだおれ太郎を出してみました（^| ^） b y りきてっくす

第二十一話 Talking (前書き)

沢木香穂里です。『先ラブ』は、今年、最初の投稿です。

前回分で、有田所長が人気爆発。なので、引き続き登場させてみました。如何でしょうか？

りつき先生の強烈さには及びませんが、是非どうぞ。

第二十一話 Talking

「あのう……」

礼子が牧村に近寄ってきて、口を開きかけた。一連の動作がスロ―モーションのように牧村の視線を捉える。

――その時……。

「ふっ、ふ……ふぁーっくしょい！」

なんと牧村は、大絶叫とともに盛大なくしゃみをぶちまけてしまったのだ。まずい……と思った。無事所長との対面を果たし、気が緩んだせいなのか。

それでもとっさにうつむいて両手で口元を覆い、なんとか風邪菌の飛散を食い止めていた。ハンカチを出して口元を押さえる。カッと体が熱くなりこめかみに汗が滲む。礼子はと見ると、眉をひそめ腕で顔を防いでいた。

「すっ、すみませんっ！」

牧村は、ぺこりと頭を下げた。まだ完全に風邪が抜けきっていないようである。しかし、所長は意に介さずと言った様子だった。

「なんや、風邪かいな？ 北海道は寒いとこだすさかいにな。わしかてこっちへ越してきたばかりの時には、ぎょうさん風邪ひきましたで。わしもともと群馬の出身やし、買付の仕事では長いこと関西の方におったもんやさかいに、この寒さだけはほんま身に沁みましてん」

はははと笑う所長に、はあそうですかと牧村がずるずる鼻をすすりながら相槌を打つ。

礼子が横合いから無言でティッシュの箱を差し出してきた。

「あ……ありがとう」

牧村は、ティッシュを二、三枚引き抜くと、ちーんと鼻をかんだ。ちようとかみ終わったタイミングでくずかごを差し出してくる。まるで普段の仕事ぶりが見て取れるような礼子の気づかい。なるほど

杉山が選んだ人材である。そう言えば、さつき、自分に何か言おうとしたようだ。が何だったのだろう。牧村は、思い切って礼子に話しかけてみた。

「あのう。さつき何か僕に言おうとしていませんでしたか？」

「ああ。ま、別にいいです……」

礼子は、面倒くさそうに黒髪をかきあげた。社員になるかどうか、まだわかりもしない相手と話し込んでも時間の無駄だと言いたげに見える。どこかみちるの面影を宿しているが、彼女の中身はまるで違っていた。応募の経路に杉山が関わっていたと聴いて親近感を覚えたのは、牧村の独りよがりだったのか。

「そや。牧村はん。これからちよつと一緒に飲みに出まへんか。なんやったら礼子ちゃんも一緒に……」

「え？」

うつたえて所長を見つめる。今日、会ったばかりのこの食い倒れ太郎みたいな所長と一緒に街に繰り出すのか……。しかも礼子も一緒に。

「互いを知るには、ともに酒酌み交わして語り合うのが、いつちやんよらしいねん。それに礼子ちゃんかて、なんや牧村はんの話あるみたいな感じやしな……。そもそも牧村はん、食事まだでっしゃろな、そうしまひよ……。それがええ、ほな決まりやね」

所長は自分の言葉に納得するように二度大きくうなずいた。もはや厭とは言わせない勢いである。それから所長は、支度をしてくるから待つように言い、応接テーブルに牧村をひとり残して席をはずした。

運命が変わってきている事を牧村は感じていた。これまでどこに履歴書を送っても書類選考落ちだった。やっと面接にこぎつけた第一堂でさえもトラブルに巻き込まれて駄目になっている。もつともあれはかなり胡散臭い会社だったから、結果的には良かったのだが。今、とんとん拍子に話が進もうとしている。牧村さえ首を縦に振れば、即、社員になれるのだ。なにか計り知れない大きな力につき動

かされているような気さえする。

「ここに決めたらどうかしら。向こうからは是非にと言ってくださるなんて、すごくありがたい事だと思うわ」

ふと頭の中にみちるの声が響いた。そうだ。みちるならきつとそう言つて、ふふ……と小首をかしげ微笑むに違いない。

——しかし

季奈子の事が気にかかる。久しぶりに会ったただの同僚だったはずなのに。いつの間にか彼女には、公私ともども世話になってもいる。

——みちる……。ごめん。

牧村はつぶやいた。妻を忘れた事は、いちどたりともない。選択を迫られたとき、嬉しい事があったとき、牧村は部屋に飾られたみちるの写真にいつも語りかけている。なのに、いま、ほかの女性を同時に脳裏に浮かべるなんて。

「いいのよ……」

またしても声が響く。そうだ。みちるは病室のベッドに半身を起こし、あの時も言っていた。

「私が死んだら早くいい人を見つけてね。理人は若いのにこの先ずっと独りだなんて寂しすぎるから」

「何言つてんだよ！ そんな事言わずに早く病気を治して、またくるみと三人で一緒に暮らそう」

寝巻きからのぞく白く細い手を握り締めながら、牧村は懸命にみちるを励ました。しかし、その夜にみちるは意識を失い、そのまま逝ってしまったのだ。

「ほな、牧村はん。行きまひょか」

所長の声に牧村は現実に戻された。ああ、そうだ。自分はいから飲みに行くのだ。牧村はのろのろと立ち上がった。不意打ちで飛び込んでくる真つ赤なダウンジャケットに牧村の目は射抜かれた。完全防備の所長の立ち姿。耳まですっぽりとかぶったニット

帽は、まさしく白と赤茶のストライプである。そして揃いのニットのマフラー。グローブだけがかるうじて茶色であった。いったいどう言うセンスの持ち主なのだろう。牧村は、ぶっと吹きそうになるのを必死に堪えた。小刻みに肩が震える。

「牧村はん、寒いんかいな？」

「ごくりと唾を飲み込むと息を整えて牧村は言った。

「いえ、だ、大丈夫です……」

牧村はぐつと奥歯を噛み締めると、間もなく現れた礼子の後に控えるように歩いた。

「なんや、ふたりともそないな暗い色のコート着はって。いつそ思いきって赤い色にでもしてみなはれ。赤ちゅうんは、ほんまエキサイティングな色でっせー。もうやる気出ること請け合いや」

「厭ですよ。そんな色のコート着てたら、どこにいてもすっかり覚えられてしまうじゃないですか」

礼子が口を尖らせる。

「そこがええのんちやいまつか。営業いうんは、顔覚られてなんぼの世界だすさかいにな」

有田所長の衣装は営業としての戦略なのだろうか。確かにいちど会ったら二度と忘れないだろう。いや、それでも多少なりとも趣味が入っているように思える。所長と礼子は、並んですたすたと歩いてゆく。牧村は慌てて歩くスピードを早めた。どうやら行き先は礼子の判断らしい。てきぱきとした迷いのない歩調が、クールビューティーと言われる所以だろう。

「彼女の方が、ええ店知ってまんねん。なんせ札幌出身やさかいにな」

振り返り、所長が言った。やがて、礼子が立ち止まりここですと告げる。看板がなかったら見落としそうな細い階段。その二階に居酒屋があった。木製の引き戸を引くとちりりと音がした。薄暗い店内には石畳が続いている。思いのほか奥行きがあり、丁度、階段を上るときに見えた隣の靴屋の二、三階部分が店内に相当するのだ

と牧村は悟った。足元を照らす灯籠を頼りに案内された小上がりに到着する。座敷に腰を落ち着けると間髪入れずに所長が「生みつつ、とりあえず」と店員に声をかけた。

「牧村はん、いける口でっしゃろ？」

「はい」

所長が座布団の上に座りなす。先に注文しておいて訊くとはなんとせつかちなのだろう。もっともこれも所長らしいと言えらしい。店員は、オーダーをメモると、御簾を下げて去っていった。店構えからは内部がこんな洒落ているとは、思いもよらなかった。どうぞと礼子がラミネートされたメニューを差し出してくる。所長がほとんど独断的に決めてしまったから、牧村はうなずくだけであった。

やがて、小鉢と生ビールが運ばれてくると、所長が入れ違いに注文を告げる。店員が奥に去ったところで、ようやく落ち着くことができた。

「ほな。まずは自己紹介といきまひよか。わしが、所長の有田俊明いいまんねん。ほんで隣にいるのが、神戸の礼子ちゃん。わしの片腕や。そして牧村理人はん。今日はあれや、牧村はんが、遠路はるばる札幌までお越しからはった事への慰労や。牧村はん、ほんまお疲れさんでしたなあ……」

所長がぺこりと頭を下げ、牧村もそれに倣った。

「ほな、乾杯！」

「かんぱーい」

「乾杯」

三人でジョッキをカツンと合わせる。所長は、いつきにジョッキを半分まで空けると、突き出しに手を付けた。牧村もまたジョッキに口をつけた。緊張の解けた体にキレの良い炭酸が行き渡る。

「ちよう、はばかりに行つてきま」

このタイミングを待っていたとばかりに所長が出て行った。まったく忙しい所長である。結果、部屋には、礼子と牧村だけがとり

残される形となった。

「いったい、何を話したらいいのだろう。牧村がもじもじしていると礼子が口火をきった。」

「ねえ。牧村さん。変な事訊くけど……。第一堂って印刷会社、応募しなかった？」

「第一堂……！ ど、どうして知ってるんですか」

「やっぱり。私、ワシオ・プランニングに来る前は、第一堂の総務にいたんですよ。どこかで会ったような気がすると思ったら、履歴書だったんだわ。牧村さんの苗字はめずらしくないけど、名前の方は少し変わってるから」

「そこまで言って礼子は、ビールで喉を湿らせる。」

「当日は、牧村さんを名乗る変な男が現れて。なんかよくわからない事件だった」

「僕も……意味不明な出来事でした。面接に行けなかった事に対して、第一堂にお詫びの電話を入れたら、このことは黙っていて欲しい。十万円は口止め料と言われるし」

「あの会社も後ろめたい事があるって事よ。あのね、さっき言おうとしたのはこのこと。もしかしたら、私の知ってる人かもって。まあ、一度も会ってはいないんだけど、それで親しみが湧いちゃってでも、さすがに所長がそこにいるのにまずいと思って、口をつぐんだんですよ」

「まったくですよ。僕だって過去に応募した会社の話なんて知られたくない」

「さっきのそっけない態度の理由がわかって牧村はほっとした。近寄りがたいと思ったら意外に気さくな女性である。礼子がくすつと笑い、牧村も笑った。」

「なんや盛りあがってまんなあ。お二人さん、さっそく意気投合かいな」

「ええ。共通の話題があったので。でも所長には内緒です。東京口ーカルの話なんですよー」

礼子の切り返しはうまさに牧村は舌を巻いた。何故なら彼女は、まったく嘘を言っていないのだ。なかなかの女性である。

「礼子ちゃんもお人が悪い。そやけどなあ、男と女の話に口挟むいのんは、やぼってもんだす」

お造りに始まり、次々と運ばれてくるメニューに三人は舌鼓を打った。

「旨い！ さすがは礼子ちゃん。わしもこの店、覚えとこ……」

所長は、弁舌滑らかに会社の理念を語り、己の半生を語り、礼子を褒め、そして杉ちゃんの事を語った。それは、聴く者を圧倒し飽きさせない。有田所長や礼子のような仲間に恵まれた環境のもと、働く事はきつと自分に多大なる利益をもたらしてくれるに違いない。きつといい仕事が出来て、充実感が得られるだろう。小一時間が経過した頃、牧村自身、条件ばかりでなくワシオ・プランニングと言う会社に非常に魅力を感じていた。

「ところで牧村はん、入社をためらう理由いのんは、なんでつしやる？」

所長ががらりと話題を変える。くつ……上手いなと牧村は思った。話題豊富にじゅうぶん牧村を惹き付けたところで核心に迫るとは。

これでは答えざるを得ない。牧村は仕方なく言った。

「家族と言っわけでもないのですが、ひとり……気になる女性がおりまして」

「ははあ。彼女だっか」

「あ、いえ。そこがなんとも微妙な間柄なんです」

「男やったら、はつきりしなはれや。そや、今、ここで告白はしたらええ、うん、それがええ。牧村はん、すぐに彼女に電話かけてんかー」

「ええっ！？ 今、ここで、ですか？」

「そうよ。きつと彼女、牧村さんの面接結果を気にしてるわ。言っちゃいなさいよ。採用されたから、君も北海道に来てくれって」

「こうなったらもうプロポーズしてしまうしかないやろ。上手く

言えへんのやったら、わしが途中で電話、変わったるさかいに」

さすが、アイテムに赤を取り入れているだけあって、所長の熱さは半端なかった。

「ま、待ってください。ぼ、僕が自分で言います。言いますから……」

ちよつとトイレに行つてきますと、席を立つ。小上がりから出てトイレの前までくると、上気した頬に冷たい空気が心地よかった。

牧村は、大きく深呼吸をした。ちりりと引き戸の音がする。そう言えば、さっきからひっきりなしに人が出入りしている。隠れた名店と言ったところだろうか。牧村がトイレから出ると、後ろからぽんと肩を叩かれた。さては、有田所長が催促にきたに違いない。振り向いた牧村は、そこに違う顔がある事に思考がうまく働かなかった。それは、ここで会はずのなと思われる人間だったからだ。ようやくその主と記憶の知人が一致したところで、牧村は叫んだ。

「しっ、茂兄イ……茂兄イじゃないですか。どうしてここに？」

第二十二話 A BAD BAD DRUNK !!

「よっ」

茂樹は、いたって気軽な調子で片手をあげ、ウインクしてみせた。薄いピンク色のカッターシャツに厚手のベストを着込み、その上からフード付きのダウンジャケットをはおっている。この男にしてはめずらしく、妙にこざっぱりとした格好だった。

「なんだおい、こんなところで会うなんて、奇遇じゃねえか」

「……どうしてシゲ兄イがここに？」

驚いて目をまるくしている牧村を可笑しそうにながめながら、茂樹が言った。

「どうだ、びつくりしたか？」

「そりゃあ、びつくりしますよ」

「ははは、まあ無理もねえや。俺たちがこっちへ越して来るとき、お前えや季奈子ちゃんには黙っていたからな」

「越して来た……てことはシゲ兄イ、この街へは露天の商売で流れて来たわけじゃないんですね？」

「ああ、そうだよ。俺は今この街でカタギの仕事をやりながら、まっとうな生活を送ってるんだ」

茂樹が得意げに鼻をうごめかせる。牧村は酒のせいではんやりしてくる頭をかかえ必死に考えた。

「じゃあ、もしかして……この北海道で……どっかの企業に……就職しちゃったってこと？」

「さっきからそう言ってるじゃねえか。俺あ、今では会社員だぜ、会社員。構成員とはわけが違うんだ、ちゃんと社会保障だって受けられるし、銀行でローンだって組める。ふふん、どうだ、すげえだろ？」

「すげえもなにも……。そうか、最近シゲ兄イが店に顔を出さないって季奈子ちゃんが心配してたけど、……こんな北の果てで暮らし

ていたんだ」

牧村は、あらためて茂樹の全身をくまなくながめてみた。スキンヘッドだった頭には短く毛が生えそろう、ウインザーノットに結ばれたネクタイといい、ぱりっと折り目のついたスラックスといい、すごく垢抜けた感じがして、なんだか品のよい紳士にさえ見える。ヤクザだった面影は微塵も感じられない。とても前科七犯の渡世人とは思えなかった。

「なるほどなあ……ほんとに会社員になっちゃったんだね。で、シゲ兄ィ、どんな会社でどういう仕事をしてるんですか？」

そう訊ねられて、茂樹は今度こそ愉快そうに大口あけて笑った。

「がはははっ、なんの仕事してるかだって？　こりゃあいいや、ははは——」

どうやら差し歯を入れたらしく、まばらだった歯並びがきちんと矯正されていた。牧村は笑われる理由をはかりかねてきょとんとしていたが、そんな彼を見て、茂樹はいたずらが成功した子どものように得意満面になって言った。

「お前さんがこれから入ろうとしている会社に、この俺もいるんだよ」

「へ？」

「へ、じゃない、俺はワシオ・プランニングの経営するレストランで、店長を任されてんの」

「ええっ！」

牧村が仰天するのを茂樹が可笑しそうにながめていると、後ろから有田所長に声をかけられた。

「なんやシゲちゃん、来とったんかいな」

「ああ、有田さん」

有田のほうを振り返り、茂樹が少しだけサラリーマンの顔になって言った。

「じつは来週の仕入れのことで有田さんにちょっと相談があつて。事務所へ電話したらここにいて言われたもんすから」

「さよか、そらご苦労やつたな」

「それに今日面接受けに来たのがこの牧村だと知って、あわてて駆けつけたんすよ。有田さん、じつはこいつ俺が定時制高校へ通ってたときのクラスメイトなんです」

「あれまあ、ほんまかいな」

有田は黒い丸メガネのフレームをくいっと持ち上げながら、牧村の顔をしげしげと覗き込んだ。

「あんさん、見かけによらず顔の広いおひとでんなあ……、なんやわし気味悪うなってきた」

牧村は、ばつが悪そうにぽりぽりと頭をかいた。

「いえ、僕のほうこそ驚いているんですよ。こんなところでシゲ兄、いえ木村さんに会えるなんて思ってもみなかったものですから……」

すると有田は、くだおれ太郎よろしく福々しい笑顔になって、

両手で二人の肩をぽんと叩いた。

「まあ、つもる話は後にして、シゲちゃんもせっかく来てくれたんやし、まずは席へ戻って飲みなおそうやないの。その仕入れに関する相談ちゅうのも、ひとつ焼き魚でもつつきながらってことで、な」
そして、そばを通りかかった店員を呼び止めて言った。

「ねえちゃん、すまんけど、わしんとこのテーブルへ生ひとつ追加したって」

牧村は、ほっと安堵の息をついた。どうやら茂樹の出現によって、季奈子へ電話をかけるという恐るべきイベントはうやむやになったようだ。

席へもどると、礼子がひとり黒髪を投げ出しテーブルにうつぶせていた。ストレートの髪の間合からのぞく形の良い耳が、酔いのせいでまっ赤になっている。それを見て、上着を脱いで座布団のうえであぐらをかきながら、茂樹があきたように言った。

「なんだ、庶務の神戸さんじゃないか、どうしたんすか彼女、すっかり酔いつぶれてるみたいいっすけど」

有田が苦笑して応える。

「なんや、知らんまにつぶれてもうてん。このあいだこの子のために歓迎会ひらいたときには、平気な顔してけっこう飲んではったんやけどなあ。調子に乗って酒勧めてもうて、ほんま悪いことしたわ」

「さすがのクールビューティーも、お酒には弱かったんですね」

酔いつぶれて寝息を立てている礼子のほうへ微笑みかけながら、牧村が言った。その彼の耳元へ口をよせて、茂樹がそつと囁く。

「じつはなマー坊、ここだけの話なんだが、マナブのやろう神戸さんに惚れてるらしくてな、それでこの前、一大決心して交際申し込んだんだが、あつさりフラれたって話しだぜ……」

「えーっ、マナブさんがですか？」

茂樹は、くつくつと笑いを噛み殺しながら愉快そうに言った。

「あのやろう、詳しいことまでは話さなかったが、どうも二人は以前にも一度顔を合わせたことがあるらしくてな、そのときからずつとマナブのほうで神戸さんに対し秘かな恋心を抱いてたみたいなんだ」

「ひ、秘かな恋心ですか……あの顔で、ぷぷっ、いや失礼」

「まあ、惚れたはれたの浮き世の話とはまったく無縁の世界に生きてきた男だからなあ」

牧村は、目つきが悪く骨張ったマナブの顔を思い浮かべて顔をしかめた。たしかに女性に恋慕して思い詰めるタイプには見えない。

「こつちで神戸さんと偶然再会したもんだから舞い上がっちゃってあのやろう、こうなったら告白するしかねえと腹くくっちゃったもんだが……、事務所の裏口で退社してくる彼女を待ち伏せして、そしてあいっ、どんなセリフ吐いたと思う？」

茂樹が、なにか必死に笑いをこらえているようなので、牧村まで思わず笑いの衝動がこみ上げてきてそれを抑えるのに苦労した。

「な、なんて言ったんです？」

「——俺っち、あんたのためだったら指三本まで詰める覚悟があるっす。だってよ。バカだろ」

二人が大笑いするのを見て、有田までつられて楽しそうな顔になった。

「なんやおもしろい話でもあるんかいな？　わしにも聞かせたって」

「わははは、聞きたいですか、有田さん」

「うんうん、ぜひ聞きたい」

そのとき――。

テーブルに突っ伏していた礼子が、とつぜんむくつと起き上がった。牧村と茂樹は、笑い声のトーンを少し下げて、目だけをそちらへ向けた。有田が心配そうに彼女の顔を覗き込む。

「だいじょうぶか？　しんどいんやったら明日遅出してもかまわんで、今タクシー呼んだるさかいに、もう家に帰って休みなはれ」

すると礼子は、焦点の合わない目をきよとつかせて周囲を見回したあと、有田の顔を見てくわつと目を見開いた。

「おおお、有田ああ！」

「ひっ」

思わず逃げようとする有田の襟首をつかんで引き戻し、彼女は持ち上げた銚子をぐいっとその鼻先へ突きつけた。

「ま、飲め」

「な、ななな、なんやねん、一体どないしたんや礼子ちゃん？」

「どないしたじゃない、こら逃げるなおっさん」

礼子は、なおも逃げようとする有田の首へ自分の腕を巻きつけて、その顔に酒臭い息を吐きかけながら、ろれつの回らない舌で言った。

「こら有田、あらしのお酌する酒が飲めないと云うのか、このカーネルサンダーズおやじが、ぐだぐだぬかしおって、わらしに水虫のクスリ買いに行かせおって、ちよーしこいてつと簀巻きにして冬の淀川へ放り込んだじゃうろ。――さ、飲め。まず、飲め。ほら、飲め」

「悪かった、水虫のクスリのことは、わしが謝る、この通りや。だからな、もう勘弁したって、な、な、礼子ちゃん」

「ほう……ちゅーことはなんれすか、この礼子さまのお酌じゃあ、酒が飲めねーと、そうあんたは、おっしやるんれすね」

「あかん、この子すっかり虎の目えになつとる。ちよつとシゲちゃん、牧村はん、黙つて見てないで助けて」

有田が、保健所へ連れていかれる野犬のような目をして言った。

牧村と茂樹は、礼子の変貌ぶりに驚いて口をぽかんとあけていたが、不意にその礼子の視線が自分たちのほうへ向いたので、思わず息を飲んだ。彼女はくわつと二人を睨みつけると、まず茂樹にむかつて言った。

「くおら、その海ばーず、おつとせい、ぬらりひょん、接待交際費だとかなんだとかぬかして堂々とソーブランドの領収書もつてきおつて。一応どこにれもありそうな会社名で切られてるけるなあ、見るひとが見れば一発で分かっちゃうんらからな。聞いてんのかこら、ゴマファザラシ」

テーブルをばんと叩く。あせつた茂樹は、上着をつかむなりそそくさと立ち上がつて、有田に言った。

「いやあ、すっかり長居してしまつて。それでは、自分これで失礼しますので」

「な、なに言うてはるんや、シゲちゃん今来たばかりやないの」

「いえ、自分これから店へ戻つて伝票整理とかしなくちゃならんものですから」

「そない慌てて行かんでもええやないの。そうや、仕入れに関する相談ちゆんはどないしたんや、じっくり聞こうやないか」

「その話ならたつた今解決しました、ではこれにて――」

「待つて、わし見捨てんといて、シゲちゃん、頼むさかいにこの子おなんとかしてえな」

礼子の腕を振りほどこうともがきながら、有田が必死に助けをもとめてくる。すると礼子は、今度は牧村に向かって言った。

「こら牧村、あんた恋人置き去りにして、よく自分だけのこのこと北海道まで出てこれたもんらな、恋人をたつたひとり……、恋人を……恋人があ……くそう羨ましいなあ……、あらしなんて、あらしなんて……」

そのまま礼子は、よよと泣きくずれた。

「なんや今度は泣き上戸かいな、えらいなんぎな子おやなあ、おうじょうするで、ほんま」

スーツに涙と鼻水をこすりつけてくる礼子を扱いかねて、有田が口をとがらせる。その様子を呆れた顔でながめていた牧村は、茂樹にぼんと肩を叩かれた。

「お前、もう帰ったほうがいいんじゃないか」

「あ、そうですね。じゃあ有田所長、僕もこれで失礼します」

「ええっ」

有田は、今度は屠殺場へ連れていかれる肉牛の目になって、牧村を見た。

「なんや、牧村はんまで行ってまうんか、わしをこの酒乱の女と二人きりにしたまま見捨てていくんか、ああ、日本はいつからこないに薄情な若者ばかりいる国になってもうたんや」

がつくりと肩を落とす有田の横で、泣き止んだ礼子が銚子に直接口をつけ日本酒をラッパ飲みしていた。ごくごくごく……。

「ぶはーっ、エネルギー充填、ひやくにじゅっぱーせんとお」

「あ、あ、礼子ちゃん、これ以上飲んだらあかん、百パーセント超えたら終いや、どうかもうそのへんで……」

「うるひゃい！　ぐらぐら言ってないれ、お前も飲め、ほれほれ遠慮すんな、おっさん」

怯える有田をがっちり捉まえておいて、礼子は空になったお茶漬けのどんぶりに、どぼどぼと酒を注ぎはじめた。

「あわわわ、どないしよ、シゲちゃん、なんとかして、牧村はん、わしを助けたって」

泣きべそをかく有田にむかって、二人は深々と頭を下げた。

「ご馳走さまでしたー」

「でしたー」

店の自動ドアが閉まる瞬間、「ひーっ、この薄情ものー」という有田の悲鳴がかすかに聞えてきた。

外はいつのまにか、みぞれから雪に変わっていた。風のない十月の夜空から、白いスノーフレークがくるくると渦を巻きながら舞い降りてくる。

「へえ……、北海道って、こんな季節からもう雪が降りはじめなんですわね」

牧村が空を見上げながら嬉しそうに言った。茂樹は、ダウンジャケットのフードをすっぽりとかぶって、鼻をずーっとすすり上げた。

「北国だからな」

そして少し寂しそうな顔をして、ぽつりとつぶやいた。

「それより季奈子ちゃん……元気にしてるか？」

「ええ、元気ですよ。くるみとも良く気が合うみたいだし」

「……そうか」

そこでふつと笑顔にもどって、彼はひらりと手を振った。

「じゃあな、お前がうちの会社に来るのを楽しみにしてるぜ」

「ありがとう、シゲ兄ィ」

やがて茂樹の背中が雑踏のなかへと消えるのを待ってから、牧村はタクシーを拾った。

第二十三話 Indulge in reminiscences

カードキーを差込むと部屋に明かりが差した。コートを脱いでひとりきりのビジネスホテルのベッドに腰を下ろす。枕もとのデジタル時計が九時を指している。思いのほか早い時間帯だ。だいたい三時間近くあの居酒屋にいたと言うことか。

一息つくとけだるさが牧村をおそった。じんわりと脳が麻痺しているのがわかる。風邪がじゅうぶんに治りきつていなかったせいか、酔いが回るのが早かったようだ。確かウエルカムドリンクがあったはずだ。冷蔵庫の扉を開けると、天然水のペットボトルが一本入っていた。早速、キャップを開け一口を飲み込んで息を吐く。冷えた水が、喉を通り細胞のずみずみにまで行き渡るようだ。

牧村はまたボトルを傾ける。半分ほど飲み干すと、ベッドに大字に寝ころんだ。今日は、ずいぶん長い一日だった。いろんな事があった。今までの生活のペースに比べれば、一週間分くらいに相当すると言ってもいいほどである。面接を受けようと勇んで出かけてみれば、先方は会う前から自分を採用するつもりでいた。有田所長、そして神戸礼子。ともに酒を酌み交わしたせいか、数時間顔を合わせただけのはずが、旧知の仲であるかのように親しく語らっていた。礼子がみちるによく似ておりしかも元第一堂の社員だったこと、そして茂兄イがワシオ・プランニングで働いていたことも驚くべき事実だった。これだけの偶然が重なるのは、あの会社縁があるに違いない。条件のすべてが整ってあとは牧村が入社するばかりと、会社の方から手招いているようにさえみえる。案外と就職に苦戦している牧村をみちるが導いてくれているのかもしれない。

——二年前の夏。セレモニーホールの部屋で、しめやかにみちるの葬儀が執り行われた。若すぎる死を誰もがいたんでいた。そんな中で花々に囲まれたみちるの遺影は、生前と同じようににこやかな笑みをたたえている。

——美しく散る、と書いて、みちる……か。

姉がまっすぐに前を見ながら言った。それから白いハンカチの隅で目頭を押さえた。普段は県外に住む姉が、みちると顔をあわせたのは、結婚式のときと正月に牧村の実家に出かけた二回程度である。姉は、悲しみの雰囲気に酔っているだけなのではないか。妻、みちるの名前を漢字に当てて話す姉の余裕を憎らしくさえ感じる。牧村はまばたきもせずにもちるを見つめていた。立派に喪主をつとめて妻を送ってやらねばならない。そう思うと泣けなかった。そのかわりに両の膝の上で結んだ握りこぶしにぐつと力を入れた。

誰が何を言おうと、到底、妻の死は受け入れられない。痛ましげに弔辞を述べてくる参列者も、牧村にはそらぞらしく思えた。心の奥では自分がひねくれものなのだとわかっている。けれど、牧村は運命を呪った。許せなかったのは、妻を自分から奪う不条理に対してだ。それでも牧村が、自暴自棄にならずにすんだのは、妻がくるみを残していつてくれたからだ。たとえ血は繋がっていなくとも、くるみは牧村の生きが이었다。みちるの分まで立派に育ててくなくてはならない。いつかくるみが自分のもとを離れ、お嫁に行くだろうその時まで。

そう思ってこれまでがむしゃらに働いてきたのだ。くるみのことまで考えがおよぶと、牧村の思考がひと段落ついた。あれこれと考えてしまうのは、きつと酒の影響に違いない。いま、脳の低位機能が表層化して理性を抑えている状態なのだ。

——酒、か。そう言えば、あれからあのふたり、どうしたんだろう……。有田所長。礼子さんにつぶされているかもしれないな。

あんな調子で明日会社に出勤できるのだろうか。なかなかどうして、有田所長と礼子は、いいコンビかもしれない。

自分の中では、答えはとっくに出ている。ワシオ・プランニングに決めよう。東京でこれまで築いてきた人間関係に一区切りつける事になるが、この北の大地でいちからスタートしよう。全国に営業

所を展開するワシオ・プランニングは、いずれ東京本社勤務の可能性もあるのだと、有田所長は言っていた。定年までを北海道で過ごすわけではない。

——しかし。

次に思い浮かんだのは、季奈子の笑顔だった。偶然、再会して前の会社の同僚だった気やすさから、親しく話すようになった。話はずんで第一堂に採用になったら会って欲しいと、つい言ってしまった。それも楽しげな彼女の笑顔にいつい引き込まれたためであり、自身、無職のままでは体裁が悪いと思ったからだ。しかしあえて口にするまでもなかった。以来、季奈子はマスターと話しにちよくちよく黒薔薇に訪れるようになったから、必然的に顔を合わせることが増え、常連どうしの付き合いに発展していったのだ。色白でまあいい鼻の季奈子は、とても愛らしい顔立ちをしている。彼女は、でんと顔の中央に位置した鼻を気にしているようだが、そこが いいのだ。隙のない美しさも意外ひいてしまうものなのだ。癒し系の彼女の雰囲気誘われるように牧村は、就職活動が思うに任せない歯がゆさをずいぶんとぶつけてしまったかもしれない。格好悪いところをたくさん見せてしまったと思う。しかし彼女は、牧村が話すことを厭な顔ひとつせず聴いてくれた。彼女には、どれだけ勇氣づけられたことだろう。

——くるみとふたりで必死で生きてきたつもりだったが、知らず知らずに人に支えられているものなんだなあ……。

再び、デジタル時計に目を落とす。九時二十分。

——そうだ。電話しなくちゃ……。

面接の帰りに電話するつもりだったのにすっかり遅くなってしまった。彼女も今日の結果を気にしているに違いない。牧村は、はじかれたように起き上がると携帯電話を取り出した。

「くるみちゃん。もう寝た方がいいわよ。明日、学校があるんだし」
膝を抱え込んでテレビに見入っているくるみのうしろ姿に季奈子

は、声をかけた。

「うん……」

生返事が返ってきて、すぐに言わなければよかったと後悔する。一応気づかうように言っただけはみたものの本心ではなかった。くるみが牧村からの電話を待っているのは、わかりきっているのに。テレビを見るふりをして、時間を気にしている。季奈子もまた時計に目をやった。もう九時をまわっている。

——向こうに着いたら、すぐに電話するって言っていたのに。

病みあがりのまま出かけた牧村の体調が気がかりだ。そして面接の感触も。

ついさっきまでは、くるみは元気にしていた。くるみのリクエストで、晩ごはんは、ハンバーグステーキにした。一緒にスーパーに買い物に行って、ふたりでせっせとひき肉をこねて種を作った。小判型に形を整える季奈子に対して、くるみは、ハートマークやウサギの形を作って、無邪気に喜んでいた。

しかし、食事が終わると途端に無口になってしまったのだ。表面上は楽しげにふるまいながら、ずっとパパリの事を気にしているのがわかる。季奈子の心がちくりと痛んだ。

「ね。パパリンに電話してみようか？」

季奈子は、身を乗り出してくるみに提案してみた。

くるみは、驚いたように季奈子を見つめ、そして「うん」と大きく首を縦に振った。まさに季奈子が電話をかけようと携帯に手を伸ばしたところで、ガラスのローテーブルの上に置かれたそれがカタカタと震えた。ほどなくして、いつものケロリンソングが流れる。

季奈子とくるみは、目を見合わせた。

「パパリン？」

季奈子の携帯をパカンと開くと果たして液晶画面に牧村の文字が表示されていた。微笑んでくるみにOKのサインを送ると、季奈子は携帯を耳に当てた。

第二十四話 a promise to meet again

「あ、俺だけ……」

受話器の向こうから、やけにのんびりとした牧村の声が聞えてきた。こんなに遅くなってから電話をかけてくるのには、それなりの事情があつて、そのことできつと彼は慌てているはずだと思い込んでいた季奈子は、少し拍子抜けした。ずっと心配していた自分やるみが、なんだかバカみたいに思えてくる。だから彼女は、ちょっとだけ意地悪してやることにした。

「あら、牧村さんじゃないですか？ やだ、お久しぶりー。お元気でした？」

「え、なに言ってるんだい、俺たち昨日会ったばかりじゃないか」「そうでしたっけ？ そんな大昔の出来ごと、私もう忘れてしまつたかも」

やや声をひそめて、牧村がおそろおそろ訊ねる。

「……もしかして季奈子ちゃん、なにか怒ってる？」

「なにも怒ってませんよーだ、ぶんぶん」

「ああ、やつぱり怒ってるんだ」

その声があまりにも情けなく聞えたので、季奈子はもうこのへんで勘弁してやることにした。

「あはは、冗談ですよ」

牧村がぷつと吹き出す。季奈子も思わずくくつと笑いを噛み殺した。

「いやあ、ごめんごめん、もっと早くに電話しようと思ってたんだけど、こっちに着いてからけっこうスケジュールが押してて、ものすごくドタバタしてしまつてね」

どうやら牧村は元気なようだ。ひょつとして移動中に熱でも出して倒れてしまったのでは、さらにその上からしんと雪が降り積もり、誰にも発見されないまま偶然通りかかった除雪車に巻き込ま

れて……、なんて悪いほうへ悪いほうへと想像力を膨らませていた季奈子は、とりあえずほっと胸をなで下ろした。同時に、彼から電話がきたら、あれを訊こう、これを訊ねようと思いをめぐらせていたものがすっかり霧散し、もうどうでもよくなってしまった。

「ほんと、お元気そうで良かったです」

心底そう思い、ほっと息をつく。

「いやあ、心配かけてごめん。どうだい、くるみは良い子にしているかい？」

「ふふ、くるみちゃんは、いつも良い子ですよ。今日も私が晩ごはんの支度するのを手伝ってくれました」

そのくるみは、季奈子の横でじっと聞き耳を立てている。どうやら電話でのやり取りが聞えたらしく、牧村が元気だということが分かって安堵の表情を浮かべていた。季奈子は、くるみに向かってウインクした。

「じゃあ今、くるみちゃんと変わりますねー」

「あ、ちよっと待ってよ、その前に……」

牧村が慌てて言った。

「じつは良いニュースと、良いニュースと、良いニュースと、悪いニュースがあるんだけど、季奈子ちゃん、どれから聞きたい？」

「まあ、良いニュースがいつばいなね。では、その良いニュースとやらを三連ちゃんお願いします」

「よしきた」

電話機に手を伸ばしかけたくるみに「ごめんね」のジェスチャーをしておいて、その場にしゃがみこむ。くるみは季奈子にぴつたりと寄り添い、手のなかの電話機に耳を押しつけてきた。受話器を通して、牧村のこほんという咳払いが聞える。

「じつはさ、ありがたいことに先方のほうではすでに俺の採用を決めてるらしいんだ。あとはこっちの返答しだいってことかな」

「本当ですか、よかったじゃないですかあ」

思わず電話機を握りしめる手に力が入った。嬉しい……、まるで

自分のことのように嬉しい。それは勤めていた会社が倒産して一緒に苦渋を味わってきた仲間同士だからということではない。もっと特別な存在として……そう、牧村は季奈子の心のなかで少しずつ特別な存在へと変わりつつあった。彼の存在は、今の自分にとって大きな心の支えとなっている。と同時に、自分も牧村のことを支えてあげたいと切望している。彼が落ち込んでいるときには、そばにいて寄り添ってあげたい。いつからか季奈子は、そんなことを思うようになっていた。だから牧村の就職内定は、素直に嬉しかったのだ。「きゃっほっ」

電話の内容を盗み聞きしていたくるみが、飛び上がって、ぱちぱちぱちつと手を叩いた。

「さっすが、くるみのパパリんだよ」

くるみのはしゃぎぶりが受話器を通して伝わっているのか、牧村が楽しそうに笑い声をもらした。

「ははは、俺だって信じられない気分だよ。だって営業所長に会う早々、いきなりいつから来れる？　なんて訊かれるんだもん」

「即戦力として期待されてるんですね」

「かなあ……なにせものすごく忙しい会社みたいだから。あ、そうそう、それとね、こっちでシゲ兄イと会ったよ。これが二つ目の良いニュース」

「ええっ、茂樹さん北海道に行ってたんですか？」

どうりで最近、店に顔を出さないと思っていた。もともと季奈子にとつて茂樹はちょっぴり迷惑な存在だったけど、牧村の古い知り合いと聞かされてからは印象もずいぶんと変わってきた。打ち合ってみれば、気さくで人のよいおじさんなのである。

「驚かないでよ。シゲ兄イさ、俺が面接を受けに行ったその会社で働いてたんだ」

「そ、そうなんですか？」

「うん、直営のレストランで店長やってるって言ってたよ」

「ねえ牧村さん……そのワシオ・プランニングって会社、ちゃんと

したところなんですよね？ まさか 組系とか 連合会系とか、
そういったヤバイ会社じゃないですよ？」

「ははは、なに言ってるんだい。規模は小さいけれど、れっきとした商社さ。売り上げも好調に伸びているみたいだし、この不景気な時代にたいしたものだよ。シゲ兄イはさ、今ではすっかり会社員になっちゃってしまっているよ。季奈子ちゃんも会ったらきつとびっくりすると思う。むかしの強もてだった面影ぜんぜんないもの」

「へえ……あの茂樹さんが」

海ボウズがサングラスかけたような茂樹の顔を思い浮かべて、そのままスーツにネクタイの会社員風の姿にしてみたら、えらくアンバランスな像が浮かび上がったので、季奈子は思わず吹き出しそうになった。

「あとね、さつき話した俺を採用してくれた営業所長っていうのが、くだおれ太郎そっくりなんだ。これ最後の良いニュース。あれは、くるみが見たら絶対喜ぶなあ、インパクト絶大なもの」

「くだおれ太郎って、あの大阪道頓堀の？」

「そう、それぞれ。なんかインチキくさい関西弁しゃべるし、あんなアクの強いキャラクターもめずらしいと思うよ」

頭のなかで、スーツ姿の茂樹の横に、今度はくだおれ太郎の人影を並べてみて、とうとう季奈子は吹き出してしまった。

「あはは、なんか面白そうな会社ですね。そんなにおかしな人たちに囲まれていたら、毎日が退屈しないで済みそう」

「俺もそう思うよ」

二人、電話機を握りしめたままひとしきり笑ったあと、季奈子が少し声のトーンを下げて訊いた。

「で、あの……悪いニュースというのは？」

牧村も笑い止んで、ふうつとひとつため息をついた。

「悪いニュースっていうのはさ……。それは、つまりその、あれだ」
「なんだか言いづらそうにしている。季奈子はじつと電話機の向こう側から聞えてくる彼の声に耳をかたむけた。」

「ほら、なんて言うかな、つまり俺がこのまま北海道で就職しちゃうとするだろ？」

「うんうん」

「その場合さ……あの、季奈子ちゃん？」

「え？」

「……いや、いいんだ。この話は戻ってからゆっくりするよ」

「ええつ、そんなあ、そこまで言いかけて、それはないですよ。最後まで聞かせてください。でないと、私今晚眠れなくなります」

「ごめん、ニユースだなんて言っておいて。じつは、俺自身にもよく分からないことなんだ。だから帰ったら君とふたりで話をしてはつきりさせようと思ってる。そっちへ戻ったら一度、二人きりで会ってくれないかな？」

季奈子は、携帯電話を両手でにぎりしめると、こくりと頷いた。

「はい……、じゃあ牧村さんに会えるのを楽しみに待ってます。だから無事に帰ってきてくださいね」

「うん、ありがとう。君がいなかったら、今回の就職は実現しなかったと思ってる。俺、本当に感謝してるんだぜ」

「そんな……私なんて」

「ははは、感謝感謝——。さあて、風邪薬も飲んだことだし、俺そろそろ寝るとするよ」

「え、あ……、お大事にしてくださいね」

「さんきゅ、じゃあね、おやすみ」

「……おやすみなさい」

そこで通話が終わった。季奈子はそつと電話機をとじ、自分も目をとじた。まぶたの裏に、牧村の笑顔がよみがえる。はやく会いたい。会っていろいろと話がしたい。あの呑気な顔に、自分の心のかのもやもやを全部ぶつけてやりたかった……。

季奈子の横で、くるみが泣きべそをかいた。

「季奈子おねえちゃん、ひっどーい。くるみもパパりんとお話が出来なかったのにい」

「あ、ごつめーん、おねえちゃん、うつかりしてたー」
すぐに牧村から、もう一度電話がかかってきた……。

第二十五話 G i r l ' s t a l k

くるみがパパリンと楽しそうに話している。季奈子は、目を細めてその様子を見守った。やがて思い出したように今日、届いた郵便物に目を見ると、軽く眉間にしわを寄せた。右肩上がりの筆跡で記された志浦季奈子様の文字。その中身はわかつている。先日、応募した会社からの不採用通知だ。季奈子が送付してから呼びじゃないと言つように一週間と経たずに送られてきたのだ。遠く北海道に面接を受けに行く牧村に触発されて、自分もこのままじゃ駄目だと行動を起こした矢先の事だった。

——でも……。

落胆の中に安心してゐる自分がいた。不思議なことにこの通知を歓迎している。今、就職を決めてしまうことは、牧村と離ればなれになることを意味するからに他ならない。もう少し、猶予が欲しい。——そんな事、考えている場合じゃないのに。

季奈子は、牛井屋のアルバイトで食いつないではいるが、こんな生活を続けていくのは、絶対に無理がある。牧村は、もう自分の道を決めてしまったのだ。

ぎゅつと不採用通知を握りつぶすと、くずかごに放り込んだ。

——「いや、いいんだ。この話は戻ってからゆっくりするよ」

——「じつは、俺自身にもよくわからないことなんだ。……そっちへ戻ったら一度、二人きりで会つてくれないかな？」

早く会つて話したい。牧村のことを思い出すと泣きそうになつてしまう。けれど、くるみの手前、唇を固く結び、平静を装った。「もうっ。パパリン。はやく季奈子おねちゃんにプロポーズしなよっ！」

季奈子の心臓はひっくり返りそうになった。

「く、くるみちゃん。何、言ってるの？」

たじろぎながら季奈子は、言った。電話の向こうで牧村が、はは

は……と笑う声が洩れ聴こえてくる。くるみは、季奈子をちらつと見ると、かまわず続けた。

「男は、度胸だよ？ パパりん。早く季奈子おねえちゃんに言わなくちゃ、逃げられちゃうよ。くるみ。さびしいよ。いつも学校から帰るとひとりぼっち。季奈子おねえちゃんみたいな人がいてくれたらなあって……」

季奈子は、慌ててキッチンに逃れた。戸棚からお茶の缶を取り出して、ふたを開ける。ふわりと香ばしい匂いが季奈子の心を落ち着けた。都築フサからもらったお茶だ。

——そうだ。久しぶりにフサさんのところに行ってみようかしら？ 季奈子は、今、ひたすらフサと話がしたかった。季奈子が心を許せる古くからの友人は、みな故郷の富山にいる。東京にも友達がいるが、恋愛めいた相談はしづらかった。

「じゃあね。パパりん。帰って来たらちゃんと季奈子おねえちゃんに言うんだよ？ でなきや、くるみ。パパりんと口利かないからね」くるみの高らかな声が季奈子のところにまで聞こえてくる。季奈子は、ひたすら受け流すとともにくるみが通話を終えるのを待って声をかけた。

「さ。くるみちゃん。パパとお話もできたし、もう寝ましようね」「うん」

さっきまでのしよぼくれた様子とはうって変わってくるみは、満面の笑みを浮かべている。

「パパりん。明日の夜帰って来るって。くるみ、季奈子おねえちゃんと一緒に、今日はすごく楽しかったよ！ おいしいハンバーグも食べられたし……ああ、もう余は満足じゃ……」

「では、姫さま。おやすみなさいませ」

くるみがベッドにもぐりこむと、季奈子は、そつと毛布をかけてやった。枕元には、くるみが持ち込んだタオル地のウサギのぬいぐるみが置かれている。ビーズを縫い付けた黒い瞳。もとは、薄いピンクだったようだが、よほどのお気に入りに見えて、うつすらグレ

―に変色している。季奈子は、この可愛い客がいとおしくて仕方がなかった。毎日、くるみと過ごせたら、どんなに楽しいことだろう。若くして妻を亡くした牧村は、不幸な人間に映るけれど、こんなく
るみの存在が励みになっているに違いないのだ。

―それにしても牧村さんは、とんぼ返りね……。

せっかく北海道に行ったのならもつとゆつくりしてきてもいいの
にと思う。今日の夕刻にここを出発して、明日の夜にはもう帰っ
てくる。まさに面接だけを受けに行った印象だ。

「おねえちゃんも早く寝ようよ」

「はい。すぐ寝るわよ」

部屋の照明を一段落とすと、季奈子はくるみの隣の敷布団に滑り
込んだ。いつもは、横になって五分もしないうちに眠りに落ちる季
奈子だが、今日はなかなか寝付けない。昨日、牧村がやって来て、
熱を出して……。いろんな事があつたせいで、脳が興奮状態になっ
ているようだ。明日は、くるみを学校まで送つていかなきゃならな
い。早く眠らなきゃとあせるほどに目がらんらんと冴えてくる。季
奈子は、天井のランプのシルエットをぼうつと眺めていた。

「ね。おねえちゃん……」

「くるみちゃん。まだ寝てなかったの？」

「だって、眠れないよ……」

くるみも季奈子とおんなじらしい。

「目をつぶって、じつとしていなさい。そのうち眠れるから」

布団をぼんと叩いてくるみをたしなめながら自分にも言い聞かせ
た。

「あのさ。おねえちゃん」

「なあに？」

「パパりんのこと。好き？」

季奈子は、息を呑んだ。脳裏に牛井屋での会話がよみがえる。あ
の時、くるみは言ったのだ。

―ねっ。お姉ちゃん。女の子同士のお話しようね。パパりんとの

出逢いのお話が聴きたいな。くるみ、楽しみつ……。

ついにこの時が来てしまったのだ。

「ねえねえ……」

くるみが季奈子の返事をせかしてくる。

「そうねえ。まあ……牧村さんは、話していると楽しいし、いい人だし……好きかと言われたら、そうかも」

季奈子は、のらりくらりと答えた。しかし、くるみの質問は容赦ない。

「好きだよなー。だってパパりんとおねえちゃんは、恋人どうしだもんね」

「ちょ……ちょっと。恋人って……？ 牧村さんと私は、友達よ。お・と・も・だ・ち」

「えーっ。どうして？」

くるみが、不満気な声をあげる。どうしてと訊かれても困ってしまふ。牧村と季奈子は、たまに黒薔薇で顔をあわせるうちに親しくなったのであって、断じて恋人ではない。

「ど、どうしてと言われましても……そうなんだから」

「だって、パパりんはくるみのこと、ここにまかせていったんだよ？ パパりんは、くるみの事がいちばん大事だよっていつも言ってくれるんだ。だからただのお友達にくるみの事、預けるわけない。ね。パパりんは、きつと季奈子おねえちゃんのこと好きなんだよ。くるみも季奈子おねえちゃん。だーいすき」

「ありがとう。くるみちゃん……。わたし、くるみちゃんに大好きって言ってもらえて嬉しいわ」

季奈子は、くるみの最後の言葉にのみ反応して答えた。そして、自分ではなくとも牧村のような立場の人間と付き合うとき、くるみに好かれることは必須なのだろうかと、漠然と思った。

とにかく、牧村はふたりで会って話がしたいと言ってくれた。ならばその時を待とう。

——翌日。くるみを学校まで送った季奈子の足は、フサの家に向かっていた。

未明から降り出した雨が、アスファルトのうえに水しぶきの花を咲かせている。

針のように細くて冷たい雨だ。

その雨のなかをカラフルなビニル傘ふたつ並べ、季奈子はくるみと身をよせ合うようにして歩いた。くるみの通う小学校までは、最寄り駅から歩いて約十分、季奈子と一緒に学校へ行くことがよほど嬉しいのか、くるみは終始ご機嫌なようすで歌を口ずさんでいた。

あめふりおつきさん くものかげ

およめにゆくときゃ だれとゆく

ひとりでからかさ さしてゆく

楽しそうなくなるみの歌声に、季奈子はゆっくりと自分の声を重ねた。

からかさないときゃ だれとゆく

しゃらしゃら しゃんしゃん すずつけた

おうまにゆられて ぬれてゆく

歌い終わって、どちらからともなく、くすくすと笑い声をたてた。

「そのお歌、学校で習ったの？」

「うん」

「ふうん……。でもこのお歌のお嫁さんって、雨に濡れてしまって可哀想ね」

するとくるみは、季奈子とつないだ手にぎゅっと力をこめた。

「好きなひとのところへオヨメにゆくんだから、きつとしあわせだよ」

季奈子は、思わず苦笑した。

「……ふふ、そうね」

せわしなくワイパーを動かす車が、次々と二人の横をかすめてゆ

く。しばらく行くと、小学校のグラウンドを囲むフェンスが見えてきた。三階建ての校舎は、降りしきる雨に包まればんやりと煙っている。その校門のすぐそばまで一緒に行き、季奈子はしゃがみ込んでくるみの頭をやさしく撫でた。

「じゃあ、学校が終わるころまた迎えにくるから。私がゆくまで玄関のところで待っててね」

「うん」

こつくりうなずくと、登校する児童のむれに友だちの姿を見つけたのか、くるみはバイバイと元気よく手を振ってそちらのほうへ駆けていった。その小さな背中が正面玄関の入り口へ吸い込まれるのを見届けてから、季奈子はふたたび駅へと引き返した。

ホームに立つと、ちょうど二両編成の路面電車が滑り込んでくるところだった。すでにラッシュアワーは過ぎていたが、それでも東急世田谷線のせまい車内には乗客と香水のにおいがひしめいていた。

彼女はつり革にぶら下がり、ぼんやりと窓の向こうを移ろいゆく景色をながめていた。空には相変わらず厚い雲が垂れ込め、色調にとぼしい冬枯れの風景にあつて、使い回したお芝居のかき割りみたいに代わり映えのしない街並が、次から次へと現れては消えてゆく。

ここは本当に私の在るべき街なのだろうか――？

ふと季奈子は、そんなことを思った。

にぎやかなように見えて、そのじつ身を切るような淋しさで心をむしばんでゆく街。そこに暮らすひとたちの思いこがれた夢や希望を、少しずつ削り取ってゆく。この街にはそんな意地の悪い本当の顔が隠されている。濡れそばつたアスファルトのうえを、だれもがうつむき、肩をすぼめ、早足で通り過ぎてゆく。

この街で私はいったい何がしたいのだろう――？

短大を卒業し、希望に胸をふくらませながら上京したあのころには、たしかに夢と呼べるものがあつたような気がする。しかし今、

その夢は空気の抜けた風船みたいに情けなくしぼんだままだ。あれから、まだ一年とは経っていないというのに。電車の窓にぼんやりと映りこむ自分の顔にむかって、彼女は静かにため息を吐き出した。

思い返せば色々なことがあった。

おてんばな季奈子は、その性格ゆえに人生のレール上で待ち構えるすべての出来ごとに対し、体当たりで向かっていった。無我夢中で、ただ真っ正直にぶつかっていった。そして、あふれ出る未来への思いが純粹であればあるほど、上手くいかなかったときの反動もまた大きかった。彼女にとってこの街は、あまり良い思い出のあるところではない。ようやく見つけた勤め先は入社して数ヶ月も経たないうちにあっさり潰れてしまったし、学生時代に思い描いていたような大人びたロマンチックな恋愛ともまるつきり無縁だった。そしていつしか夢だけが空回りし、あせり、苦しみ、やがて言いたいのではない不安にとらわれた。

この街で私は何ができる？

なにもできやしない、仕事もなく、恋人もいない。やがて絶望し、打ちひしがれて、故郷の富山へ逃げ帰るのだ。

夜、一人ぼっちの部屋で湿ったベッドにもぐり込んで、そんなふうに思いながら泣いたこともある。

この街で私は何もできやしない。

おとぎ話を真に受けた世間知らずの少女が、ちょっと都会にあらがれ夢を見ただけ。ただそれだけのこと……。

しかし、そんなネガティブな思いが少しずつ変わりつつあった。

あの日から、そう古びた木造家屋の玄関に貼られた「あなたの人生、占います」という文字に目をとめたときから、彼女の運命は少しずつその軌道を変えはじめたのだ。

……私の運命？

「けっきよく運命を切り開くのは自分自身だからね」
フサの言葉が胸によりがえる。

彼女の優しい笑顔からこぼれ落ちたその言葉は、日々の暮らしですり減らした季奈子の心に希望を与え、勇気づけた。ああ、はやくフサに会いたい。会ってまた、あの美味しいお茶をいただきながらお話がしたい。そつと目を閉じ、思い起こしてみる。日に焼けた畳のにおい、小鳥のさえずり、風にさやぐ庭木のこずえ、そのすべてが季奈子の脳裏をかすめ、彼女はなにか温かいもので心のなかを満たされてゆくを感じた……。

がたん、と衝撃がはしり、電車が減速しはじめた。どうやら終点が近づいたようだ。

とにかく今日もう一度フサの家を訪ねてみよう。そしてまた占ってもらうのだ。私の歩むべき道を……、そして季奈子にはもう一つ、フサの力を借り、どうしても確かめねばならないことがあった。指先で曇った窓ガラスをきゅっきゅっとこする。冷たいしずくがひと筋つたい落ちる。すると拭き取られた部分から見える外の景色が鮮やかに躍動しはじめた……。

駅に降り立つと、雨足はかなり弱まっていた。ほつと息をつく。

と同時に、フサが在宅しているか急に不安になってきた。季奈子は携帯電話を取り出し、あらかじめ登録されている彼女の自宅の電話番号へコールした。

すぐに応答があった。

「はい、つじゆきです」

それは予想に反して、たどたどしい少年の声だった。お孫さんかな？ とつさにそう思ったが、しかし決めつけるのはよくないと思い、できるだけ丁寧な口調で「お母さん、いらつしやいますか？」と訊ねてみた。すると「うん」と返事があり、しばらくして今度は若い女性の声に代わった。

「はい、都築ですが」

フサの声ではない。

「あ、ごめんなさい。私、今電話に出てくれたのがフサさんの息子さんかなと思っちゃって」

「フサは私の母ですが……」

くすくすと忍び笑いがもれる。

「でも私と間違えられたと知ったら、うちの母きつと飛び上がって喜ぶわ」

どうやら孫で正解だったらしい。季奈子は少し恥ずかしくなつて声の調子を改めた。

「あの、私以前フサさんに占いをしていたいただいた者で、志浦と申しますが」

「占いのお客さんね。ちょっと待ってて、今母を呼んできますから」

どうやらフサの家には今、娘親子が遊びに来ているらしい。タイミングが悪かったな、と季奈子は少しがっかりした。仕方ない、また明日にでも出直そう。踵を返すと、彼女はそのままキャロットタワーのエントランスで傘を折りたたんだ。

「はいはい、お電話かわりましたよ」

急に懐かしいフサの声が耳に飛び込んできた。相変わらず地声が大きい。思わず電話機を耳から遠ざけつつ、それでも妙な心の安らぎを覚え季奈子はぱつと表情を明るくした。不思議なパワーを秘めた人だな、と改めて感じた。

「あの、私は以前フサさんに占っていた……」

「志浦季奈子ちゃんだろ？ あの目のぱっちりとした」

「わあ、覚えてて下さったんですね」

「覚えてるさ、可愛らしいだんご鼻の」

「……あはは」

「あれから元気にやっているのかい」

「はい、おかげさまで」

季奈子は、革靴のつま先で床に「の」の字を描きながら電話機をぎゅつと握りしめた。

「あの……」

「今近くにいるのかい？」

「え、はい、すぐ近くの駅にいます」

「じゃあ今から遊びにおいで」

「あ、でも……」

「じつは、あんたに見せたいものがあるんだ」

フサが言った。季奈子は戸惑いながら白い息をはきだした。

「見せたいもの……ですか？」

「なあに、たいしたものじゃないさ。けれども近くにいるのならちよつと寄つてらっしゃい。美味しいお茶を用意して待っているから」

季奈子はこくりとうなずいた。

「……はい、それじゃお言葉に甘えて」

「雨に濡れて風邪をひかないよう気をつけるんだよ」

「ありがとうございます」

「それじゃあ」

そこで通話は終わった。見せたいものってなんだろう？ 少し胸を躍らせながら、季奈子はふたたび雨のそば降る街路をてくてくと歩きはじめた。さっきまでのしよぼくれていた自分がウソのように心が浮かれている。くるみがうたっていたあの歌が、自然と口をついて出た。

あめふりおつきさん くものかげ

およめにゆくときや だれとゆく……

途中で見つけた和菓子店に立寄り、日本茶に合いそうな練り切りと芋羊羹を買った。やがてたどり着いたフサの家の前には、赤い軽自動車が一台とめられていた。

「ちょうど今、息子夫婦が遊びにきていてね」

なかへ入るとすぐに奥の座敷へ通された。前回訪れたときと同じ、あの八畳間の和室だ。床の間の掛け軸が梅にウグイスの花鳥画に代わっていること、や、花瓶に生けてあるのが八重咲きの水仙だったことを除けば、まったくあのときと同じ佇まいのままだった。その部屋で季奈子は丸テーブルを飲んで、フサと 向かいあった。

「あの……ひよつとして私、お邪魔だったんじゃ？」

心配そうに訊ねると、フサはゆっくりとかぶりを振った。

「なあに、息子たちは近くに住んでいるからしょっちゅう遊びに来るんだよ、気にすることはない」

フサの膝の上には、三つか四つくらいの男の子がちょこんと乗っていた。その頭を優しく撫でながら彼女は顔をくしゃくしゃにして笑った。

「ほれワタル、お姉ちゃんにあいさつなさい」

ワタルと呼ばれたその男の子は、やはにかみながら上目づかいで季奈子を見上げた。

「こんにちわ、つじゅきわたるです」

「あは、可愛い……。志浦季奈子です。よろしくね」

季奈子が笑顔で応えると、彼は「え、きなこ？」と言って目を大きくさせた。そしてフサの膝からじたばたと逃れると、そのまま襖を開け部屋の外へ駆け出していった。

「あれあれ、しょうのない子だねえ……」

「元気なお孫さんですね」

「ありゃあ嫁に似たんだよ。そそっかしいとこなんか、ほんとそっくり」

すると二十代後半の女性が、お盆に急須と湯呑みを二つ乗せてあらわれた。

「お婆ちゃん、ぜんぶ聞えてますよ」

「ははは、わたしやワタルは母親似で可愛いつて言ってたんだよ」

「ウソばかり」

スリムなジーンズを穿きこなした、背の高い女性だ。季奈子は、彼女に向かって会釈しながら言った。

「あの、おくつろぎのところをお邪魔しちゃって本当にすみません」

「あ、私たちそろそろおいとましますので、どうぞゆっくりしてらして下さいね」

「いえ、でもあの……」

そのとき廊下をばたばたと、こちらへ向かって駆けてくる足音が聞えた。たぶん、さっきのワタル少年だろう。

「こらワタル、廊下を走っちゃいけません」

母親が振り向いて叱りつける。フサはなぜだが、にこにこしていた。そしてワタル少年はというと、部屋へ駆け込んでくるなり「きなこ」と叫んだ。同時に、なにかふわふわしたまっ白いものが季奈子の腕のなかへ飛び込んできた。

「きゃあっ」

季奈子のはけぞりながらも、両手でその白いものをしっかりと抱きとめた。やわらかくて温かい……、それは、一匹の犬だった。

「え、犬のぬいぐるみ——？」

すると肩で息をしながら、ワタル少年が言った。

「あのね、あのね、そのわんこも、きなこってゆうんだよ」

第二十七話

Tarots fortune-telling

「きな……こ？」

季奈子は、ぬいぐるみを抱きとめたまま目をぱちくりさせた。なんだか自分の名前を呼ばれているみたいでこそばゆい。

「うん」

ワタル少年がにこにこ微笑んでいる。季奈子は、ぬいぐるみを持ち上げてみた。黒いつぶらな瞳に鼻と口は、真っ白な毛並みに覆われていて見えない。ワタル少年が両腕で抱えなくてはならないほどの大きさの犬。精巧に作られたものとは言えず、犬種ははっきりしなかった。

——きなこ……確か、そんな映画があっただわ……。

警察犬見習いの犬の物語。牛井屋のアルバイトの行きかえりの道すがら、しばしば広告を見かけたように思う。映画こそ観なかったが、そのストーリーに自分を重ね合わせて、また新しい就職先を見つけようと決意したあの頃。

「そうだよ。その犬の名前は、映画からとったんだ」

季奈子の思いを見透かしたようにフサが言った。

「え。やっぱり……ですか？」

「ははは、ラブラドル・リトリバーには、見えないけどねえ。」

ワタルは、すっかりあの映画が気に入ってしまつて、元々あったその犬にきなこと言う名前をつけたんだよ」

「そっか……可愛いわね」

季奈子は、やわらかな犬の毛並みを撫でると、ワタル少年のもとに返した。

「さあて季奈子ちゃん。今日はどんな相談事かい？ さては木の男性がみつかったのかな」

「はい。見つかったような、見つからないような……。でもわたし、どうしたらいいかわからなくて」

季奈子の話が始まると、ワタル少年を連れた母親が立ち去ろうとした。その後ろ姿にフサが声をかける。

「ああ、倫子ちゃん。まだちょっとそこにいてくれないかい」

彼女の名前は倫子と言うらしい。怪訝に思った季奈子は、フサと倫子の顔を交互に眺めた。

「ねえ。季奈子ちゃん。嫁も占いをやるんだ。良かったら今日は、この嫁に占ってもらわないかい。お代は要らないから」

「え？」

すっかりフサに占ってもらうつもりでいた季奈子は面食らった。この優しそうな母親も占いをするなんて。しかし、わざわざフサが推すとなれば、彼女もそれなりに力があるのだろう。

「ふふふ。不思議そうな顔をしているね。大丈夫。嫁はタロットカードに関しては、あたしの師匠と言ってもいいくらいなんだ。あたしなんかよりよっぽど季奈子ちゃんの相談相手になってくれるだろうよ」

「ちよ、ちよっとお義母さん……」

「頼むよ。倫子ちゃん。この季奈子ちゃんは優しいいい娘でね。ひとりで東京に出てきて頑張っているんだ。ぜひともあなたのアドバイスが必要なんだよ」

倫子は黙ってフサの話す事を聴いていたがやがて頬を緩めて言った。

「仕方ないですね。お義母さんの頼みとあっては。でも季奈子さんは、それでいいのかしら？」

フサと倫子の目線が向けられて季奈子は大きくうなずいた。

「決まりだね。久しぶりに腕が鳴るんじゃないのかい」

「もう。お義母さんったら」

倫子は準備してきますと、部屋の外に出て行った。

「さ。ワタル。ばあと一緒に遊ぼう」

倫子が戻ると、フサは入れ違いにワタルを連れて立ち去った。

障子が閉じられる。今度は、季奈子はテーブルを挟んで倫子と差

し向かいに座る形となった。ショートカットの凜とした表情にボーダーのセーターがよく似合っている。歳の離れた姉と言ってもいいような存在に季奈子はひと目で好感を持った。

「季奈子さんは、先におばあちゃんに占ってもらっていたのね」

「はい」

「じゃ、まずは今、直面している問題を聴かせてくれないかしら。おばあちゃんの時とかぶってしまうようで申し訳ないけど」

季奈子は、これまでの事を順を追って話し始めた。倫子は黙って聴いていたが、季奈子が話し終えると、口を開いた。

「なるほどね。季奈子さんの取るべき道と、彼の事と。季奈子さんの話し方を聴いただけで、素直な人柄が伝わってくるようよ。じゃあ、早速これから季奈子さんの今後の事について占いましょう」

そう言つて倫子は皮のケースからカードを取り出した。続けて小さな茶色い小瓶から手にひとしずくのオイルを垂らしてすりこんだ。成分はなんなのだろう。甘ったるいような香りが季奈子の鼻先に漂ってくる。

「タロットカードは、大アルカナ二十二枚と小アルカナの五十六枚で成り立っているの。今日は大アルカナだけで占うわね」

季奈子はうなずいた。そして、ばさりと倫子の手によつて、テーブルの上にカードが撒かれる。促されて季奈子は、倫子と一緒にカードをかき混ぜはじめた。

「自分の納得のいくまでカードをかき混ぜてね。季奈子さんの合図でとめるから」

この混ぜ加減が運命を決めるのだ。季奈子は神妙な面持ちで、何度も何度もしつこいくらいにカードをかき混ぜた。文句を言うでもなく倫子は黙って季奈子の混ぜるカードを丸く中心部にまとめるように整えている。ようやく季奈子が手を引つ込めると、倫子はカードの面積を次第に小さくし長辺と短辺を揃え手前に引くと縦向きに手の上に乘せた。続けて下から半分を上に乗せ、更にその下の四分の一ほどのカードを上に乗せる。二、三度それを繰り返して、やが

て裏向きのままカードを配置した。季奈子は、神妙な面持ちで裏向きになったカードの図柄を見つめた。

「最初にカードを混ぜ合わせた季奈子さんもこの配置に一役買っているのよ。さて、占い結果はどうかしらね」

「はい。なんだか怖いです……」

「タロット占いは、怖いものじゃない。たった二十二枚のカードだけど、その解釈は無限大なの。インスピレーションでカードの意味するところを読み取るのよ。たとえば死神のカードがあるでしょう。これって駄目だっと思うかもしれないけど、死はすなわち生まれ変わりを意味するから、私は結構好きなカードなのよ」

倫子の指先が、カードをめくっていく。一枚ずつではなく一気にすべてのカードをオープンにすると、じっと全体を見渡した。季奈子は、息を詰めて倫子の答えを待った。一番最初に出たカードを倫子が指差す。

「まずは【運命の輪】ね。いま季奈子さんを取り巻く環境が目まぐるしく変わっている。会社が倒産してしまったのもそう。それから彼に再会したこともね」

季奈子はうなずいた。更に倫子が続ける。

「それから【節制】の逆位置だけど、季奈子さんは、恋愛のことや仕事のことで思うようにいかない自分の状況に不安や焦りを感じているみたい」

「はい……私、まさにその事で今日、ここを訪れたんです」

「さっき私が言ってた【死神】が出ているわ。でも逆に出ているからこの場合は、再生を意味する。新しい事を始めるには、いったん終わらなきゃならない。いっばうでこちらに出ている【星】の逆位置は、季奈子さんの心そのものね。決して悪い方向へは流れていないのにチカチカと瞬いて落ち着かない。【星】は本来、良いカードなのよ。季奈子さんは事態を悪い方へ悪いほうへ捉えているのじゃないかしら」

「はい。だってわたし。今までの事を考えると、いったい何してる

んだろうつて思つて。東京で何がしたいんだろ。一所懸命生きようとするほど空回りしているみたい」

「【運命の輪】に翻弄されてる？ でもそつじゃない。明るい兆しが見えるわ」

倫子は、二枚のカードを指で押さえた。

「いい？ 六番目の位置には、【力】十番目の位置に【世界】が出てるでしょう。事態は必ず季奈子さんにとって良い方に収束する。

季奈子さん自身の力によつてね」

「私の……ちから？」

「そうよ。自分の未来を変えるのは、自分しかないのよ」

倫子の目に力がこもっている。季奈子は、そんな倫子の視線から逃れるようにうつむいた。自嘲気味に笑みが漏れる。

「そんな。今の私には無理です」

「どうして？」

「だって、就職だって、恋愛だって、自分ひとりで決められる事じゃないもの」

「そうかなあ？ 確かに自分ひとりの力でどうにもならないことだつてある。でも考えてもみて？ ひとは影響しあつて生きているのよ」

季奈子が顔を上げる。

「幸せつてなにかしらね？ わたしは、幸せつて自らが感じる事じゃないかと思うのよ」

倫子が微笑んでひとつのカードを指差す。

「八番目の【隠者】のカードは、彼の事だと思つて。少し難しいカード。絵柄を見て。暗がりカンテラを持って注意深く歩んでいくちよつと遠慮がちな感じのひとかな。いろいろ考えてる事があるのね」

倫子のことばに季奈子はくすつと笑つた。あののんきそうな表情でそれでも考えているんだと思うと何気にツボだったのだ。

「ふふ。笑つたわね。季奈子さんの笑顔は可愛いわ。この【世界】

のカードは、周りから祝福を受けているでしょう？ 季奈子さんはみんなにとつて癒しの存在なのよ。知らず知らずのうちにたくさんのひとを味方をつけてる。どう。思い当たることはない？」

季奈子は、くるみの顔を思い浮かべた。おませさんだけど、季奈子のことを慕ってくれている。それから次に浮かんだのは幸子おばさんのこと。不幸の固まりのようなおばさんだけど、季奈子に好きな相手がいると見抜いてしまった。あの強面の海ボウズみたいな茂樹だって、季奈子が健気だと褒めてくれたっけ。それから……しばらく足を運んでいないけれど、黒薔薇のマスター。困った事があつたらいつでも言いなさいって言うてくれたっけ。季奈子は忘れていた。自分が実に多くの人に見守られていたことを。

——わたしったら、最近、自分のことばかりで……。

「季奈子さんの置かれている状況は、決して悪い方向へは流れていない。就職が決まらないのだって今がそんなめぐり合わせなだけ。今後よりよくなっていくための過程に過ぎないの。どうか自信を持つてね」

「はい」

季奈子は、こくりとうなずいて言った。

「実は……今度、彼と二人きりで会っんです。わたしは、彼に向き合うのが怖くて先に占いに逃げてしまったのかもしれない。でもおかげで勇気が出ました。ありがとうございます」

第二十八 the bitter oranges

「そうだわ、お近づきのしるしに、これを季奈子さんにあげる」

倫子が、合皮をメッシュ編みにした銀色のシオルダーバッグを手元へ引き寄せ、中からなにかを取り出した。金華山織の端切れで、ていねいに包まれている。テーブルに寄せ、まるでバナナの皮をむくように布地をひろげると、なかから古いタロットカードが現れた。かなりの年代物らしく、表面が淡い飴色の光沢を放っている。絵柄は極端に図案化されていて、まるで文庫本の挿絵か、子どもの落書きみたいに見えた。そこにヘブライ文字だの古代エジプトの象形文字だのが、ミミズがのたくったような手書き風の書体で大胆に刻まれている。神秘的というより悪魔的で、なにやらオカルトじみた雰囲気さえある。

「あの、これ……」

「古いマルセイユタロットの復刻版よ。以前、私の占いの師匠をしていたひとがくれたもののなの」

「えっ、そんな高価なもの、私いただけません」

慌てふためく季奈子に、倫子は口には手を当てて笑った。

「やだ、そんな大層なものじゃないわよ。うちの師匠って浴槽にためたお湯を三日も使い回すほどのケチだったから、このタロットもきつと二束三文の安物に違いないの」

「だけど私、タロットの使い方なんて知らないし……」

「ふふ、タロットカードっていうのはね、ただ持っているだけでパワーストーンみたいなお守りの役目を果たすものなのよ」

「そうなんですか……」

倫子は、カードの束のてっぺんに手をかざすと、すーっと横に引いた。あざやかなアーチを描いてカードがテーブルの上に広がる。その中から慎重に一枚を選んでそっと指でつまみ上げると、絵柄を季奈子のほうへ向けた。

「例えばこれ、ラヴァーズのカードよ。男と女の愛の神秘を伝えるカードなの。意中の彼氏と初めてデートするときには、このカードを肌身離さず持っていて。きっと良いほうへ導いてくれるから」

季奈子は、そのカードを手に取ってながめた。一体なにを意味しているのか判然としないが、寸劇の一場面みたいなシチュエーションで三人の男女が描かれている。その頭上で半弓をかまえる天使が妙に真面目くさった顔をしているのが、なんだか可笑しかった。

「ひょっとして、あなたの意中のひとつで奥手なんじゃない？」

倫子が、少し探るような視線で小首をかしげた。季奈子は驚いて彼女の目を見つめ返した。

「ど、どうしてそれが分かるんですか……？ あの、多少優柔不断なところはあるかもしれませんが」

「じゃあ、これを持っているといいわ」

別のカードをつまみ上げる。

「女帝のカードなの。あなたに包容力と、そして行動を起こす力を与えてくれるはずよ」

「……行動を起こす力、か」

「他にも小アルカナの聖杯のカードなんかは恋愛に対して効力を発揮するけど……まあ、あとは本人のやる気次第ね、しよせん運命は自分自身で切り開くものだから。あつ、これは義母の受け売りなんだけど」

にっと笑うと、すべてのカードを束ね、元のように紫色の布でていねいに包んだ。そして季奈子の前にぽんと置く。

「はい、騙されたと思って試してみて、お守りとしての効き目は私が保証するから。なにせアイアム生き証人だもの……」

「生き証人？」

そのとき玄関のほうから野太い男の声が聞えた。

「おい、ママ、そろそろ帰るから、支度しろー」

「はい、今行くわ」

そう叫び返しておいて、彼女は声のしたほうへ悪戯っぽく目配せ

した。

「あの、ひょうろくだまの亭主をゲットできたのも、そのタロットのおかげなのよ。だから私にはもう必要ないものの、あなたに譲るわ」

バッグをつかんで立ち上がると、ショートカットの髪をかきあげた。

「また会いましょう」

彼女が差し出した手を、季奈子はそつと握り返した。

「はい、色々とありがとうございました」

傘をさして、フサと一緒に倫子一家を門の外まで見送った。

「きなこちゃん、大切に可愛がってあげてね」

ワタル少年に笑いかけると、彼は顔をまっ赤にして母親の後ろに隠れた。このあたり、今日び女子より男子のほうが恥じらいのあることが分かる。くるみなら、きつとお尻ふりふり踊りだすところだろう。

やがて三人を乗せた軽自動車走り去り、傘をたたんで家のなかへ入ろうとしたとき、季奈子は前庭に生える一本の木を見上げた。

雨のそば降る寒空に青々と枝葉をひろげ、フサの家の瓦屋根にしなだれかかるようにして伸びている。

「これ、金木犀かなあ。立派な木……」

「どこから種が飛んできたのかねえ。勝手にここへ根付いちゃって、気が付くとこんなに育ってしまったのさ。いつの間にか景色の一部になって、切り倒すにしのびなくてねえ」

季奈子は、子どものころよく遊んだ実家の庭にも、金木犀があったことを思い出した。秋の終りころに鮮やかなオレンジ色の花をつけ、その花弁から安眠感をもたらす強い芳香がしていたのを覚えている。きつと最初にこの家を訪れたとき、なんだか妙に懐かしいような気がしたのは、この金木犀が香っていたせいだろう。

思い出したようにフサが、ぼんと手を打った。

「そうそう、季奈子ちゃんにまた、お茶を分けてあげなくちゃね」

フサの家を辞したあと、季奈子はくるみを連れコーヒーショップ黒薔薇のぶ厚い扉を押した。ちょうど午後のティータイムの時間帯で、いつもなら店内は休憩中のビジネスマンやら買い物帰りの主婦でいっぱいのはずだが、この雨のせいか存外客の姿はまばらで、カウンターのなかでヒマそうにパイプをくゆらせていたマスターが、二人のすがたを見るなり嬉しそうに立ち上がった。

「やあ、いらっしやい。こんな雨のなかをよく来たね」

「こんにちは、渡瀬さん」

「やだなあ、マスターと呼んでくれたまえ」

「うふふ、こんにちは、マスター」

季奈子の隣で、くるみが気軽な調子で片手を上げた。

「おいっす」

「よお、くるみちゃん、この店へ来るのは久しぶりだね。今日はパリんと一緒にじゃないの？」

くるみの代わりに季奈子が答えた。

「牧村さん、今は北海道にいるんです」

「ああ、そういえばそんなこと言ってたっけ」

白いコートを脱いで二人がけのテーブル席へつくなり、くるみが上目づかにマスターを見上げた。

「ねえ、マスターのおじちゃんは、北海道へ行ったことある？」

「北海道かあ……」

きんきんと氷の鳴るコップを二人の前に並べながら、マスターが遠くを見るような目つきになった。

「大学生のころ二、三度スキーをしに行ったことがあるなあ。山へ上るとほんと一面の銀世界できれいだったよ。雪の質が違うのかなあ、こうさらさらしてて、風が吹くとその雪がぱあっと舞い上がってさ。日を浴びてきらきら輝いて、なんとも言えない幻想的な眺めだった……」

「いいなあ、くるみも一緒について行けばよかったよ」

「でも凄く寒いんだぞ、一日じゅう、まるで冷蔵庫のなかにいるみたいだし、くしゃみするとたちまち鼻水が凍って、つららのように垂れ下がるんだ」

うひゃあと身を縮めて、くるみが震え上がった。季奈子は苦笑しながらマスターを軽く睨んだ。

「だめですよ、純真なこどもにそんな嘘教えちゃ」

「寒いのは本当なんだけどなあ」

季奈子がコップの水に口をつけた。

「でもその寒いなか北海道まで行った甲斐あって、牧村さんみごと就職を決めたみたいなんですよ」

「やあ、それは良かった」

マスターは不意になにかを思い出したように、あっとつばやいた。「そうだ季奈子ちゃん、今日ここへ来たのはグッドタイミングだったよ」

「え？」

「いや、じつはさ——」

客が少ないのを良いことに彼は隣の席からイスをずりずり引っぱってくる、季奈子の斜め横にどっかり腰を据えた。

「俺の幼なじみに会計士やってるやつがいてさ、そいつが新しく経営コンサルタントの会社始めたんだ。ちょうど今、新しい人材を集めてるところで、どこかに若くて、明るくて、よく気がついて、おまけにガッツのある女の子いないかなって俺に訊いてくるから、季奈子ちゃんのこと話してあげたら、そいつえらく乗り気になつてさ」

「経営コンサルタントの会社ですか……」

「うん、会社っていつでも従業員十人くらいの零細企業なんだけど、でも他人にコンサルティングするくらいだから経営理念はしっかりしてるし、それに社長やつてるその男つてのは俺もガキのころからよく知ってるけど、苦学生だっただけあって、気さくですごく面倒見の良いやつなんだ。もし季奈子ちゃんさえ良ければ、すぐにでも紹介してあげるけど」

いきなり降って湧いたような話に少し戸惑ったが、しかし今後の身の振りがたに悩んでいる季奈子にとっては願ったり叶ったりの話である。マスター、もとい渡瀬課長の親しくしているひとが経営する会社ならば、おかしなことにはならないだろう。ただ、こっちで就職を決めてしまった場合、ひとつだけ気がかりと言うか心残りなことがあった……。

「だめだよ」

くるみが、マスターの顔を睨みつけて言った。

「季奈子おねえちゃんは、くるみやパパリと一緒に北海道へ行くんだから」

マスターはびっくりして季奈子のほうを見た。

「ええっ、そりゃあ本当なのかい？ 君たち、いつの間にそういった関係に……」

「ち、違います、私たちまだそんな……。もう、くるみちゃんつてば、勝手にそんなこと言わないの」

「だって！」

くるみは、ふてくされた顔でテーブルを睨みつけ、足をぶらんぶらんさせた。季奈子も赤い顔をしてうつむいてしまう。そんな二人の顔をしばらく見比べたあと、マスターはゆっくりと立ち上がって言った。

「まあ、季奈子ちゃんにも色々事情があるだろうし、返事は急がないから、ちょっとだけ考えてみてよ」

「……はい」

「そうだ、来月から新しくメニューに加えようと思っている自家製ケーキがあるんだ。お客に出す前に、ちょっと二人に味見してもらおうかな」

そう言つてマスターはカウンターの奥へ引つ込んでしまった。くるみは、相変わらずテーブルに視線を落としたまま、なにも喋らない。季奈子は、深くため息をついた。

「くるみちゃんは、ほんと、おませさんね」

「……おませじゃないもん」

「あまり大人の話に首を突っ込んじゃダメよ」

くるみは押し黙っていた。季奈子は、そつと窓の外に視線をやる。雨は相変わらず止む気配を見せず、空はどんよりと低かった。濡れた歩道に映りこむ信号機の青が、ゆつくりと点滅を始めて、やがて赤に変わった。

「牧村さん、きつとくるみちゃんにお土産買ってきてくれると思うな。なんだろうね、ちよつと楽しみだね」

「……おみやげなんて、いらないもん」

二人の会話はすぐに途切れてしまう。マスター、早く戻って来ないかな。季奈子はすぐのような気持ちでカウンターの奥を覗いたが、彼はどうやらケーキの解凍に忙しいようだった。仕方がないので黙ってグラスについた自分のルージユを見つめていると、くるみがぼろりと涙をこぼした。

「……今日ね、季奈子おねえちゃんが学校まで傘さして迎えにくてくれたとき、すごく嬉しかったの。だってクラスのみんなは、授業参観のあとママと手をつないで帰るのに、くるみはいつも独りぼっちなんだもん。くるみ、季奈子おねえちゃんにパパちゃんと結婚してなんてムリなお願いしないよ。でも遠く離ればなれになるのは、ぜつたいにイヤなの。おねえちゃんが北海道へ行かないなら、くるみも行かない。パパりんが帰ってきたら、はつきりそう言う」

やばい……。季奈子はじんわりと目が潤んでくるのを感じ、慌ててぎこちない笑顔をとりつくろった。

「うふふ、私もくるみちゃんのこと、だーい好き」

そこへ、ようやくマスターが銀色のトレイにショートケーキを二つ並べて現れた。どうやらレアチーズケーキらしく、皿の代わりに底の浅いカップに乗せられている。

「お待たせー」

二人の前に置かれたケーキは、鮮やかなオレンジ色をしていた。おそらくキャラロットやトマトなど色のついた野菜で味付けしたもの

だろうと季奈子は予想した。

「甘いものを食べない男性客のために、工夫を凝らしてボロネーズ風味にしてみたんだ」

「ボロネーズ？　ってことは、これミートソース味なんですか？」

「うん。チーズとは相性が良いだろう？」

「……」

季奈子とくるみは、目の前に置かれたケーキを凝視したまま、しばらく動かなかった。マスターはそんな二人を交互に眺めながら、にこにこしている。やがて意を決したように大きく息を吸い込んで、季奈子がフォークを手にした。

「では、いただきます」

「どうぞ、どうぞ」

おそろおそろ、ひとかけらを口へ運ぶ。予想した通りそのまんまの味がした。はつきり言って美味しくない。しかし機嫌良く微笑みかけてくるマスターを見ていると、とても正直な感想は言えなかった。

「どうだい？　けっこう自信作なんだけど」

「そ、そうですね、まったりとコクがあって、個性的な味です。あ、赤ワインとか合うんじゃないでしょうか」

「うんうん」

満足げにうなずいてから、今度はくるみのほうを見た。彼女は、くんとケーキのにおいを嗅いでから、不安げな視線で季奈子を見上げた。

「だいじょうぶよ、毒じゃないから……」。

季奈子は、目で力強くうなずいて見せた。

「いただきます」

くるみが、フォークの先でケーキをつついた。

「どうだい？　くるみちゃん」

「……ゲロまじい」

第二十九話

In a family restaurant

あの日、牧村は北海道から戻ってきたその足で季奈子の家を訪ねると、くるみとともに帰って行った。

「牧村さん。おつかれさま。就職が決まってよかったですね」「季奈子ちゃん、くるみを預かってくれてありがとう」そんな挨拶程度の言葉を交わしただけで、核心に触れることはなく、季奈子は拍子抜けしてしまった。くるみちゃんがいるんだもの、そんなものよねと思った矢先、駆け足で戻ってきた牧村が「また連絡するからね」と小声で耳打ちして行った事に結果的に安心できたのだが。果たして牧村から、夜中にメールがあった。そして今日、会うことになったのだ。待ち合わせ時刻は、午前十時。牧村の生活スタイルからいくと、くるみを見送ってほっと一息ついた時間であろう。

季奈子は、出かけるための支度をしていた。バッグの中に倫子からもらったタロットカードを収める。包みを手にしながら倫子に思いを馳せる。素敵なひとだった。近隣に住んでいれば、何かと頼っていたいお姉さんのような魅力を備えたひと。そんな倫子のどんな様もカードでゲットしたと言う。

しかし、季奈子は、占いのやり方など知らない。タロットカード占いを勉強した倫子だからこそカードの持つ力を最大限に発揮できたのではないか。いくら季奈子がカードの意味を倫子からレクチャーされたところで、有用に使えるのか、はなはだ疑問だ。マルセイユ版の復刻だと言うこのカードは、女帝が杖と鷲の紋章の盾を手にしてこちらを向いている。深く腰掛けた椅子の背もたれは、翼のようにも見える。このカードは繁栄や豊穡を意味するそうだ。占いにおいては、どこでカードが出現したのか、また他のカードとの関連性、読み手のインスピレーションによってその意味は無限に広がっていく。倫子は、フサと同じように不思議な力を備えている。タロット占いをしてもらった後、黒薔薇に立ち寄ったとたんに渡瀬から

仕事の話があつたのが証拠だ。そんな倫子から受け取ったカードは、意識せずとも運を引き寄せてくれる効力があると信じたい。

——そろそろ出かけなくちゃ。

季奈子は、シヨッピングバッグを肩まで引き上げた。今ごろ、くるみは学校での授業の真つ最中だろう。

——くるみちゃん。ちゃんと授業を受けているかしら……。

くるみを預かっている間、ずいぶんと夜更かしをさせてしまった。昨日、牧村が迎えに来たのだって、だいぶ夜も更けていたから、眠る頃にはさぞかし遅い時間だったのではないか。授業中、疲れて居眠りしてるんじゃないかしら。ふつと不安になった。くるみときたら、おしゃまで頭の回転が早いと思いきや、勉強のほうは苦手なようだ。くるみを預かっている時は、つきっきりで宿題をみてやった。つけ。もつともくるみはまだまだ小学校低学年である。そんなに勉強の事を心配するべきではないかもしれない。子どもは、ちよつとしたきつかけで変わるものだ。将来、なりたい職業ができて勉強を頑張り始め、ぐんと成績が伸びた子の話も聞いた事がある。それにくるみは勉強は苦手でも、しっかり者だ。生活力とでも言うのだろうか。難しい言葉をよく知っていて、大人とも対等に話をしている。それは早くに母を亡くしたくるみの防衛手段かもしれない。

——おねえちゃんが北海道へ行かないなら、くるみも行かない……。小さな体で精一杯に叫んでいたくるみの姿がよみがえってきて、

季奈子の胸がちくりと痛んだ。それでも牧村さんに会ったら、安易な同情やなんかではなく、わたしはわたしの思っている事を誠実に話そう。季奈子は、ブーツに足を差し入れた。外気の冷たさが季奈子を包む。コートの前をかき合わせ季奈子は身をすくめた。

——きつと北海道は、もつと寒いよね……。

——どんよりと曇った空を見つめた。

——北海道かあ……。

思いつきで気軽に出かけられるような場所ではない。飛行機を使えば早いのだろうが、交通費だつてかかる。行くのだと意を決しな

ければならないだろう。もうしばらくしたら、牧村もくるみもその北海道に行ってしまうのだ。見上げる空は、繋がっているけれどその先はあまりにも遠い。牧村たちとは、これきり会えなくなるかもしれない。季奈子は、ふうとひとつ息を吐いた。待ち合わせ場所のファミレスに着いたのは、十時に五分ほど前だった。店内は、客もまばらだ。

「いらつしやいませ……。おひとり様ですか？」

季奈子の行く手にピンクの制服をまとった女性の従業員が現れた。

「あ。いえ、待ち合わせなんです」

従業員の肩越しに店の奥に目をやると、窓際の席に座った牧村が軽く手を挙げたのが見えた。季奈子の胸がどきんとひとつ鼓動を打つ。

「あ、先に来ているみたいです……」

「そうですか。では奥のほうへどうぞ」

道を空け軽く会釈する従業員の脇をすり抜けて、牧村のテーブルにやってくるU字型の椅子の向かいに腰を下ろす。

「牧村さん。お待たせしてごめんなさい……。って、まだ十時前ですよね」

「うん。ちょっと前に来たところ……」

牧村の前には、コーヒーとそして山盛りになったフライドポテトの皿があった。

「え。フライドポテト……。なんで？」

「ここドリンクバーだけの注文ができないんだよ」

「えーっ。そうなんですか。わたし、なんにしようかな」

季奈子がメニューを広げると、牧村は、ひよいと皿の上のポテトをつまみあげるとちゃんとケチャップを先っぽに付け、口に放り込んだ。

「俺。好きなんだよね」

「え？」

季奈子は、メニューから顔を上げた。

「フライドポテト。うん、でも塩味の方がいいな……」

肘について小首をかしげる牧村に季奈子はくすつと笑った。

「牧村さん。子どもみたい」

「えーっ。そうかなあ……。たまに給食のない時、くるみに弁当作るんだけどさ。必ずこれ入れるんだよね。で、俺は残ったのつまむの」

牧村は、笑顔で一本をつまむとまたひょいと口に放り込み、コーヒーをすする。

「あはは……。子どもは好きですよ。フライドポテト」

「この素朴な味がいいんだよね。あ、季奈子ちゃん。好きなもの選んでよ。ここは俺のおごりだからさ」

「いいですよ。自分で払います。働いてるんだから。あつ……」

「がーん。俺、無職だよ……」

季奈子が再びメニューから顔を離すと、牧村がおおげさなゼスチャーでうなだれていた。

——わ、わたし、なんだか可愛くなかったかもー。

「い、いいんですよ。牧村さんは、内定をもらっているんだから……北海道に」

急に季奈子の声が弱弱しくなる。牧村が何か言おうとする前に、季奈子は、慌ててテーブルの呼び出しボタンを押した。現れた従業員にミルクレープとドリンクバーを注文すると、牧村に向き直った。「内定おめでとうございます。そうよ。わたしが牧村さんにおごらなくっちゃだわ……」

とつさに思いもよらず元気な口調で言い放った自分に季奈子は戸惑いを覚えた。

——いやだな。こんな風に会話の流れを持っていくなんて思っていないのに。

牧村が、少し困ったような表情を浮かべた。

「あのっ。わたし、コーヒー取ってきますね……」

季奈子は、席を立った。ドリンクコーナーで、カフェラテのボタ

ンを押す。

カップに落ちる液体をじつと見つめる。話題が早々に核心に触れるのが怖かった。コーヒーを注いでテーブルに戻るまでの時間が、今の季奈子に残された猶予時間だ。季奈子の頭の隅に女帝のカードの絵柄が映る。同時に倫子との会話も……。

——大丈夫よ。わたしには、タロットカードと言うお守りがあるんだもの。

力強くカップの取っ手を握ると季奈子は牧村のいる場所へと戻った。

第三十話 lovey dovey

席へ戻ると、牧村は携帯電話でだれかと話し込んでいた。用件はおそらく仕事に関することだろう、口調がいつもより改まっている。季奈子は硬いウッドチェアへ尻をすべり込ませると、湯気の立つカフェラテをひとくちすすり窓の外に目をやった。空も灰色ならば、街も灰色、通りを走る車も、デパートの正面を飾るショーウィンドウでさえくすんだ灰色に見えた。まるで街全体が、灰色に燻した巨大なフィルターに包まれているよう。きっと自分の心のなかが灰色に曇っているせいだ。そう思って季奈子は切なさを噛みしめた。はやくこの胸のつかえをおろしたい。携帯電話に向かって笑い声を立てている牧村を、ちよつと恨めしげに睨んだ。

やがて運ばれてきたミルクレープを、親の仇みたいに切り刻む。ずぶり――。

牧村さんの良いところ。

考えかたがいつも前向きで、一緒にいるとなんだか勇気がわいてくること。

ミルクレープのかけらを口へと運ぶ。ぽい――。

牧村さんの悪いところ。

のんびり屋さんで、ときに優柔不断なところ。

口のなかに、甘いバニラの香りが広がった。

ふたたびフォークの先でミルクレープを切り刻む。ずぶずぶ――。

牧村さんの好きなところ。

いっぱいある。

笑ったときに見える少し尖った八重歯。

いつも剃り残しのある白い喉ぼとけ。

柑橘系のコロンのにおいがする厚い胸。

心地良く響いて落ち着きのある低い声。

温かくて大きくて爪の伸びていない手のひら。

姿勢の良いちよつと気取った歩きかた。

素直で思いやりにあふれる言葉。

もっとたくさんあるけど今は思いつかない。

少し大きなかたまりを口のなかへ放り込んだ。ぱくり――。

牧村さんの嫌いなところ。

私を放っておいて、いつまでも電話してること……。

店内にはクリスマスソングが流れている。この時期だと、どこへ行っても判で押したようにクリスマスソングかもしれない。ジョン・レノンだ。そのメロディに操られるかのように、街中を行き交うひとたちの足取りもせかせかと忙しない。十二月を師走と呼ぶゆえんだろ。世界中が浮かれ、浮き足立っている。そんな雰囲気の中自分だけが取り残され、宙ぶらりんの情けない気持ちのままくすぶっている。そんなふうを感じ、季奈子はため息とともにフォークを置いた。

ようやく牧村が電話機を閉じた。

「ごめんごめん、向こうの営業所長つてのがせつかちなひとでさ、働きはじめる前からもうあれこれと仕事の相談をしてくるんだ」

「所長つて確か……、くだおれ太郎みたいなひとでしたっけ」

「そうそう」

「――ねえ、牧村さん」

「え？」

何かを言いかけて思い直し、季奈子は力なく首を振った。

「……いえ、なんでもないです」

皿に残っていたでっかいかけらをフォークで突き刺して、口のなかへ押し込む。も――。

「なんだよ、気持ち悪いなあ。言いかけたら最後まで言ってくれないと……」

「それより牧村さんこそ、私に話ってなんですか？」

なかば挑むようにして訊ねると、牧村は目を逸らし彼女と張り合うかたちでポテトを口のなかへ放り込んだ。それをコーヒ―で流し

込み、今度は思わせぶりに大きくひとつ息をつく。なかなか話しはじめるタイミングがつかめないらしい。じれったいなあ。季奈子はそれとなく水を向けてやった。

「牧村さんが北海道へ行ってしまったら、私たちもう会えなくなりますね」

「そう、そのことなんだよ、それで俺は……」

それで？ リスのようにくりくりした瞳で見つめられ、牧村は少したじろいだ。

「うん……それで、くるみのやつが北海道へ行きたくないなんて駄々をこねるんだ。季奈子ちゃんと別れるのは嫌だって」

あ、牧村さんずるい——。季奈子はきゅつと唇を噛んだ。くるみちゃんを引き合いに出して話をすり替えるなんて。悲しげな表情で季奈子に睨まれ、牧村はあわてて視線を逸らした。少し気まずい沈黙が流れる。なにか言わなきゃと彼がふたたび視線を上げたとき、また携帯が鳴った。

「やれやれ……」

ため息をつきながら手を伸ばすと、それより一瞬早く季奈子が電話機を奪い取った。驚いて目をはる牧村の前で、ぱちん、ディスプレイを開いて電源をオフにする。

「これでよし」

「……え、あの」

「この電話はただいま電波のとどこかないところにあるか電源が入っていないため繋がりません」

牧村が苦笑する。

「今日の季奈子ちゃん、なんだか迫力があるね」

「女帝ですから」

「え？」

「いえ、こつちの話」

電話機をそつと返すと、牧村はそれを革ジャンの内ポケットへ突っ込んだ。

「ねえ、もう一杯ずつコーヒー飲んだら店を出てちよつと歩かないか、外は寒いけど」

「いいですよ」

牧村はエスプレッソを、季奈子はミルクティを飲んでそのままフアミレスを後にした。

外は思っていたより風が冷たかった。まるで頬を突き刺すような向かい風で、季奈子は目を細め三重に巻いたマフラーに鼻まで顔を埋めた。ちりちりとした羅紗の肌触りが妙に心地よい。本当は互いにもっと寄り添って歩きたかったけど、まだちゃんと付き合ってるわけじゃないし、それに平日の昼間ということで人目も気になる。

二人は微妙な距離を保ちながら、慌ただしく行き交う人波を縫ってメインストリートを足早に抜けた。

線路に沿った道をしばらく行くと、その界隈でひとつだけ頭の飛び出た十一階建てのビルが見えてくる。派手な飲み屋の看板がつらなるテナントビルだ。夜になると電飾がきらきら輝いて誘蛾灯みたいにひとを引き寄せるが、今は色気のないくすんだ外壁を人目にさらしている。ビルのわきに、こんもりと木の茂る小さな稲荷社があった。その赤い鳥居の前でふと足を止め、季奈子が牧村の顔を見上げた。

「あ、この場所って、なんだか以前にも来たような気がします」

「俺も覚えてるよ、ほら、君や町村くんの歓迎会やったとき……」

「ああ、そうそう、思い出しました」

彼女が袋小路印刷に勤めはじめてすぐ、わりに年の若い社員だけが集まってこの近くの居酒屋で歓迎会をやったことがある。そのとき何軒か店をハシゴしたあと、みなで酔っぱらってここへお賽銭を投げたのだ。ぱんぱんと柏手を打って、季奈子も手を合わせた覚えがある。会社でみなとうまくやってゆけますように、素敵な出会いがありますように……。ちなみに同期入社の町村くんは学生気分が抜けきらないまま、その二週間後には会社を辞めてしまった。

「あのときは、可愛い子が入ったなって俺もちょっとドキドキしてたんだぜ」

「え、それって私のことですか？」

「他に誰がいるって。うちの社長、事務員は経験年数の長いおばさんしか雇わなかったから、若い子が入るの珍しかったしね」

「若けりやだれでも良かったんじやないですか」

「そんなことないさ、君が来てから急に会社へ行くのが楽しみになつたりしてね」

「ふーん」

近くの踏切で警報機が鳴り、轟々と電車の走る音がして会話が途切れた。立ち止まると足下からひしひしと冷気が這い上がってくる。季奈子はマフラーに顔を埋めたままコートの襟をかき合わせ、まっ白い息を吐き出した。

やがて電車が走り去る。

なんの前ぶりもなく、牧村が言った。

「なあ、俺たち付き合わないか」

「え……」

「ちゃんと恋人同士としてさ」

「……」

とつさに答えられなくて季奈子が黙っていると、形勢不利とみたのか今度は泣き落としにかかった。

「季奈子さま、お願いしますっ。俺もう北海道へ行ってからこのかた寝ても覚めても君のことばかり考えてて」

「あのう……もしもし」

「だめかな？」

本当に泣きそうな顔で見つめてくるので、季奈子はぶつと吹き出した。

「ばっかみたい」

「なんだよ、ひとがせっかく真面目に告白してるのに」

「もうー、いい大人なんですから、もっと格好よく口説いてくださ

いよ」

「いや、じつは昨日の晩からあれこれと決めのセリフを考えてたんだけど、いざ本人を目の前になるとダメなんだよね、俺――。むかしから演技は下手くそで、学芸会ではいつも大道具係をやらされていたよ……」

「本当に格好いい男のひとつで、自分を飾らないですよ」

「……今日の季奈子ちゃん、やっぱいつもと違うね」

「だから女帝なんですってば」

ふたたび電車の走り抜ける音がして会話がさえぎられた。一瞬だけ二人の存在する空間が、まるでこの世界から切り離されたような錯覚におちいる。ごごごーっと寒空に轟音の響くなか、牧村はそつと季奈子の肩に手を回し抱き寄せた。その力にさからわず、彼女はされるがままその厚い胸に身をあずける。かすかにタバコのおいがした。やがて電車が走り去ったあとの間抜けな静寂のなかで、牧村は季奈子の耳元に口を寄せてそつと囁いた。

「……じつはさ、今夜くるみは友だちの家にお泊まりする予定なんだ」

「もう、牧村さんったら、そんなとこばかり用意周到なんだから」
「仕事も決まったことだし、これからは強気でいくことにするよ」

「そついうのは、ちゃんと相手の気持ちを確かめたうえで……」
いきなり押しつけられた唇に、季奈子の言葉は遮られた。ヒールの細いパンプスが思いつきり背伸びをする。周りの景色も風の音も二人から切り離され、代わりにお互いの息づかいだけが相手の耳に直に伝わってくる。

このまま時が止まってしまえばいい。

キスしたまま、季奈子は自分の首から長いマフラーをはずし、牧村の首と一緒にもう一度ぐるぐると巻きなおした。

第三十一話 Sweet time

いったん唇を離すと角度を変え、ふたたび合わせる。そうやって何回のキスを繰り返しただろう。ようやく季奈子のかかどが地面に着地したとき、瞳からぼろりと涙がひとしずくこぼれた。

「どうしたの」

牧村が覗き込むように小声で訊いてきた。マフラーが落ちそうになりながらかるうじてふたりの首にかかっている。

「だって……」

かすれた声で季奈子が答えようとしたとき、ちりりとベルを鳴らし自転車にのったおじさんが通り抜けていった。季奈子がよろけるようにして牧村に体を寄せて道を空けると、すれ違いざままじまじと視線を寄越していく。

ずっと見られていたかもしれないと季奈子の頬が熱くなった。完全に自転車が見えなくなると、季奈子は言った。

「だって、牧村さんは、もうすぐ北海道に行ってしまうじゃないですか……」

「すぐ戻ってくるよ。季奈子ちゃんのところ。転勤願い出してさ」
牧村の指先が季奈子の顔を覗き込むようにして髪を撫でる。

「すぐに？」

季奈子は、訊ねた。牧村の会社の事情は知らないが気休めだと思ぐにわかる。そんなに早く転勤なんてありえない。ましてやあの所長。まだ勤めてもいない牧村に相談ごとをしに電話を寄越してくるくらいだもの。ひとたび勤めたら、

牧村が多忙を極めるだろうことは容易に難くない。

——そしてだんだんと連絡も途切れがちになり疎遠になって……自然消滅してしまうんだわ。遠距離恋愛なんてそんなもの。

そこまで考えたとき、季奈子の大きな瞳からまた涙がこぼれそうに

なった。せつかく心が通じ合ったと思ったのに離れ離れになってしまふなんて。

牧村がうるたえたように言った。

「いや、俺。本当はさ。季奈子ちゃんと一緒に北海道に行つて欲しいかな……なんて」

乾いた風が季奈子の頬を撫でる。ぐごご……と高架橋を電車が走り去つていく。心地よい音楽を聴くように季奈子は牧村の次の言葉を待った。

「俺が働き出したら、本格的に離れてしまふ。面接に行つてあるあいだずっとそれが気がかりでさ。どうしようかなつて……ちよ、ちよつと、季奈子ちゃん。もしもし？」

「何ですか？」

「季奈子ちゃんさ。なんだか冷静だね……」

「そんなことないです。わたし、さつきから牧村さんの話す事をじつと聴いてるのに……」

頬を涙が伝う。しかし、季奈子はそれを拭いもせず眉間にしわを寄せ軽く牧村を睨んだ。もどかしかった。牧村は、強引な態度に出たかと思えば、そのわりにはつきりとものを言わない。半分ふざけたような、ぼかしたような言い方が季奈子には、不満だった。もうこの東京で一緒に過ごせる時間は限られているのに。頭の上を行く線路は、大通りに沿つてうねっている。牧村と季奈子の眼前に繁華街の風景が戻ってきた。この街は騒がしすぎる。牧村は、季奈子の手を軽く握つた。季奈子もその手を握り返す。つないだ手から牧村の体温が伝わってくる。はた目から見てもきつと自分たちは、恋人同士に映るに違いない。ゆるやかな坂道を昇る途中に洒落た建物が見えてきた。入り口には、デザイナーズホテルの看板が掲げられている。一見するとビジネスホテル仕様なのか、はたまたシティホテルなのか判断しがたいところだが、それより少しカジュアルな感じだろうか。石畳の階段を二三段階降りると左右をクリスマス仕様のイルミネーションに飾られたドアが見える。

「牧村さん。これって……」

季奈子は、怪訝な表情で立ちつくした。

「ここ。所長が穴場だって教えてくれたんだよ。名刺までくれてさ。愛を語るには、ここがええでっせって……ここカラオケだってあるし、映画も観られればゲームにジェットバスだって……多目的に使えるんだ。ちよつとしたリゾート気分も味わえるだろ？」

牧村が楽しげに言った。ああ、やっぱりだ……と思う。天然なのだろうか。それともわざとなのか。季奈子の手を引いて奥に進もうとする牧村の甲を季奈子は思いっきりガリツと引つ搔いた。

「もうっ、ありえない。牧村さんのえっち。話ならわたしの家ですればいいじゃないですかっ」

「いてっ……。季奈子ちゃん。そりゃないよ……」

さっさとその場を離れもと来た道を歩いてゆく季奈子を慌てふためいた牧村が追いかけていった。

牧村の手の甲は白く筋が立ち少しかり血が滲んでいた。マンションに到着すると、すぐに季奈子は救急箱からキズ薬を取り出し、シユツとひと拭きする。

「うわ……結構、強く引つ搔いちゃったんだ。わたし。ごめんなさい。沁みますか？」

「うん。ちよつと。でもたいしたことないよ。痛いとか言うよりも俺は季奈子ちゃんに拒絶されたことのほうがショックだった……」

季奈子は、傷口に絆創膏を貼りながらうわ目遣いに牧村を一べつした。

「牧村さんが、あんなとこに連れて行こうとするからですっ」

「ははは。俺って落ち着きがないと言うか、すぐ調子にのっちゃうところあるんだよね……」

——やっぱり確信犯……。

季奈子は、小声でつぶやいた。「え？」と牧村が聞きかえしてきたが答えもせず、季奈子はキッチンに立った。狭い１LDKの部屋

にお茶の香ばしい匂いが立ち込める。

「じゃあ、これを飲んで落ち着いてください」

牧村は、湯飲みを受け取るとゴクリと一口を飲みこむ。

「美味しい。ああ、なんだかほつとするよ」

牧村はなおもお茶を口に運ぶ。

「季奈子ちゃんと毎日こんな風に向かい合って、お茶したり話したりできたらいいだろうなあって思うよ……」と言いかさ、季奈子ちゃんも一緒に北海道に行こうよ。そりゃあここでの生活があるからすぐには無理かもしれないけど……転勤の可能性をあてにしていたらいつになるかわからないし、その方がいいと思うんだ」

季奈子は黙ってうつむいた。確かに牧村の言うとおりだ。離れ離れになるのを回避するには、牧村が戻ってくるか季奈子が同行するか、ふたつにひとつしかない。

「牧村はん。うまくいったやろか……」

もはやトレードマークと化した赤いストライプのシャツに身を包んだ有田が、カウンターに陣取ってまぐる丼を食べている。隣で定食を注文した礼子が冷ややかに言った。

「所長ったら。さっきから、しょっちゅう牧村さんに電話したりして。今頃、彼女と一緒にいるかもしれないのにお邪魔ですよ」

「いやだって、礼子ちゃん。まだ昼間でっせ……」

有田が左腕の腕時計を指で指し示した。

「恋人同士に今が何時かなんて関係ないんですよ」

それだけ言い放つと礼子は、有田から視線を外すと目の前の定食に手を付けた。

第三十二話 in misfortune

定食屋のすみにある十四インチのテレビが、お昼のニュースを喋り終えたあと、ぽーんと正午の時報を打った。途端にわらわらと客が入りだし、八人掛けのカウンター席がすぐにぎゅうぎゅう詰めになる。有田は窮屈そうに身を縮め、ぞぞぞと茶をすすって言った。
「なあ、礼子ちゃん……」

礼子は箸を止めず、目線だけを有田に向けた。湯呑みを覗き込むようにしてため息をついていた有田は、そんな礼子をちらちらと気にしながら、おそろおそろきり出した。

「……うちのかみさん、めっちゃめっちゃ怖いひとやねん」
「はあ？」

この男は、突然なにを言い出すのやら。

礼子は付け合わせのサラダにドレッシングをかけながら、そつと有田の様子をうかがった。仕事中はバイタリティのかたまりみたいなひとだが、背中を丸めて茶をすすっている姿は、疲れきった中年サラリーマンだ。派手なストライプ柄のシャツの襟が、ところどころすり切れている。

「もうずうつと以前の話になるんやけど、わしがまだ神戸の営業所におったころ、一度だけかみさんに浮気がバレたことあってな。相手は、当時行きつけやったスナックで働いてた娘で、折り悪くたまわしが家で風呂入ってるときに携帯へ電話よこしてきよってん……」

「代わりに奥さんが出てしまった、というわけですね。よくある話です」

「わし土下座して謝ったんやけど、そんなときうちのかみさん、なあんにも言わんとただ、にたーっ笑いよってな」

有田がなんと情けない表情で礼子を見た。

「ぶすっ、いきなりわしのけつ果物ナイフで刺しよってん」

「あはは」

「あ、こら、笑いごつちゃないで、わし今でも和式便所でかがむたんにしんどい思いすんねん。刺された部分の皮がめりめりって引きつれて……」

「ようするに、これのことが言いたいのでしょう？」

礼子が、ブラウスの襟の部分を指でめくって見せた。白い首筋に小さな鬱血のあとがある。

キスマークだ。

「こ、これっ、あかんで、こんなとこではしたない、早よ隠しい」

「うふふ、大丈夫ですつて。奥さんと別れて私と一緒になつてくさい！　なんて、そんな無粋なこと口が裂けても言いませんから」

有田は丸眼鏡を外し、おしほりを広げてひたいに浮き出た汗をこし拭いた。

「……あのときはお互いべろんべろんに酔ってたし、わしも単身赴任ちゅうことで少々開放的な気分になつとった。不幸な過ちや、許したつて」

「あら、私は半分本気でしたけど」

礼子が、ぽりぽりとたくあんを噛み砕きながら屈託のない笑みを向けた。有田はおしほりを元通りていねいに巻きなおし、眼鏡のレンズに向かってふつと息を吹きかけながら言った。

「わし、こう見えても根は純情な男やねん、からかつたらあかん。

それに礼子ちゃん、本当は牧村はんに気があつたんちゃうの？　わしにはそう見えたけどなあ……」

礼子は箸を置き、膳に向かって「ごちそうさまでした」と合掌すると、立ち上がって有田の耳もとへ唇をよせた。

「……また誘ってくださいね、待ってますから」

そう囁いて、バッグを肩に引つ掛け颯爽と店を出てゆく。その後姿を茫然と見送りながら、有田はぶるつと身震いした。

「今度は、けつ刺されるくらいじゃ済まんやろな。……わし、いっそ転職しようかな」

朝から泣きだしそうだった空は、とうとう夕方になって霧のように細い雨を降らせ始めた。雪になる寸前の、冷たい雨だ。

季奈子は、牧村を送って駅までの道を一緒に歩いた。一本の傘に、二人寄りそうようにして濡れたアスファルトを踏む。ときどき互いの靴を踏みそうになって、足がもつれる。

「おっと、危ない」

「きゃあ」

転びそうになった季奈子を、牧村がしっかりと抱き止める。

「やだ、ごめんなさい」

「ははは、しっかり前を見て歩かないと」

「っていうか、傘二本あるんだもん、わざわざ二人して一本の傘にしがみつくないに」

「俺、相合い傘って一度やってみたかったんだ」

「もう……」

ぷつと頬を膨らませる季奈子だが、言葉とは裏腹に心は弾んでいた。彼女自身こういったシチュエーションを何度も夢に描いたことがある。なんだか楽しい気分になり、いつの間にか歌を口ずさんでいた。

あめふりおつきさん くものかげ

およめにゆくときゃ だれとゆく

ひとりでからかさ さしてゆく

「この歌、知ってます？」

そつと牧村の横顔を見上げる。彼は前を向いたまま目を細め、楽しそうに歌のあとを継いだ。

からかさないときゃ だれとゆく

しゃらしゃら しゃんしゃん すずつけた

おうまにゆられて ぬれてゆく

「——だろ？ この前風呂に入ったとき、くるみに教えてもらったよ」

「ええっ、牧村さん、まだくるみちゃんと一緒にお風呂入ってるんですかあ？」

「……え、まずいかな？」

「まずいですよ。女子って男子に比べて体が成長するの早いんですよ」

「うむむ——。じゃあ、もう一緒に入るのよすか。でもあいつ、ひとりで入って言ったたら淋しがるだろうなあ……」

「だいじょうぶです、今度は自分ができるみちゃんと一緒に入りますから、とはさすがに言えなかった。」

駅が見えるところまで来ると彼は「じゃあ、ここで」と言っ自分分の傘を広げた。

「北海道へ行く前にもう一度連絡するよ。また遭ってくれる？」

「うん」

「それじゃ」

「ばいばい」

遠ざかる牧村の背中が駅の入り口へ吸い込まれるのを、手を振って見送った。

彼女はけっきょく牧村と約束をした。告白されて、キスして、そして北海道へ一緒に行く約束をしてしまったのだ。彼のコロンの香りが、まだ鼻の奥に残っている。もう後戻りなんて出来ない。

私は、将来あのひとのお嫁さんになる。

まだ正式にプロポーズされたわけじゃないけど、きっとそうなる。

……気がする。

いえいえ、絶対そうなってみせる。

自分自身へ言い聞かせるように、うん、と力強くうなずくと彼女は踵を返し、今きた道を引き返していった。

マンションへ帰り着くころには、すっかり土砂降りになっていた。アスファルトが景気よく水しぶきの花を咲かせている。

「うひー」

半分濡れネズミになりながらエントランスへ駆け込むと、前髪が

らばたぽたと雫がしたたり落ちた。

「牧村さん、ちゃんと帰れたかしら……」

郵便受けをチェックして階段を駆け上がり、自分の部屋のドアにキーをさし込む。

「あ、電話鳴ってる」

部屋の中から電話の呼び出しが聞こえていた。自宅のほうへ電話が掛かってくるなんて珍しい。急いでドアをあけ、靴を脱ぐのもどかしく部屋へ駆け上がると、あわてて受話器を取った。

「はい、志浦です」

叔母の幸子だった。

「ああ、もう、季奈子ちゃんにしまったん、うち何べんも電話掛けたんよ」

そういえば、携帯電話の電源は切ったままだった。

「やだ、ごめんなさい」

あわててスイッチを入れてみる。留守電にメッセージが七件も入っていた。はじめの三件は母からで、残りはすべて叔母からだった。「季奈子ちゃん、よく聞きたい。今からすぐ迎えに行くから、富山の実家へ帰る準備しとってや」

「え？ あ……」

「あんたのお父はんな、今朝がた自宅で倒れはったんよ」

「ええっ」

季奈子は、ぎゅっと受話器を握りしめた。背中から嫌な汗がぶわっと吹き出す。

「あの、あの……」

「脳溢血やって。救急車で病院へ運び込まれて、これから緊急手術を受けることになるらしいねん。とにかく今からタクシー拾って迎えに行くさかい、出掛ける準備して待つとってや、ええな」

そこで電話は切れた。しばらく受話器を握りしめたまま茫然と佇んでいた。

父が……倒れた。

季奈子は、まるで夢遊病者のようにふらふらと寝室へ行き、洋服ダンスから引っぱり出した着替えをベッドのうえにならべ始めた。

「……お父さん」

季奈子の父はまだ還暦を過ぎたばかりで、いったん定年退職した会社でふたたび嘱託として働いていた。生まれつき壮健なひとで、めったに病気などしたことはなかったが、まあ難を言えば、大酒飲みでいつも血圧は高めだった。でも、まさか倒れるだなんて……。

なかば上の空で、ベッドのうえにならべた着替えをカバンに詰める。容態しだいでは、しばらく帰れないかもしれない。それに、もし万一のときには……。

そこまで考えたら急に心細くなって、季奈子はその場にへたり込んでしまった。意思とは関係なく、涙がぼろぼろとこぼれてくる。気をしっかり持たなくちゃ。唇を噛みしめ、なんとかカバンへ荷物を押し込んだところへ、ちょうど玄関のチャイムが鳴った。

「季奈子ちゃん、迎えに来たでえ」

叔母の声だった。

「は、はい」

とにかく一刻も早く病院へ行かなくちゃ。

戸締まりとガスの元栓を確認してから大急ぎでカバンを抱いて玄関へ行った。少し迷ったが、歩きやすいようにスニーカーをはいてゆくことにする。

「準備ええ？」

「あ、はい……」

叔母が、玄関のドアを少し開いて顔をのぞかせた。とたんにスニーカーのヒモがぶちっと切れた。

第三十三話 Drink in frustration

「季奈子ちゃん？」

叔母が、再び玄関のドアを開ける。

「あつ、ごめんなさい。すぐ行きます……」

季奈子は、とっさにスニーカーを脱ぎ捨て、通勤用のパンプスに履き替えた。

縁起でもない。変に気を回していつもと違ったことをしようとするからだ。かぶりを振ると季奈子は、震える手でマンションのドアに鍵をかけて、叔母とともにタクシーに乗り込んだ。シートに体をうずめ、遠くで叔母が行き先を告げている声を聞いた。母はどうしているだろうか。何回も電話してくれたのに、全然気づかなかった。親不孝な自分。思いをめぐらせるうちにまた涙がぼろぼろとこぼれてきた。

——やだ。もつとしつかりしなくちゃ……。

季奈子はバッグからハンカチを取り出して眼を押さえた。叔母は、そんな季奈子の肩にそつと手を乗せてなだめるようにぼんぽんと叩いた。

「大丈夫や。大丈夫。お父はん。成美病院に搬送されたんやて。あすこは、脳外科で有名なところやから、県外からも患者さんがたくさん来るいうとったわ。手術だつて数え切れなくらい成功させてるらしいで。だから、きつと季奈子ちゃんのお父はんも。な？」

季奈子は、こくんとうなずいた。不幸を一身に背負った幸子おばさんだなんて避けたりもしたが、こんなときに頼りになるのはやはり血の繋がった叔母なのだ。それから、叔母に導かれるままどこをどうやって帰ってきたのかも覚えていない。季奈子自身、まるで夢の中にいるようだった。いや夢ならばどんなに良いだろう。不思議なことに富山に帰るまでには、叔母と一緒にいるにも関わらず、トラブルにぶちあたることはひとつもなかった。ようやく病院に辿

り着いたところは、午後九時を回っていた。夜間通用口から長い廊下を小走りに急ぐ。ほどなくして廊下に佇む母の姿が見えた。

「季奈子に幸ちゃん……」

母の目線が二人を捉える。

「お母さん。お父さんは？」

「いま手術を終えて眠つとる。季奈子、連絡したのにどこかに出かけとったん？」

「ごめんなさい。携帯の電源を切ったままでしたら気づかなくて」

「それで義兄さんの容態はどないや？」

叔母が尋ねた。

「あとは、意識が戻るのをまつしかないがよ。いつ目覚めるか……」

「ほんま、びっくりして、心臓がひっくり返るか思うたわ。お義兄さん。こないだ会った時はあんな元氣そうやったのに」

「お酒飲みだつたからねえ。日頃から血圧が高くて。先月、佳乃子に言つて無理に医者に連れてつたばかりだったんよ。その矢先にこんなことになって」

佳乃子と言うのは、五つ違いの季奈子の姉である。姉はついさっきまで母に付き添っていたものの、家族としてはもう何も出来ることはないと知つて、ひと足先に自宅に戻つたと言う。母は、叔母に連絡を取つたいきがかり上、季奈子たちが来るだろうからと病院に残っていたらしい。季奈子と叔母は仰々しい集中治療室の鉄の扉を見つめた。そして父の顔を見る事もできないまま、母と一緒にその場を後にしたのである。守衛室の前で叔母と季奈子は無言のまま長いすに腰掛けた。母が公衆電話からタクシーを呼んでいる。

季奈子は、ふといつかの牛井屋の店長のことを思い出していた。「不慮の事態が起こった時は、まずタクシーを呼ぶもんだよ。決して自分で車を運転して行かないこと。動揺して事故ったりしないようにね。タクシーに乗って、後ろの席に座って気持ちを落ち着けることだ」

——まったくその通りだわ。

タクシーに乗っている間すら季奈子は、落ち着かなかったのだから。約九ヶ月ぶりに帰る自宅は、季奈子が上京するときとなんら変わらなかった。しばらくはこの家で過ごす事になるだろう。父の意識が戻って、状態が落ち着くまでは。季奈子は考えをめぐらせる。

明日にでも牛井店に連絡を入れなくてはならない。しばらく休暇を取る事になるだろう。それから牧村にも連絡をしなければ。折角、気持ちに通じたと言うのに牧村が北海道に旅立つのを待たずに会えない状況になってしまった。それにしても今日はいろんな出来事があった。最高に幸せな気分から、一気に不幸に叩きつけられたような気がする。

――牧村さんに会いたい……。今すぐにでも。

とにかく今の状態を牧村に伝えなくては。季奈子は、携帯を手に牧村に向けてメールを打った。

自分の部屋に帰った礼子はコンビニで買ってきた缶チューハイのプルタブに手をかけると、ぷしゅーっと音をさせて口を開いた。そのままぐいっとひとくちをあおると、甘い甘い巨峰の味が広がる。

「ぷはぁーっ」

ジュータンの上にべた座りになりベッドを背もたれに柿の種をつまむ。そしてまた缶チューハイをひとくち。たちまち缶の中身が半分以下になる。こんなものジューズといっしょだ。二、三本なんかすぐに空ける。それくらい呑んではじめてふわりと心地よい気分にあたるだろう。

――有田のやろー。わたしが牧村に気があるですって？

気に食わない。だいたい牧村に会ったのはたったの一日だ。確かに牧村は好感度の高い男で、話もそこそこにはずんだ。でも彼女のいる男だとわかっていいるから、はなから対象外である。有田は、牧村のことを引き合いに出して、じぶんから気を逸らそうと必死で取りつくろってるようにみえる。

――ふん。小心者のおっさん……。

またひと粒、礼子は柿の種を口に運んだ。しかしそのうちにまどろっこしくなってきた。小袋サイズの柿の種をざーっと手のひらに出して一気に口に放り込み、ピーナッツと一緒にぱりぱりと噛み砕く。それを缶チューハイで流し込む。一本めが空になった。礼子は次にオレンジ味のカクテルを選んだ。柿の種をもう一袋破る。だんだんと血の巡りが良くなってくる。ふわりと気分が高揚してきて顔が少し熱い。礼子は、息苦しくなってブラウスのボタンをいくつかはずした。

小さな鬱血のあと――かろうじてブラウスの襟に隠れる箇所にあった。確かこのへんだっただろうか。指先でなぞってみる。

――あの晩……。

予約時間を超過し一軒目の居酒屋を出た礼子と有田は、そのまま帰宅するでもなく酔い覚ましにガード下を歩いていた。そのうちに礼子は、北海道に出てくる前に第一堂で手痛い失恋をしてしまったことを有田に告げていた。礼子が話し終わると、有田は言った。

「見る目がないお人でんなあ。礼子ちゃんは、魅力的や……わし、いつもどんなに助かつとるか」

そして有田は、礼子のことを褒めちぎってくれたものだ。多分にお世辞が混ざっているにしてもそれは礼子にとって心地よいことだったのだ。そして、有田がすごく頼りがいのある男に見えたのだ。気がつくのと、礼子是有田に誘われるまま、ホテルの門をくぐっていた。ホテルの中でも有田は礼子を褒める事を怠らなかった。

「礼子ちゃんは、いい娘や。ずつとわしの片腕でいて、な？」

有田の指先がフェザータッチで礼子の体を這い回り、唇は「約束やで」と礼子の首筋を強く吸った。礼子は、喜びと快感に身を震わせ、うっとり和有田の言葉を聴いていたものだ。

しかし、奥さんの影におびえる今の有田はそのときの頼もしさのかけらもない。

――ふんっ、男なんか、男なんかっ……。

礼子は三本目の缶を空にすると、化粧も落とさないままぐうぐう

といびきをかいて寝入ってしまった。

第三十四話 Oh! daddy , daddy

季奈子の父が意識を取り戻したのは、病院へ担ぎ込まれてから五日後のことだった。

とても寒い日で、未明から絶え間なく雪がちらついていた。ぽつてりと水気をふくんだ牡丹雪だ。それはやがて路面をシャーベット状に覆い、自動車が行き過ぎるたびに冷たいしぶきとなって跳ね上がった。空はどんよりと低く、冬枯れた街路樹が乗せた雪の重みでしな垂れている。たまに風が吹くと、その枝に乗った雪がびちやびちの固まりとなって地上に落ち、通行人を驚かせた。

街は、あきらかに冬のよそおいを見せ始めていた。

クリスマスまであと少し、街も人も、なんだか熱に浮かされたみたいに異様なエネルギーを孕んで、ざわついていた。

季奈子の父の手術は成功だった。術後の経過も良好で、担当医によれば意識さえ回復すればあとは割と早い時期に退院できるかもしれないということだった。しかし父が入院して三日目の晩に、今度は母が倒れてしまった。連日の看病による過労とストレスが原因だった。しばらくは静養させたほうが良いということになり、今は姉のマンションで面倒を見てもらっている。倒れた当初、季奈子はずいぶん心配したもののだが、昨日姉に電話してみたところ、もうすっかり元気になって孫を相手にお手玉やらあやり遊びに興じているらしい。とにかくそんなわけで、父の世話は必然的に季奈子の仕事となり、この五日間というも、彼女は欠かさず病室に詰めていた。

その日もいつものように近くの喫茶店で味気ない昼食を済ませた後、もはや定位置となっているベッドの横のパイプ椅子に腰掛けてファッション雑誌をぱらぱらめくっていた。清潔そうな白いカーテンの向こうで、雪がくるくると渦を巻いて降っている。なんだか雑誌の内容に集中できず、彼女は窓の外に目をやりながら何度も

ため息をついていた。と、不意に喉にからみつくしわぶきの音が聞え、反射的に雑誌から顔を上げた。

父が目を開けていた。季奈子のほうを見ながら、しきりに目を瞬かせている。

「……なんちゃ、そこにおるがは季奈子じゃないけ？」

かすれた低いつぶやきだったが、間違いなくいつも聞き慣れた父の声だった。季奈子はあわてて椅子から立ち上がり、身を乗り出して言った。

「お父さん、気がついたのね」

「……ここは病院け？　なんでわしはこんなところにおるがや」

「お父さん、テレビの相撲中継観てて突然倒れたのよ、もう五日も前のこと。でも良かった、もしかしたらこのまま目を覚まさないんじゃないかって心配してたところなの」

不思議そうにしよぼしよぼと瞬きをくり返す父の顔を覗き込んで、季奈子は心配そうに言った。

「ねえ、苦しくない？　看護師さん呼ぼうか？」

「なん、大丈夫だ。それより母さんはどこ行った？」

「う、うん……」

倒れたなどと言えば父が心配すると思って、季奈子は嘘をついた。

「母さんね、今着替えを取りに帰ってるの。明日になったら、またこっちへ戻って来るわ」

「そうか」

安心したようにうなずいてから、今度は急に季奈子の顔を見てまぶしそうに目を細めた。

「……それより季奈子、お前ずいぶんと久しいじゃないか。ぜんぜん連絡をよこさんからわしも母さんも心配しとったんだぞ」

「やだもつ、なに言ってるの、私お盆にはちゃんと家に帰ったじゃない」

「いや、そんなはずはない。だいいち帰ったのならこのわしがちゃ

んと覚えとる。お前とは、もうかれこれ五年近くも会つとらんだらう」

どうやら父は記憶が混乱しているらしかった。そういえば担当医に、術後しばらくは意識が混濁するかもしれないが、じきに回復するので心配はないと言われた記憶がある。

「それにしても、お前しばらく見んうちにずいぶんと綺麗になったなあ……。どうだ、もう恋人はおるのか？」

急にそんなことを訊かれ、季奈子は少しどぎまぎした。この五日というもの、父の意識が戻ったらあれを話そう、これを話そうとずっと考えてきたのに、なんだか調子が狂ってしまう。なんと答えていいか分からず父の呑気そうな顔を眺めていると、ふとその顔に牧村の顔が重なって見えた。そうだ、いつかは父にも話さなければならぬ。なら、いつそ今ここで説明してしまおうか。牧村のこと、一緒に北海道までついてゆく約束をしたひとがいるということ……。

「……あのね、お父さん」

「ん？」

「じつは私ね、今好きなひとがいるの」

「ほう」

「前に勤めてた会社の同僚でね、すっごく良いひとなのよ」

「……そうか」

「でも、ちょっとお人好しかな。そういうところは、なんかお父さんと似てるかも」

「……」

「それでね、お父さん。元気になったら一度彼と会ってもらいたいの」

「……」

「ねえ、聞いている？」

返事がない。

「お、お父さん？」

あわてて顔をのぞき込むと、父は穏やかな表情をしたまま目を閉じていた。鼻先にそつと耳を近づけてみる。ゆっくりとした寝息が聞える。どうやら、ふたたび眠ってしまったようだ。

もう、お父さん……。

また目覚めますかとしばらく待つうちに、今度はくうくういびきをかき始めたので、いったん病室を出て父の意識が戻ったことを姉たちに知らせてくることにした。父のひたいに軽く手を当ててから、静かに病室を出る。途中ナースステーションに寄って、いつも検温に来てくれる看護師のお姉さんに父の意識が戻ったことを伝えた。

「あら、良かったわね。じゃあすぐに先生を呼ばないと」

内線電話に手を伸ばしかけた看護師を、季奈子が押しとどめる。

「いえっ、あの、またすぐに眠ってしまったものですから」

「そうなの……」

ちよつと小太りの、気の良い看護師は苦笑して言った。

「じゃあ今度目を覚ましたときには、すぐに私たちに知らせてくださいね」

「あ、はい」

「でも、お父さん意識が戻って良かったわね」

「ええ、だから今母や姉にも知らせてこようと思って」

ナースコールが鳴ったので、看護師は受話器を持ち上げながら早口で言った。

「わざわざロビーまで下りなくても、この先にあるレストルームで携帯電話使えるわよ」

「そうですか、どうも」

院内は携帯電話の使用が禁止されている。季奈子は言われたとおり、入院病棟の一番奥にあるレストルームへ向かった。ここには休息用のイスやテーブルの他に、コーヒーやジュースの自動販売機が置かれている。ガラス張りの扉を押し開けると、ちょうど患者が昼寝をする時間帯なのか中はずいぶん閑散としていた。見ると、

腕に点滴の針を刺した老人が窓際にある小さなテレビをぼんやり眺めているだけで、あとは誰もいなかった。季奈子は自動販売機で小さな紙パック入りの乳飲料を買うと、ストローの先を口に含みながらバッグから携帯電話を取り出した。

「ええと、お姉ちゃん、お姉ちゃんの番号はつと……」

姉の自宅に電話するつもりだったのが、無意識のうちに牧村の番号へコールしていた。

やだもう、なにやってんのよ、私……。

しかし『切』に伸ばしかけた指が止まる。なんだか無性に彼の声が聞きたくなった。

「そうだわ、牧村さんにも一応父の意識が戻ったことを伝えておかなくちゃ」

父が倒れたことは牧村にも知らせてある。きつと心配してくれているに違いない。というのは言い訳で、とにかく声だけでも聞いて会えない淋しさを紛らせたかった。

呼び出し音が鳴るあいだ、ヨーグルト味の乳飲料で喉をしめらておく。すると、出し抜けに電話口から元気の良い女の子の声が飛び込んできた。

「えー、パパりんは、ただ今電話に出ることができません。ご用のあるかたは、ぴーつという発信音のあとに、メッセージを……」

そこで声が止まる。

「……あれ、もしかして季奈子お姉ちゃん？」

電話に出たのは、くるみだった。

「あら、くるみちゃん……元気してた？」

「うん、くるみは一年じゅう元気だよ」

「ふふ……、そうね」

「そう言う季奈子お姉ちゃんは？ 元気なの？」

少し甘えた声で訊いてくるので、季奈子はくくつと笑いを噛み殺して言った。

「ふふん、お姉ちゃんも一年じゅう元気、元気——。でもくるみち

「やん、よく私からの電話だって分かったわね」

「たぶんテレパシー」

「そうか、私たちテレパシーでつながってたんだ」

「ここでのくるみの声が少し低くなる。」

「そんなことより、お姉ちゃん」

「……ん？」

「お姉ちゃんは、くるみたちと一緒に北海道行くんだもんね」

「う、うん、そのつもり」

くるみの声はさらに低くなる。

「嘘じゃないよね」

「う、嘘じゃないよ……」

「ぜーったいに嘘じゃないよね」

「バカねえ、私がくるみちゃんに嘘つくわけないでしょう」

「……ほんとに？」

「ほんとよ。くるみちゃん、お姉ちゃんのこと信じてないの？」

しばらく間があって、

「……うん、分かった」

「やっど、くるみの声が元の明るい調子に戻ったので、季奈子はほつと胸をなで下ろした。」

「それでくるみちゃん、あの……お父さん今そこにいるの？」

「おトイレで、うんちしてる」

「あら……」

すると、ちょうどトイレから出てきたらしい牧村の声が受話器の向こうから聞えてきた。

「こらっ、くるみ、ひとの電話勝手にいじって、お前今だれと話してるんだ？」

「えへへ、季奈子お姉ちゃんだよーん」

「なに？ ばっかつ、その電話機こっちへよこせ」

「やだよ、びーだっ」

「こら待てっ、くるみっ」

電話の向こうから、牧村の叫び声と、きやつきやとはしやぎ回るくるみの声が聞えてくる。どうやら電話機を奪い合つて鬼ごっこしているらしい。

しばらくして、

「こら、やつと捉まえたぞ、このいたずらお嬢ちゃんめ」

「やーん、くるみのお洋服引っぱっちゃやダーっ」

そこでようやく電話の音が牧村に代わった。

「あー、もしもし、季奈子ちゃん？」

電話の声とともに牧村の息遣いが聴こえてきて心が躍る。

「もしもし……」

「どう？ お父さんの具合は」

開口一番に牧村が尋ねてきた。無理もない。あの日は、一刻も早く富山に戻らねばならなかったのだから。牧村には、事後報告にならざるをえなかった。

「ええ。少し前にお父さんの意識が戻ったの」

「本当か？」

「うん。お父さん、またすぐに眠っちゃった」

「とりあえずは、安心していいんだね？」

「ええ。お医者さんがお父さんの意識が戻れば大丈夫だって言ってくれたから」

「よかった。俺、心配でたまらなくてさ。ああ……そうか。よかった……よかったなあ」

冷静になって考えると、ここしばらくは父の付き添いにかかりつきりで、牧村には、ほとんど連絡を取っていなかった。タクシーの中からメールしたほかは富山に到着してから、電話を一回したきりだったのだ。牧村の声を聴いて、今電話してよかったと季奈子は思った。季奈子は、父の手術から今までのことを牧村に話して聴かせた。

「あの……牧村さん。そんなわけで、わたし、まだしばらくは戻れないと思うの。北海道に行くのだって、少し遅れて行くかたちになるかもしれない。父の意識が完全に戻って、落ち着かないことには」
「そんなの、あたり前じゃないか。富山でゆっくり親孝行しておいで。俺もさ、早く来てくれって所長にせつつかれるんだけど、何せ北海道だろ。すぐにはいかないよ。アパートだってまだ決まっていないし、くるみの転校の手続きだって必要だし」

「わたしも牧村さんのお手伝いができたらいいんだけど……。ごめんね」

「いやいや、これって完全に俺の都合だろ？　また連絡するよ。あの、さ。季奈子ちゃん」

「え？」

「一緒に来てくれるって言うてくれて、ほんとに感謝しているよ。俺、今、すごく充実しているんだ。これから新しい会社でばりばり仕事してさ、頑張るよ」

「うん……」

「だから季奈子ちゃんもしっかりお父さんのこと、看病して」
「うん」

「くるみも季奈子ちゃんが来てくれるのを楽しみにしてる。あつ、もちろん俺もただけどさ。ははは……」

ほのぼのと温かさが沁みてるのは、院内が適温に保たれているばかりではないだろう。四角い窓の向こうでは、牡丹雪が舞っている。この雪は、根雪にはならないだろう。富山で本格的に雪が降るのは、年が明けてからなのだ。やがて、レストルームにまばらに人がやってきた。廊下から夕食のワゴンががらと運ばれていく音が聴こえる。姉にも父の意識が戻ったことを伝えなくちゃ。そして病室に帰ろう。

「あの、牧村さん。わたし、これから姉のところにも電話するから、これで切るね」

「うん。お父さんお大事にね」

「ありがとう。牧村さんと話せてよかった」

「俺も。電話、嬉しかったよ。じゃあ……」

ピツと、牧村との通話を切ると、季奈子は姉の自宅のボタンを押した。

「はい。志浦です」

電話口に出たのは母だ。姉は、嫁いで実家からはスーパの冷めな距離にあるマンションに住んでいる。ついっかかりと志浦の名前

が出てしまったというところだろう。

「もしもし？ わたしだけど……」

「ああ、季奈子？」

電話の向こうで、ギギギ……とテーブルの椅子を引くような音。

かちやかちやいつているのは、食器だろう。ちょうど姉は、夕飯の支度をしているようだ。

「あ。お母さん？ あのね、お父さん。さっき意識が戻ったのよ」

「えっ、本当け？」

「うん。またすぐに眠ってしまったんだけど。ちゃんと話もしたのよ」

季奈子が話しか話し終わらないうちに「ちょ、ちょっと……佳乃子！」と母が叫ぶ声が聴こえる。

「お父さん、意識がもどったって」続いてぱたぱたとスリッパの音とともに「ほんと？ わあ、よかった」姉の声も聴こえてくる。ガサガサと言うノイズに続いて再び母の声が飛び込んできた。

「季奈子。母さん、すぐに病院に行くちゃ」

「待って……。お母さん。お父さん、一回目が覚めたけど、すぐに眠ってしまったのよ」

「なんだ。そうかいね……」

「だからお母さん。あわてなくて良いのよ」

「お父さん。また眠ってしまったんかいね」

母はがっかりしたように季奈子の言葉を繰り返した。

「うん。少し話せたんだけど、わたしの事、五年ぶりにあつて綺麗になったなんて言うのよ。ほら、先生が意識が混濁することがあるって言ってたじゃない」

「大手術だったからねえ……無理もないちゃ。ああ。とにかくよかった。母さん、ごはん食べたらすぐ病院行くちゃ。お父さん。またいつ目が覚めるかわからんがやる？ 季奈子は、ここ来て食事しられ」

「うん。そうする。お母さんが着いたら交代するね」

レストルームの中では、付き添いの家族らしき人が食事を摂っている。さっきのテレビを見ていた老人の姿はもういなかった。季奈子は病室に戻った。

「季奈子ちゃんのお父さんの意識が戻ったんだってさ」

季奈子からの電話を変わってから、くるみはぴったりと牧村にくっつくようにしていた。不安そうな表情で牧村を見上げている。

「ほんと？　ねえ。パパりん。季奈子おねえちゃん。ほんとにくるみたちと一緒に北海道に行けるんだよね」

「ああ、もちろんさ」

「季奈子おねえちゃんのパパ、まだ病気なんでしょう？」

「うん。でもね、パパりん。電話でよかったって言ってただろう。」

季奈子ちゃんのお父さんは、無事手術が成功してあとは回復するのを待つだけなんだ。たしかにお父さんのことがあるから、季奈子ちゃん、すぐには戻ってこれないと言ってたけど」

「いつまで？　ねえ。おねえちゃん。いつ戻ってくるの」

くるみが牧村の腕をつかんで揺する。

「それは……わからないよ」

「くるみ。心配なんだよ。おねえちゃんが富山に帰っちゃって、もう戻ってこなかったらどうしようって」

「はは……。くるみ。大丈夫だよ。季奈子ちゃんは、ちゃんと北海道に行くって約束してくれたんだから」

牧村は、くるみの頭を撫でると携帯を握りなおした。有田に連絡を取っておこうと思いついたのだ。先日、季奈子に会って以降、有田には牧村のほうから、フォローの電話を入れたのだが、それつきりだった。せわしなく仕事の電話をかけてくるあの所長にしては珍しい。牧村は、茂樹とも連絡を取りあっていたから、気になつてそれとなく所長のことを訊いてみたが、別段、何も変わったことはないと言う。

あまり俺にあれこれと電話をするのを、おおかた礼子あたりに注

意されたのではないかな……。そんな風に思いながら牧村は、アドレス帳から有田の番号をプッシュした。ところがなかなか有田は、電話に出ない。もしかして、体調でも悪いのだろうか。奇抜な服装で破天荒なイメージのある有田だが、あれでなかなか繊細なところがありそうだった。

「はい」

ようやく有田が出たのは、八回目のコールの後だった。

「あ、牧村です」

「ああ、牧村はん」

気のせいだろうか。声がよそよそしかった。もしかしてまずいタイミングで電話してしまったのだろうか。

「すいません。お取り込み中でしたか。今、大丈夫ですか？」

「ああ、かまへんよ……」

やはり有田の対応は、つつけんどんな感じがした。いくぶんひるみながら、牧村は続けた。

「あの、彼女のOKが取れたので、今、急いでマンションを探しています。そちらに行く具体的な日など詰めたいのですが」

「あ。その件やけど……。少し待ってくれまへんか？」

「えっ、どういうことですか？」

「わしなあ、転勤が決まりましたん。北海道営業所は、今月限りや。それでちよつとばたばたしてましてなあ……」

牧村は、耳を疑った。自分を引っ張ってくれた所長がいなくなる……。では、俺はどうなるのだ。すでに働いていれば問題はないのだろうか、いま、まさに入社に向けて話を進めているこの時期に。なんてことだ。牧村はあせった。

「どっ、どこに転勤になるんですか」

「金沢営業所ですねん」

沈んでいく牧村に対して、有田所長の声は意気揚々としたものに変わった。

「北海道勤務は、長おましたからなあ。いやあ牧村はん。あんたは

んには、まだ入社もしていないうちから色々と仕事の相談にのってもらって、ほんととお世話になりました。去るもんが入社の話しても仕方おまへんやろ？ これからの北海道営業所は新しい所長のもんや。牧村はんの優秀さは、ちゃんと話しておくから、入社については、新所長と話を進めてください」

そつ、そんな。牧村は叫び出したい気持ちになった。

第三十六話 I t · s a l l o r n o t h i n g

その日の夕方、キッチンに立つくるみの小さな背中をハラハラしながら見つめていると、不意に牧村の携帯がぶるるつと震えた。家でくるといるときは、なるべくマナーモードにしてある。誰だろうと思いディスプレイを覗いて見ると、そこには知らない番号が表示されていた。

恐る恐る、電話機を耳に押し当てる。

「はい、牧村ですけど……」

「おう、マー坊、久しぶりだな」

返ってきたのは、聞き覚えのある茂樹のどら声だった。

「なんだ、シゲ兄イじゃないか」

「ははは、こつちで有田さんと一緒に酒飲んで以来だ」

「ほんとですね。いやあ、その節はお世話になりました」

そのときキッチンで悪戦苦闘しながらメイクイーンの皮を剥いていたくるみが「おわっ」と叫んだ。

「どうした、くるみっ！ 包丁で指でも切ったか？」

慌ててくるみのそばへ駆け寄り、肩越しに彼女の手もとを覗き込む。どうやら、細くてちっちゃい指は十本とも無事だった。ほっと息をつく、少しはにかなだ笑顔で振り向いたくるみが、小さな白い塊を見せて言った。

「いやあ、じゃがいもって、皮剥くとずいぶん小さくなるもんだな！ って思ってた」

牧村の握りこぶしくらいあったメイクイーンは、くるみの手のなかでゆで卵くらいのおおきさになっていた。身のおお半を、皮と一緒に剥かれてしまったらしい。牧村は、安堵と失望の入り交じった大きなため息をついて言った。

「……なあくるみ、もう料理は父ちゃんに任せて、お前はゆっくりテレビでも見ていたらどうだ？」

「およよ、パパりんつてば、くるみの料理の腕を信用してないね」
「信用するもなにも……」

くるみが料理をするところなんて見たことがない。まだ妻がいたころ、盛りつけの手伝いくらいはさせていたのかもしれないが、それすら彼は見たことがなかった。だから今日くるみが突然「ミネストローネを作る」と言い出したとき、てっきりプレステのゲームかなにかの話だと思い込んでいた。女の子なんだから料理に興味を持つことは悪いことじゃない、とさえ思ったものだ。それがまさか、本当に自分でキッチンに立つことだったとは……。

「いきなりミネストローネは、ちよつと敷居が高いんじゃないのか？　せめてオムライスかホットケーキくらいにしておいたほうが……」

「いいから、いいから。晩ごはんの用意はくるみに任せて、パパりんは料理が出来るまでのんびりテレビでも見ててよ」

ぐいぐいとソファアのほうへ押しやられ、仕方なくそのまま腰を下ろす。電話機からは、茂樹のでっかいどら声が響いていた。

「おい、マー坊、どうした！　だれか怪我でもしたのかっ？」

「あ、シゲ兄イごめん、うちのくるみが晩メシ作るって張り切ってるんだ。俺に似て不器用だし、料理なんて教えてもらったことないくせに、もう危なっかしくて見てられないよ」

くくっという忍び笑いが聞えた。

「あのおてんば娘が料理してるのか。こりやいいや、パパとしては心配やら照れくさいやらで、じつとしてられないってわけだ。でもまあ、男手ひとつで育ててるんだ、よその家庭では味わえない苦労や楽しみもあるだろうよ、ここはひとつ娘の成長する喜びをかみしめながら温かく見守ってやれ」

「う、うん、そうするよ……。ところでシゲ兄イ、俺になにか用事があつたんじゃないのかい？」

「おお、それよ」

茂樹が、こほんと咳払いをした。

「有田さんが転勤になる話は、お前も聞いてるよな？」

「つい今さつき本人と話していたんだ。それで俺もすごく驚いていたんだ。……ねえ、シゲ兄イ、彼はどうして急に転勤なんかするこ
とになったんだい？」

「ふむ……、じつはな」

茂樹の声が少し低くなる。

「あの有田ってひとはやり手ではあるんだが、その手法にちよつと
やんちゃなところもあってな。事実、彼が来てから営業所の売り上
げはぐんぐん伸びたわけだが、同時に変な連中との付き合いも出来
ちまった」

「変な連中……って？」

「海産物の密猟なんかに加担している、いわゆる闇のブローカーっ
てやつさ。裏では暴力団なんかとも繋がりを持つてるヤバイ連中だ」

「それは本当ですか？」

「ああ。俺は元々そっちの世界で稼業していた人間だから分かるん
だ。ああいう連中は、一度関係を作っちまうともう手を切れなくな
る。有田さんも急な受注に間に合わせるため違法なルートと分かっ
ていながら仕入れをしたらしくて、それが今になって大変な問題に
なってるんだ」

「じゃあ、その責任を取らされて……」

「結果として連中に弱みを握られるかたちになったし、それにもし
これが公の知るところとなれば、会社は信用を失い大打撃を受ける。
そうなれば有田さんも、恐らくすべての責任を負わされ会社を去る
ことになるだろう」

「そうですね……。俺はまた、てつきり栄転するのだとばかり」

「金沢営業所は、二年前に食中毒事件を起こして以来ずっと業績不
振にあえいでいる。一時は閉鎖も検討されていたほどだ。いくら有
田さんでも、あそこで出世するなんて出来っこないよ」

「うーん、見かけの派手さばかりに目がいったけど、じつは大変
な苦勞を背負ったひとだったんですね」

「有田さんの話はもういいよ。そんなことより……」

ここでまたキッチンのほうから「うひゃっ」という、くるみの声が聞えた。

「こ、今度はなんだ？」

イスから立ち上がってキッチンのほうを見る。今度は牧村のほう
が「うひゃっ」と叫んだ。オーブオイルがなみなみと満たされた
フライパンが、今まさにコンロの火に掛けられようとしていたのだ。
「うわっ、ちょっと待て、くるみ！ お前、フライパンにそんなに
オイル溜めてどうするつもりだ？」

「だって……」

くるみが、虎の巻にしている料理本のページを指でぴしゃりと弾
いて言った。

「たっぷりとオイルをひいて下さいって、ここに書いてあるよ」

「バカっ、たっぷりにもほどがあるだろう。それじゃ天ぷらになっ
ちまうじゃないか」

「もう」

くるみは、ぶうつと頬を膨らませ、フライパンのなかにある余分
なオイルをどばつと流しへ捨てた。

「こ、こら、バカっ、オイルをそのまま流しに捨てるやつがあるか」

「もうー、くるみのことバカバカ言って！ このままじゃ、うるさ
くて料理に集中できないよ」

「うるさいったって、お前……」

くるみは、ぷいっとそっぽを向いてコンロに火を入れた。電話機
のなかからは茂樹の怒鳴り声が聞える。

「こらっ、マー坊。ちゃんとひと話を聞け！」

「ああ、ごめん。くるみのやつがメチャクチャやるもんで、もう気
が気じゃないんだ」

「そんなの放っておけよ。あんたの娘を信じなさい、ってクレイジ
ーキャッツも歌ってるだろう」

「知らないよ、そんな古い歌」

「いいから、ここは一番父親の威厳をもってだな、娘の料理する姿を静かに見守ってやれ」

くるみが危なっかしい手つきで野菜を炒めはじめた。じゃじゃーっと油のはじける景気の良い音がして、香ばしい匂いが漂ってくる。どうしても黙って見ていることができず、牧村はハラハラしながら何度も声を掛けた。

「おい、火傷すんなよ」

「ほーい」

「野菜焦がすんじゃないぞ」

「ほーい」

「あと消火器は冷蔵庫の横にあるからな。いざとなったら迷わず使え」

「もう、パパりん、うるさい」

くるみが腰に手を当てて睨んでくる。

「おい、よそ見すんな。フライパンに火が回ったらどうする」

電話の向こうの茂樹が、たまりかねて言った。

「おい、マー坊、聞いてるか。そこを引き払って、大至急こっちに来いっ！」

「え？」

「有田さんがいるうちに、なんとしても採用してもらえ。あのひとは一応、取締役として会社に名を連ねているから、現地で社員を採用する権限を持っている。あの人がいるうちに話をまとめてしまうんだ。いいか、今度送られてくる所長は、銀行から天下った事なかれ主義の爺さんだ。そんなのが来てしまったら、もうお前の出番なんか金輪際やって来ないぞ」

「そんなこと言っただって……」

「住むところなら、礼子ちゃんが探してくれている。住民票の移動も、お嬢ちゃんの転校の手続きだって、彼女に任せておけばちゃんと代理人として処理してくれる。お前はとにかくこっちへすっ飛んで来て、有田さんと雇用契約を結んでしまえ」

「うむむ……」

牧村が唸っていると、またまたくるみの悲鳴が聞えた。

「きゃあ!」

「おい、もう勘弁してくれよ。今度は一体なんだ?」

見るとくるみは、手にしたアルミ缶に貼ってあるラベルを睨みながら、うーっと唸っていた。

「パパりん、これトマト缶じゃなくて、ミートソースの缶詰だった……。どうしよう、代わりにこれ使ってもミネストローネ作れるかな?」

「作れるわけないだろう。なあ、もうあきらめて二人でファミレス行こうぜ」

電話機に向こうからは、相変わらず茂樹の怒鳴り声。

「おいこら、マー坊。いい加減にひとの話を……」

「分かったよ、シゲ兄イ。とりあえずこれからくるみとファミレスにでも行くから、飯食いながらじっくり考えてみるよ」

「あんまり時間はないぞ。短い人生、そう何度もチャンスはめぐって来るもんじゃない。そのことを忘れるな」

「うん、ありがとう。じゃあ、また後で電話するからばちん。」

携帯電話を閉じると、すぐ横にくるみが立っていた。野菜炒めをてんこ盛りにした大皿を持って悲しそうな顔をしている。

「ねえ……これ食べないの?」

「そうだな」

野菜からは湯気と一緒に、オリーブオイルと黒胡椒の香ばしい匂いが立ち上っている。牧村は鼻をひくひくとさせ、やがて目を細めて笑った。

「うん、たしかし野菜炒めとしては上出来だ」

「でしょ」

くるみが、にへーっと微笑む。そのあたまをがしがしと撫でて、牧村が言った。

「じゃあこれをオカズに、コンビニでおにぎりでも買って食べるか」
「ついでに、うまい棒も買っていい？」

「だめ」

そのとき、ふたたび牧村の携帯が震えた。またシゲ兄イかと思っ
たが、今度は季奈子からの電話だった。

「やあ、季奈子ちゃん」

「……」

返事がない。牧村はなぜだか妙な胸騒ぎを覚え、電話機をきつく
握りしめた。

「季奈子ちゃん、どうしたの？ なにかあった？」

しばらく間があつて、消え入りそうな彼女の声がつとつと語り
始めた。。

「……今、お医者さんからお話があつたの。お父さん、下半身が麻
痺してるかもしれないって……もしそうなら、リハビリするのに五
年くらいは掛かるだろうって……」

牧村は息を止めて、今富山にいるはずの季奈子の姿を探しとめ
るように目をうろつろさせた。彼のただならぬ様子に気づいたのか、
くるみがシャツの端をぎゅっと掴んでくる。やがて感情を押し殺し
たような低い声で、季奈子が言った。

「牧村さん、私あなたと一緒にには行けないかもしれない。体の不自
由な両親をこのまま残して家を出てゆくことなんて出来ない……」

「き、季奈子ちゃん、ちょっと待って」

「……ごめんね、牧村さん。ほんとに、ごめんね」

電話は、そこで一方的に切られてしまった。

——嘘だろ……。

牧村は、呆然と立ち尽くすしかなかった。

自分を引き立ててくれた有田が転勤になる。やっと恋人同士になった季奈子は富山の実家を離れる事が出来ないと言う。牧村はがっくりと膝を落とした。

「パパりん……季奈子おねえちゃん、北海道に行けなくなったの？」
さつきから牧村にぴったりと寄り添っていたくるみが、不安げに尋ねてきた。

「あ、いや、何でもない」

そう言ったものの自分の動揺を鎮めることもできずに、くるみを納得させられるはずもない。

「うそ。パパりん。変だよ」

くるみは、牧村の腕をつかむと駄々をこねるように左右にゆすつた。

「はは……。大丈夫さ。パパりん、ちょっとコンビニに行ってくるよ」

「くるみも行く！」

「いや。くるみはここにいなさい」

「ええっ」

くるみが不服そうにぷうつと頬を膨らませた。

「すぐに帰ってくるから」

言い含めてコートを羽織ると部屋を飛び出だす。季奈子と一緒に北海道に行けると信じて疑わないくるみにこのことを悟られてはならない。牧村の頭の中には、今しがたの季奈子との通話がぐるぐると巡っていた。牧村は足を早め、近くの公園に入った。ベンチに腰をおろし、季奈子の番号をプッシュする。しかし……。

「おかけになった番号は、電波の届かない場所にあるか電源が入っ

ていないため、かかりません……」

冷たいアナウンスの応答が流れ、牧村は愕然とせずにはいられなかった。電源を切っているとしたら、今、病院にいるのかもしれない。それならわかる。まさか避けられているのではないだろう。これから一緒に北海道に行こうとしていた季奈子の問題は、牧村の問題でもあるのだ。ひとりで悩まずにもっと頼って欲しい。もう一度、季奈子の番号をプッシュする。が、受話器の向こうからは同じアナウンスが流れるだけだった。

――俺は、一体どうすればいいんだ

ぼつ……としずくが一滴手の甲にかかる。すぐにいくつもの雨粒が牧村に打ち付けてきた。

――雨、か……。

雨は、どんどん強まりみるみるうちに公園の地面を濡らしてゆく。天候もろくに見ずに飛び出してきた自分に、少し頭を冷やして考えるよう言われているように思えた。それがいいかもしれない。かつかした頭で話したところで、何も解決などできないだろう。今日、季奈子が病院から帰る頃を見計らってもう一度電話しよう。そしてゆっくりと季奈子の話を聴こう。コンビ二で適当におにぎりをみつくろいついでにビニール傘も買い込むと、牧村はくるみの待つ自宅へと急いだ。アパートに到着して、鍵を差し込む。しかしそれは何の引っ掛かりもなく空回りするだけだった。

――くるみのやつ。ひとりでいる時は、ちゃんと鍵をかけておくように言ったのに。物騒じゃないか……。

ドアを開けると中からは楽しそうな話し声が聴こえてくる。玄関先には、男物と女物の靴が二つ。

――もしや……。

「おお、理人君。お帰り」

「ごめんなさいね。お邪魔していたわ」

二人の客が振り返る。ひとりはい白いひげを蓄えた初老の紳士。そして品のいいグレーのスーツに身を包んだ婦人。亡きみちるの両親

だ。

「わつ。ご無沙汰してすいません。お義父さん、お義母さん……」
牧村は、頭を下げると慌ててテーブルの一角に腰掛けた。ほんのちよつとの間にやってきたなんて、なんとタイミングの悪い事か。まるでくるみを放ったらかしにしていたように見えるではないか。牧村は言った。

「すいません。ちよつとそのコンビニに出かけていて……」

「いえ。こちらこそ連絡もせずに急に来たりして。今、くるみにお茶を入れてもらったところよ」

義母が、目を細めてくるみをみつめる。テーブルには、急須が置かれ、両親としてくるみの分のみつつのお茶が並んでいた。ちよつぱりお茶の葉っぱがこぼれているのが、ご愛嬌だ。

「えっへん。くるみ。これも作っただよ！」

くるみがキッチンの流し台から皿に大量に盛られた野菜炒めを運んで来た。

「まあ、これ、くるみが作ったの？」

「うん。くるみひとりで作っただ」

「おお。ちゃんとお父さんのお手伝いをしているのか。えらいなあ。くるみは」

「じいちゃん、ばあちゃん。食べてみて」

くるみが勧めると義母が飛び出しているキャベツの一切れをつまんだ。

「まあ。こつ言う薄味のものが体にいいのよ。よしよし。くるみは良い子ねえ」

義母がくるみの頭を撫でる。

「ほう。私にもくれないか」

義父は、箸で一口分を手のひらに載せると一気に放り込む。

「うん。野菜の味がよく出ている……」

牧村は半信半疑で、それを口に入れた。油でべたべたしていて何の味もしない。

——不味っ！

牧村は、ろくにかまずにそれをごくりと飲み込んだ。

みちるの両親とは、今でも交流が続いている。何よりもくるみは、目に入れても痛くない血が繋がった孫である。そして両親は、みちるの忘れ形見のくるみを育てている牧村に対して感謝してくれているのだ。

顔を上げた牧村に義父が口火を切った。

「北海道に就職の件、本決まりになったそうだね？」

「あっ……ええ」

いまひとつ歯切れよく返答ができないのは、有田の異動の事があるからだ。北海道営業所で採用と言うのは口約束なだけ。正式な契約書を交わしたわけではない。

「くるみも一緒に行ってしまうのね？ さびしくなるわ……」

「一所懸命仕事を探していたんですが、どうにも見つからなかったんです。そんな矢先に友人から誘いを受けたものですから」

「そうね。知っている人が誘ってくださるなら安心ですものね」

義母が微笑み、牧村は小さくすみませんと言った。

「いや、あやまることはないよ。たまにしか顔を出さない私たちが、立派にくるみを育ててくれている理人君のことをとやかく言う筋合いはないんだ」

「でも……」

義母がおずおずと切り出した。

「今までのようにくるみの成長する様子を近くで見守ってあげたらと思っているのよ。何とか東京にとどまってもらえないかと思って、牧村としても気になっていた事で、二人の言いたいことは痛いほどわかる。」

——俺は、北海道には行かない方がいいのか……。

もし有田に正式採用を認めてもらったとしても、有田と一緒に仕事ができるわけではない。間もなく茂樹の言う事なかれ主義の爺さんのもとで働く事になってしまうのだ。季奈子にしても一緒に北海

道に行けないかもしれないと言っていた。こんな状態になってまで、ワシオ・プランニングに行く意味があるのか。牧村の頭にそんな疑問が浮かぶ。

「それは、俺だって思いました。どこかで働いていて転勤するならともかく、わざわざ引越してまで仕事を求めたくはない。くるみだって小学校にあがって友達ができたのに、転校させるのも可哀相だ。でも、本当に仕事が決まらなかったんです……」

「そこでだけどね……理人君」

義父はそこで区切って、お茶を一口飲んだ。

「ひとつ、仕事の話があるんだよ。私の弟の会社の取引先なんだが、業務を拡大するそうなんだ。それでこれから求人募集をかけようってところなんだが、その前に誰か知り合いか何かに良い人がいないかと訊かれたそうなんだ」

「それを……俺にですか？」

義父は大きくうなずいた。

第三十八話 t h e c h o i c e s

ジャズが流れている。

かなり古い録音らしく、曲のそこかしこに細かいスクラッチ音が刻まれているが、それが返ってお洒落でブルージーな雰囲気をもし出している。リズムにからみつくようなアルトサックスのアドリブが終り、ピアノがやや控え目なソロを奏ではじめたころ、喫茶黒薔薇のマスターこと渡瀬淳也は穏やかな口調で切り出した。

「……そうか、季奈子ちゃん富山へ戻ったきり帰ってこないのか」「ええ、おかげで一緒に北海道へ行くって約束は、どうも雲行きが怪しくなってきました」

牧村がグラスを揺すって、琥珀色の液体のなかで涼しい音を立てている氷をくるくると踊らせながら、アルコール臭いため息をついた。店に入るときオーダーしたバーボンのボトルは、もう残りがほとんどなくなってしまうている。マスターは山盛りになった灰皿にむりやりすき間をつくると、そこへ短くなったラッキーストライクの火を押しつけながら言った。

「じつは、こっちも季奈子ちゃんに仕事を世話してやろうと思ってただけど、その調子だと御破算になりそうだなあ……」

「俺のほうも、せっかく友人の肝煎りで決まりかけた北海道での就職が、このままじゃ全てパーになりそうです」

「季奈子ちゃんを取るか、就職を取るかの選択では、やはり季奈子ちゃんを選んでしまうか」

「ま、まあ、俺はかまわないんですけど、くるみのやつがね」

牧村は、ていねいに殻を剥いたピスタチオを指先で弄びながら苦い顔をした。チェーンスマーカーのマスターが、ラッキーストライクの箱から最後の一本を取り出し、口にくわえて火を付けた。

「別に、くるみちゃんにかこつけなくてもいいさ。自分の気持ちに素直になればいい」

ゆっくりと煙を吐き出し、空になった箱をくしゃつと捻り潰す。牧村はきれいに殻を剥いたピスタチオを、けつきよく食べずにそのまま皿のなかへ戻し、ため息をついた。

「ひどいんだよなあ、一方的にしゃべるだけしゃべって、いきなり電話を切っちゃうんだもん……」

「彼女なりに色々考えてのことじゃないのか？　せつかく決まった就職を棒に振らないよう、涙をのんで身を引く覚悟を決めたんだろう」

「それにしたって……」

「まあ、少しは頭を冷やせって。ほら、もつと飲めよ」

マスターは牧村のグラスを取り上げると、ウィスキーと氷を足してゆっくりかき混ぜた。バーテンはさつき入店してきた若い女性客とのおしゃべりに夢中で、彼らのことをすっかり忘れてしまっている。

冴えない顔をして黒薔薇を訊ねてきた牧村を連れ出し、いきつけの飲み屋でもあるこのスタンドバーへやって来たのだが、給料日の後ということもあって思いのほか店内は混み合っていた。一時間ほど前からは、入ってくる客みんなが肩や頭の上に白い粉を乗せている。どうやら外では雪が降っているらしかった。

「混んできたな。このボトルを空けたら、そろそろ次の店へ行くか」

「そんなに飲んで、お店のほうはだいじょうぶなんですか？」

「心配ご無用、明日は定休日だ。お前のほうも今夜はくるみちゃん、いないんだろう？」

「ええ、祖父母の家へ泊まりに行ってます。今頃はきつと、ご馳走の山にかこまれて大はしゃぎしてるはずですよ」

「ははは、あの年頃の娘が一番可愛いよなあ……。でも覚悟しておけ、もうちょっと大きくなると、父親を周りの異性と比較しはじめから大変だぞ。パパ不潔だから嫌い、とか言って今に寄り付きも

しなくなる」

「あれ、渡瀬さんともお嬢さんでしたっけ？」

「ああ、ひとり娘だ。今は横浜の短大へ通うために家庭教師のアルバイトをしながらひとり暮らししているよ。近ごろでは盆と正月以外、もう家には滅多に顔も出さんようになった、淋しいもんだ」

グラスの酒をぐつとほして、マスターがため息をついた。牧村も彼に倣ってグラスを空ける。

「そういうもんすかねえ」

「そういうもんだ。でも、くるみちゃん、ほんと可愛いよなあ、チャーミングなところは、みちるさんにそっくりだ」

「優柔不断なところは、俺に似たんすけど……」

「まあ、そう腐るなって」

マスターがタバコをもみ消しながら笑った。牧村はグラスのなかのアイスキューブをひとつ口のなかへ放り込み、ばりばりと噛み砕いた。二人ともかなり酔っているようだ。

「……じつはですね、さっきみちるの両親からも仕事の世話をしているって言われたばかりなんです。なんでも老舗の金属加工のメーカーらしくて、ＥＴ関連のベンチャーにも参入していて、さらに今度は新しく電子出版の事業を立ち上げるらしいんです。俺に、その企画と営業の仕事をやらないかって」

「なんだ、引っ張りだこじやないか。電子出版はやりようによって可能性のあるビジネスだ。せつかくだから思いきって世話になってみてはどうだ？」

「いやあ……なんて言うか、俺、みちるの親の世話にはなりたくないんですよ」

「どうして？　ちっぽけなプライドが邪魔するとしても言うのかい？」

「ははは、ずいぶんストレートにものを言いますね」

「おっ、ボトルが空になったぞ」

自分と牧村のグラスに残りのウイスキーをそそいで、空になったボトルを振りながらマスターが言った。

「どうする、次の店へ行くかい？」

「いやあ、俺はもうそろそろ……」

「再婚したらもう夜遊びなんて自由にできなくなるぞ。季奈子ちゃん、そういうところは厳しそうだからね」

「だから季奈子ちゃんは、もう……」

「とにかく、お前一度、富山へ行つてこいよ」

マスターが牧村の肩をぽんと叩いた。酔って赤い顔をした牧村は、マスターを見て不思議そうに瞬きをした。

「富山へつて、なにをしにですか？」

「ばか、決まってるじゃないか。季奈子ちゃんに会ってちゃんと話をしてこい。そうだ、ついでに彼女のご両親にも会って、お嬢さんをボクにくださいってお願いしてこいよ」

「そんな強引な……」

「お前たちの結婚式には、俺が媒酌人をしてやる。よし、もう決めたぞ。二次会はずちの店を貸し切りにする。とにかくお前は、一刻も早く季奈子ちゃんを説得して、こっちへ連れ戻してくるんだ」

そう言つてマスターは自分のグラスを牧村のグラスに、ちよんとぶつけた。

「そうと決まれば前祝いだ。どこかエッチな店にでも行つて、ぱーっと派手にやるか」

「……それ、いいっすね」

第三十九話 J o b c h a n g e

スタンドバーを出た渡瀬と牧村は、互いに無言で歩いていく。平日にも関わらず途切れない人の群れ。どこからこれだけの人が湧いてくるのかと思えるほどだ。東京は人があふれかえっている。皆、それぞれの事情など知る由もなく、せつせと歩いていく。やがて壁面に設置されている時計の針が、午後十時過ぎを指しているのが牧村の瞳に映りこんだ。目の前の道路をタクシーが横切っていく。まだまだ夜は長い。

——しかし……。

交差点にさしかかると牧村は口を開いた。

「渡瀬さん。俺。ここで失礼します」

「おう。帰るのか」

「うん……。渡瀬さんと話してすっきりしたから」

「行かなくていいのか？」

渡瀬は、風俗店街が立ち並ぶ通りの向かい側をあごでしゃくつて見せると、いたずらっぽい表情を浮かべた。

「やっぱりさ。今は、気分じゃないっすよ……」

「……だな。不器用な奴だな。まっ、そこがお前のいいところでもあるんだが」

酔っ払った渡瀬が、エッチな店に行くかなどと提案したのは会話のノリからだとかわかってる。しかしそれで牧村の気が晴れるなら、渡瀬はいくらでも乗ってくれただろう。

渡瀬とは長く袋小路印刷と一緒に過ごしてきた。そして渡瀬が黒薔薇を開店してからは、よりいっそう親しくなった。もしも実の父親が生きていたら、こんな風に一緒に酒を酌み交わすこともあっただろうか。いつしか牧村は、亡くなった父に渡瀬をだぶらせていた。もちろん義理の両親も頼りに思っているし、向こうだって牧村のことを心配してくれてもいる。しかし、妻亡きあと牧村は自分が所

詮他人である事を強く意識するようになった。だからくるみの面倒は見てもらっても、自分は世話になりたくないと言う屈折した心理があるのだ。

渡瀬が牧村の肩をぽんと力強く叩く。

「じゃあな。頑張れ」

「あ、はい。今日はありがとうございました」

信号が青に変わり、渡瀬が歩き出す。牧村は軽く目礼をすると、渡瀬と反対方向に歩いていった。ひとり歩を進めながら考える。

有田が金沢に転勤してしまう。そして季奈子は実家に帰ったまま戻ってこない。運命の歯車は、牧村に北海道に行かせまい、行かせまいと回っているように思える。しかし、自分の足場はしっかりと固めておかななくてはならない。無職の男が季奈子を迎えにいったとて、先方の両親を安心させられるはずがないのだ。

――よし。

牧村は口を真一文字に結ぶと携帯の番号をプッシュした。

「なあ姉さん。季奈子ちゃん、好きな人がいはるんやて」

病院のレストルームで唐突に幸子おばさんが、世間話でもするよな気安い口調で言ったものだ。カウンターで紙パックのジュースを口に使っていた季奈子は、思わずむせそうになった。たちまちぼんやりした母の表情筋がぴしっと引き締まった。

「そんな話、初めて聴いたわ！　ねえ、季奈子。それ本当け？」

反射的に大きな声を出す母に、季奈子はうつと声を詰まらせた。

確かに一度は牧村と一緒に北海道に行く約束をしたが、それは暗礁に乗り上げてしまった。今でこそ牧村とは恋人同士ということになっている。ただこの状態が続けば、自然消滅だって免れないかもしれない宙ぶらりんの状態でどう答えたらいいのか。

「誰け。母さんの知ってる人？」

畳み掛けるように母が訊いてくる。けれど季奈子は何ひとつ答え

られない。しかし、無言でいることは、それがそのままYESの意思表示と伝わったようだ。

「なん、そんな筈ないちゃ。東京におるがやね。その人。そう言えば袋小路印刷がつぶれてもすぐに戻って来んかったし……ははあん。そういうことやったがいね」

母が自分の言葉に納得したように大きくうなづく。半分当たって半分はずれている。しかし、季奈子には反論する気力が湧かなかつた。何か言えばさらに母の疑問をあおってしまいそうである。結局、季奈子が一言も発しないまま独断的に母の疑問は解決されてしまったのだ。

「ちよつと父さんの様子、見てくるね」

季奈子は、母と叔母の追求を逃れるようにその場を離れた。牧村のことを知られるのは、もつと後になってからでいい。黙っていれば、叔母も母もそのうち関心を失っていくだろう。結局のところ、父は左半身の麻痺が残ってしまった。「残された機能をリハビリによって訓練し、自立した生活を送れるようにしてきましょう。志浦さんと同じケースで予後の良い人はたくさんいますよ」との医師の話で、ひとまず安堵できたところだ。

病室に入ると、父はベッドに横になっていた。

「父さん。体調はどう？」

「なん、（自分の体が）思うようにならん」

季奈子は、ベッドの脇に腰掛けると父の腕を取り、丹念にさすりはじめた。

「仕方ないちゃ。大きな病気したもんね。こうやって、こまめにマッサージしたらいいんだって」

「命、あつただけ、ありがたいと思わんなんちゃ。そのままあつち裏に行かんで済んで良かった」

うまく呂律が回らないのは、顔面にも麻痺がきているせいだろう。しかし注意深く聴き取れば話している内容は、じゅうぶんに理解できるものだった。

「そうだね。父さん。良かったね」

調子を合わせるように季奈子は言った。その間、腕のマッサージを終えた季奈子は今度は足のマッサージをはじめた。

「つまらんことだのう。毎日天井見とらんなん。もう酒止めるわ。こつで懲りた」

「父さん、俳句ひねるの、好きだったじゃない。俳句だったら入院しててもできるよ。作ってみたら？」

「おう。病の俳句でもひねっかのう」

ふふ、と季奈子は微笑んだ。父は命があったことをありがたく思っているようで、決して悲観的にはなっていない。これならリハビリの効果だつて早く現れるだろう。とにかく早く元気になつてもらわなくては。

――足が痩せてきたみたい。寝たきりだったからなあ……

季奈子は、再び力を込め父の足を包み込むようにマッサージした。

都内にオープンしたばかりの洋食店に牧村の姿があった。

「ビストロ・WASHIO」ファミレスよりもワンランク上の価格帯で、黒を基調とした洒落た店構えは、カップルや女性客が多かった。今、牧村はこの店で副店長として働いている。渡瀬に自分の思いを洗いざらいぶちまけたことによつて牧村は、いくぶん自分のことを客観視できるようになっていた。そこでごく当たり前のことに気づいたのだ。そもそもワシオ・プランニングへの就職話は、杉山が持ってきたものである。だから何かあつたら、まずは杉山に相談しなくては。電話をかけると杉山も有田の転勤話を気にしていたようで、向こうから「どうする？」と言つてきた。牧村は、自分と面接してくれた有田のいない北海道営業所に行くのは不安があることそして東京都内で募集している別の仕事がないか訊いたのである。杉山からは即座に返事が返ってきた。営業でなくても良いならば、チェーン店の募集がある。店の運営管理を行う副店長を求めているとのことだった。しかし、営業職希望なのにそれでいいのかと杉山

は尋ねてきた。そんなことは構わない。是非、そこで働かせて欲しいと言ったところ、電話だけでは採用が決まった。追って面接があったものの、実質、確認のための顔見せていどだったのである。

義理の両親には、こう話しておいた。北海道勤務を断つたら、都内でも募集があるから手伝って欲しいと拝み倒された。実は、人事担当者が杉山という人物で中学時代の友人でもあり、彼の顔を立てなくてはならない。もちろん、厭々引き受けたわけではなくその仕事はやってみたかったからであると付け加えておいた。おかげで義父との関係も良好に保つことができたのである。

人間、その気になれば何だってできるものだ。もともと営業職で慣らした牧村には、接客業が性に合っていたのだらう。張り切ってどんどんと仕事を覚えていった。

もっと早くからこうしていればと悔やまれたが今となってはどうしようもない。むしろきちんと仕事に就いたことを喜ぶべきだろう。季奈子と連絡を絶ってから、数週間が経過している。今こそ季奈子を迎えに行く時だ。

その日。くるみを義父母に預け、旅支度をした牧村は、意を決して新幹線に乗り込んだ。

第四十話 a s t r a n g e r

たいていの病院　がそうであるように、季奈子の父が入院する成美脳神経外科クリニックスの薄暗いロビーも、お年寄りと、病人のため息と、消毒液のにおいに満ちていた。外は雪　が降っており、ロビーの大きな窓から見渡せる表通りの景色は寒々として、そこを行き交う通行人が新雪を踏む、きしきしという靴音が伝わってくるよう　だった。

牧村は、高岡駅へ着いてすぐに季奈子へ連絡を入れた。彼女は突然の訪問にかなり驚いた様子だったが、それでもいくぶん嬉しさにじませながらあ　りがとうと言った。なんでも姉や母と交代で父親の世話をしているらしく、今日はちょうど季奈子が病院へ詰める番だと言った。それじゃあ病院で会おうという　ことになりタクシーへ飛び乗ったのが今からおよそ一時間前、途中の商店街でいったん車を停めて見舞いのフルーツを買い求めたのが三十分前、そして今、約　束の時間よりだいぶ早く病院に着いてしまった牧村は、やや途方に暮れながら寒々としたロビーの前にたたずんでいた。

季奈子と約束した時刻までには、まだ一時間近くもある。仕方がないので警備員室へ行って病室を確かめようとしたところ、驚いたことに志浦という　苗字の入院患者は三人いると言われた。下の名前は知らない。まさか当てずっぽうで病室を訪れるわけにもいかず、携帯電話も使えないので、仕方なしにもう一度ロビーへ引き返してきた。待合いロビーの小さな液晶テレビでは延々国会中継を流している。まさか一時間もこれを眺めて過ごす気にもなれず、またロビーの　あちこちから聞えてくる、こんこんと咳き込む患者の声を聞いているうちに、なんだか自分まで体の調子がおかしくなりそうな気がしたので、仕方なく雪のちらつくなかをぶらりと外へ出た。あいにく近所にパチンコ店など暇をつぶせそうな遊興施設はなかった。通りを渡ったところにある小さな喫茶店は、どうやら定休日

のようだ。その隣りにコンビニが一軒あったが、まさか学生じゃあるまいし、そこで立ち読みして時間をつぶすわけにもいくまい。万策尽きてふたたび病院へ戻ろうとしたとき、建物に併設された立体駐車場のわきを抜けた向こうに、小さな中庭があるのを発見した。近づいてみるとちょうど屋根つきのベンチもあって、おそらく入院患者であるうお年寄りが三人、談笑しながらタバコを吸っているのが見えた。少し寒い、ダウンジャケットをはおっているの、で一時間くらいならなんとか過ごせそう。牧村は、そこで時間をつぶして季奈子を待つことに決めた。

先客のお年寄りたちに軽く会釈してベンチの端へ腰を下ろす。観賞用に植えられたイチイやアカマツにはすでに冬囲いがされていた。それでも覆ったむしろからはみ出した梢に薄らと雪片を乗せている姿は、なんとも言えない趣がある。ふだんは使わない風流なんて言葉が、ふと牧村の頭に浮かんだ。

お年寄りは三人ともお爺ちゃん、入院着のうえから甚平のようなものをはおり、さらに厚手のジャケットなどで重ね着をしていた。膝のうえにも、しっかりと毛布が掛けられている。それでもやはり寒いらしく、たばこをはさむ指先が小刻みに震えていた。院内は全面禁煙なので、しょうがなくここで隠れて一服しているに違いない。

「こりゃ、根雪になりますかな」

嬉しそうに目を細めて庭先に降り積もった雪を眺めながら、お年寄りの一人が言った。

「いや、まだでしょう。長期予報では、来週にはこの寒波もいったん去って、また暖かくなると言っていましたよ」

「そりゃあ良かった。わたしや寒いと膝が痛んでどうも……」

「私は腰にきます。もうトイレに立つのも億劫なくらいです。年を取ると冬という季節がこたえますな」

他にすることもなくぼんやり中庭から見える景色を眺めていた牧村は、聞くとはなしに年寄りたちの会話に耳をかたむけていた。空

は消し炭のような 曇天であつたが、ときおりその空に晴れ間ができて、さあつと柔らかな光が射し込んだ。それでも雪は相変わらず音もなく降りつづいていた。

「今時分に雪が降るとあんがい暖冬になるなんて言う人もいますが、去年もたしかそんなことを言っけきよく寒かった覚えがありますな」

「ふむ、灯油代が値上がりしたので、うちは暖冬だとすごく助かるんですが」

ここで唯一電動車椅子に座っていたお爺ちゃんが、口をもごもごといわせ始めた。他の二人がその顔を覗き込んで、嬉しそうな声をあげる。

「おつ、徳さん、さつそく一句浮かんだようですな」

「どれどれ、拝聴いたしましょう」

二人に囁し立てられ、徳さんと呼ばれたそのお爺ちゃんは、こほんと咳払いしてからゆっくりと目を閉じた。

雪がこい 娘戻りて 冬ぬくし

「お、良いですな。囲いの、こい、と、来い、を掛けてるんですな。相変わらずお上手で」

「だれか、徳さんに座布団一枚やつとくれ」

徳さんは照れ笑いして、

「いやいや、落語じゃないんですから」

と、新しいたばこに火を付けた。

「そう言えば、徳さんところは娘さんが帰ってきているんですな」

「そうそう、私も会いましたよ。じつに可愛らしいお嬢さんで」

徳さんは美味そうにたばこをくゆらせながら、目尻を下げて言つた。

「年も暮れようというのにこんな病気になつてしまつて、ずいぶんと我が身を呪いましたが、唯一良かったことは娘が帰ってきたことです」

「まだご結婚はされてないのでしょうか？」

吸い込んだ煙を鼻からふんと吐き出して、徳さんはゆっくり空を見上げた。

「はい、まだですが……、どうも恋人はいるらしいのです。この前ちらとそんな話をしていました」

松の枝から湿った雪がぱりと落ちる。徳さんの口がもごとと動いた。

「おっ、また一句ひねったようですよ」

「どれどれ」

徳さんは眉根を寄せて怖い顔をつくりながら、いくぶん芝居がかった口調で言った。

悪い虫 退治してくれよう 徳二郎

とたんに二人が笑い出した。わきで素知らぬ顔をしながら聞いていた牧村も、思わず吹き出しそうになった。

「ははは、こりゃいいや。徳さんの今の心境が滲み出ていますな」

「やはり娘を嫁に出すのは、今の父親の心境として抵抗がありますか」

徳さんは、まだそんなに短くないたばこの火を灰皿でもみ消しながら、ふつと淋しそうにため息を漏らした。

「いずれは嫁に出さによあ、いかなのですが。自分でもそれは良く分かっているのですが……」

そのとき四人の背後から元気の良い女性の声がした。

「あーっ、お父さんやっぱりここにいたあ。ダメじゃないのよ、風邪でもひいたらどうするの」

季奈子だった。彼女は、とっさに自分のほうを振り返った顔のなかに牧村がいるのを発見して、あっと叫んだ。

「牧村さんっ！」

「き、季奈子ちゃん」

「どうして牧村さんが父と一緒にいるの？」

「えっ、じゃあこの人が……」

驚いて立ち上がった牧村は、季奈子と徳さんを交互に見ながら茫然となった。とたんに二人のお年寄りが目を輝かせ、にやにやし始める。

「噂をすればなんとやら、というやつですか」

「これは、ちょっと面白くなって来ましたな」

第四十一話 Meeting with father

通いなれたレストルームで、こんなに緊張して座った事はない。

窓から見えるのは薄墨を流したような空の色ではあったが、先ほどの雪はすでにやんでいた。まるで今の状況に早く決着をつけよと言わんばかりに。外にいては寒いからとにかく病棟に戻りましようとか好奇心たつぷりの二人の老人の視線から逃れるようにここにやってきた。季奈子は、父の顔色を伺いながら、おそろおそろ切り出す。

「お父さん。このひとが牧村理人さん。今、付き合っているの。以前に同じ袋小路印刷に勤めていたのよ」

「はじめまして。牧村と言います」

牧村は深々と頭を下げた。父の視線が一瞬だけ、牧村の姿を捉える。しかし、すぐに目をそらした。それから一切、牧村はおろかこちらの方を見ようとしめない。父は、ただぼんやりと窓の外に広がる風景を見ている。それは、はるばる訪れた牧村なんかよりも、これからのお天気のほうが、重大なことであると主張しているようにも見えた。もちろん、そうではないのだろう。突然連れてきた恋人を父は認めたくないのだ。季奈子の胸がきりりと痛む。

それでも少しでも二人の間をとりなそうと、今度は牧村に向けて声をかけた。

「牧村さん。私の父の志浦徳二郎です」

しかし、父はそっぽを向いたきりである。

「さつき休憩所でお会いしたんだけど、お父さん、みごとな俳句を披露されていてね……」

少しでも場を和ませようと、牧村が季奈子に話しかける。その途端に父が言い放った。

「わしゃ、あんたのお父さんじゃないがいね！」

一瞬、その場が水を打ったようにしんとなった。

「お父さん！ そんな言い方ないでしょう。わざわざ牧村さんが、

東京からお見舞いに来てくれたのに……」

「来いなんて、わしはひとつも頼んどらんよ」

父は、動揺しているのだろう。取りつくしまもなかった。季奈子は、なかばあきらめて目を伏せ、ため息をついた。

「あの、志浦さん」

牧村が父に向けて話しかけた。まるつきり牧村を無視していた父の肩がぴくりと動く。

「僕のような男がいきなり現れて季奈子さんと付き合っているなんて言って、驚かれたのは無理ありません」

季奈子は、驚いて牧村を見つめた。いつもの様子から察するに父の剣幕にてつきりしょぼくて退散すると思っていたのに。いつからこんなに積極的になったのだろう。

「……でもいい加減な気持ちじゃありません。ほんとに誠実にお付き合ひさせてもらっています。季奈子さんは、明るくて気立てもよくて、僕はどんなに勇気付けられたことか。恥ずかしながら、僕は少し前まで失業していたんです。でも今はちゃんと仕事に就いています。それもみんな季奈子さんのおかげです」

相変わらず父は黙ったままだが、季奈子には牧村の話すことをじつと聴いているように見えた。

「僕は、思っています。自分の始末もつけられない奴が好きな女性を幸せになんかできないって。だから自分なりに頑張って、そしてようやくここまで来たんです。だから少々怒られたくらいで、はいそうですね。うですかと引き下がるわけにはいきません。僕は、季奈子さんのことは、お嫁に欲しいと思っています」

思いもかけぬ牧村の言葉に季奈子の視界がにぶった。ぼろぼろと涙がこぼれてくる。

「ねえ。お父さん。聴いてる？」

声を震わせて問いかけると、ようやく父は、牧村のほうに向きなおった。

「牧村さん……」と言ったな。あんたの言うことはわかったちゃ。け

どな……季奈子の姉の佳乃子かて、結婚したのは二十八歳の時。季奈子は、まだ二十二歳……。まだ社会に出てほんの少ししか勤めとらんひよつこだ。そんな季奈子に結婚なんざ、早すぎる！」

はき捨てるように言つと、ぷいっと父は電動車椅子を操作してレストルームを出て行つた。父の姿が見えなくなると、牧村がどつと椅子からずり落ちた。

「まっ、牧村さん。大丈夫？」

季奈子は牧村の片腕をつかんで引つ張つた。

「あんな感じでよかったかな？ ははは……」

「うん、うん。牧村さんがあんなに話すイメージがなかったから……。私、すごく嬉しかったよ」

——それにお嫁に欲しいなんてあんなにはつきりと言ってくれて……。

くすんと鼻をすすつて、季奈子はハンカチで目頭を押さえる。

「牧村さん。今日は、ありがとう」

レストルームを出ると、向こうから佳乃子が出て来た。ベージュのダウンジャケットをはおり、バッグと大き目のショッピングバッグを提げている。ショッピングバッグからは、水筒が覗いていて、父の世話に来たのだとすぐにわかる。佳乃子は、牧村の姿を見つけ、軽く会釈すると、季奈子に向けて言つた。

「季奈子は、お客さんでしょ。父さんの看病、代わるから」

「姉さん。助かるわ。ありがとう」

季奈子は、額の前で手を合わせた。

「その代わりと言つちやなんだけど。父さん、あさつてで退院決まつたでしょう？ ひとまず快気祝いをしたいから、デパートに行つてお品を選んできてくれない？ 全面的に季奈子のセンスに任せるから」

佳乃子は、バッグから紙切れを取り出すと季奈子に手渡した。それは予算額とお見舞いをもらった先のリストだった。

「品物はあとでお金と一緒に取りにいくから、注文だけしておいて

欲しいの」

「あ、うん。わかった」

快気祝いなら、そんなに慌てなくてもいいはずだ。どうやらこれは、牧村と二人でデートしてきたらと言う佳乃子の粋な計らいらしい。

「牧村さんと言ったかしらね？　買い物が終わったらうちでくつろいでいってくださいね」

佳乃子は、牧村にもひと声かけると、そのまま父の病室のほうに歩いていった。

季奈子の白い軽自動車が、牧村を乗せて繁華街へと走る。デパートの脇にある狭い路地に入ると、駐車場には一回で車庫入れを決めた。助手席に乗った牧村が言った。

「初めて見たよ。季奈子ちゃんが運転する姿。慣れたもんだね……」

「免許を取ったのは、学生の時。帰省したらいつも運転しているの。ここは東京みたいに交通機関が充実していないから、車がなくなっちゃ不便なの」

本当は、牧村のほう及格好良く季奈子を乗せてドライブと行きたいところだが、ここは季奈子のフィールドである。牧村は、お客さんに徹することにした。デパートの正面にまわり、すぐにエレベーターに乗りこむ。季奈子は六階のボタンを押すと、バッグを探して姉からもらったメモを見つめた。

「大体、どんなものを買うか品物の種類まで書いてあるわ。あとはデザインを選ぶだけね」

「それなら、季奈子ちゃんの得意分野だね」

季奈子がほほをぷうつと膨らませる。

「ええつ。牧村さんったら意地悪ね」

「いや本当のことじゃないか。季奈子ちゃんってさ、もともと袋小路印刷でデザインがしたかったんだろう？　洋服もいつもかわいいの着てるし、センスあるなあって、俺は思っているよ」

「もうっ。牧村さんもいつしよに選んでくださいね」

生活雑貨のコーナーの前でエレベーターの扉が左右に開く。突き当たりにはカーテン等が飾られているのが見えた。手前には、入浴用品やスリッパ等が配置され、通路を挟んだ向かいには食器類や台所用品が陳列されている。

「ここでは、何を選ぶの？」

牧村が季奈子に視線を落として言った。

「タオルセットだって。月並みだけど、いくらあっても困らないからって……」

目的の場所にたどり着くまでに、季奈子はカラフルなタジン鍋に関心を奪われた。

「ねえ。牧村さん。これ、見て」

「ああ、最近よく見かけるよね。俺の働いている店でも使っているよ」

話しながら牧村はこそばゆかった。なんだか新婚家庭で使う品を選んでいのような錯覚に陥る。

「ふふ……」

一度、開けたタジン鍋の蓋をもどすと、季奈子は陳列棚に並ぶ品々を順番に眺めた。端まで来たところでその先に人だかりが出来ているのに気づく。客の間から、くすくすと笑い声が漏れている。どうやら鍋の実演販売らしかった。季奈子と牧村は、興味半分に客達の頭の間から、覗いてみた。

「この鍋は、五重構造になっておりましてなあ……野菜の水分を逃しまへん。と言うことは栄養が逃げない！　だんなさまやお子様たちに栄養たっぷりの食事を作ってあげたいと思いまへんか？　普通ならこういう鍋。とても高うおまっしやる？　でもそこは出血大サービスや。九千八百円で、この専用のおたまと、中が透けて見えるガラス蓋と……それからおたまを置く台もつけます。ああ、それとこのミニフライパン！」

「あらら、所長。そんなにサービスしたら、うちの会社がつぶれ

てしまいます！」

「かまへん。わし、ご家庭の主婦のみなさまの味方だす。血尿出してでもサービスしまっせえ。これぞ出血大サービスや」

「えええっ！？ 所長……」

絶妙な掛け合いにどつと客から笑いが起こった。季奈子も大爆笑している。

「あはは。あの人たち面白いわよねー。牧村さん……」

同意を求めたけれど、牧村はのってこなかった。それどころかその表情は固い。

「牧村さん？ どうしたの」

牧村は言った。

「何てことだ。ありゃあ、元北海道営業所長だった有田さんじゃないか。ここまで遠征かよ。所長自ら営業に出張ってくるなんて」

第四十二話 Chihuahua

師走のこの時期、年末のバーゲンと重なることもあってデパートのなかにはひどく混雑していた。

暖房の効いた店内は、どのブースもクリスマス一色である。フロアの各所には電飾もあざやかにツリーが飾られ、くり返し流れるジングルベルの軽快なメロディに背中を押されるようにして、主婦や家族連れの買い物が売り場のなかを練り歩いてゆく。

六階の生活雑貨コーナーには、フロアの半分ほどをぶち抜いて年末ギフト用の特設会場が設けられていた。お歳暮商戦のピークはとうに過ぎたが、それでもカウンターの前には発送手続きの順番を待つ長蛇の列が出来ていた。雑多な喧噪にまじって、時おり赤ん坊の泣き声や、迷子を報せる館内放送も聞えてくる。

そんな混雑を極める売り場のすみに、ちょっとした人だかりが出来ていた。有田所長たちがつとめる実演販売のコーナーだ。機関銃のようにまくしたてる珍妙な関西弁のトークがよほど可笑しいのか、観衆のあいだからは時おりどつと笑いがわき起こる。その雰囲気につられて、近くを通りかかった新たな客が一人また一人と集まってくる。有田の実演販売は、どうやら大盛況のようだった。

「お次ぎはこれ、野菜の皮をむくためのピラー。ただし、そんなじょそこいらで売られてる皮むき器とはモノがちやいまっせ。まあ見とってや」

有田が慣れた手つきでピラーを使い、固そうなジャガイモの皮をしゃりっしゃりつとむいてゆく。拳骨大のごつごつとした馬鈴薯があつという間に丸くて白いむき身のかたまりとなった。つづいて大根、それをむき終えると今度は人参……。

「どうや、すごいでっしゃろ。大根だろうが人参だろうが、でこばこ、三角、丸、四角、どんな形の野菜でも関係あらへん、あつと言う間にこれこの通り、だれでも簡単、手間要らず」

まるで手品のようにならゆる野菜から皮がむかれ、観衆からおおっという感嘆の声がもれる。

「刃は二種類あって専用のもので取り替えると、ごらんのとおりこの固い、かったいゴボウも見る見るうちにたんざく切り。こうして切ってしまえば、柳川、けんちゃん、豚汁、なんにでも使えまつせ。終わったらそのままじゃぶじゃぶ丸洗い。誰でも簡単に使用できます、年齢、性別、学歴、宗教、一切問いません」

また観客がどつとわく。

「今日はこの便利なピラーに、なんと我が社自慢の高級三徳包丁もお付けします」

すかさずアシスタントが大仰に驚いてみせる。

「所長、これはまた良く切れそうな包丁ですねえ」

「いひひ、ほんま良く切れまつせー。さあさ、お集りのみなさん、よく見ておくんなはれ」

有田はどこからか木片を取り出すと、その側面へ向けて包丁の刃を叩き付けた。ぱつきいん、と鋭い音がして太さ五センチほどの木材がきれいに両断される。思わず観衆からひいっと悲鳴がもれた。

「ははは、怖がらんでええ怖がらんでええ」

有田は、まず木材の断面を見せて言った。

「これこの通り、固い木材も一刀両断」

驚きの声があがる。次に有田は包丁をかがげ、刃の部分を照明の光にかざして見せた。

「見てください、あないに固いもの切った後やのに刃こぼれなどは一切なし。ほらほら、そこのおばちゃん見てみい、まったく刃こぼれしてへんやろ？」

手前にいた中年女性に包丁を渡して見せる。彼女は受け取った文化包丁の刃先をあらため、あからさまに驚いて見せた。

「あらほんとだわ。ぜんぜん刃こぼれないのね」

じつはこの女も有田が仕込んでおいたサクラなのだが……。

「それに見てください、ふつうに売られてる包丁と比べると、はが

ねの色が違います。じつはこれ、刃を焼くときの温度がちやいまんねん。専門店行ったらケースのなかに大切に仕舞われてるような逸品でっせ。ええですかよう見とってや、このじゅくじゅくに熟れたトマトをやな……」

まな板のうえに乗せた真っ赤なトマトを、えいつ、やーっ、と一と掛け声もろとも四つに切り分ける。

「見よ、この切れ味っ！」

すかさずアシスタントが叫ぶ。

「すごい！こんなに柔らかいのに、まったく型くずれしませんね」
有田は、ふふんと鼻をうごめかせた。

「言うとかけどな、このトマト、あまりの切れ味の良さに、まだ自分が切られたことに気づいてまへんで」

また客が、どつとわく。

季奈子も、牧村の腕をつんつん引っぱって笑った。

「ほんとに面白いですね、あのひとたち」

牧村は、困惑顔で季奈子を見て言った。

「いや、季奈子ちゃん、じつはあのひとはね……」

そのとき有田が、オーバーな手振りで季奈子に向かって手招きをした。

「おつい、ちょっと、そのかわいらしいお姉ちゃん」

「え、え、私のことですか？」

「そうそう、そのべっぴんさん。お手数やけどちょっとここへ来てな、この包丁の試し切りをしてみてほしいのや。だれが使こうても良く切れるつちゅうこと、みなさんに証明したって」

「やだ、どうしよう。恥ずかしいな……」

そう言いながらも、季奈子はまんざらでもない様子で有田のほうへと歩いてゆく。牧村は、驚いて有田の顔を見た。とたんに不器用なウイंकが返ってくる。どうやら彼は牧村の存在に気づいていて、季奈子を牧村の知り合いと知ったうえで呼び寄せたようだ。

「さあ、今からこのお姉ちゃんが、うちの商品の切れ味を身をもっ

て証明してくれはります。はい、拍手、拍手ーっ」

観衆から盛大な拍手が起こる。季奈子は耳まで真っ赤になって少しうつむきながら有田の横に立った。まな板のうえには新鮮そうな秋刀魚が一匹まるのまま乗せられていた。

「さあ見てちょうだい、この生きのいいサンマ。これをこのお姉ちゃんがこの細い、ほっそい腕でみごと骨ごとばっさり両断しますっ」アシスタントがわざとらしく言う。

「ちよつと所長、それはいくらなんでも無理でしょう」

「いやいや、うちの商品をバカにしたらあきまへん。ええか、みなさん、よう見とつてや」

包丁の柄を握らされた季奈子は、緊張してコチコチになっていた。ここは何としてもすばつと上手に切つてやらねば、せつかくの実演販売が台無しになってしまう。生きの良さそうにウロコをてらてら光らせる秋刀魚を、季奈子はぐつと睨みつけた。

「さあ、男は度胸、女は愛嬌、となりの山田くんホーホケキョ。すぱーつとひとおもいに切つてやつてちょうだい！」

観衆の視線がいつせいに季奈子に集まる。意を決し、彼女は手に持った包丁を思い切りよく振り下ろした。

「えいっ！」

だんつ、と大きな音がして秋刀魚は見事に二つになり、ついでに頭のほうが勢い余つてぼーんと飛んだ。ぎょろりと目をむいた魚の頭は、そのままサクラとして雇われていたおばさんの顔にぺちんと当たって床に落ちた……。

「ああ、もう恥ずかしかった」

デパートのなかにある喫茶店。

季奈子はウィンドウの外を歩く家族連れの姿を目で追いながら、ちよつとふてくされた顔をした。

「知り合いのひとに見られなくて、ほんとによかったわ」

向かいの席で、眼鏡を外した有田がおしぼりで顔を拭きながら笑

った。

「いやいや、姉ちゃんのパフォーマンズじつに面白かったで。大人しそうな顔して案外に役者やのう。今日やった実演販売のなかで、あれが一番客にウケたわ」

「もう」

「しゃーけど想像した通りのべっぴんさんやな、牧村はんの恋人でっしやる？」

牧村が、照れて顔をほころばせる。

「ええ、まあそうなんですけど……。ははは。季奈子ちゃん良かったな、所長がべっぴんさんだつてさ」

「そんなお世辞言つてもダメですよーだっ」

「いや、お世辞ちゃうで、ほんま可愛いらし顔してからに、なんやうちのマリンちゃんにそっくりやわ……」

「マリンちゃん？」

季奈子が、有田に視線を戻す。

「あの、マリンちゃんって……。ひょっとして有田所長さんのお嬢さんとか？」

「いや、わしには娘いてへんよ。でも考えてみれば娘みたいなもんやな、いや養女と言ふべきか。とにかく、わしにとっては天使のような存在やった」

「そんな……。天使だなんて」

天使と聞いて、季奈子がほんのりと頬を上気させる。隣りで聞いていた牧村が、首をかしげて言った。

「マリンちゃんなんてずいぶんと変わった名前ですね、ひょっとしてあだ名ですか？」

「いや、本名」

そう言ってから、有田は急にしょんぼりとした顔になった。

「惜しくも先年フィリアで亡くしてしもうてな……」

「え、フィリア？」

牧村が、ちらつと季奈子のほうを気にしてから、有田に向かって

恐る恐る訊ねた。

「そ、それって、もしかして……」

「うちで飼っていたメスのチワワ。マリンちゃんいうてな、享年十二歳の、ほんま天使のように可愛いらし犬やった」

ほつつと夢見るような表情でため息をつく。

季奈子が、有田に向かって吠えた。

「わんっ」

「おお、その顔、ますますマリンちゃんにそっくり」

「わん、わんっ！」

牧村は、あわてて話題を変えた。

「し、しかし所長も大変ですね。わざわざ小売店にまで出張ってきて実演販売だなんて」

「じゃあないわ、今の時代、大人しく待っててもお客さん来てくれへん、あの手この手でこつちから仕掛けて行かな、どんならん」

「……金沢営業所は、色々と大変なところらしいですからね」

胃腸薬の粉末をコップの水でぐつと飲み干して、有田が言った。

「大変なのは、どこも一緒や。札幌営業所かて未だに問題ぎょうさん抱えてる。わしなあ、正直な話こつちへ飛ばされて来て、ほつとしてるんや。あのまま、あこにおつてもこの先良いことなんかあらへん」

「そうですか……」

どうやら茂から電話で聞いた話は本当のようだった。

「ところでシゲ兄ィ、いや木村店長は元気にしてますか？」

「こつちへ来てから連絡取ってへんけど、元気ちゃうの。あいつ、わしの送別会でえらい泣きよつてな、強面のくせして酒入ったらすぐに泣きだすの、悪い癖やわ」

「ははは、シゲ兄ィらしいや。とりあえずは元気にやってるみたいですね」

そこへウェイトレスが三人分のコーヒーを運んでくる。有田はいつもの癖で、顔を拭いたおしぼりを元通りていねいに巻き直した。

デパートの売り場から、閉店時間が間もないことを報せるアナウンスが流れてくる。ウェイトレスが伝票を置いて立ち去ると、それを待っていたように有田が切り出した。

「じつはな、牧村はん。今度うちの営業所で新しい事業展開するねん。金沢営業所の命運を賭けた、起死回生の一大プロジェクト」

「ほう……」

「そこでお二人に折り入ってお願いなんやけど、その記念すべき顧客第一号になつてはもらえまへんやろか」

牧村と季奈子が、思わず顔を見合わせる。

「あのう……新しい事業って、いったいなにをなさるおつもりなんですか？」

「ブライダル事業」

そう言つて胸を張り、有田は美味しそうにコーヒーをすすった。

第四十三話 Mother and older sister

「ブライダル事業!？」

牧村は、おどろいたように有田の言葉を復唱した。

「そや。牧村はん。何か？」

有田は、得意満面の表情で、牧村と季奈子を交互に眺めた。ブライダル事業など参入の余地があるのだろうかと牧村は不安になった。いや、やり手で知られる有田のことである。ちゃんと勝算はあるに違いない。

「あ、いえ。ブライダル事業って、思いもよらなかったものだからびっくりして。で、いつごろ始動するんですか」

「そやなあ。来年の春ごろにでも第一号のカップルを送り出せたらええねんけど。はっ、もしかして牧村はん。それだと遅いでっしやるか。もう、余所をお願いしてはる？」

神妙な顔つきで有田が牧村の顔を覗き込んだ。

「いえ。そんなことはないんですけど……」

「なんや牧村はん。齒切れ悪うおますなあ。気が乗らんと言っにかいな」

「ちっ、違いますよ。まだ彼女の両親に結婚の許しをもらってさえないんです。反対されてるんですよ。彼女のお父さんに」

なあと牧村が傍らの季奈子を振り返る。

「そうなんですよ。うちの父ったら頑固なの……牧村さんが、お父さんって、ちょっと言っただけで「わしゃ、あんたのお父さんじゃない!」って、すごい剣幕なんだもの……父が許してくれるのを待っていたらいつになる事か……」

有田がカラカラと笑った。

「ははあ。そんなことですかいな。ならわしが、季奈子はんのところに一緒に行ってお願ひしてあげます」

「いつ、いえ。結構です。僕がちゃんと自分で言いますから……」

有田が混じると余計に話がややこしくなりそうだ。とにかく季奈子の父親のもとには、根気よく何度も通って頭を下げるしかない。

誠意をもって話せば、そのうち向こうの態度も和らいでくるだろう。「まあ、お互いに社会人やし、いざとなれば双方の合意だけでも結婚できますやる。挙式の件、季奈子はんも考えといてな」

有田は、さらりと言つてのけると、席を立ちテーブルの上にあつた伝票を取り上げた。

「ちょ、ちよつと有田さん」

牧村が立ち上がったて伝票を奪おうとするが、有田は牧村の手を押した。

「ここは、わしが持ちますさかいに。我が社運をかけた貴重なプロジェクトの第一号のお客さんや。これは必要経費だす。なら牧村はんも季奈子はんも元気だな。ほな」

有田はすたすたと行つてしまった。残された牧村は、再び椅子にどっかりと腰掛けると、ほうとため息をついた。相変わらず、有田のやり口は強引だ。別段、有田のプロジェクトに乗ることに異存があるわけではない。が、終始、有田主導で進む話に牧村としては足枷をはめられたような複雑な心境だった。

「なんだか……すごい所長さんですね……。実演販売をやつてみた、ブライダル事業だなんて」

「ああ。あの人がもしかしたら、北海道営業所で俺の上司になるかもしれない人なんだぜ」

「ブライダル事業つて……実現するのかしら？」

「ああ、有田さんなら、やってのけるさ。なかなかやり手な人だからね」

「違うわ。牧村さんと私の……」

言いかけて季奈子は押し黙る。あとは、牧村に悟れという事だろう。

「ああ。有田さんの事業は別として……。ちゃんと式を挙げて、結婚しようね」

季奈子が大きな瞳でじつと牧村を見つめる。

「牧村さん。ずいぶんとさり気なく言いますねー」

「ああ。俺は、コツをつかんだんだ。あらたまって言うと、緊張するからね。さ、会計も済ませてある事だし、出よう」

牧村は、楽しそうに言う。季奈子を伴って喫茶店を後にした。デパートを出る頃、日はとつぷりと暮れていた。季奈子の運転で今度は志浦家へと向かう。父親が入院していた為に、両親に同時に挨拶することが出来なかったからだ。助手席で牧村は、時刻表を広げた。明日の夜からシフト勤務が入っている。だから少なくとも明日の午前中には富山を立つつもりだ。時間さえあれば、今日の夜行バスを使ってでも東京に帰るつもりでいたが、スケジュール的に難しそう。宿泊先も決めずに飛び出してきたが、男ひとりである。素泊まりで駅前のビジネスホテルに飛び込むなり、ネットカフェで過ごすなり、牧村はどうにでもなると思っていた。

――しかし。

牧村は面食らった。季奈子の家に到着するなり、座敷に通されそこにはなんと夕食の用意がされていたのだから。金糸に彩られたふかふかの座布団がテーブルをはさんで向かい合わせに置かれている。そしてテーブルの真ん中に据えられた船盛には、甘海老、ウニ、昆布締め、バイ貝などが、威勢よく盛り付けられている。ほか、酢の物、煮物、茶碗蒸し……。笹の葉の上に形良く整えられたます寿司。そして季奈子の母親は、台所からまだ料理を運んでくるではないか。ほんの一時間ほどお邪魔して早々に立ち去ろうと考えていた牧村の思惑は、あっさりと打ち砕かれた。これだけでもてなされて、さつさと帰るのではいかにも不義理である。季奈子の母は、てんぷらの籠とだし汁をふたつずつテーブルに置くと、微笑んで言った。

「今、燗をつけますからね。牧村さん。お飲みになられるんでしょう？ 今夜は是非泊まっていてくださいねえ」

「いや、あの、僕はご挨拶だけのつもりで寄らせていただいたので……どうかお気を遣わないでください」

やっとそれだけ言ったものの、今更、気を遣うなと言ったところでもうすっかり料理は並べられている。どう転んでも遅いのだ。

「いやだ、遠慮せんでくださいよ。牧村さんは、季奈子の未来の旦那様なんですから」

うつふふ……と口元を手で押さえると、母親はまた台所へと消えた。とりあえずは、ここでは牧村は歓迎されているらしい。母は、この結婚に同意してくれているのだ。牧村はほっとした思いで額の汗を拭った。私も手伝うわと、母に付き添うように季奈子までもが台所に消えてしまった。おかげで牧村は、夕食の準備が完全に整うまで、座敷でずっと居ずまいを正して座っていないではならなかったのである。背後には、水墨画で描かれた掛け軸が、その前には淡い緑の壺が、天井と鴨居の間には欄間が飾られている。隣の部屋と仕切られているはずのふすまは開け放たれ、座敷と同じスペースの畳の間が広がっている。なんだかくらくらしてきて視線を下方に向けた。

そのうちに確かに玄関先が騒がしくなった。佳乃子と呼びかける甲高い声が聞こえる。どうやら季奈子の姉が病院から戻ってきたらしい。牧村の視線が、たぶん季奈子の父の記念品であろう勤続三十年と記された飾り時計の時刻を追った。七時半である。

長いイントロダクションの後、ようやく牧村と季奈子は向かい合 わせに座る形となった。季奈子の母と姉は、少し離れたところに座った。

「牧村さん。今日は、遠いところようこそいらっしゃいました」

正座をした母が畳に額を擦り付けんばかりにしてお辞儀をする。後ろに控えた姉もまた丁寧にお辞儀をした。

「こちらこそ。牧村理人と言います。丁寧におもてなしいただきまして、恐縮です」

慌ててそう言つと、牧村もまた母たちに習つて畳に額をべったりとつけた。

「ささやかながですけど、どうぞゆっくりしてってくださいね。」

さ……牧村さん」

満面に笑みをたたえた母が銚子をぐいと傾ける。

「あ……どうもすみません」

牧村は慌てて伏せてあつたお猪口を手にとった。半分ほどをぐいと飲み干す。お猪口の酒が減った様子を見て取ると、母は再び銚子を差し出す。牧村のお猪口にまたなみなみと酒が注がれる。

「お母さん。私も牧村さんに注がせてよ！」

後ろから佳乃子が声をかける。

「牧村さん。甘えん坊で泣き虫な頼りない妹ですけどよろしく願います」

佳乃子もまた微笑んで、牧村に銚子を差し出した。

——ええっ！？

母の酌を受けておきながら姉の酌を受けないわけには行かない。

牧村は再びお猪口の酒を口に運んだ。酒に弱いわけではないが、もはや酔っ払いそうだ。

「あつ。ねえ。佳乃子姉さん。私もっ」

季奈子までもが、そんなことを言い出した。

——もっ、もう勘弁してくれ……。

牧村は季奈子の差し出す銚子に手のひらで蓋をしながら言った。

「は、ははは……もう俺、綺麗な人たちに囲まれてもうすっかり酔っ払いそうだよ」

「まあっ、牧村さんったら、お上手ながやねえ」

ぱしっと母が牧村の背を叩く。

「じゃあ、季奈子。ちゃんと牧村さんにおもてなしするがやよ」

「えっ。あの、お母さんたちも一緒に食べましょうよ……」

牧村が勧めるものむなく、母は佳乃子と一緒に台所で食べますからとその場を去った。広い座敷に季奈子とふたり。贅沢だ。贅沢すぎる……と牧村は思った。

「は、はは……。なんだかすごいご馳走だね。俺、びっくりしたよ」
「そう？ 牧村さんが来るって言ったら、母も姉も張り切っちゃっ

て」

「とりあえずここでは……歓迎されているみたいだね。俺」

「そうよ。わからずやなのは、父だけなの」

言いながら、季奈子は牧村の小皿に船盛の刺身を取り分けた。

「ありがとう……」

わさびを溶かした刺身醤油に半分刺身を浸すと、口に運ぶ。そして、お猪口を傾けると口の中がかと熱くなる。

——美味い……。

どこかの温泉旅館を訪れたと言っても過言ではない程の食事を牧村は存分に堪能した。品数が多く豪華な料理は、そのどれもが上品に少量ずつ盛られていた故か、すすいと牧村の胃袋に入っていた。

牧村が部屋の中を眺め回し、つぶやく。

「季奈子ちゃんの家つてさ、すごく広くて立派な家だよね……」

「そう？ そりゃあ、東京とは違うかもしれないけど……田舎ですもの。このあたりじゃ普通なのよ」

料理があらかた空になると、季奈子は、急須に湯を満たし湯飲みに注ぎ入れる。

二人向かい合わせにお茶を飲んでいると、再び母が現れた。

「牧村さん。お粗末さまでした」

いや、ぜんぜん、粗末なんかじゃないから……と思いながら牧村は、「ご馳走様でした」と頭を下げる。

「お風呂の用意が出来てますから、どうぞ……」

食事が終わったら、今度はお風呂である。旅館張りのサービスに牧村は、すっかり恐縮しっぱなしだ。母は、新品の男物のパジャマを袋から出してきた。襟ぐりや袖口にパイピングが施され、胸元にワンポイントの刺繍がある。何かのブランドだと思うが、馴染みのないメーカーで牧村には思い出せなかった。いずれにせよ、高級な品である事は間違いない。

「これ、牧村さんが着るのにどうですか。うちのお父さんにつて頂

いたんだけど、病院だと院内着があるから使わんがですよ。しさいズなら牧村さんも着られるかと思いましてね」

「お母さん。ちょっとそれ、牧村さんが着るにはおやじ臭いわよ……」

……

「あら。でも今日泊まる言うたら、着替えがないと」

「いや、あの、お母さん。今日は泊まるつもりはなくて……」

母は怒ったように言った。

「何言つとるがですか。東京からわざわざ来てとんぼ返りなんてとんでもない。ゆっくりしてってください」

好意的に迎えてくれて精一杯のもてなしをしてくれる季奈子の母たちには逆らえない。

「それでは、お言葉に甘えて……貸していただきます」

「牧村さん。いいの？ こんなダツサイ……」

母が季奈子の頭を軽くぶつ真似をした。

「何言つとるがいね。男前が良いと服も引き立つつてもんだちゃ」

牧村に対しては、怪しい標準語だった母の口調も季奈子に話しかける時は、百パーセント方言のようだ。

「お風呂場は、こつちですから……パジャマ。この籠の中に入れておきますからねえ」

先の料理から、どんな風呂が飛び出すかとびくびくしていたものだが、ごく普通の家庭風呂であり牧村は安堵した。時すでに九時を回っている。せっせと食事の後片付けをする母と姉の様子に気がとがめたが、牧村は遠慮なく風呂に浸かることにした。自分がさつさと風呂に入らなくては、母たちがいつまで経つても入れないに違いない。体を洗い、浴槽に身を沈める。牧村が、手足を伸ばしても充分な余裕があった。さすがにここには、誰も来ない。浴槽のへりに頭をつけ、うーんと伸びをする。列車に乗って約三時間半。降り立った高岡駅は、覚悟して出かけたもののさして東京と変わらない気温であった。

そのまま見舞いも兼ねて、季奈子の父の入院する病院に直行した。

最初に父親に会っておけば、あとは精神的にらくだと思ったのだが。
——あんたの言う事はよくわかったちゃ……。

結局、聴くだけ聴いて結婚には反対だと言う。あの父を説得するには、長い時間がかかりそうだ。しかし、母と姉は賛成しているよ。うだから、何とかなるかな……。楽天的に考え始めたところで季奈子の声がした。

「牧村さあん。お湯の加減はどう？」

半分寝た状態になっていた牧村は、ばしゃりと音を立てて体を起こした。

「う、うん。丁度良いよ……」

「そう。ゆっくりしてきてね」

「あ、ありがとう」

季奈子が去るのを確かめて、牧村は、ふうと体の筋肉を弛緩させた。あまりにも至れり尽くせりのこの家は、緊張の連続である。

とにかく……長い一日だった。

「いいお風呂でした……」

台所にいる母と姉に牧村は挨拶をした。見ると季奈子も台所にいて食器を棚に収めている。

「あら。そのパジャマ、牧村さんにちょうどいいがいね」

母の言葉に季奈子は同意しかねると言ったように眉をひそめていた。

「お二階に布団を敷いておきましたから、ゆっくり休んでくださいね」

佳乃子が言った。案内されるままに牧村は二階に上がってみる事にした。二階は廊下を挟んでふたつの部屋と突き当たりトイレがあった。季奈子の部屋の向かい側は、お嫁に行った元姉が使用していたとの事で、今ではほとんど荷物置き場になっている。季奈子の部屋には、女性らしくドレッサーと整理ダンスが置かれ、たんすの上には小さなテレビが乗っていた。富山に帰省してからと言うもの、ここで過ごしているのだらう。季奈子の生活の息吹が感じられる空

間で、ほほえましかった。それはいいとしても……ぴつたりと寄り添うように敷かれたふたつの布団。仲良く並んだ枕に牧村は啞然としてしまった。季奈子と一晚を過ごした事はあったが、その時は熱に浮かされていたうえにくるみも一緒だったのだ。すでにふたりが結婚の約束が出来ていると認識した姉は当然のようにこの布団を敷いていったのだろうか。それは、わかる。ちなみに季奈子は、この布団を見たのだろうか。見たらなんと言っただろう。あの潔癖な季奈子は。自分は、客人としてもてなされているわけで、おとなしくここで眠るつもりではあるのだが。

——いや。

悶々としてしまい、今夜は、眠れそうにない。

第四十四話 hope for the best

「うう——」。

と風がうねっている。

季奈子の部屋の、古い木枠の窓をかたかたと鳴らす。

磨りガラスに映り込んだ街路灯の明かりが、渦を巻いて叩きつける雪片の軌跡をアニメーションのように投影している。どうやら牧村が風呂に浸かっているあいだに天候が荒れてきたらしい。本来ならこの荒れ模様のなかを今ごろは夜汽車の固いシートに揺られているはずである。そう思うと彼は、ほっと安堵の息をつくとともにさやかな安らぎを覚えた。情味のある旧家のたたずまいがどこか懐かしくすら感じる。

すっかり酔って体が重たくなったせいで、牧村は早くも寝具の温もりが恋しくなっていた。来客用として敷かれた羽毛布団は見るからにふかふかしていて、すぐにでも潜り込みたい衝動にかられる。だが、さすがに自分の家ではないのでそこまでくつろげず、よっこいしょとカーペットのうえにあぐらをかいた。調子に乗って食べ過ぎたせい、腹の皮が突っ張って仕方がない。もしくるみにも見つかったら、メタボになると叱られることだろう。彼はゆっくりと部屋の壁に背をもたせかけた。新品のパジャマが発する工業製品特有のつんとした甘酸っぱさとともに、熟れた果物みたいな甘ったるい匂いがしてくる。じつはこの家の風呂には女もののシャンプーしか置いておらず、仕方がないので牧村はそれを借りて髪を洗ったのだった。

部屋のなかは全体に淡いトーンの白とベージュの中間色で統一されていた。壁紙はおそらく最近張り替えられたばかりだろう。使い古された勉強机のうえにスパンコールの飾りが付いた化粧ポーチが置かれている。洗ったばかりのパフが三つ、洗濯バサミにはさまれて電気スタンドのフレームに吊るされていた。ふと、何気なく本

棚として使われているカラーボックスへ目をやると、そこには縁のない写真立てが伏せたまま置かれていた。牧村は一瞬どんな写真が入っているのか確かめてやろうと腰を上げかけたが、しかし途中で思い直して浮かせた腰をふたたび下ろした。むかしの恋人とのツーショット写真でも出てきたら正直言っただけが悪い。

アイドルのポスターやら雑誌から切り抜いたヌード写真をべたべた貼っていたかつての自分の勉強部屋とは違い、彼女の部屋の壁には画鋏の穴ひとつあいていなかった。ただ押し入れの鴨居のうえにいくつかの賞状が飾られているのが見えた。なかでも目を引いたのが日本書道教育学会のもので、それによると季奈子はどうやら書道を習っていたらしかった。認定証と大書された額には、漢字条幅三段と書かれてある。たいしたもんだ。牧村は腕を組んで感心した。なにを隠そう彼自身はとにかく字が下手で、会社の上司からも「前の字は読めない」とよく苦情を言われたものである。くるみのやつも字が下手くそだから、ひとつ季奈子ちゃんに習字の稽古をつけてもらおうと考えながら、もう一つ全日本学生選抜書道展と書かれた褒状があるのを発見した。

「うわ、文部科学大臣賞だった」

どうりで字が上手なわけである。

それならば、これから挨拶状のたぐいは一切季奈子に押しつけてしまおうなどと良からぬ企みをめぐらせていると、ててと軽快に階段を駆け上ってくる音が聞えた。もうすっかり足音で分かるようになってしまったが、季奈子である。

「牧村さあん、どこですかあ？」

どうやら牧村を探しているようだった。向かいにある姉の部屋が遠慮がちにノックされる。

「……おつかしいなあ。どこ行っちゃったんだろう？」

ちえつと舌打ちして、彼女は自分の部屋のドアを無造作に開けた。すっかりパジャマに着替えた彼女は、首から下げたバスタオルで髪をぐしぐし拭きながら牧村を見て驚いた。

「あら、こんなところにいたんですか。私の部屋でいたいなを……」

してるんです？ という言葉を飲み込んだ。

「……」

彼女は、牧村の前に敷かれている来客用の布団を見て、次いでその隣りに敷かれた自分の布団を見て、牧村の顔を見て、再び仲良く並んだ布団を見比べて、そっとドアを閉めて、そして、ぱたぱたたたと勢い良く階段を駆け下っていった。

「ちよつと、お姉ちゃん！ なによ、あれ？」

茶の間で夕飯の残りものを箸で突つきながら銚子をかたむけていた姉の佳乃子は、そんな季奈子の剣幕を見てけらけらと愉快そうに笑った。

「なにつて、なによ？」

ちやぶ台で姉と向かい合わせにぺたんと座り、季奈子が鼻を膨らませる。

「どうして私と牧村さんのお布団並べて敷いてあるのかって訊いてるんですっ」

佳乃子は平然として煮物を口のなかへ放り込むと、ふふつと含み笑いだした。どうやらすっかり酔って上機嫌のようである。

「べつにいいじゃないの、もうすぐ結婚するんだから」

「よかあないわよ、私たちまだ籍も入れてないのよ。それなのに、婚前交渉のお膳立てみたいなことするなんて……」

佳乃子が目を丸くした。

「へえ、それじゃああなたたち、ひよつとしてまだセックスとかしてないわけ？」

「してるわけないでしょうが」

季奈子が食ってかかった。

「恥ずかしいこと言わないでよ、人聞きの悪い」

「男女七歳にして席を同じゅうせず、ってかい。まるで戦時中の女学生みたいなこと言うね。だいいち婚前交渉だなんて今どき死語よ、

死語。頭が固すぎるのよ、あんたって子は」

「お姉ちゃんみたいに、職場の上司と不倫して強引に前の奥さんを離縁させるみたいな厚かましいまね、私にはできませんからね」

「ほっとけよ、ばーか」

佳乃子が猪口をくいつと傾けて、ふんと息をついた。

「ほんと、そういう堅物なところはお父さんそっくりなんだから――」

「やめてよ、あんな頑固おやじと一緒にしないで」

季奈子は皿に乗ったタクアンを口へ放り込んで、ぱりぱりと噛み砕いた。上気したその顔には微かに憤りの表情が窺える。彼女は未だに病院での父の態度に腹を立てていた。そんな季奈子の耳もとへ口を寄せて、佳乃子はいたずらっぽく囁いた。

「……じつはさ、病院であんたたちが帰った後、お父さんすんごく上機嫌だったのよ。リハビリするときもなぜか張り切っちゃってさ」

季奈子の口の動きが止まる。

「それ、どういうこと？」

「あんたがフィアンセ連れてきたこと、内心では喜んでるんじゃない？　いつまでも車椅子の身じゃ式のときに格好がつかないだの、あの男は釣りをするのが好きだろうが、なんて私に向かってぶつぶつぶ言ってくるんだもの」

「釣り？」

「ほら、去年の暮れに釣り仲間の善蔵さんがぼつくり逝っちゃったでしょう。お父さん、あれ以来一緒に魚釣りに行く友だちがいなくなつて寂しがってたのよ」

「じゃ、じゃあお父さん、牧村さんと……？」

「内心では、ちょうど良い釣り仲間ができたかもしれないって喜んでるんじゃない？　娘婿なら遠慮せずにあちこち連れ回せるしさ」

「どうやら季奈子の父は、彼女たちの結婚に心から反対しているわけではなさそうだった。季奈子は少し遠い目で天井を見上げた。

「……そうなんだ、お父さん、そんなこと言ってたんだ」

ほっと胸をなで下ろし、それからちゃぶ台にあった銚子を引つた
くると直接口をつけてラッパ飲みした。

「あ——」

啞然とする佳乃子の前で、季奈子の白い喉がごくごくと上下する。

「あんた、ずいぶんとお酒強くなったわねえ……」

ぶはあ、と息を吐き出して銚子をどんと置く。

「なんかさ、お父さんじつは結婚に反対してないんだって知ったら、
ほっとしちゃった。そしたら急に喉がかわいて……」

佳乃子は煮物の入った小鉢を季奈子の前へすすめてから、頼杖を
ついて目を細めた。

「誠実そうで良い旦那さんじゃない。あんた、しっかりやんなよ」

「うん、分かってる」

姉の箸を借りて蒨と牛蒡の煮物をひよいひよいと頬張ってから小
鉢を押し返す。佳乃子は空になった銚子をつまんで軽く振ってから、
どっこいしょと腰を上げた。

「とにかく今夜は私も泊まってゆくんだから。他に布団を敷く場所
はございませんので、将来の旦那さまはあんたの部屋に寝かせてち
ようだいな」

「むっ」

茶の間の壁掛け時計が、ぼーん、ぼーんと十時の時報を打った。
急に酔いが回った季奈子は、ふわっと生あくびを噛み殺しながらの
ろろと立ち上がった。

「じゃあ、お姉ちゃん、ちょっとパールか金槌貸してくれない？」

台所へ向かって面倒くさげに言う。一升瓶から移し替えた酒で爛
をつけていた佳乃子が、目だけで振り返って訊ねた。

「あら、こんな夜遅くに大工仕事？ ご近所の迷惑にならないでよ」

「違っわよ——」

季奈子は腰に手を当てて、ふんと息巻いた。

「一緒に部屋に寝ろって言うならしょうがないから、護身のために武装します」

「はあ？　ちよつと季奈子、あんたなに言つてんのよ。強盗やなんかじゃあるまいし」

はじかれたように佳乃子は振り返った。

「えー」

不満そうに返す季奈子の顔は耳まで赤く染まっている。いつものきびきびした様子とは違う間延びした声の色。

「あらつ。季奈子ったらすっかり酔っぱらっちゃって……」

「あ、あらしは酔つてなんかいまひえんよーだ」

「やだねえ。この子は」

佳乃子は手早くグラスに水を注ぎ、季奈子に差し出した。

「わかつたから、ちよつとこのお水飲みなよ。喉がかわいてたんでしょ」

「ん……ありがとう」

季奈子はいっきにグラスの水を飲み干すと、ふーっと口元を拭いた。だんつと乱暴にグラスを置く。

「ちよつとお。もつと丁寧に扱つてよ。割れちゃうじゃない。はい。じゃあねえ季奈子はもう寝なさい。ほらっ、これを持って」

佳乃子はテーブル端に置いてあつたタオルを季奈子に持たせると、その肩を押して回れ右させた。

「お姉ちゃん。これ金槌？」

「そうよ」

「金槌……かなづち……と」

季奈子は、ひとつ大きくうなずくと立ち去りかけた。が――。
「違う！」

季奈子は、ぶん！　とタオルを放り投げた。

「これ、金槌じゃないもん！　金槌、こんなにやわらかくないもん」
佳乃子は軽く舌打ちすると、さつとあたりの物を物色した。

「ごめんごめん。お姉ちゃん、間違えちゃった。これだったわね」
佳乃子は、今度はティッシュの箱を持ってくると季奈子に押し付けた。

「この箱の中に入っているの。さ、これで頑張って」

「うん。お姉ちゃん。ありがとう」

季奈子は、満足そうにティッシュの箱を抱え、おぼつかない足取りで立ち去った。

季奈子の姿が見えなくなると、茶の間に移動した佳乃子はぶつと吹き出した。とりあえず何か物を持たせたら、納得して行ってしまった。あとはよきに計らえである。あのふたり、どうなるんだろう。明日の朝の様子を観察するのが楽しみでもある。

「どうしたがいね佳乃子。ひとりでにやにやして」

ちようと母が風呂からあがって来た。佳乃子は手酌をしながら言っ
た。

「うん。季奈子に素敵な旦那様が見つかった良かったなあって思ってた」

佳乃子が小首をかしげる。ああ……と母はうなずきながらちゃぶ台の前に座った。

「ほんとにねえ。まだ季奈子には早すぎる気がするけど、こう言うのは縁だちゃ。ほらあんたもいつまでも飲んどらんとお風呂に入ってこられ」

「はい」

くいつと猪口の酒をあおると、佳乃子は立ち上がった。

鼻歌交じりに季奈子とはほとんど階段をのぼった。顔が熱い。飲みつけないお酒を一気にあおったせいだ。体がふわふわとして、なんとも気持ちがいい。父が牧村との結婚を許してくれたことも手伝って季奈子はすっかり高揚した気分になっていた。嬉しくてついつい口元がほころんでしまう。にやけそうになる表情をこらえ、季奈子は荒い息を吐いた。

「まきむらさーん」

自分の部屋に向かつて声をかけると季奈子は、いきおいよくドアを開けた。果たして牧村は、似合わないグレーのパジャマ姿で布団の脇で胡坐をかいていた。

「季奈子ちゃん……」

牧村がぼかんとした顔で季奈子を見あげている。

「どうしたの、それ」

「これ？ これはねえ……金槌」

季奈子はティッシュの箱を見せびらかすように掲げた。

「金槌？ それが」

「そうっ。この箱の中に……」

季奈子は、箱に手をかけた。はからずも引つ張り出されたティッシュが牧村と季奈子の間をひらひらと舞った。ティッシュの行方を追って季奈子の眼球が動く。床の上に到達した時点でようやく季奈子は気づいた。

「きやあ。なんで私、こんなもの持つてるの!？」

我に返った季奈子はぼろりと箱を落とすと、へなへなと布団の上に座り込んだ。ティッシュを正しく認識できたものの体にはしつかりと酔いが回っているようで、一度座り込んだが最後、立ち上がることさえ億劫だった。

「季奈子ちゃん。もしかしてお酒飲んだ？」

季奈子は、こくりとうなずく。牧村は目を細め、くすつと笑った。「はは……。今日は疲れたしもう休もうか？ 俺、待ってたんだ。」

季奈子ちゃんが来るのを。先に寝ちゃうのも悪いしさ」

「あ。うん。牧村さん、もう寝てね」

「じゃあ、失礼するよ」

組んだ足をほどくと牧村は滑るように布団へと移動した。

「季奈子ちゃんも」

「え、ええ……」

促されるまま、季奈子も並んで横になる。二組の布団が敷かれた部屋には、余分なスペースなどほとんどない。牧村と地続きの布団

に横になった季奈子は、上を向いたまま微動だにしなかった。ずつと目の前に広がる天井の柄を眺めているが、寝付けそうにない。室内はしんと降る雪と同じくらいに静かだった。

少しして隣で牧村が言った。

「ねえ、季奈子ちゃん。起きてる？」

「うん」

「俺さ、さっきは猛烈に眠かったんだけど。なんだかもう眠いのを通り越してしまったよ」

「牧村さんは、明日早いんだから寝なくちゃ。夜から仕事なんですよ？」

「うん。そうだね……ねえ。季奈子ちゃん」

隣で寝返りをつつ気配がする。季奈子の方へと体の向きを変えたようだ。

「なあに？」

顔の向きだけを牧村の方向に向ける。牧村は、季奈子をじつと見つめていた。

「そっちに行つていいかな？」

「ええっ?!」

最近の牧村はかなり積極的になっている。あつさりと北海道営業所の内定を蹴つて、東京でレストラン勤務に鞍替えしたと聞いたときは、おどろいた。そして富山まで自分を迎えに来てくれたフットワークの軽さ。今日だってあの気難しい父相手に結構食い下がってもいた。のんびりとしたやさしさゆえに優柔不断な牧村のイメージは、ここにきて大きくくつがえされた。季奈子が慌てて言った。

「だめっ!」

「うーん。じゃあ、季奈子ちゃんがこっちに来る？」

牧村が自分の掛け布団を半分ほどぺろんとめくる。

「そっ……それもだめっ」

「ちえっ。季奈子ちゃんは潔癖だなあ」

不貞腐れたように牧村は、ごろんと仰向けになった。

「あ。牧村さん、怒った？」

「別に」

「嘘。怒ってるでしょう」

「まあ……ね。季奈子ちゃんもさあ。なにもそこまで頑なにならなくても。俺たちもう婚約してるんだぜ」

「……」

季奈子は何も言えなかった。さつきも佳乃子にも頭が固すぎると言われたばかりだ。

しかし……。季奈子の実家である。階下には母と姉がいて、まだ起きているはずだし、牧村が身に着けたパジャマは、父なら違和感なく着られるのだろうが、見るからに似合っていない。何かとロマンチックな雰囲気には程遠いのだ。ドアを閉めてしまえば、一応はふたりっきりの世界ではあるのだが。それよりも何よりも……季奈子はセックスに抵抗があるのだ。

「ねえ。もしかして……季奈子ちゃんって、はじめて？」

「あつ、当たり前ですっ」

そうか……と牧村は、小さく言った。

「うーん。そうか。じゃあ……それはまだ取っておくことにして……。せめておやすみのチューだけでもして」

牧村が、情けない声で言う。このままではあまりにも可哀想に思えて、季奈子は体を起こすと牧村の頬に軽く口付けた。

「ええっ？ 俺、こっちがいいなあ」

不満げに牧村が唇をとがらせ、人差し指をあてる。

「もうっ牧村さんったら……」

牧村に覆いかぶさるようにそつと唇をつける。唇を離すよりも先に季奈子の背に牧村が両腕が回った。そのままぎゅっと抱きしめられる。

「ちょ……ちよつと牧村さん！」

「ああ幸せ。俺、朝まで季奈子ちゃんを抱き枕にして寝ていたいよ」
「わあ！」

「俺も季奈子ちゃんにおやすみのチューしようつと」

牧村はころんと半回転すると今度は自分が上になり唇を押し付けてきた。積極的な牧村に季奈子は戸惑うばかりである。季奈子は、必死で牧村の胸に両腕を突っ張った。

「ちょ……牧村さん」

「やだ。やつとふたりきりになれたのに」

季奈子の頬に牧村のさらさらの髪が触れる。シャンプーの匂いとおろしたてのパジャマのないまぜになった匂い。それらの匂いをいっぱいに吸い込んだとき、季奈子の体に変化が現れた。次に季奈子はだらりと両腕を弛緩させた。観念したのではない。突如として吐き気が襲ってきたのだ。さっき銚子を空にしてから一時間と経っていない。今、動き回ったことも手伝って、いつきに酔いが回ってきたようだ。季奈子の額に汗がにじんでくる。急におとなしくなった季奈子の顔を怪訝そうに牧村が覗き込んだ。

「ま、きむらさん。わたし、酔っ払った……みたい。なんか……変」

「季奈子ちゃん？」

牧村は立ち上がり部屋をあかりを点けた。季奈子は真っ青な顔で横たわっていた。

「大丈夫か？」

「き、きもち……わるい」

「よしよし。季奈子ちゃん」

牧村が季奈子の体を起こし背をさすった。季奈子の目が涙に潤んでいる。

「だいぶ飲んでたみたいだったから」

季奈子は、荒い息を繰り返すだけだった。吐き気は季奈子の胸元に根を張ったようにとどまって、いつこうに治まる気配がない。

「吐いたら楽になるよ」

「うん……。私のことは気にしないで牧村さんは寝て。明日、早いんだから」

「何言ってるんだよ。季奈子ちゃんが具合が悪いのに寝てなんかい

られるか」

「ごめん、なさい……。牧村さん」

「謝らなくていい」

牧村は季奈子の背中をずっとさすり続けていた。

「ごめんなさい……。ごめんなさい」

季奈子は、うわごとのようにつぶやき続けた。

第四十六話 t h e d a y b r e a k

ときどき強い風が吹いて建て付けの悪い窓をかたかたと鳴らした。石油ファンヒーターが自動的にタイマーへと切り替わったため、部屋のなかからは風の吹く音と二人の息づかいより他に聞えてこない。牧村は耳をすませ、季奈子の寝息を確かめた。どうやら彼女もまだ眠ってはいないようだった。階下では姉か母親が起きているらしく、ときおり戸棚を閉める音や食器の触れ合う響きが聞こえてくる。

しばらくして、季奈子が牧村に聞かれないうそつと咳をした。
こほん……。

沈黙に飽き飽きした牧村は、思いきって小声で話しかけてみた。

「なあ……眠れないのかい？」

「ああ、ごめんなさい、起こしちゃったかな？」

「いや、俺もなんだか寝つけなくなつてさ」

この時期の雪には霰がまじる。小豆大の固い粒が、強い風にあおられて窓ガラスをしゃらしゃらと打つ。どこか遠くのほうで、風の音にまじってか細い犬の遠吠えが聞えた。牧村は布団のなかで軽く寝返りを打ち、季奈子のほうへ視線を向けた。わずかな光に、鼻まで毛布をかぶった彼女の顔がぼんやりと浮かび上がる。

「眠くなるまで、少し話をしないか？」

「ええ、いいわよ」

今度は季奈子が牧村のほうへ顔を向けた。一瞬目と目が合つて、それから牧村は慌てて天井を睨んだ。

「うむ、なんの話をしようかな……、むかし観た映画の話でもしよつか、それとも我が家秘伝のカレーの作りかたでも伝授しようか。そうだ、とっておきの怖あい怪談を聞かせてあげよう。ふふふ、でもそれだとますます眠れなくなるね」

牧村の冗談には応えず、季奈子はやや真剣な口調で言った。

「ねえ、みちるさんとの結婚生活ってどんな感じでした？」

「え？」

わずかに口ごもって、それから牧村はうーんと唸った。季奈子がたたみかける。

「私よく既婚の友だちから言われるんです。結婚なんてものに幻想を抱きすぎると後でかならず後悔するぞって。最初のうちはいいの、幸せいっぱい毎日いちゃいちゃして、それで知らぬ間に時が過ぎてゆく。でも、だんだんお互いのことが空気みたいに当たり前の存在になってきて……、そうなるとやがては、どうして私たち結婚しつちやたんだろうって疑問に思いはじめるんですって。ねえ牧村さん、それって本当なんですか？」

どう答えて良いか分からず、牧村は口を閉ざした。季奈子が、すっと枕ひとつぶん顔を寄せてくる。

「私と牧村さん、結婚してうまくやっていけるかしら……」

「どうして急にそんなこと訊くんだよ」

「……ごめんなさい、なんか私たちの結婚が現実味をおびてくると急に不安になってきちゃって」

「いや、べつに謝ることはないんだけどさ」

牧村はふたたび寝返りを打ってうつ伏せになり、枕にあごを乗せた。すぐ横に季奈子の真剣な眼差しを感じる。つかの間、暗闇を睨んでいた牧村はやがて穏やかな口調でしゃべりはじめた。

「俺のおやじってのがさ、俺が十五になった春に死んじゃったんだ。飲酒運転で電信柱に突っ込んでね、そのままあっけなくオダブツ……。ほら、オラは死んじゃったダー、って歌がむかしあったろう、まさにあんな感じさ。おかげで俺は中学を卒業してすぐに働かなきゃならなくなった……」

季奈子は、いったい牧村はなんの話をするのかと緊張して毛布の端を握りしめた。彼の口調は、ともすれば自嘲的な陰りをおびてくる。

「うちのおやじは酒癖が悪くってね、いつも酔って帰ってきてはお

ふくろに因縁をつけ暴力を振るっていた。おふくろはおふくろで勝ち気なひとだったから、家んなかは夫婦喧嘩が絶えなかった。俺も姉貴もそんな家にいるのが嫌でさ、早く大人になりたい、大人になって自分の家庭が持ちたいっていつも願ってたんだ。もし自分が結婚したら絶対に幸せな家庭を作ってみせるって心に決めていた。奥さんを大切にして、子どもには経済的な苦労などさせない、いつも笑いの絶えない絵に描いたような幸せな家庭を作る。自分の胸にそう固く誓っていたんだ」

牧村がくると季奈子のほうを見た。

「でもさ、それがぜんぜんダメだった」

「ダメ？ …… って、どうして？」

「俺、みちると結婚したときすごく張り切っちゃってさ、仕事が終わっても酒の誘いなんかは一切断り、休みのときは一日じゅう家族サービス、くるみ、今度の日曜はどこへ行きたい？ 遊園地かい？ それともデパートへ行ってもおもちでも買ってやろうか？ どこでも好きなところへ連れて行ってやるぞ……。授業参観日には仕事を休んでも欠かさず顔を出し、運動会では父兄参加の競技に積極的に出場する。妻に対しても、家事が負担にならないよう出来る限り手伝って、たまには夕食だって代わりに作ってやる。食卓では常に会話がはずむよう心がけ、仕事でどんなに嫌なことがあっても家族の前では決して難しい顔などしたりしない」

牧村は鼻からふつと息を吐き出した。笑ったのだ。

「でも、なぜだかくるみはぜんぜん懐いてくれなかった。みちるのほうも結婚してからはずっと浮かない顔をしていた……。そして結婚してちょうど二年目の冬に、俺は職場で倒れてそのまま半月ほど入院したんだ。病名は神経性胃潰瘍、ははは、バカだよな俺って。みちるが泣きながら、どうしてそんなに無理する必要があるの？ って訊いてきた。二年間すごく居心地が悪かったって、俺が無理して良いパパを演じてるのが見え見えで、いたたまれない気持ちになったって、あいつ泣きながらそう言ってたよ」

「牧村さん……」

「そうさ、俺も結婚というものに、家庭というものに手前勝手な幻想を抱いていたくちなさ。家族に自分の価値観を押しつけようとしていた。家庭とはこうあるべきだ、幸せとはこういうことなんだってね。だから俺は入院中ずっと悩みに悩んで、そして退院してからは考えを改めた。ありのままに、ごく自然にみちるやくるみと向き合おうと心に決めたんだ。肩肘を張らず、悩みがあつたら素直に打ち明け、機嫌の悪いときには八つ当たりだってする。気に入らないところはお互いに指摘しあうし、くるみに対しても悪いことをしたらがんがんに叱りつけた」

「そろんとまた仰向けになり、牧村は目を閉じて言った。

「結果くるみとはすごく仲良しになれたし、みちるにも結婚する以前のような明るい表情が戻った。夫婦なんて、親子なんて自然体が一番なのさ。季奈子ちゃんも結婚したらこうしようあしよう、なんて考えは持たないほうがいいよ。今のままで良いのさ、これから何十年も一緒にいるんだ、変に気負っていたら以前の俺みたいに途中でへばっちゃうよ」

季奈子は、ゆっくりとうなずいた。

「そうね、そうかもしれないわね。私、結婚を境に人生が一変するようなおかしな錯覚に陥ってた。けど、そういうのってたぶん良い結果を生まないのよね」

「良妻賢母なんて幻想さ。君は妻である前に、母である前に、ひとりの女であり、一個の人間であるんだ。俺やくるみと正直に向き合ってくればそれで良い。俺もそうするし、くるみだってたぶんそうすると思う」

「うん、分かったわ。牧村さん、ありがとう。私すごく楽になった」

季奈子が毛布から目だけを覗かせて笑った。牧村も、今度は楽しそうな表情で笑い返した。

「じゃあ、そろそろ寝ようか」

「うん、おやすみなさい」

それっきり二人は口を閉ざし、あとには風の音だけが残った。それもやがて二人の穏やかな寝息にかわった……。

その夜、なぜだか季奈子は一度も会ったことのないみちるの夢を見た。彼女は一人きりでどこかの駅のホームに所在なさにたたずんでいた。ベージュ色をしたタートルネックセーターの肩にうつすらと雪が乗っていた。季奈子がいくら話かけても、彼女はただ淋しそうに笑って首を振るだけだった。それが、もどかしくて、もどかしくて季奈子は胸のつぶれる思いがした。やがてみちるの姿はホームへ滑り込んできた列車のなかへと消えた。季奈子はひらひらと雪の舞うなか、徐々に走り去ってゆくその列車の影をただ茫然と見送っていた……。

彼女は心のどこかでちゃんと分かっていた。妻と死に別れた男と結婚するということが、いったいどういうことなのかを……。

翌朝、十二月の空は嘘のように晴れ渡り、淡く道路を覆った雪がまぶしいほどに輝いて見えた。

第四十七話 B i s t r o W A S H I O

澄んだ空気の中、高岡駅のホームに郷愁を誘う発車メロディが響いてくる。一呼吸置いて先発の列車が走り去った。列車を降りたばかりの客たちが季奈子と牧村を避けるように進んでゆく。ひとびとは、ひとかたまりとなって駅出口へと吸い込まれていった。いつばうで、まわりには同じ列車に乗ると思しき乗客たちが、ぼつぼつと増え始めた。出発時刻まで、あと少し。

「じゃあね、一足先に行つて待つているから。すぐに後から来てくれよ」

すっかり旅支度を整えた牧村は、昨日、病院の休憩所で再会したときと同じコート姿でそこにいた。手にはます寿司やら何やら土産物が入ったビニール袋をぶら下げている。季奈子の母があれもこれもと牧村に持たせたものだ。

「もちろんよ。すぐに後から行くわ」

季奈子が微笑んで返す。昨夜、季奈子の胸に生じた一瞬の不安要素もすがしい朝の訪れとともに、今はすっかり消え失せていた。牧村はやさしくしてくれるし、くるみだつて季奈子に懐いてくれている。牧村が就職した事で生活の基盤も整った。今、ここからまっすぐに伸びているレールに乗るように結婚までの道のりを突き進めばいいのだ。なんの迷いがあるだろうか。

「お父さんやお母さん、お姉さんによろしく言つておいて。そうそう、それから季奈子ちゃん風邪ひくなよ」

「ええ、牧村さんも。くるみちゃんにもよろしくね」

ホームにアナウンスの声が響き渡り、カタンカタンと鈍い音を立てて列車がホームに滑り込んできた。牧村の乗る車両のドアが、ちょうど牧村と季奈子が立つ前で止まる。牧村が重そうなキャリーバッグを引っ張り上げ、乗り口のステップを昇った。そのまま後ろに並ぶ客に押し込まれるように車内を進んでゆく。通路から牧村が

もう一度軽く手を振ってきて、季奈子も振り返した。それ以上、別れを惜しむ猶予はなかった。ゆつくりと列車は加速していった。季奈子はその最後尾を視界から完全に消えるまで見送った。残されたホームにびゅうと冷たい風が吹き抜ける。

「牧村さん。行っちゃった……」

急に寂しさがこみ上げてきて、季奈子は振り切るように駅を後にした。

帰宅すると母が居間でせっせと片付けものをしていた。整理棚の中身をすべて引っ張り出し、ふたたび中身を戻している。姉の姿が見えないところを見ると、おおかた家に戻ったのだらう。

「母さん。手伝うわ」

母は季奈子の顔をちらりと見やると言った。

「なん、いいちゃ。正月迎える前に要らんものの整理しとるだけだから。季奈子は、東京に行く準備はしたがけ」

「ううん。まだだけど……」

「なら自分の支度、しられ」

「そんなの、別に準備する事なんてないわよ。何したらいい？ ああ、これ……」

季奈子は、取り込まれていた洗濯物をたたみはじめた。

「季奈子も嫁に行ってしまうがやねえ……」

ふと母が顔をあげて言った。

「やだなあ。そんなしみじみ言わないでよ。まだ先の話よ。大体、お父さんだつて許してくれていないんだから」

「お父さんのことだから、季奈子がどんな良いひとを連れてきても反対するちゃ」

母は歌うように言い、不要らしきものを次々とゴミ袋に放り込んでいった。

「牧村さんが、奥さん亡くして子供さんがおられる言うが、気になるけど……」

「ああ……やっぱり、気になるわよね」

正座したタイトスカートの膝の上にたたんだタオルを乗せ、季奈子は俯いた。

「でも好きながやる？ 昨日、初めて会ったけどすごく感じの良いひとだったし。お互い、好きあっているなら、母さん何も言うことない。世間には、そんな夫婦、いっぱいある。何よりも季奈子を選んでひとやし。母さんは、季奈子が幸せになってくれれば、それでいいちゃ」

「……うん」

「お父さんの事は、心配ないがよ。最初は反対してもだいたい母さんと同じ意見ながやから」

「うん。母さん。ありがとう」

明日、父の退院を待って明後日には東京に戻る。季奈子は、東京のアパートの事が気になっていた。

幸子おばさんに促されるように、大急ぎでカバンに衣類を詰め込んで、逃げるように実家に来てしまった。着ない服はベッドの上に散らしたままである。コンセント類は、すべてしっかりと抜いたが、電気ポットの中に水が入りっぱなしだったかもしれない。冷蔵庫の中には、そろそろ賞味期限切れのものがあつたはず。

——向こうに着いたら、さっそく部屋を片付けなくちゃね。牛井店のアルバイトにもすぐに顔を出さなきゃ。

「ビストロ・WASHIO」は、角地に建てられた細長いビルの二階にあつた。洒落た創作料理を提供する店。ここは、牧村の勤務先でもある。白いシャツにグレーのベストとパンツに身を包んだ牧村は、背筋を伸ばし、脇に控えていた。薄暗い店内の壁の一角に配された生け花にライトが当たり、まぶしく光る。フォークが食器に当たる音、時折聞こえてくる笑い声。九割がた埋まったテーブルの間を縫うように料理を運ぶスタッフたち。幸いなことに連日ここは、大賑わいである。営業でならした牧村にとって副店長の仕事は、さ

して苦にならず入り込みやすいものだった。絶えず客の動向に目を配り、スタッフに指示を出していると、何年も前からここで働いているかのような錯覚におちいる事すらあった。副店長と言う肩書きは、店長の補助と言うより、いない間の代行に等しい。なぜなら店長は、この五十メートルほど先にある姉妹店「ヴィラ・WASH IO」の店長をも兼ねているからだ。来年になれば、このビルの一階に喫茶をオープンする計画があるらしい。まさにワシオグループ快進撃である。営業にこだわり続けるよりもずっと良かったかもしれない。

入り口のドアが開き、数名の女性たちがやって来た。牧村は、大股でフロアを進むとにこやかな笑みをたたえ、自ら客を出迎えた。「いらつしゃいませ……何名さまですか？」

「えっと、四人……」

女性の一人が、親指を曲げた手を示す。

「四名様ですね。承知いたしました。すぐにご案内しますので、掛けてお待ちくださいませ」

入り口に並んだソファに彼女らを誘導すると、後はウエイトレスに申し送った。

（うわ。お洒落ー。雑誌で見たとおりだわ）

（ねえねえ。あのお店のひと、カッコよくない？）

（ホント、なんか俳優の。。。みたい……）

背中から女性たちの囁きが漏れ聞こえてくる。

牧村は引き続き入ってくる客を出迎えようとして、おや……と声を上げた。そこには、渡瀬が妻を引き連れて立っていた。ツイードのコートを羽織った渡瀬とベージュのカシミアのコート姿の妻は、そこに立っているだけでさまになっていた。何年も連れ添った夫婦だけが持つ独特な空気をもし出している。

「渡瀬さんじゃないですか。それに奥様も。いらつしゃいませ」

「こんばんは。牧村さん。ステキなお店ね……」

「牧村君がここに勤めたと聞いて、さっそく来たよ。すいぶんと盛

況のようだね」

「はい。おかげさまで。それにしても渡瀬さん、みずくさいなあ。先に来るって言うてくだされば特等席を用意したのに……」

「ははは。そんなに特別扱いしないでくれよ。今日は、たまたま店が早くに引けたから、思い立って家内と来ただけなんだから」

渡瀬が傍らの妻を振り返り言った。

「ありがとうございます。コートお預かりします……」

牧村は、深々と頭を下げた。

第四十八話 g o - b e t w e e n

渡瀬の妻が肩に掛けているストールを手で払うと、ぱつと雪片が散ってフロアへ舞い落ちた。どうやら外ではけっこうな量の雪が降っているらしい。見ると、渡瀬のそろそろ薄くなりかけた頭にもところどころ溶けかかった雪が乗っている。それを彼は、犬のようにふるふると頭を振って払い落とした。

「今年は例年にくらべて雪の降り始めるのがずいぶん早い気がするなあ。去年なんかクリスマスを過ぎたころになってもまだしよぼしよぼと時期外れの雨が降っていたのにさ」

牧村にコートを預け、すっかり白く曇ってしまった眼鏡にふうつと息を吹きかける。最近とうとう遠近両用に替えたらしく俺も年を取ったもんだと嘆いていたが、ひげの印象的な童顔のマスターにはかえってこの地味なデザインの眼鏡がよく似合っている。

「雪の降り始めが早いと、その年は暖冬になるって言いますからね。うまくすれば今年は灯油代が節約できるかもしれません」

渡瀬の妻が、脱いだコートをたたんで牧村に手渡した。

「あら、それ本当？ いいことを聞いたわ、暖房費を節約できればうちはすごく助かるもの」

結婚するまで学校の教師をしていたという渡瀬の妻は、今では近所の小学生を自宅に集めてささやかな塾をひらいている。清水の舞台から飛び降りるつもりで購入した一軒家は、娘の出でいった今となっては広すぎて夫婦二人だけでは寒々しい。塾に子どもたちがやって来るのは週に三回、そのときだけ家のなかがぱあつと華やいだように賑やかになる。生徒たちの熱気が今の渡瀬夫婦にとっては欠かせないものとなっていた。ただその分だけ光熱費もかさむというものである。

「根拠はありませんけどね。冬の前半に雪の多く降った年には、後半になって逆に雪の量が少なくなる。そうやって年間の降雪量がほ

「ほぼ均一になるよう上手く調節しているんですよ」

「調節しているって、だれが？」

「お天氣の神様です」

渡瀬の妻がぷつと吹き出す。そのすきに牧村は手際よく二人分のコートをキャッシャーの奥にあるクローゼットへ収めた。

「それではお席のほうへご案内します」

週末の夕食どきということもあって店内は満席だったが、運の良いことにちょうど今しがた予約のキャンセルが入ったばかりである。牧村は、床が一段高くなった窓際の四人掛けのテーブル席へ二人を案内した。大きな窓から駅前ひろ場を見渡せる景色の良い席である。ゆったりくつろげるよう隣りのテーブルとは間隔が取られ背の高い観葉植物で仕切られていた。

「素敵なお店ね」

「ありがとうございます」

牧村がメニューを手渡すと、二人は一応ちらつと眺めるだけですぐにそれを閉じた。

「料理はお任せするよ。君のお薦めのコースでたのむ。あまり脂っこいものは遠慮したいな。あとこいつは光りものが食べないから……」

「あら、お酢でしめた物なら食べられるわよ。あなたこそブロッコリーが食べられないじゃない。まったくいい歳をして食わず嫌いなんだから」

牧村は肩をすくめて笑った。この二人とは長い付き合いである。

食の好き嫌いは良く分かっているつもりだ。

「では、お二人にぴったりのスペシャルコースをご用意いたしますので」

牧村がメニューをさげて立ち去りかけたとき、渡瀬が小声で言った。

「……式の日取り、決まったんだってね」

えっと牧村が立ち止まる。すばやくあたりを見回し、こほんと咳

払いました。

「え、ええ……六月の八日です。でもおかしいなあ、まだみんなには秘密にしていたんだけど……マスターそれ誰から聞いたんです？」

「このあいだ、くるみちゃんから電話があつてね。自分でウエディングケーキをデザインしたからスケッチを見てくれって言っただよ。僕が焼くとも思ったのかねえ、あんなでかいケーキ俺には作れないって言ったらがっかりしていたよ、ははは……」

「ちっ、くるみのやつ……」

「まあ、ウエディングケーキは無理だが、二次会ではうちの店を貸し切りにするつもりだから自由に使ってくれていいよ、皆で大いに騒いでくれたまえ」

牧村は、バツの悪そうに頭を掻いた。

「いやあ、それは助かります」

そしてしばし逡巡してから、思いきつて渡瀬に切り出した。

「あの……じつは結婚するにあたって、お二人にお願いがあるんですが」

「おやなんだい、急にあらたまっちゃってさ」

「これは後できちんとご挨拶にうかがつてお願いするつもりだったんですが、お二人には結婚式の媒酌人を頼みたいのです」

夫妻が顔を見合わせた。

「私たちがかい？」

「ええ、引き受けていただけないでしょうか？」

「ううむ、こっちは別にかまわないが……そういうのは会社の上司に頼んだほうが良くはないかい。今後のつきあいもあるだろうしさ」

「そのつもりだったんですが、聞けばうちの店長っていうのがすごい遊び人でいい歳をして未だに結婚してないらしいんですよ。独身者に媒酌人は頼めませんね。その上の上司っていうとこれが企画部長なんです、定年間近のお爺ちゃんでも奥さんに先立た

れているらしくて……」

「いいわよ、お引き受けするわ」

渡瀬の妻が華やいだ笑顔を見せた。

「お式のほうは任せなさい、ばっちり仕切ってあげるから」

牧村が顔を輝かせた。

「ありがとうございます。だれにお願いしようか悩んでいたんですが、これで肩の荷がおりました」

「こりゃ、年が明けたら忙しくなるな」

「今、俺のおごりでシャンパンをお持ちしますから」

牧村が立ち去ったあと、渡瀬の妻がぐつと身を乗り出してきた。渡瀬が思わずのけぞる。

「ねえ、新しいお着物作ってもいいかしら」

「ちっ、お前の狙いはそれだったのか」

「こういう機会でもなければ、なかなか作るチャンスがないんですもの」

楽しみだわ、と夢見るような目つきになっていたが、ふと渡瀬のほうを見て念を押すように言った。

「あなたは貸衣装でかまわないわよね」

「……はいはい、よござんすよ」

渡瀬はカーテンを脇に寄せ、アーチ型の窓の向こうを眺めた。街灯に照らされた大通りに一片また一片と雪が舞い落ちてゆく。ひっきりなしに行き来するひとびと。駅前ロータリーの路面は真っ白になっていた。

「帰る頃には、止むといいけどなあ」

「どうでしょうね。そう言えばあなたは雨男でしたものね」

渡瀬の妻もまた窓の外に目を向け、言った。

「おいおい。私のせいなのかい」

「いいえ。雪が降って大変だなんて思っていますよ。ロマンチックでいいじゃないの。ふふ」

「ちえつ。着物を仕立てられると思ったら、よっぽど嬉しいみたいだな」

渡瀬が苦笑いしたところに牧村がシャンパンを持って現れた。

「お待たせしました」

手馴れた仕草で栓を抜くと夫妻のグラスに注ぎ入れる。少し遅れて現れたウエイトレスがスープと長方形の器に形よく盛られた前菜三種をふたりの前に置いてゆく。彼女が立ち去ると、その場に控えていた牧村がメニューの説明をはじめた。

「こちらの前菜は、ほうれん草のキッシュに鴨のテリーヌ、アボカドの生ハム巻きです」

「まあ、美味しそうなこと！」

渡瀬の妻が弾んだ声で言った。

「理人君、すっかり店長の仕事が板についているね」

「いやだなあ渡瀬さん。僕は副店長ですよ」

「じゃあ、未来の店長だ。はは」

冗談めかした渡瀬の言葉に牧村は軽く笑って返す。

「このあとお魚の料理をお持ちしますね。ごゆっくりどうぞ」

薄暗い店内。背の高いグラスの中で揺らめく黄金色の液体は、テールブルのロウソクの炎に照らされて幻想的ですらあった。テリーヌを口に運んだ渡瀬の妻は、目を細めて言った。

「ああ美味しい。私たちの若い頃もこんなお店があったらよかったのに」

「それなりにあっただろう。知らなかっただけさ」

「あなたとの待ち合わせと言ったら、大学の近くの喫茶店でコーヒーがお約束だったでしょ。一杯で一時間ぐらいねばったわね。そのうちにお腹が空いたからって、場所も変えずにチャーハンとかスパゲッティを追加オーダーして。何をそんなにしゃべることがあったかと思うくらい、たわいもないことをずっと話しこんでた。そう言えばあのお店、今はもうなくなっちゃったわね」

「そうだなあ。学生ばかりが集って居座るから、儲からなかったんじゃないか。店主も愛想の良い人だったなあ。学生には大盛にしておまけしてくれたりしてさ。あの頃は、デートするってたって金もなかった」

話しながら渡瀬は、フォークとナイフを使ってキッシュを切り分けようと格闘したが、諦めた。仕方なく扇形のそれをぽいっと口に放り込む。

「確かにね。でもねあなた、誤解しないで。それが不満だったわけじゃないのよ。それなりに楽しかったわ。あなたはギターを弾くのがうまかったから、部室でフォークソングを聴かせてくれたわね。私もあなたに教わったけど、どうにも苦手で断念しちゃって……」

渡瀬の妻は、ロウソクの炎に視線を移した。

「なんだい。急に昔が懐かしくなったのかい？」

「いいえ。ふっと思ひ出しただけ。ねえ、あなた」

「なんだい？」

「またこのお店に連れてきてくださいね」

「よござんすよ。理人君の店なんだ。これからも精々ひいきにしようじゃないか」

渡瀬の妻は、空になりかかった渡瀬のグラスにシャンパンを注ぐ。妻の手からボトルを奪うと、今度は渡瀬が妻のグラスにシャンパンを継ぎ足した。もはやシャンパンは残り少なくなっている。

そうこうしているうちに牧村が次の料理を運んできた。

「おいおい。副店長じきじきに給仕かい。なんだか申し訳ないな」

「いえいえ。大切なお客様ですからおかまいなく。こちらは蒸し鯛のバルサミコソース仕立てです」

「なんだかずいぶんと健康に気を遣ってもらっている気がするなあ」

「ええ。この店のウリは、ヘルシーメニューを提供しているところなんです。俺も色々と意見を出させてもらって、試行錯誤して今のスタイルを作り上げたと言う感じです。おかげで女性のお客さんにもすこぶる評判が良いんですよ。ぜひ味わってみてください」

「ほう。最近メタボが気になってるから、それは助かるよ」

渡瀬が自分の腹を押さえた。話しながら、牧村はシャンパンが切れているのに気づいたようだった。

「あ。シャンパンでよろしいですか？」

「いや、もうアルコールはこれで」

「では、ソフトドリンクをお持ちしましょう」

牧村が去ると、料理皿に向け渡瀬の妻が軽く手を合わせた。目にも楽しい一品は、敬意を表したくなるほどのものだ。舌にのせると溶けそうなほどの柔らかな白身魚をソースが引き締めている。お腹にもたれない料理は、すぐにふたくちめに手が伸びる。

「さっぱりしていて美味しいわ。語彙がとぼしくて申し訳ないけど、それに尽きるわよ」

「ずいぶんお気に入りようだね」

「もちろんよ、あなたは？」

渡瀬の妻は、ナプキンの端で口を拭った。

「そりゃあ、もちろんさ。しかし、牧村君も変わったな。たとえば、このソースのようにピリツとしてさ……」

魚料理の次に出された牛フィレ肉のわさびソース添えを切り分け

ながら渡瀬が言う。

「あなた。それってなあに」

「いい意味でギリギリしているよ。仕事も軌道にのって季奈子ちゃんとも婚約して。のりにのってるって感じかな」

「ふふ。そう言われてみればそうね。なんだか結婚式のふたりが目に浮かぶようよ。ふたりともまだ若いし、おひな様みたいに可愛らしいでしょうね」

この頃になると、窓の外の雪はすっかり止んでいた。

「いや、牧村君。こんな金額では……」

伝票に書かれた金額の安さに渡瀬は、仰天していた。かなり牧村がサービスしてくれたようで、想定していた金額よりも五千円ほど安くなっている。

「いや、商品にならない野菜なんかを仕入れているので、原材料費がかからないんですよ」

「またまた……そんな事を」

渡瀬は、請求金額よりも多めの札を牧村に握らせようとした。

「ほんとに、いいんですよ。じゅうぶん儲かってますから」

牧村は、一枚だけを抜き取り、後は渡瀬の胸元に押し付ける。

「よくない」

押し合いがしばらく続いたが、他に会計する客がやって来た。レジが渋滞を引き起こす事になり、渡瀬はついに諦めた。

「じゃあ今回は理人君に甘えるでしょう」

「はい。また来てください。お待ちしております」

「くっ……。理人君、営業よりも店長の仕事が合っているよ」

「ありがとうございます」

牧村は、満面の笑みでふたりを見送った。

うつすら積もった雪に足跡をつけながら牧村は帰宅の道のりを急いだ。店が引けるのが十時。アパートに着くであろう時刻が十時半

過ぎ。治安を気にするみちるが選んだアパートは暗証キーを押さなければ、玄関をくぐる事すら出来ない。当時は、贅沢だと思ったが、くるみがひとりで待っている今となっては、幸いした。ただくるみがすっかり夜更かしになってしまるのが気にかかる。成長期だと言うのに。

コンコンとドアをノックすると、ドアの向こうから可愛らしい声が聞こえてきた。

「路地裏にあるおしゃれなレストランの名前は？」

声の主が問う。

「ビストロ WASHIO！」

少ししてガチャリとドアが開く。くるみには、ドアチェーンをかけたうえで合言葉を言わないとドアを開けないよう言い含めてあるのだ。

「パパりん。お帰りー」

ピンクのフリースの上下を着込んだくるみが笑顔で飛びついてくる。

「ただいま、くるみ。遅くなってごめんよ」

「くるみ、お風呂にお湯を溜めておいた。それから洗濯物もたたんだよ」

「おお、えらいぞ。くるみ」

牧村が仕事に就いてからというものの、家庭はうまく回っている。帰宅が遅く負担をかけているが、それでも仕事が決まらない時に比べればずっと良い。仕事が決まらない時は、その歯がゆさが牧村の表情や態度に出て、くるみを不安にさせていたと思うのだ。

「なあ、くるみ……」

浴槽に肩まで沈めながらドア越しに牧村は言った。

「何、パパりん」

浴室のドアが開き、くるみがにゅっと顔だけを出した。

「黒薔薇のマスターに言っただろっ……結婚のこと……」

「わっ……あわわ……」

くるみの慌てふためく表情に牧村は、くすくす笑った。

「はは。スペシャル級のフライングだなあ。まさかくるみからばれるとはね」

「ご、ごめんなさい。パパりん……」

「いいよ。いいんだ。パパりん、嬉しかったぞ。くるみは黒薔薇のマスターにケーキを作って欲しいってお願いしてくれたんだから。ありがとう。くるみ」

牧村は、手を伸ばすとくるみの頭をがしと撫でた。

「うわーん。パパりん、髪がくしゃくしゃになっちゃう」

第五十話 Cleopatra's Dream

クリスマスイヴは月曜日だった。

したがって聖夜を楽しもうという恋人たちの多くがイヴのイヴである日曜日か、もしくはその前日の二十二日の夜にクリスマスのイベントを済ませていた。もちろん牧村も季奈子も同じように週末に休みを取って会いたかったが、そこはサービスの悲しさ、とくに牧村のほうは予約のびっしり詰まった店を切り盛りするのに大忙しでそれどころではなかった。それでも週が明けて二十四日の夜、二人はなんとか時間の都合をつけようやくデートまでこぎつけたのだ。

「人気店だと聞いていたんだが……、予約なしでは絶対入れないと思っただけど案外空いてるんだなあ」

美味しいワインが飲みたいという季奈子のリクエストに応えてボルドーワインの専門店に連れてきたのだが、カップル客を当て込んでクリスマスムードたっぷり装飾された店内には、しかしことのほか空席が目立っていた。

「やっぱりイヴが月曜日ってのがいけないのよ、明日が火曜日って思っただけでなんだか白けちゃうもの」

「そうだろうなあ、だからみんな土日にデートを済ませてるってわけか。おかげでこっちは大忙しで、とてもクリスマスを祝うどころじゃなかったけど、まあ考えようによっちゃカップルでぎゅうぎゅう詰め場所で食事するよりこっちのほうが良かったかもしれないな」

ビルの最上階、片面の壁は総ガラス張りである。あいにく朝からの晴天でホワイトクリスマスにはならなかったが、そのぶん空気も澄んでキラ星のごとくに電飾を連ねる繁華街の夜景がよく見渡せた。

「きれいな……まるで街全体が巨大なクリスマスツリーを横たえた

みたい」

「上手いこと言うね、詩人になれるんじゃないのか」

「でも夜景の美しさって信用できないのよね。うわべだけきらきらしてて、その下にある本当の街の姿を隠してる気がするもの」

「なるほど、あのロマンチックに見えるネオンサインの下じゃ、今ごろうちの店長が貧乏揺すりしながら目を血走らせてパチンコ台にかじりついてるってわけだ。かと思いきや今度新しく入ったシェフの松山君なんか奥さんが臨月で、今日生まれるか明日生まれるかって大騒ぎしてるし、夜景の下はまさに悲喜こもももって感じだね」

白ワインとナチュラルチーズの溶け合う匂いが漂っている。テールブルの真ん中でチーズフォンデュの鍋がぐつぐつと音をたてている。この店一番の人気のメニューだ。串に刺したフランスパンや温野菜を煮込んだチーズにからめて食べるのだが、牧村は頬張ったチーズの予想外の熱さに驚いて飛び上がった。

「あちちっ」

「やだ、大丈夫ですか？」

「ひどいなあ、舌やけどしちゃったよ。俺って猫舌だからこういうところろに煮込んだ料理ってのはちよつと苦手なんだ」

「そんなこと言って、私にふーふーして食べさせて欲しいとか？」

「ばーか、そんなこと恥ずかしくてできるかい」

「ふふ……」

指先でつまんだグラスのなかで赤ワインをころがしながら、季奈子がいたずらっぽく笑う。そのくすり指には、テールブルに置かれたキャンドルを反射して婚約指輪にはめられたダイヤが光っていた。

「そうそう、季奈子ちゃんにこれ渡さなきゃ」

牧村が足下に置いてあった紙袋から、きれいに包装された小箱を取り出した。

「ちよつと荷物になるけど、これ俺からのクリスマスプレゼント」

「わあ、ありがとう。じつは、さっきからその紙袋の中身が気になって気になって仕方なかったのよ」

さつそくりボンをほどいてフタを開けると、なかにはスエードの赤い靴が入っていた。レースアップして履くショートブーツで、紐の先におしゃれなフリンジがぶら下がっている。

「ヒールが高くて冬靴としてはちよつと歩きにくいかもしれないけど、季奈子ちゃん雪国の生まれだからきつと大丈夫だろうと思って」

「きゃあ、おしゃれーっ、可愛い、ありがとー。こういうの欲しかったんだ、ムートンのブーツだとなんだか子どもっぽいいし、本格的な皮のロングブーツは気取ってる感じがして好きじゃないし。牧村さん、ありがとう、大事にするわ。じゃあ、今度は私からのプレゼント……」

今度は季奈子が、足下においてあった紙袋をよっこいしょと持ち上げて牧村に手渡した。

「やあ、俺もさつきからこの紙袋の中身が気になって気になって……うわ、ずいぶんと重たいねこれ。いったいなに入ってるんだろう。というか季奈子ちゃん、よくこんな重いもの持ってここまで来たね」

「うっん、牧村さんの喜ぶ顔想像してたら重さなんかぜんぜん苦にならなかったよ」

「ははは、じゃあさつそく中身を見てもいいかな？」

「うん」

牧村は、やや緊張した面持ちで袋から取り出した箱を膝の上に乗せ、梱包をほどいた。なかにびっしり詰められたクッション材を慎重に除けると、そこにはずっしりと重みのある鳩時計が入っていた。

「こ、これは一体……？」

「ふふ、可愛いでしょ。アンティークだけどドイツ製なのよ、すべて職人の手づくりなんですって」

牧村は一瞬ジョークかと思って季奈子を見たが、彼女のはじけるような笑顔にあって本気で選んだプレゼントなのだと理解した。

「は、はは……季奈子ちゃん、プレゼントを選ぶセンスあるね。俺今までこんなもの貰ったことないから感激しちゃったよ」

「でしよう。ねえ見て見て、この文字盤の上にあるちっちゃい人形、これ時刻に合わせてくるくる踊るのよ、可愛いでしょ。電子部品を一切使わずにこんな凝った仕掛けを造っちゃうなんて、さすがドイツ、技術の国よねえ」

「本当だね、すごいすごい、は、はは……」

季奈子がワインのグラスを持ち上げた。

「じゃあ、プレゼントの交換も終わったことだし、あらためて乾杯しましょう」

尻ポケットから取り出したハンカチで冷や汗を拭いつつ、牧村もグラスを持ち上げた。お互い相手のグラスにこつんとぶつけ合う。

「――聖夜に乾杯」

しばらくして店内に絶え間なく流れていたゴスペルソングが止み入れ替わるように、ぽろん……とピアノが鳴った。徐々に照明が落ちて薄暗くなり、そのぶんだけ各テーブルに置かれたキャンドルが輝きを増す。気がつけば、ふだんは飾りとして店の中央に置かれているグランドピアノに、紫色のドレスを着た女の人が座っていた。

ぽろん、ぽろんと鍵盤が静かに叩かれる。客たちのざわめきが止み、みながその女性に注目する。やがてレコードに針が落とされるように優雅に曲の演奏が始まった。ゆったりとした、それでいて熱い情熱を秘めたようなピアノ曲だった。

「ねえ……」

季奈子が、囁き声で牧村に訊いた。

「これ、なんて曲？」

「ドビュッシーの、月の光さ」

どこか郷愁を誘うようなメロディが季奈子の胸をちくんと刺した。夜のショッピングモールで牧村と再会したときから、こうしてクリスマス之夜と一緒に過ごすんじゃないかという予感があった。運命論は信じないが、たしかにそんな予感がしていたのだ。

薄暗い店内にキャンドルの明かりが揺らめき、そこかしこでウィングラスをぶつけ合う音が聞えてくる。

一年に一度の、恋人たちのイベントである。

次に演奏された曲は、季奈子でも知っていた。チャイコフスキーのクルミ割り人形だ。小学校の音楽の時間にレコードを聴かされた覚えがある。たしかバレエ曲だと思ったが、クラシック音楽に興味のない季奈子は、この曲でバレエを踊っている映像を目にしたことがない。

三曲目は、テンポの早いジャズだった。出だしのフレーズがとても印象的で、きっと何度も聞いたことのある曲だと思った。しかしこれも曲名が分からない。知っているはずの曲なのに、どうしても曲名が浮かんでこないのだ。ややためらって、季奈子はふたたび牧村に顔を近づけ囁いた。

「ねえねえ、この曲のタイトル教えて」

すると彼は、季奈子の瞳を覗き込むようにして言った。

「バド・パウエルの名曲さ。タイトルは、クレオパトラの夢――」

そのまま人さし指で季奈子の鼻の頭をちゃんと突ついて、そして目だけで笑ってみせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3405n/>

先の見えないラブストーリー（仮）

2011年11月14日03時27分発行